

2016（平成 28）年度 人間発達環境学研究科・発達科学部
年 次 報 告 書

神戸大学大学院人間発達環境学研究科・発達科学部

はじめに

平成 27 年度神戸大学ビジョン「先端研究・文理融合研究で輝く卓越研究大学」及び文部科学省「国立大学経営力戦略」の策定の翌年度となる平成 28 年度は、第 3 期中期目標・中期計画期間の 1 年目にあたる。この改革の流れのなかで本研究科は、国際人間科学部の設置準備に加え、教員組織と教育研究組織の分離と教員人事のポイント制の実施など様々な改革に対応した一年間であった。研究科においては、まさしく激動の年度だったといえる。

平成 25 年に文部科学省が公表したミッションの再定義において、本研究科のミッションは次のように記されている（一部抜粋）。

「研究科の教育に関しては、人間の発達及びそれを支える環境に関わる基礎的並びに応用的・実践的な教育研究活動に主体的に参加し、これを推進する指導的役割を担える高度な専門的能力、独創性及び卓越性を発揮しうる研究能力を有する高度専門職業人・研究者を養成する。また、研究に関しては、人間の発達及びそれを取り巻く環境に係る学際分野における研究実績をいかし、アクティブ・エイジング支援、ライフヒストリーによる心理教育支援、高度教員養成プログラム開発、バイオマスエネルギー利用に係る研究を推進している。

今後、人間の発達及びそれを支える環境を多面的に捉えるため、異なる専門分野間の連携等の取り組みについて重点的に取り組むなど、総合的な研究を組織的に推進するとともに、我が国社会の課題解決・文化の発展に貢献することを目指す。」

本年度は、神戸大学ビジョンを視野に入れながら、本研究科のミッションのさらなる実現に向け、人間の発達及びそれを支える環境に関わる新たな研究課題の探求、ならびに分野横断型研究のシーズの支援に向けた検討を行なった。また、2 学部の再編統合による新学部設置に起因する様々な課題の解決に向け、教職員が協力し合いながら大きく前進した年度となった。

本学報告書は、その一年間の様々な活動の記録や取り組み内容が記載されたものであり、研究科の強み・特色を示した価値ある集積となっている。

第 3 期中期目標・中期計画年度が進行するにつれて、今後本研究科は激しい改革の渦のなかに巻き込まれることが予想される。そのような状況のなかでも、これまで培い守ってきた、本研究科の「知」のアイデンティティを標榜し続けることが肝要と考える。

そして、本学報告書の刊行が、過去・現在・未来という歴史のなかで継承されてきた「知」を総合する道程となることを願っている。

(人間発達環境学研究科長・発達科学部長 岡田修一)

2016(平成 28)年度
人間発達環境学研究所・発達科学部 年次報告書 目次

はじめに

目次

1. 平成 28 年度の取り組みの概要-----	1
1.1. 神戸大学の施策に関わる取り組み-----	1
1.2. 部局としての取り組み-----	8
2. 学部・大学院運営-----	11
2.1. 学部・大学院運営組織-----	11
2.2. 将来計画-----	12
2.3. 管理運営-----	13
2.3.1. 人事委員会(研究科・学域)-----	13
2.3.2. 学部・大学院運営委員会-----	14
2.3.3. 教員活動評価委員会-----	16
2.3.4. 中期計画推進委員会-----	16
2.3.5. 自己評価委員会-----	16
2.3.6. 安全衛生委員会-----	18
2.4. 予算-----	19
2.4.1. 予算に関する特記事項-----	19
2.4.2. 予算関係の審議等の状況-----	19
2.4.3. 外部資金獲得等状況-----	20
2.5. 広報及び情報公開-----	21
2.5.1. パンフレット, ウェブサイト等-----	21
2.5.2. 国際人間科学部 オープンキャンパス実施委員会-----	22
2.5.3. 人間発達環境学研究所 オープン・らぼ-----	25
2.5.4. ホームカミングデイ-----	27
2.6. 環境設備-----	31
2.6.1. 教育・学習環境の整備-----	31
2.6.2. 交流ルーム・アゴラ-----	33
2.7. 教員研修-----	34
2.7.1. FD-----	34
2.7.2. 初任者研修-----	35
3. 入試-----	36
3.1. 一般選抜入試-----	36
3.1.1. 入学試験委員会-----	36
3.1.2. 一般選抜入試に係る総括と課題-----	37
3.2. 特色ある入試-----	38

3.2.1. 3年次編入学試験	38
3.2.2. 社会人特別入試	38
3.2.3. アドミッション・オフィス入学試験	38
4. 国際交流活動	40
4.1. 学術交流協定	40
4.2. 留学生	40
4.3. 「英語による授業の実践—ESD 研究」	43
4.4. 学生・教員・職員の海外派遣	43
4.5. 海外研究者等の招聘・訪問	45
4.6. スタディツアー	46
5. 教育	49
5.1. 教育課程	49
5.1.1. 今年度の特長	49
5.1.2. 学部, 研究科共通科目	52
5.1.3. 教職教育	57
5.1.4. 博物館学芸員資格	60
5.1.5. ESD サブコース	61
5.1.6. ゲストスピーカー及びティーチング・アシスタント	62
5.1.7. グローバル人材育成推進事業	62
5.1.8. 神戸グローバルチャレンジプログラム	64
5.2. 各学科等の教育	65
5.2.1. 人間形成学科	65
5.2.2. 人間行動学科	67
5.2.3. 人間表現学科	69
5.2.4. 人間環境学科	72
5.2.5. 発達支援論コース	73
5.3. 各専攻講座の教育	74
5.3.1. 人間発達専攻	74
5.3.2. 人間環境学専攻	77
6. 進路	80
6.1. キャリア形成支援	80
6.1.1. キャリアサポートセンター	80
6.1.2. 学振特別研究員申請支援	93
6.2. 卒業・修了後の進路	94
7. 研究	96
7.1. 今年度の特長	96
7.1.1. 研究動向	96
7.1.2. 学生の受賞	98

7.2. 学術 WEEKS -----	99
7.2.1 学術 WEEKS の各事業・セミナー -----	100
7.3. 研究科支援プロジェクト研究 -----	110
7.3.1. 学際研究 -----	110
7.3.2. 国際共同研究 -----	115
7.3.3. 高度教員養成プログラム -----	118
7.4. 研究推進 -----	119
7.4.1. 研究推進委員会 -----	119
7.4.2. 研究倫理審査委員会 -----	120
7.4.3. 紀要編集委員会 -----	120
7.5. 各専攻の研究 -----	120
7.5.1. 人間発達専攻 -----	120
7.5.2. 人間環境学専攻 -----	154
8. 産官学共同・地域連携による教育・研究活動 -----	172
8.1. 産官学共同プロジェクト -----	172
8.2. 地域連携プロジェクト -----	173
8.3. 高大連携 -----	176
9. 社会的活動・震災復興支援 -----	180
9.1. メンタルケア関係 -----	180
9.2. 災害地への支援活動 -----	180
10. 附属施設 -----	183
10.1. 発達支援インスティテュート -----	183
10.1.1. 発達支援インスティテュート運営委員会 -----	183
10.1.2. 心理教育相談室 -----	184
10.1.3. ヒューマン・コミュニティ創成研究センター -----	186
10.1.4. のびやかスペースあーち -----	193
10.1.5. サイエンスショップ -----	205
10.1.6. アクティブエイジング研究センター -----	211
10.2. 実習観察園の運営利用状況 -----	218
付録 1 学術 Weeks 音楽教育シンポジウムポスター -----	225
付録 2 学術 Weeks タイムスリップコンサートポスター -----	226

1. 平成 28 年度の取り組みの概要

1.1. 神戸大学の施策に関わる取り組み

1.1.1 神戸大学機能強化改革

(1) 神戸大学ビジョンの実現に向けた戦略

平成 28 年度から第 3 期中期目標・中期計画期間が始まった。神戸大学は、第 3 期中期目標・中期計画期間（H28 年度～H33 年度）における神戸大学の機能強化改革として、平成 27 年 4 月に神戸大学ビジョンとして、先端研究・文理融合研究で輝く卓越研究大学をかかげ、平成 27 年 6 月に文部科学省「国立大学経営力戦略」の 3 つの重点支援の枠組みの重点支援 ③「海外大学と伍して、全学的に卓越した教育研究，社会実装を推進する取組を中核とする国立大学」を選択した。

第 3 期中期目標・中期計画期間におけるビジョンの実現に向けて、以下の 5 つの戦略が実施されている。

- ・戦略 1：先端研究の推進
- ・戦略 2：社会課題を解決する文理融合研究の推進
- ・戦略 3：先導的研究成果の社会実装への取組み
- ・戦略 4：世界で活躍できる人材の育成
- ・戦略 5：大学運営基盤の改革

なお、国際人間科学部の設置は戦略 4「世界で活躍できる人材の育成」に位置づくものである。

(2) 神戸大学ビジョンを支える新たな教員組織・人事システム

平成 27 年 11 月 19 日の部局長等懇談会において「教員組織と教育研究組織の分離について」に関する意見交換が行われた後、平成 28 年 4 月 21 日「教員組織と教育研究組織の分離について（たたき台）」が説明され、5 月 12 日部局長会議を経て、5 月 19 日教育研究評議会において「神戸大学ビジョンを支える新たな教育組織・人事システム（案）」が承認された。

神戸大学ビジョンを支える新たな教員組織・人事システムは、教員の教育研究組織からの分離、教員組織の大括り化、ポイント制の導入及び学長裁量戦略枠の設定を柱としたものであり、この人事システムの効果として教員の流動性の向上、組織間の教員配置の最適化、柔軟な改組の実現、教員数及び若手ポストの増加等をあげている。

教員組織と教育研究組織の分離によって、平成 28 年 10 月から神戸大学におけるすべて

の教員は学域に所属し、当研究科の教員は全員が人間発達環境学域の所属となった。また、ポイント制の導入時期は、平成 29 年 4 月からとなった。

1.1.2 国際人間科学部（仮称）設置準備

平成28年4月1日より、本学に国際人間科学部の設置準備に関し必要な事項を審議するため、国際人間科学部設置準備委員会が置かれ、計12回にわたり新学部の設置に係る検討を行った。委員は、水谷文俊理事（統括副学長）、吉井一雄理事（総務・財務等担当）、岡田章宏学長補佐、櫻井徹学長補佐、正司健一学長顧問、大月一弘国際文化学部長、岡田修一発達科学部長、野谷啓二前国際文化学研究科評議員、西谷拓哉国際文化学研究科評議員、青木茂樹人間発達環境学研究科評議員、上野成利国際文化学研究科副研究科長及び小高直樹人間発達環境学研究科副研究科長である。なお、事務部からは、合田征史国際文化学研究科事務長、川端清文人間発達環境学研究科事務長、小紫裕正企画部課長（新学部等設置準備担当）、平山克也課長補佐（新学部等設置準備担当）、水野哲夫専門職員（新学部等設置準備担当）及び足立隆昌主任（新学部等設置準備担当）が準備委員会に加わった。

国際人間科学部の設置準備委員長には、学長から岡田章宏学長補佐が指名され、(1) 学部長候補者の選考に関する事項、(2) 教員の選考に関する事項、(3) 学内各種委員会委員の選出に関する事項、(4) 年次計画に関する事項、(5) 諸規則の制定に関する事項、(6) 学生の募集に関する事項、及び(7) その他学部の設置準備に関する重要事項について審議を行った。

以下は、設置準備委員会にて検討された事項である。

	検討事項
第1回（4月4日）	<ol style="list-style-type: none">1. 平成29年度募集人員について2. パンフレットの作成について3. 専門委員会の設置について4. ホームページによる公表について5. 説明資料等について6. 大学案内の原稿について
第2回（5月11日）	<ol style="list-style-type: none">1. 事前伺いについて2. 予算案について3. アドミッション・ポリシーについて4. オープンキャンパスの実施について

	<ul style="list-style-type: none"> 5. 高等学校の進路指導担当者向け説明会の実施について 6. 平成29年度入学者選抜要項（案）について 7. 平成29年度高大接続研究入試募集要項（案）について
第3回（7月6日）	<ul style="list-style-type: none"> 1. 事前伺いの結果について 2. 国際人間科学部（仮称）の運営体制について 3. 国際人間科学部（仮称）設置準備委員会専門委員会の追加について 4. 国際人間科学部（仮称）設置準備委員会委員の追加について 5. 平成29年度神戸大学国際人間科学部推薦入試，アドミッション・オフィス（A0）入試学生募集要項（案）について
第4回（8月4日） （持ち回り審議）	<ul style="list-style-type: none"> 1. 新学部における協定大学について 2. 大学教育推進機構大学教育推進委員会委員等の選出について
第5回（9月7日）	<ul style="list-style-type: none"> 1. 初代学部長及び初代副学部長について 2. GSPオフィス教員の選考に係る取扱いについて 3. 事前伺いの結果への対応について 4. 国際人間科学部（仮称）設置準備委員会委員の追加について 5. ヘント大学との学術交流協定等の締結について 6. 新学部における覚書の更新について 7. 交換留学生の受入れについて 8. 平成29年度神戸大学学生募集要項一般入試について 9. 平成29年度入試における合格者判定に係る取扱いについて
第6回（10月14日）	<ul style="list-style-type: none"> 1. 初代学部長及び初代副学部長について 2. GSPオフィス教員の配置について 3. 教員の人事について 4. 国立療養所邑久光明園及び同園入所者自治会と神戸大学大学院人間発達環境学研究科及び神戸大学国際人間科学部との包括的な事業連携に係る協定の締結について 5. 部局年次計画について
第7回（11月9日）	<ul style="list-style-type: none"> 1. 国際人間科学部教授会規程及び学科長に関する規則について 2. 平成29年度神戸大学高大接続研究入試（A0入試）合否判定について 3. 平成30年度神戸大学高大接続研究入試（A0入試）入学者選抜要項

	<p>(案) について</p> <p>4. 平成31年度入試の入試方法の変更について</p>
第8回 (12月14日)	<p>1. 平成29年度(前期)特別聴講学生の受入について</p> <p>2. 国際人間科学部の学部長及び副学部長について</p> <p>3. 国際人間科学部の運営組織について</p> <p>4. 平成29年度社会人特別入試合否判定について</p> <p>5. ディプロマ・ポリシー(DP)及びカリキュラム・ポリシー(CP)について</p>
第9回 (1月18日)	<p>1. 教員の人事について</p> <p>2. 平成29年度非常勤講師の採用について</p> <p>3. 国際人間科学部の運営組織について</p> <p>4. 国際人間科学部規則等の制定について</p> <p>5. 平成29年度(前期)特別聴講学生の受入について</p>
第10回 (2月3日)	<p>1. 平成29年度推薦入試/アドミッション・オフィス(AO)入試合否判定について</p> <p>2. 平成29年度国際人間科学部入学者選抜に係る原則について</p> <p>3. マレーシア政府派遣留学生の受入れについて</p> <p>4. 国際人間科学部学科長に関する規則等の制定について</p> <p>5. 平成29年度非常勤講師の任用について</p> <p>6. 入学前の既修得単位の認定に関する内規等の制定について</p> <p>7. モンゴル国立大学等との学生交流細則の締結について</p> <p>8. 平成28年度予算執行計画の変更について</p>
第11回 (3月7日)	<p>1. 平成29年度個別学力検査(前期日程)の合否判定について</p> <p>2. 平成29年度私費外国人留学生特別入試合否判定について</p> <p>3. 国際人間科学部教授会における審議事項の取扱い等の制定について</p> <p>4. 全学委員会委員の選出について</p> <p>5. 各種委員会委員等の選出について</p> <p>6. 国際人間科学部履修科目の登録の上限に関する内規等の制定について</p>
第12回 (3月19日)	<p>1. 平成29年度個別学力検査(後期日程)の合否判定について</p> <p>2. 国際人間科学部におけるハラスメントの防止等に関する内規の制</p>

	定について 3. 国際人間科学部高大接続研究実施委員会の設置について 4. 全学委員会委員の選出について 5. 各種委員会委員長の選出について 6. 平成29年度予算について 7. グローバル・スタディーズ・プログラムの個別プログラムの決定について 8. 認定科目（インターンシップ実習・外国語実習）における実施機関の決定について
--	---

以上の審議事項については、委員会開催前に、設置準備室と発達科学部及び国際文化学部
の執行部のメンバーによって検討がなされた。

また、審議事項については、国際人間科学部に設置される専門委員会である、広報委員
会、自己評価委員会、GSP実施委員会、教務委員会、入試委員会、及びオープンキャンパ
ス実施委員会などにおいても検討を行った。

なお、新学部には、「神戸大学国際人間科学部運営会議」を置き、(1)学部長が付託し
た事項、(2)教授会の議題整理に関する事項、(3)学科相互間の調整に関する事項、(4)委
員会相互間の調整に関する事項、及び(5)その他学部の組織運営上の連絡調整に関する事
項について審議を行う。この運営会議の構成員は、(1)学部長、(2)副学部長、(3)各学
科長、(4)広報委員会委員長、(5)自己評価委員会委員長、(6)国際交流委員会委員長、
(7)教務委員会委員長、(8)学生委員会委員長、(9)入試委員会委員長、及び(10)GSPオ
フィス室長である。

1.1.3 国際人間科学部設置に係る「事前伺い」

国際人間科学部設置に向けての事前伺いの書類作成は、新学部設置準備室が行った。文
部科学省高等教育局国立大学法人支援課（以降、法人支援課）から、様々な厳しい意見が
伝えられ、その都度、新学部設置準備室、発達科学部及び国際文化学部の執行部で協議を
行い対応するという、時間的余裕がない状況のなかで判断を迫られながら、書類の作成に
追われた。事前伺いに係る法人支援課と大学とのやり取りについては確認できる資料を基
に、以下に記す。

(1) 平成28年4月21日、法人支援課から事前に内容を確認するため事前伺いを送付するよ
うにこの電話連絡があり、当日、メールにて事前伺い（4/21現在版）を送付した。

(2) 4月22日、文科省担当者から電話連絡の後、25日にメールにて確認事項が送付されてきた。その確認事項への対応には岡田設置準備室長、櫻井副室長があたった。

(3) 6月28日、法人支援課から「事前伺いの結果」が届いた。学科の分野及び学科名称の再検討、科目の新設、科目名称の再検討や修正、科目区分の配置の見直し、科目内容の充実という意見伝達があった。

(4) これらの意見への対応について協議するため、新学部設置準備室、発達科学部及び国際文化学部の執行部が2度協議を行い、7月8日に法人支援課へ回答を行った。

(5) 7月11日、法人支援課から再度、分野、内容等についての意見が届き、設置準備室で対応し、7月12日に回答した。

(6) 8月15日、法人支援課から事前伺いの結果として、『設置報告書』の提出により設置が可能」との朗報が入った。また、設置報告書提出の締切りは、12月末日であるが、報告書の受理をもって学生募集活動が可能となるので、速やかに提出するとともに、提出後は電話による受理確認を行うようにとの連絡があった。

(7) 8月15日、結果伝達のなかに「コミュニティ論」を学ぶ必修科目の充実、「世界の貧困」「社会開発」「コミュニティ開発」等の社会問題を取り扱う必修科目の充実、「包括的ケアシステムの形成」や「雇用を含めた持続可能性」等を取り扱う必修科目の充実などの留意事項が付けられた。

(8) 8月23日、8月31日、9月6日、設置準備室、発達科学部及び国際文化学部の執行部がこれらの留意事項への対応案について検討を行った。

(9) 9月12日、法人支援課に神戸大学の対応案について確認したところ、神戸大学が検討した対応案で問題ないとの回答があった。

1.1.4 国際人間科学部に係る教職課程認定

平成28年度の課程認定については、発達科学部での作業が中心となるため、前年度と同様の課程認定検討WGにて作業を進めた。課程認定検討WGの委員は、渡邊隆信教授、岡部恭幸教授、鳥居深雪教授、長坂耕作准教授、北野幸子准教授であり、文部科学省初等中等教育局教職員課の指摘について対応を行った。併せて、検討WGは、これまでの中等免許の認定を受ける科目代表者から構成される課程認定準備委員会（田村文生准教授、平芳裕子准教授、前田正登教授、佐藤春実准教授、長坂耕作准教授、井上真理教授、澤宗則教授、(野谷啓二教授・国際文化学部)）のメンバーと個別に連絡を取りながら具体的な作業を進めた。

今年度の課程認定検討WG開催日及び検討内容については、以下のとおりである。

(1) 5月13日 課程認定検討WG（通算第20回）

・文科省からの課程認定申請書の修正要求に関する対応の検討

(2) 6月16日 課程認定検討WG（通算第21回）

- ・文科省からの課程認定申請書の修正要求に関する対応の検討

(3) 8月1日 課程認定検討WG（通算第22回）

- ・文科省からの課程認定申請書の修正要求に関する対応の検討

(4) 8月2日 課程認定検討WG（通算第23回）

- ・文科省からの課程認定申請書の修正要求に関する対応の検討

このような課程認定検討WGの尽力によって、2016年11月28日付けで、文部科学大臣から神戸大学宛に「教員の免許状授与の所要資格を得させるための学部学科等の課程として認定する」という認定通知書が届き、課程認定が正式に認められた。

（人間発達環境学研究科長・発達科学部長 岡田修一）

1.1.5. 附属中等教育学校を活用した高大接続研究

「神戸大学－附属中等教育学校高大接続研究」

「グローバル・エクセレンスの実現」を目指す神戸大学が、「グローバルキャリア人の育成」を教育目標に掲げる附属中等教育学校を活用した高大連携・接続の在り方に関して行う研究に対し、多数の発達科学部教員が積極的に協力した。具体的な連携事業としては、附属中等学校生徒を学部が実施するグローバルな課題に関するアクティブ・ラーニングに参画させる「グローバル・アクション・プログラム」、さらには附属中等教育学校生徒が卒業研究として取り組む研究に大学教員が指導・助言を行う「課題研究」がある。平成28年度の附属中等教育学校からの参加者は18名であったが、そのうち9名が発達科学部教員の協力するプログラムに参画した。

なお、この研究の延長上で実施した「平成29年度神戸大学高大接続研究入試」では、発達科学部にも出願があり、手続きに基づいて入試を実施した。ただし、合格者の入学先は国際人間科学部となる。

（入学試験委員会委員長 青木茂樹）

1.1.6. 平成28年度大学教育再生加速プログラム

神戸大学は、平成27年度大学教育再生加速プログラム（AP）に対し、「神戸グローバルチャレンジプログラム」を申請し採択された。本学部もこのプログラムに「アジア・フィールドワークコース」として参加し、平成28年8月～9月、インドネシアのハサヌディン大学及びプログラム実施場所（シンジャイ県）を5名の学生が訪問し、関係者への協力依頼・調査・協議を行った。

（人間発達環境学研究科長・発達科学部長 岡田修一）

1.2. 部局としての取り組み

1.2.1 平成30年度概算要求

神戸大学ビジョンの実現に向けた戦略のなかに「戦略2：社会課題を解決する文理融合研究の推進」があげられる。その戦略のなかの取組として、「取組4：都市レジリエンスから未来世紀都市学へ」がある。

平成30年度概算要求において、本研究科は、この取組「都市レジリエンスから未来世紀都市学へ」の拡充として、「持続可能なコミュニティ・環境形成プログラムの開発に基づいた多世代・多様な人々のwell-beingの実現を目指す教育研究拠点形成」を提案し、概算要求学内ヒアリングにおいて説明を行った。そのヒアリング時の助言を受けて、取組4の取りまとめ代表者と相談を行ったところ、平成28年度から動き出した取組である「文理医融合の先端研究による未来世紀都市学の構築－防災・減災から安全・安心の未来世紀都市学ユニットへの集約－」の拡充として、本研究科案が取り込まれることになった。平成30年度に拡充する内容は、次のように記されている。

「前年度までの学内組織の整備を得て、未来世紀都市学の高度化をはかる。すなわち、1)学外機関との共同研究を加速する。さらに、2)未来世紀都市を支える多様な人々のwell-being（人々の安全・安心の確保と豊かで質の高い生活）を実現するために、『well-being研究拠点』を新たに設置し、その下で、多様化するアジア諸国の保健衛生課題の解決を目指す『アジア健康科学研究ユニット』、並びに、都市における人々の社会的連携や協調を実現させるプログラムの構築を目指す『社会関係資本研究ユニット』を設置する。これらによってハードとソフトの両面から、『人々』を主体とした未来世紀都市学を具現化し、国内外への社会実装を推進する。」

特に本研究科に関わる内容としては、「都市における人々の社会的連携（結束力、絆）やネットワーク等の社会関係資本を重視した持続可能なコミュニティ形成および環境形成プログラムを考究し、社会実装できるように、『社会関係資本研究ユニット』を設置する」という内容である。

なお、「well-being研究拠点」は、保健学研究科と共同でつくる拠点であり、なかでも保健学研究科は未来世紀都市を支える「人々」の健康を担保できるシステム構築を行う。すなわち、少子化、母子保健、生活習慣、超高齢化、感染症などを統合的に考究し、社会実装できるように、「アジア健康科学研究ユニット」を設置するという内容である。

1.2.2. 外部との連携

(1) 第22回国立大学新構想学部教育・研究フォーラム

9月26日と27日、アークホテル岡山にて、岡山大学環境理工学部が当番大学となり第

22 回国立大学新構想学部「教育・研究フォーラム」が開催され、本学部も参加した。本年度のテーマは「未来社会を担う学生のキャリアパス形成－入り口と出口の充実－」であり、学部理念に沿った学生の確保，社会の要請に応え得る学生の質保障などの現状報告や新しい取り組みの紹介に加え，キャリアパスのなかで，特に工夫が必要となる入口と出口について情報交換及び意見交換を行った。

(2) 第 39 回国立大学法人大学院環境科学関係研究科長等会議

7月8日，千葉県柏の三井ガーデンホテルにて，千葉大学自然科学系研究科アソシエーション大学院園芸学研究科がホスト校を勤める第39回国立大学法人大学院環境科学関係研究科長等会議が開催された。本研究科としては2度目の参加となった。本年度は，環境省自然環境局自然環境計画課から「環境省の生物多様性保全に関する取組み」や千葉大学環境健康フィールド科学センターから「環境と健康－千葉大学環境健康フィールド科学センターの取組みと自然セラピー研究－」という講演が行われた。また，各研究科等における地球環境関連の研究教育の取組みについて，1) 地球環境関連の研究教育の目標，2) 現状の取組みと課題及び3) 将来展望の観点から意見交換を行った。

1. 2. 3. 平成 28 年度国立大学法人等施設整備実施事業

数年にわたり本研究科は，施設キャラバンの要望の第一位に F 棟改修をあげているが，その実現は難しかった。ところが，本年度の施設キャラバンにおいて F 棟の改修については，機能強化改革の一環で新学部「国際人間科学部」として必要不可欠なもの，さらに既存スペースの有効活用も含めて提案してはという助言があった。そこで，新学部設置準備室の意見を踏まえ，国際人間科学部の設置に伴う鶴甲第 2 キャンパス F 棟改修を表題として，新学部の大きな教育上の特色であるグローバル・スタディーズ・プログラムの国内外フィールド学習推進の本拠とするだけでなく，グローバルな課題解決をめざす研究科プロジェクトと連携するアクティブ・ラーニング型授業モデルを開発・発信する教育拠点形成に向けた環境整備という内容の申請を行った。

学長をはじめ大学本部の強い支援もあり，平成 28 年度国立大学法人等施設整備実施事業に係る平成 28 年度補正予算「事業名『神戸大学（鶴甲 2）総合研究棟改修』」が付き，F 棟の改修が行われることになった。

平成 28 年 6 月 29 日に本部施設部による F 棟改修に関わる説明会を行ない，意見交換を行った。F 棟に研究室や演習室等がある教員の協力を得て，F 棟改修検討 WG を設置した。当初の WG メンバーは，河辺章子教授，塚脇淳教授，宮田任寿教授，岡田修一研究科長，川端事務長，八嶋会計係長であった。第 3 回目以降は，塚脇淳教授から岸本吉弘准教授へ，

また宮田任寿教授から長坂耕作准教授へとメンバーの交代がなされた。

F棟改修検討WGについては、7月8日、8月3日にはF棟改修計画への質問・要望等の意見交換を行い、8月24日には施設部が加わり、今後の改修に係るスケジュール及び作業、研究室等の使い方について検討を行った。11月11日には施設部によるF棟関係の教員に対するヒアリングが行われた。その後、3月末から移転が始まり、工事完了は平成29年10月末の予定である。

(人間発達環境学研究科長・発達科学部長 岡田修一)

2. 学部・大学院運営

2.1. 学部・大学院運営組織

神戸大学大学院人間発達環境学研究科及び神戸大学発達科学部は、以下の組織により運営されている。

<教授会等>

神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授会，神戸大学発達科学部教授会
人間発達環境学域会議（10月～）

以下に委員会等の組織を列記する。その際、大学院に関係する組織については、その前に付される研究科名「神戸大学大学院人間発達環境学研究科」を省略し、学部に関係する組織については、「神戸大学」を省略し「発達科学部」を付した。

<管理運営>

学部・大学院運営委員会，人事委員会（4月～9月），学域人事委員会（10月～3月）教員活動評価委員会，予算委員会，学舎検討委員会，中期計画推進委員会，自己評価委員会，発達科学部課程認定検討ワーキンググループ，交流ルーム運営委員会，安全衛生委員会，ハラスメント防止委員会，学科・専攻運営会議

<研究>

研究推進委員会，研究紀要編集委員会，研究倫理審査委員会

<教務・学生>

教務委員会，学生委員会，博物館学芸員資格専門委員会，発達科学部教員養成機関審査委員会，「発達科学への招待」運営委員会

<入試>

入学試験委員会，発達科学部社会人入試専門委員会，発達科学部編入学試験専門委員会，発達科学部 AO 入試実施委員会，発達科学部人間表現学科実技検査入試検討委員会，学生委員会（編入学入学者の募集及び選考に関わる事務）

<国際交流>

国際交流委員会，学術 WEEKS ワーキンググループ

<広報>

情報メディア委員会，オープンキャンパスワーキンググループ，学部等案内作成ワーキンググループ

<附属施設等>

図書委員会，実習観察園運営委員会，キャリアサポートセンター運営委員会，発達支援インスティテュート運営委員会，心理教育相談室運営委員会，ヒューマン・コミュニティ創成研究センター運営委員会，のびやかスペースあーち運営委員会，サイエンスショップ運営委員会，教育連携推進室，アクティブエイジング研究センター運営委員会

(人間発達環境学研究科長・発達科学部長 岡田修一)

2.2. 将来計画

2.2.1. 国際人間科学部（仮称）設置検討ワーキングチーム（WT）

平成 29 年 4 月に発達科学部と国際文化学部の再編統合による新学部の設置をめざし，学部においては学部 WT（岡田修一学長補佐，小高直樹教授，平山洋介教授，渡邊隆信教授）に青木茂樹副学部長が加わり，昨年度から新学部設置に係る継続的な検討を行った。

今年度第 1 回の WT は 4 月 28 日，第 2 回は 6 月 29 日に開催され，文部科学省からの事前伺いに対する対応への協議結果と今後の対応について検討を行った。その後は新学部設置準備室が始動したのに伴い，新学部の設置準備に係る議論の場は新学部設置準備室と発達科学部及び国際文化学部の執行部の打合せ会議，ならびに新学部設置準備委員会に移された。

2.2.2. 課程認定検討ワーキンググループ

平成 26 年 7 月に発足した課程認定検討ワーキンググループは，平成 27 年度に入り，教職課程認定審査に向けた本格的な作業に入り，平成 27 年度末に課程認定申請書を文部科学省初等中等局教職員課に提出した。WG の構成は，一昨年度に引き続き，渡邊隆信教授，鳥居深雪教授，岡部恭幸教授，北野幸子准教授，長坂耕作准教授である。

平成 28 年度の WG の会議は，平成 27 年度末に提出した課程認定申請書に対する教職員課からの指摘事項（修正要求）への対応を行うために，5 月 13 日，6 月 16 日，8 月 1 日，及び 8 月 2 日に開催した。なお，これらの WG 会議に加え，文部科学省から指摘された事項への回答案を検討するために，複数の WG 委員による検討会が頻繁に行われた。

(人間発達環境学研究科長・発達科学部長 岡田修一)

2.3. 管理運営

2.3.1. 人事委員会（研究科・学域）

本年度の人事委員会は、4月～9月は研究科人事委員会として運営し、10月以降は教員組織が学域に移行したことに伴い設置された学域人事委員会において人事等に係る検討を行った。人事委員会の構成は、岡田修一研究科長、青木茂樹副研究科長、小高直樹副研究科長、稲垣成哲人間発達専攻長・人間形成学科長、平山洋介人間環境学専攻・人間環境学科長、河辺章子人間行動学科長、塚脇淳人間表現学科長の7名である。

学域人事委員会は、教員の採用及び昇任等だけでなく、ポイントの管理・運用及び教育研究組織への配置に関して、学域会議に発議する原案を審議する委員会であり、これまでの研究科の人事委員会の任に加え、ポイントの運用や教育研究組織への教員の配置についても検討するという重責を担うことになった。

研究科人事委員会及び学域人事委員会の開催日及び検討事項については以下に記す。

	検討事項
第1回（4月8日）	1. 人間発達環境学研究科教授昇任人事のためのガイドライン(案)について
第2回（5月6日）	1. 人事選考委員会の設置について（講師3名）
第3回（6月3日）	1. 今後の人事方針について 2. ポイントの確認
第3回（6月10日）	1. 「新たな教員組織・人事システム」に係る検討の整理 2. 今後の人事方針について
第4回（7月1日）	1. 教員人事にかかる基本方針（案）について 2. 講師2名の准教授昇任について
第5回（9月2日）	1. 教員人事にかかる基本方針（案）について 2. 講師1名の准教授昇任について
第6回（10月7日）	1. 学域人事委員会について 2. GSP オフィス教員の選考に係る取扱について 3. 今後の教員の昇任及び採用等について
第7回（11月4日）	1. GSP オフィス教員採用人事について 2. 10月13日（木）第1回教員人事委員会について 3. 人間発達環境学域教員人事方針（案）について 4. 今後の教員の昇任及び採用の流れ 5. 人間発達環境学域人事配置案について

第8回（12月2日）	1. 今後の教員の昇任及び採用について
第9回（1月6日）	1. 平成30年4月1日付け教授昇任人事について
第10回（1月27日）	1. GSP オフィス教員採用人事について 2. 平成30年4月1日付け教授昇任人事について
第11回（3月10日）	1. 神戸大学人間発達環境学域人事委員会の一部改正について 2. 平成29年4月1日付け人間発達環境学域人事配置案について 3. 平成29年度人間発達環境学域人事方針（案）について

（人事委員会委員長 岡田修一）

2.3.2. 学部・大学院運営委員会

学部・大学院運営委員会は、研究科長，副研究科長（2名），専攻長（2名，ただし2名は学科長を兼ねる），学科長（4名）の7名体制で運営した。本委員会は、研究科等の管理を円滑に行うために組織及び運営に関し包括的な事項を扱ってきた。検討事項は以下のとおりである。

	検討事項
第1回（4月8日）	1. 国際人間科学部（仮称）（新学部）の設置審書類等について 2. 「教員組織と教育研究組織の分離について（たたき台）（2016.3.17 部局長懇談会）について 3. ポイント制の整理について，等
第2回（5月6日）	1. 新学部設置スケジュールについて 2. 教員組織と教育研究組織の分離について（たたき台）（2016.6.21 部局長懇談会）について 3. 平成29年度以降の授業開講形態について，等
第3回（6月3日）	1. 平成28年度神戸大学若手教員長期海外派遣制度による派遣候補者について 2. 新学部設置に係る学長裁量枠ポストについて 3. F棟改修について，等
第4回（7月1日）	1. 博士学位論文審査委員会候補者（案）について 2. 新学部の運営・時間割等について 3. 新学部設置に伴う学部附属施設等にかかる規程の変更について 4. 研究科教授会規程等の一部改正等について，等

第5回 (9月2日)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 博士学位論文審査委員会候補者(案)について 2. 設置審査「事前伺いの結果：留意事項」への対応について 3. GSP オフィス教員の選考に係る取扱について 4. 女性研究者養成システム改革戦略会議「平成28年度女性研究員の採用」について、等
第6回 (10月7日)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 博士論文予備審査委員会候補者(案)について 2. 部局年次計画の進捗状況について 3. 10月29日(土)ホームカミングデイについて 4. 次年度予算について、等
第7回 (11月4日)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 部局年次計画の進捗状況ヒアリングについて(10月28日) 2. 平成29年3月31日付け定年及び自己都合退職者に係る授業について 3. 国立療養所邑久光明園「国立療養所邑久光明園及び邑久光明園入所者自治会と神戸大学大学院人間発達環境学研究科及び神戸大学国際人間科学部との包括的な事業連携に係る協定書」の調印式(11月2日) 4. ホームカミングデイ(10月29日)について、等
第8回 (12月2日)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 新学部教授会、運営会議の審議事項について 2. 次年度予算関連事項について 3. 平成30年度概算要求について、等
第9回 (1月6日)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 博士学位論文審査委員候補者(案)について 2. 研究科規則等の改正案について 3. 平成30年度概算要求について、等
第10回 (1月27日)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 平成30年度概算要求ヒアリングについて 2. 平成28年度年次報告書について 3. 研究科外部評価の平成29年度実施について、等
第11回 (3月10日)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 新学部設置について 2. 研究科外部評価委員について 3. センター基幹研究部門の新設及び名称の一部変更について、等

(学部・大学院運営委員会委員長 岡田修一)

2.3.3. 教員活動評価委員会

神戸大学教員活動評価が実施されて3年目となる。昨年度と同様、教員活動評価委員会内規第3条に基づき、研究科長、副研究科長、専攻長に加え、その他研究科長が必要と認められた者として学科長を加え、7名体制で臨んだ。

また、昨年度、相当の時間を使って合意した評価の方法や基準等を基本的に踏襲しつつ、その都度問題がないか慎重に判断しながら、手続きを進めた。「教員活動評価結果通知書」配布後、「意見の申出」はなかった。

委員会は、6月2日、7月1日、7月22日及び10月7日開催し、すべての手続きが終了した後に総括を行い、研究業績欄の増加、学会発表者の詳細等、次年度の教員活動評価書の改善点について確認・検討を行った。

(教員活動評価委員会委員長 岡田修一)

2.3.4. 中期計画推進委員会

今年度は、研究科長(委員長・岡田修一)、副研究科長(青木茂樹、小高直樹)、研究推進委員会委員長(岡田修一)、教務委員会委員長(吉永潤)、学生委員会委員長(高見和至)、国際交流委員会委員長(近藤徳彦)、入学試験委員会委員長(青木茂樹)、キャリアサポートセンター長(澤宗則)、情報メディア委員会委員長(宮田任寿)、自己評価委員会委員長(坂本美紀)、事務長(川端清文)の構成員に加え、総務係長(西田望智子)が出席し、月1回の定例会議を開催した(計11回)。

「中期目標の遂行、見直しに関する事項」を所掌する本委員会では、毎回、研究科長から部局年次計画に関わる全体的な状況が説明された。その後、各委員会等からそれぞれの活動内容が報告され、年次計画の進捗状況を確認し合うとともに、各委員会における計画実施の促進、ならびに委員会相互の情報の共有と連携可能性について検討した。

また、「第三期中期目標・中期計画管理表」における平成28年度実績について各委員会に対し回答を求め、それらを踏まえたうえで本研究科の年次計画管理表の再確認を行った。

(中期計画推進委員会委員長 岡田修一)

2.3.5. 自己評価委員会

本年度は、研究科長(岡田修一)、副研究科長(青木茂樹、小高直樹)、委員長(坂本美紀)、委員(伊藤真之、山口悦司、田畑暁生、片桐恵子、大野朋子)、事務長(川端清文)の10名の構成員、ならびに総務係長(西田望智子)が出席し、10回の委員会を開催して、下記の諸課題に取り組んだ。

(1) 授業ピアレビュー

前年度に倣い、ピアレビューの対象とする授業科目として、学部授業では、各学科で前

期後期各 1 科目を、大学院の授業では、人間発達専攻で 2 科目、人間環境学専攻で 1 科目を選定し、それぞれレビューアーを決定した。今年度のレビュー対象は計 11 科目となった。レビューアーおよび授業担当教員が当該の授業内容を点検・評価し、作成したレポートをもとに議論し、対象授業の改善を図った。ピアレビューレポートの様式は、前年度を踏襲した。重要な資料であるレビューレポートの保管先を一元化するため、今年度は、レポートの提出先を教務学生係に変更した。

(2)各種アンケート

入学・進学時アンケートの全学回答結果について検討した。卒業・修了時アンケートにおける学部回答結果について、全学での回答結果を踏まえて検討し、対応策を協議した。また、授業振り返りアンケートの回答率向上策の一環として、各クォーター並びにセメスターごとに、自己評価委員会から教員全体に呼びかけるとともに、前年度に回答者がなかった授業科目について、担当教員に直接、アンケートへの協力について依頼した。卒業・修了時アンケートに関しても、前年度に比べて回答率が低下しているとの報告を受けて、回答を呼びかけるメールを対象学生全員に送付し、回答率の向上を図った。

(3) Voice Box

Voice Box に 2 件の投稿があった。これに関して、本委員会の他、関係委員会や事務部と連携して対応を検討し、大学 Web サイトにて回答を公開した。

(4)ファカルティ・ディベロップメント

計 8 回のファカルティ・ディベロップメントが、研究科教授会の開催に合わせて実施された。グローバル・スタディーズ・プログラムなど、平成 29 年度に発足する新学部の教育に関する内容や、グローバル人材養成を目的として全学で実施する神戸グローバルチャレンジプログラムと発達科学部が提供するアジア・フィールドワークコースの紹介と実施状況報告などが行われ、学部を中心とした教育の取組・課題等について部局教職員の情報共有、理解促進などの効果が得られた。(各回の詳細内容は『資料集』を参照のこと)。

(5)学修時間調査

今年度より開始された本調査に関し、全学の回答結果について検討するとともに、発達科学部の回答結果の公表方法等について協議した。

(6)「教育の質向上のための評価指標」による自己点検・評価

全学が定める「教育の質向上のための評価指標」に基づいて、本学部・研究科における教育の点検・評価を行った。次年度の課題についても検討した。

(7)平成 28 年度年次報告書の作成

本学部・研究科における平成 28 年度の教育・研究活動を集約し、年次報告書としてまとめた。

(自己評価委員会委員長 坂本美紀)

2.3.6. 安全衛生委員会

1) 平成 28 年度委員

委員長（秋元忍），委員（稲原美苗，關典子，榎本平，井上真理，白杉直子，川端清文（事務長），西田望智子（総務係長），笠原夕美（人間科学情報サービス係長））

2) 委員会の開催

5 月 31 日，10 月 27 日，3 月 1 日に委員会を開催した。

3) 委員会の業務

- ・点検事項報告とその対策の検討
- ・その他改善を要する点の検討
- ・全学安全衛生委員会の報告
- ・その他

4) 定期点検

委員による学舎内共用部点検を月に 1 回実施し，各委員が担当場所の点検報告を行った。

5) 本年度の実施事項

・ A 棟 5，6，7 階を対象とした，衛生管理者巡視を 4 月 12 日に実施し，結果を全学安全衛生委員会に報告した。

・ 以前環境管理委員会が行っていた省エネに関する確認のうち，不在時の消灯確認と，エアコン温度確認の 2 点を引き継ぐこととなったため，11 月教授会において上記 2 点の確認を各教員に依頼した。また不在時の消灯については，教授会での依頼後，安全衛生委員が巡視時に確認することとした。

・ D 棟，E 棟について，通常の巡視による確認事項に加えて，不在時の消灯の確認を行った（11 月 29 日）。結果，不在時の点灯は見られなかった。

・ 下記の 2 回実施された，産業医巡視に立ち会った。グラウンド，テニスコート，部室等（9 月 6 日）。プール，体育館等（12 月 6 日）。

・ 共通のゴミ捨て場の使用状況改善のため，毎月の委員長の巡視場所にゴミ捨て場を追加した。

・ 安全管理マニュアルの配布を行った。

・ 消防訓練を実施した（1 月 19 日）。

6) 課題

- ・ 共有スペースにおける不要物の撤去依頼を継続する。
- ・ 省エネへの協力依頼を継続する。
- ・ 安全管理マニュアルの改訂を行う。

（安全衛生委員会委員長 秋元忍）

2.4. 予算

2.4.1. 予算に関する特記事項

(1) 予算追加配分

本年度は科研費等間接経費，受託研究間接経費等を財源として，予算追加配分を下記のとおり行った。

- ①平成 27 年度に引き続き外部資金獲得者に対しインセンティブ配分を行った。
- ②電気料金の執行及び見込みを考慮し電気料金の追加配分を行った。
- ③急な経費の支出等の不測の事態に備えて予備費を確保した。
- ④トイレ詰まり修繕，空調機の修繕等の管理運営経費に充当した。

(2) 平成 29 年度当初予算配分

平成 29 年度当初予算配分案作成にあたり，教育研究基盤経費（既定経費）が非常勤講師相当額を組み込まれた上で前年度より 4.8%減額され，昨年度よりも厳しい予算配分となった。

①管理的経費については，光熱水費が電気代契約単価の値下げがあること，学部学生便覧，AO 入試パンフレット，社会人学生募集要項などを新学部予算にて支出すること等により削減できる一方で，F 棟改修関連の移転費や建物新営設備費が発生するため，全体としては増額とした。

②教育費については，学生当たり経費 1 年生分を新学部へ移行させ，学生実験実習経費や共通図書の学生用推薦図書，ティーチングアシスタント経費等を削減したが，非常勤講師人件費を部局予算より支出することになったため，全体としては増額となった。

③研究経費については，教員研究経費を教員一人当たり 30 万円に減額し，研究支援経費をシンポジウム経費，プロジェクト研究経費，研究推進経費を合わせることで大幅に減額して配分した。

④附属施設経費および政策経費の各委員会予算については，前年度 1 割減で配分した。また，平成 29 年度には外部評価を予定しておりそのための経費を計上した。

なお，翌年度以降も予算の減額が予定されており，予算の配分については今後根本的な見直しが必要である。

2.4.2. 予算関係の審議等の状況

(1) 平成 27 年度決算

平成 28 年 5 月 19 日の予算委員会で審議し，5 月 20 日の教授会において承認された。

(2) 平成 28 年度当初予算再配分

平成 28 年 3 月 19 日の教授会において承認された平成 28 年度当初予算について平成 28 年 5 月 1 日現在での各専攻，学科，コース等の学生実員数に基づいて学生当経費の再配分の修正を行い，5 月 19 日の予算委員会にて審議し，5 月 20 日の教授会において承認された。

(3) 平成 28 年度予算追加配分

予算追加配分について，平成 28 年 12 月 15 日持ち回り開催の予算委員会にて審議し，12 月 16 日の教授会において審議・承認された。

(4) 平成 29 年度当初予算配分

平成 29 年度当初予算配分案は平成 29 年 3 月 15 日開催の拡大予算委員会にて審議し，3 月 19 日の教授会において審議・承認された。なお，学生当経費は平成 29 年 5 月 1 日の学生実員数に基づいて修正を加え 5 月開催の教授会にて審議することとした。

(予算委員会委員長 前田正登)

2.4.3. 外部資金獲得等状況

外部資金の獲得状況については，その詳細を資料編（特に「11-3-1～4」参照）に掲載しているため，ここでは特徴的な点を指摘するにとどめる。

平成 28 年度科学研究費補助金の獲得は，48 件（新規：24 件），総額 127,485 千円であった。内訳は，基盤研究(A)：2 件（新規：1 件），基盤研究(B)：8 件（新規：6 件），基盤研究(C)：21 件（新規：7 件），挑戦的萌芽研究：12 件（新規：8 件），若手研究(B)：4 件（新規：2 件），国際共同研究加速基金：1 件，となっている。平成 27 年度科学研究費補助金の獲得は 40 件（新規：20 件），総額 107,850 千円であることから，今年度は採択件数及び総額ともに約 20%の増加がみられた。特に，昨年度と比較すると，今年度は基盤研究(A)及び基盤研究(B)という予算規模の大きい科研費の採択が増加していることが特徴的である。昨年度から研究推進委員会及びFDにおいて科学研究費補助金の獲得に向けての様々な取り組みの効果が現れていることが考えられる。

文部科学省以外（環境省，神戸市等）の補助金等については，今年度は 17 件，総額 4,621 万円であった。昨年度は 13 件，総額 5,363 万円であるものの，新学部設置関連の補助金 1,212 万円を除くと，総額 4,151 万円となり，研究科の平成 28 年度の補助金は件数・総額ともに増加しているといえる。

受託研究については，11 件，総額 6,272 万円（平成 27 年度 10 件，総額 7,055 万円）となっており，総額において昨年度を下回ったものの，平成 25 年度以降，総額 5,000 万円以

上を維持している。

共同研究については、8件、総額842万円となっており、昨年度の2倍近くの総額の増加がみられた（平成27年度5件、総額431万円）。

日本学術振興会特別研究員については、本年度DC6名（新規：2名）、PD1名（新規：0名）が採用されている。昨年度のDC7名（新規：4名）、PD2名（新規：1名）と比較すると減少にはあるが、学生委員会を中心とした申請に係る説明会の継続的な開催により、次年度以降の申請数及び採用数の増加への効果が現れることを期待したい。

（人間発達環境学研究科長・発達科学部長 岡田修一）

2.5. 広報及び情報公開

2.5.1. パンフレット、ウェブサイト等

(1) 研究科案内（パンフレット）

2017年4月入学者向け研究科案内（パンフレット）は、2016年6月に発行した。さらに、2018年4月入学者向け研究科案内の編集を行った。この案内は28ページで構成され、研究科の教育、研究、国際学術交流、社会貢献、各専攻に関する特色について掲載した。発達科学部は2017年4月に改組予定であるため、発達科学部案内は作成していない（新学部案内は2016年8月に発行した）。

(2) 研究科ウェブサイト

研究科ウェブサイト(<http://www.h.kobe-u.ac.jp>)は2011年度に導入された高機能CMS（コンテンツ管理システム）によって運用されており、すべての情報を一元的に管理・公開し、アクセサビリティ、作業の効率性、安全性の向上を図っている。研究科ウェブサイトは、受験生や一般向けの広報媒体として、また、在学生や教職員向けの広報媒体としての役割をもつ。2016年度においては、受験生や一般向けの情報として、とくに、入試情報や国際学術交流に関する情報を充実させた。入試情報に関しては、ウェブ掲載する手順をマニュアルとしてまとめ、安全対策を行った。また、学術Weeksとして開催されたシンポジウムやセミナーなど、研究科の組織が主催するほぼすべてのイベントの情報をウェブ上に掲載した。在学生向け向けの情報として、基本的な教務学生情報（学生便覧、時間割表など）の他、キャリアサポートセンターが主催するセミナー情報、ESD関係の授業情報、留学に関する情報を掲載し、学科や専攻を超えた学術交流を支援するため、各コースが主催する卒業論文・修士論文発表会プログラムも公開した。

（情報メディア委員会委員長 宮田任寿）

2.5.2 国際人間科学部 オープンキャンパス実施委員会

平成 28 年度のオープンキャンパスは、平成 29 年度より発足する新学部(国際人間科学部)の設置理念や教育目標、特色等について学外に広く発信するとともに、新学部に関心を寄せる多くの高校生に適切な情報を提供することを目的として開かれた。

新学部(国際人間科学部)は、グローバル文化学科、発達コミュニティ学科、環境共生学科、子ども教育学科の 4 学科から構成されるが、物理的な制約から、後述するように、グローバル文化学科は国際文化学部学舎(鶴甲第一キャンパス)で、また他の 3 学科については発達科学部学舎(鶴甲第二キャンパス)でそれぞれ開催された。

ここでは、発達科学部に関連の深い、3 学科(発達コミュニティ学科、環境共生学科、子ども教育学科)を中心に報告する。

(1)実施体制

本年度のオープンキャンパスは、2 学部の合同開催となることから、まず全体的な企画・運営を所掌する委員会として、新学部(国際人間科学部)設置準備室のもとに「オープンキャンパス実施委員会*」が置かれた。当実施委員会が中心となって、発達科学部と国際文化学部間の調整を行いつつ、プログラムの全体的な枠組(説明内容と説明のメインストリーム等)が検討・策定された。また、新学部の特筆すべき試みである GSP(グローバル・スタディーズ・プログラム)については、参加者への丁寧な説明が重要であることから、設置準備室ならびに両学部執行部間で入念な打合せと予行演習等を複数回実施するなどして、万全の準備を行った。

*委員長:遠田先生(国際文化学部)、副委員長:小高(発達科学部)

各学科独自の企画・運営(下記 4.2)や、第 2 部(下記 4.1)における学生登壇者等の選出については、実施委員会副委員長の小高を取りまとめ役として、選出された以下 10 名のメンバー(敬称略)が準備に当たった。

- ・発達コミュニティ学科：伊藤俊樹／秋元忍／谷正人／松岡広路
- ・環境共生学科：丑丸敦史／阪本雄二／井上真理／太田和宏
- ・子ども教育学科：渡邊隆信／北野幸子

(2)オープンキャンパス概要

申込み方法は、インターネット登録とし、学科ごとに、また回ごとに定員を設定して、申込みが定員に達した時点で打ち切る方式とした。申込み期間は 7 月 1 日(金)～7 月 29 日(金)であったが、第一週目でほぼすべての学科、すべての回で定員に達し、新学部に対する興味・関心の高さがうかがえた。なお、保護者を除く参加者全員にオリジナルバッグ(内

容：新学部パンフレット，神戸大学広報冊子，梱包物)とペットボトルを配付した。また，今後の貴重な参考とするために，オープンキャンパス当日に発達科学部B棟前にてアンケートを配付し，帰宅時に回収箱により回収した。

説明会の概要は以下の通りである。

1. 開催日：平成28年8月11日(木・祝)及び8月12日(金)
2. 開催時間：午前及び午後の2回，2日間で計4回実施
午前(10:00～12:30)，午後(13:30～16:00)
3. 説明会場：学科別に開催。会場は以下の通り。
 - ・発達コミュニティ学科(発達科学部 B202) (定員 250)
 - ・環境共生学科(発達科学部 F256) (定員 200) 補助机と椅子を搬入
 - ・子ども教育学科(発達科学部 F264) (定員 200) 補助机と椅子を搬入
 - *保護者向け説明会場(B108, 予備として B108) (定員なし)
 - *グローバル文化学科(国際文化学部 K 棟)
4. 説明内容：
 - 4.1 会場ごとに実施。各回2部構成とし，第1部で国際人間科学部の概要について，第2部で各学科の概要について説明した。

第1部の内容

 - ・広報ビデオ放映
 - ・国際人間科学部とは？
 - ・授業カリキュラムについて
 - ・グローバル・スタディーズ・プログラム(GSP)について
 - ・入試情報について

第2部の内容

 - ・学科の概要と特色について
 - ・教育内容・進路について
 - ・学生による体験談(留学やフィールドワーク等・その他)
 - ・入試情報について
 - 4.2 新学部及び学科説明と平行して，各学科ごとに，以下のような企画を随時開催・実施した。(開催時間：10:00～16:00)

発達コミュニティ学科関連

表現活動受験(A0)等についての説明(B104)

身体運動受験(A0)等についての説明(B201)

臨床心理士，公認心理師資格等についての説明と個別相談 (B202, B212)

環境共生学科関連

研究室紹介 (B210)

子ども教育学科関連

相談会&パネル展示 (F264)

(3) アンケート結果の概要

アンケートによる回収データの分析は，人間発達環境学研究科の大学院生の協力を得て，単純集計及びクロス集計(学科別)により行った。自由記述についてはKJ法を用いて分類した。調査および分析結果の概要は以下の通りである。

1. 調査内容

- ・属性：性別，年齢，学年，高校所在地
- ・参加形態：情報入手源，同伴者，参加理由
- ・オープンキャンパスに対する評価：感想・意見・要望（自由記述）

2. 調査対象

- ・2016年神戸大学国際人間科学部のオープンキャンパス参加者のうち，発達コミュニティ学科，環境共生学科，子ども教育学科参加者のみ

3. 回収数：1307票

4. 調査結果の要約は以下の通りである。（詳細は参加者調査報告書を参照されたい）

- (1) サンプルの性別は，男性が25.2%，女性が74.8%と女性が圧倒的に多い。
- (2) 年齢は，17歳が35.7%，16歳が34.9%，18歳が18.6%と，回答者の約9割が高校生である。
- (3) 学年は，高校2年生が44.9%で最も多く，次に高校3年生が30.7%，高校1年生が21.6%である。
- (4) 高校所在地は，神戸市内が214人，兵庫県内が281人，大阪府が294人で，兵庫県と大阪府を合わせて半数以上を占める。
- (5) オープンキャンパスの情報入手源は，「大学ホームページ」が62.3%を占めている。
- (6) 同伴者は，「保護者と」が35.4%，次に「友人と」が31.6%，「一人」が31.5%となっている。
- (7) 参加理由は「学部の理念に興味があったから」が36.1%と最も多く，「受験を検討しているから」が32.9%と続いている。
- (8) 総合評価は，すべての学科において8割以上の参加者が「内容は良かった」と評価している。

- (9) オープンキャンパスに対する感想・意見・要望を分類すると(KJ法による),
満足に関する感想が323件と最も多く, 要望が158件, 不満足が37件となっている。
満足に関する感想では, 「学生の話」, 「学部学科説明」に関する感想が多く見られた。

平成28年度のオープンキャンパスは, 申込み開始後数日にしてほぼ定員に達した。また, 当日に並行して開催した海外研修(GSP)を中心とした保護者向け説明会は, 参加者が会場に入り切れず, 急遽説明回数を増やすほど盛況であった。いずれも新学部への関心と期待がいかに高いかを示すものであり, 参加者の立場からは, 新学部の理念はもちろんのこと, 発達科学部からの継続性や相違点, 入試方法(とくにA0入試の実施内容), 海外研修(GSP)の詳細等, 確認したい情報が数多くあったに違いない。しかし, 主催者の立場としては, 新学部の設置申請中の開催という不確実な状況のなかで, 新学部や新学科, とりわけ入試に関する情報を, どこまでどのように説明するかについて, 大変苦心したのが実情であった。次年度(平成29年度)は, 正式に発足した国際人間科学部としての最初のオープンキャンパスが開催されるが, より一層多くの参加者を迎えて成功裡に終わることを期待したい。

(国際人間科学部 オープンキャンパス実施委員会副委員長 小高直樹)

2.5.3 人間発達環境学研究科 オープン・らぼ

(1) 実施概要

研究科の「オープン・らぼ」は, 昨年度までは, 5月上旬から研究科HPを通じて告知して参加希望者を募り, 7月上旬の土曜日に当研究科にて全体説明会を開催して, 全体説明, 各専攻・コース説明会の後, 予め面談を予約していたそれぞれの教員の研究室を訪問して教員と面談, 在籍学生との交流, 施設見学等をするという形式で実施されていた。しかし, 教員の学会シーズンとの重なりや参加者の事情等により, 全体説明会とは別途日時を設定して面談するケースが多くあることから, 研究科内外から柔軟な運用を求める声も高まっていた。

こういった指摘に対応し, 参加者の利便性に配慮して, 平成28年度は, 「オープンらぼウィーク」なる研究室訪問期間を設定することとした。参加希望者は予め個別に教員に連絡して面談の予約をとり, 「オープンらぼウィーク」の期間中の任意の日時に面談を行うという方式である。面談の申込み受付期間は5月下旬から6月上旬とし, 「オープンらぼウィーク」の期間は, 本研究科の入試が8月から始まることや教員の教育・研究活動に配慮して6月下旬から7月上旬の約2週間に設定した。

「平成28年度大学院 オープン・らぼ」の実施概要は以下の通りである。

【オープンらぼウィークス】

- ・実施期間：平成 28 年 6 月 27 日（月）～7 月 8 日（金） 9:00～17:00
- ・場所：神戸大学大学院人間発達環境学研究科

【面談の申込方法と受付期間】

- ・面談希望の受付期間（申込受付期間）：平成 28 年 5 月 27 日（金）～6 月 10 日（金）
- ・面談の申込み方法：面談を希望する教員に直接メールで申込。（個別の教員を指定せず、領域のみ指定して面談を希望する場合は、領域の窓口教員（以下の系講座主任）に直接メールで申込。

◎ 人間発達専攻の 4 領域

- ・こころ系 窓口教員（吉田圭吾教授）
- ・表現系 窓口教員（塚脇淳教授）
- ・からだ系 窓口教員（河辺章子教授）
- ・学び系 窓口教員（國土将平教授）

なお、臨床心理学コースの窓口教員は「こころ系」の窓口教員が、また発達支援 1 年履修コースの窓口教員は「学び系」の窓口教員が担当した。

◎ 人間環境学専攻の 4 つの領域

- ・自然環境（伊藤真之教授）
- ・数理情報環境（宮田任寿教授）
- ・生活環境（近江戸伸子教授）
- ・社会環境（岩佐卓也准教授）

(2) 総括

「オープン・らぼ」への参加が、当研究科の受験に結びついているかどうかを調査したところ、人間発達専攻所属の教員との面談実施者は 19 名で、そのうち当研究科を受験した者は 7 名、また人間環境学専攻所属の教員との面談実施者は 6 名で、そのうち当研究科を受験した者は 4 名であった。参加者は全体で 25 名、そのうち受験に結びついた参加者は 11 名という結果である。「オープン・らぼ」参加者のほぼ半数近くが当研究科を受験していることから、当企画が受験生を確保するうえで、一定の役割を果たしたと言える。

さて、平成 29 年度大学院人間発達専攻前期課程の入学者の定員充足率が最終的に 90%を切る結果となった。受験者のさらなる増加を目指して、次年度は、「オープン・らぼ」の

広報強化はもちろんのこと、外部の専門家の協力も視野に入れた多様な方策を検討する必要があるだろう。

(人間発達環境学研究科 オープン・らぼ WG 主査 小高直樹)

2.5.4. ホームカミングデイ

本年度のホームカミングデイ（第11回）は10月29（土）に次の内容で開催された。

13時00分～14時00分 受付（発達科学部A棟正面玄関）

14:00～14:30 キャンパスツアー

14:45～15:00 「おかえりなさい！発達科学部へ」（大会議室）

発達科学部長，紫陽会会長挨拶

15:00～15:15 紫陽会賞受賞式（大会議室）

15:20～16:20 Alumni Report 2016（大会議室）

諫山大介氏（人間環境学科1997年卒，神戸市市会議員）「発達科学部1期生として」

永富めぐみ氏（人間形成学科2014年卒）「教員生活3年を振り返って」

16:30～19:00 全体懇談会（生協食堂），懇親会（参加費：3,000円）

16:30～19:00 混声合唱団セレクトメンバーズによる演奏

発達科学部には全70名（卒業生：40，在学学生：17，教職員13）の参加を得た。「Alumni Report 2016」と題した中核企画に，キャンパスツアー，懇親会等のレギュラー企画を加えた内容は好評であった。

本年度の案内状送付対象年次は，次のとおりである。

大学（本部）送付：昭和36，41，46，51，56，平成3

当学部独自送付：平成10，11，12，13

以下，準備から実施当日までを時系列で記す。

4月：「ホームカミングデイ・プロジェクト委員会」発足

北野幸子准教授（人間形成学科），高田義弘准教授（人間行動学科），梅宮弘光教授（人間表現学科，委員長），關典子准教授（人間表現学科），寺門靖高教授（人間環境学科）。事務担当：西田望智子総務係長。

5月23日：学部別ホームカミングデイ企画提出

総務係を通じて本部に次の仮決定学部企画を提出した。

5月25日：同窓会「紫陽会」役員を加えた拡大委員会開催

紫陽会：宮嶋昭周会長，松永一夫副会長，ほか1名

研究科：岡田修一研究科長，岡田章宏前研究科長，川端清文事務長，ホームカミングデイ・プロジェクト委員会委員（前出）

中核企画の名称を「Alumni Report 2016—発達科学部から巣立った多彩な活動の今，そしてこれから」とし，内容として，卒業生をゲストスピーカーに迎え，卒業後の活動を紹介しつつ学生時代を振り返り，当学部における学びの意義を論じていただくものとすることが了承された。これを含めて，当日のプログラムとタイムスケジュール（前述）が了承された。

案内状の送付対象として，大学（本部）の対象年次に加えて，学部独自に対象を4年分加えることが決定された。いずれの対象にも学部独自の案内チラシ（A4サイズ，カラーコピー）を同封することが決定された。

加えて，今後の同窓会やホームカミングデイのあり方について協議した。

6月10日：企画内容の決定

仮決定内容を協議し，次のとおり決定した。

Alumni Report 2016の具体的内容：企画テーマのカテゴリーとして，卒業後の進路やライフステージに応じた現況（留学生，女性管理者，業界別など）が考えられる。具体的内容については各学科へ提案依頼し，6月末を目途に集約のうえ個別折衝を行うこと。

「学部関係サークルによるパフォーマンス」企画については，実績のある「よさこいサークル」に加え，ジャグリングサークル，アメフト部チアリーディング，混声合唱団などが候補となり，混声合唱団に打診することとなった。

実施当日の託児所開設については，例年開設してきており利用実績はないが本年度も開設することとした。

7月26日：学部独自の案内チラシ最終決定

卒業生への訴求力を高める方策として，学部独自の案内チラシを作成した。内容は，ホームカミングデイのプログラムとタイムスケジュール情報に加え，各学科長（稲垣成哲教授，河辺章子教授，塚脇淳教授，平山洋介教授）のメッセージ，師範学校から発達科学部に至る組織変遷図。組織変遷図については，宮嶋昭周紫陽会会長，総務係，委員会間で相互チェックを行い，正確を期した。

9月初頭：

委員会において「Alumni Report 2016」のゲストスピーカー候補を検討し，複数候補から次の2氏に絞り，出身研究室の指導教員を通して依頼，快諾を得た。

諫山大介氏 発達科学部 1997 年卒業（1 期生）神戸市議会議員

永富めぐみ氏 発達科学部 2014 年卒業 神戸市立霞ヶ丘小学校教諭

9 月 16 日，21 日：ゲストスピーカーとの打合せ

委員長が各ゲストスピーカーを訪ね，正式依頼と企画趣旨の説明，先方の意向，必要となる準備物等について打合せを行った。

9 月 20 日：学生によるパフォーマンス決定と打合せ

懇親会の中盤に披露される学生グループによるパフォーマンスについては，この数年間は「よさこいサークル」の協力を得て好評であった。一方，ホームカミングデイ参加者の中には毎年参加される方々もおられる。こうした状況を鑑み，本年度はプログラム内容を変えることとし，混声合唱団のうち当学部部員を中心とした有志グループに依頼した。

同グループの代表者と打合せを行い，プログラム内容（「神戸大学歌」を含めることなど），懇親会会場でのスペース確保などを協議した。

9 月 21 日：在学生向けの参加呼びかけ

卒業生のためのイベントと捉えられがちなホームカミングデイから脱して，在学生との交流の場を目指すべく，ポスター（A3 サイズ）とチラシ（A4 サイズ）を作成し，学内掲示板 10 カ所，ラーニングコモンズに掲出した。

また，教員を通じて指導学生への呼びかけ，キャリアサポートルームに来室者向けの呼びかけを依頼した。加えて，学生向けメール配信システムを利用して全学生に向けて次の参加呼びかけを行った。

○在学生のためのホームカミングデイ！？

「ホームカミングデイは卒業生のためだから関係ない」と思っていませんか？ そんなことは，ありません。帰ってくる人と待つ人の両者がいてこそその「ホーム」でしょう。だから，在学生にも有意義な企画となるように考えました。

○"Alumni Report 2016"

「アラムナイ」，同窓とか卒業生という意味です。今年のホームカミングデイでは，発達科学部 1 期生（1997 年卒）と，卒業間もない（2014 年卒）方のお二人をゲストスピーカーに迎え，学生時代を振り返りつつ現在のお仕事について話していただきます。

○夢と将来を考える機会に

みなさんも遠からず「卒業生」です。何年か，十何年か，何十年か…，未来から今の自

分を眺めてみる。"Alumni Report"は、そんな視点を与えてくれるはずです。先輩の話は、みなさんが夢と将来を考えるよいきっかけになるでしょう。

10月19日、26日：学内向け参加呼びかけ

研究科教員あてにメールにて教員及び研究室所属学生の参加意向を照会し、参加呼びかけを行った。

10月29日：ホームカミングデイ当日

本報告冒頭に記したプログラムどおりに進行した。参考までに各項について気づいた点を付記する。

受付：総務係長に加え総務係から2名の応援を得て円滑に行われた。

キャンパスツアー：笠原係長（人間科学図書館）の協力を得て、書庫ツアーと卒業生向け図書館サービスの説明が行われた。卒業生向けサービスが必ずしも周知されていないこともあってか、たいへん好評であった。書庫ツアーに限らず、キャンパスツアーに対する参加者の潜在的な関心が高いことに驚いた。それぞれに思い出の場所、懐かしい場所があり、たとえ参加者の在学時とは変化していても、再びそこに行ってみたいという要望がある。実際には管理上施錠されている部屋もあり、時間も限られている（30分）ことから、そうした要望にはほとんど応えられなかった。キャンパスツアー企画の充実は、参加者の満足度を高めることにつながると思われた。

Alumni Report 2016：ゲストスピーカーいずれも発達科学部の卒業生だが、1期生と一昨年の卒業という世代差があり、その取り合わせが好評であった。ゲストスピーカーと現役学生との質疑応答もあり、教育学部時代の卒業生にとって発達科学部以降の動向を知ることができてよかったとの声があった。

全体懇談会・懇親会・学部関係サークルによるパフォーマンス：Alumni Report 2016からの流れで少数ながら現役学生の参加があった（本年度は学生の参加は無料とした）。合唱団の演奏に卒業生の飛び入りがあり、卒業生と現役学生とのコミュニケーションも見られ、終始なごやかで活気のある雰囲気が続いた。現役学生の参加増加は、今後のホームカミングデイ活性化の鍵のひとつだと感じた。

おわりに、準備過程から実施当日まで当企画に参加・協力いただいたすべての方々にお礼申し上げ、本年度の報告としたい。

（第11回発達科学部ホームカミングデイ・プロジェクト委員会委員長 梅宮弘光）

2.6. 環境設備

2.6.1. 教育・学習環境の整備

(1)各種施設・設備

1) D-Room の整備

昨年度、D-Room の床の AV フロア化、壁のホワイトボード化及び廊下側の可視化等への改修や可動式テーブル、パーテンションを導入して、ラーニングcommonsとしての整備を行ったが、今年度は、更に書庫やカウンターテーブルを増設し、フリースペースにも多目的に利用できるテーブルや椅子を配置して、アクティブ・ラーニングにも対応できる施設に整備をした。

2)のびやかスペースあーちの整備

昨年度、移転する灘区民ホールの入居スペースを「のびやかスペースあーち」としてより機能的に利用できるように改修を行ったが、今年度は、神戸市に採択された「子ども食堂」事業に対応できるように調理環境を整備し、学生の実習環境を整えた。

3)F 棟の改修計画

F 棟の改修にあたり、学生の教育環境を充実させるため、1階と2階部分にアクティブ・ラーニングや遠隔授業等が行える多機能な施設を設置する改修計画を作成し、施設部と設計の細部について協議を進めている。 (事務長 川端清文)

(2) キャンパス内ネットワーク環境整備

本研究科では、部局の広報用に独自のウェブサーバを管理運営している。2015年度に、研究科広報用ウェブサーバをリプレースしている。2016度は、新学部広報用ウェブサーバを導入した。

本研究科で利用できる無線 LAN は、神戸大学情報基盤センターが管理する全学用無線 LAN と、本研究科が独自に管理する無線 LAN がある。2013年度までに、部局内建物のほぼ全域で、無線 LAN の利用が可能となっている。

本研究科では、研究科ウェブサイト上で公開しているイベントやお知らせ等の情報を学生・教職員向けに幅広く周知する目的で、電子掲示板を4台(A棟1階エレベータ前、A棟2階教務学生係前、D-Room、図書館内)に設置し、運用してきた。しかしながら、これらのうち2台は老朽化による故障のため使用できなくなっている。また他の1台は、D-Room 改修のため取り外された状態である。

情報教育設備室の準備室にはスタッフが常駐し、60台の教育用端末のサポートの他、学生や教職員向けに、コンピュータやネットワーク利用に対する技術支援も行っている。2016年度は、パソコンやネットワークに関するトラブルの対応など、300件を超える問

題への対応を行った。

本研究科では、在学生への広報手段の1つとして、学生向けメーリングリストの運用を行っている。メーリングリストは学生が所属する公式組織（コースなど）単位で構成され、教務、学生生活、キャリアサポートに関する情報などが提供された。

（情報メディア委員会委員長 宮田任寿）

(3) 図書館整備

本学研究科・学部 に附設された人間科学図書館は、下記の活動を実施した。

新入生ガイダンスで図書館利用の意義・方法を案内した（「図書館利用のすすめ」）。利用方法を説明する「春の図書館ツアー」を4月11～22日に実施し、4月中は要望に応じて適時実施した。

学生用資料の整備充実に努め、平成28年度において、学生用推薦図書（専攻推薦図書）、学生希望図書など、1,123冊（総額5,257,685円）の図書を購入して開架した（表1）。附属図書館からの予算が約18%削減されたため、学生用推薦図書を減額せざるを得なかった。また、平成27年度購入学生用図書の平成28年1月～12月までの利用実績は、全体の貸出率で53.68%、回転率で153.40%であり、いずれの図書とも概ねよく利用されていた（表2）。

スペースの有効活用の観点から、古い資料・重複資料を1,341点（3,142,958円）、処分した。

予算的観点から、継続購読中の白書・統計類について見直した。Web上で利用できるもの、且つ、分野的に配架されていなくても困られないと思われるものについて購読中止を決定した。なおWeb上での利用ができないものや、直ちに配架不要と判断しにくいものについては継続審議事項とした。

教員の退職・転出に伴う返却図書について、当該教員より譲渡希望があった資料の廃棄処分について審議・決定した。また寄贈雑誌の資産登録廃棄処分と雑誌としての再受入について審議・決定した。

新学部（国際人間科学部）設置に伴い、人間科学図書館と同図書委員会を継続することを確認した。

本年度は、メール会議を含めて3回の委員会を開催した。

（図書委員会委員長 浅野慎一）

表1

区 分	予算額 (円)	購入実績		備 考
		冊数	金額 (円)	
教員推薦図書	4,221,000	655	3,479,945	参考書含む
学生希望図書	380,000	71	270,540	
継続図書	400,000	116	385,291	参考書含む
シラバス掲載図書	160,000	19	67,383	
教科書	180,000	131	71,866	
学生用図書	0	31	206,212	
参考図書	0	14	237,816	
グローバル図書	30,000	76	392,832	
視聴覚資料	0	10	145,800	
合 計	5,371,000	1,123	5,257,685	

表2 (平成27年度購入図書における平成28年1月～12月の利用実績)

区 分	購入冊 数	貸出可能冊 数(A)	貸出図書 数(B)	貸出延回 数 (C)	貸出率 (B/A) %	回転率 (C/A) %
教員推薦図書	828	827	440	1200	53.20%	145.10%
学生希望図書	85	85	67	184	78.82%	216.47%
継続図書	64	64	17	50	26.56%	78.13%
シラバス掲載 図書	31	31	8	28	25.81%	90.32%
教科書	307	307	156	425	50.81%	138.44%
学生用図書	23	23	7	15	30.43%	65.22%
参考図書	78	0	0	0	0	0
グローバル図 書	117	117	86	330	73.50%	282.05%
視聴覚資料	1	1			0.00%	0.00%
合 計	1,534	1,455	781	2,232	53.68%	153.40%

2.6.2. 交流ルーム・アゴラ

体制

開設9年目を迎え、4月は男子2名女子3名のスタッフと実習生2名の体制でスタートした。6月に新たな女性スタッフが加わり、8月に男性スタッフが退職した。年度末におけるスタッフのうち、1名に精神障害、2名に知的障害がある。

活動状況

- ・六甲アイランド高校の福祉専攻の生徒たちが、前期・月1回のペースで実習を行った。
- ・兵庫ワークセンターから1名の実習生を受け入れた。
- ・前期・毎週1回、大学院の授業がサイエンスカフェ形式で実施された。スタッフにとっても意義のある内容であった。
- ・8月11日・12日のオープンキャンパスには、スタッフ5名と学生アルバイト6名が対応し、ランチ等を提供した。メニューは、カレー、たこやき、コーヒー、アイスクリーム、リンゴジュース、オレンジジュース、レモンスカッシュであった。また、実習生がボランティアとともにDルームでクッキー、缶ジュースを販売した。
- ・オープンキャンパスの売り上げは前年比を下回った。
- ・秋に2回、農学部ボランティアささやまによる黒枝豆販売の協力を行った。

展示

- ・造形表現発達論の授業との連携で、11月より木版画展を実施した。

その他

- ・共同作業所から無農薬玄米白米を購入した。
- ・実習生が、教員ボックスへの郵便物の配達、クッキー販売を行った。
- ・客員数は昨年度を上回っている。
- ・寄付金の受け入れがあり、それをもとに1月より実習生1名の週3時間雇用を実現した。

(交流ルーム運営委員会委員 佐々木倫子)

2.7. 教員研修

2.7.1. FD

教授会の開催にあわせてFDを実施した。以下、本年度に扱ったテーマ及び講師を記す。

- (1)6月17日：「新学部でのグローバル・スタディーズ・プログラム (GSP) について」 (GSP 実施委員会 青木茂樹)
- (2) 9月9日：「科研費申請の基礎とステップアップに向けて」 (学術研究推進本部 寺本時靖特命准教授)
- (3) 12月9日：「国際人間科学部の準備状況について」 (国際人間科学部設置準備室長 岡田章宏 他)
- (4) 12月16日「新グループウェア (KUIC) の導入と利活用について」 (総務部総務課長 志茂弘明 他)

- (5) 1月20日：「『神戸大学基金』について」（佐伯 誠一学長補佐）
- (6) 1月20日：「神戸グローバルチャレンジプログラムと発達科学部のアジア・フィールドワークコースについて」（神戸グローバルチャレンジプログラム委員 伊藤真之，古川文美子）
- (7) 3月7日：「グローバル・スタディーズ・プログラムについて」（国際人間科学部設置準備室長 岡田章宏）

（人間発達環境学研究科長・発達科学部長 岡田修一）

2.7.2 初任者研修

情報メディア委員会では，毎年，着任した教員に対して研修会を主催している。2016年度は4月から10月に4名の教員が赴任されており，そのうち3名に対して，2016年11月25日に研修会を開催した。神戸大学における情報セキュリティポリシーと個人情報保護に関する説明をはじめ，部局が独自に提供するICT関係のサービス（IPアドレス管理システム，無線LAN，学生へのメール配信システム，技術サポートなど），神戸大学が提供するICT関係のサービス，学外ASPサービス利用の注意点などについて説明を行った。

（情報メディア委員会委員長 宮田任寿）

3. 入試

3.1. 一般選抜入試

3.1.1. 入学試験委員会

本研究科および発達科学部が関係する入学試験全体を所管する入学試験委員会は、研究科長、副研究科長、専攻長、学生委員会委員長の計8名で構成し、平成28年度委員長を副研究科長の青木茂樹が務めた。なお、学部1年生の入学試験は国際人間科学部の入試となり、最終的な審議・決定は当該学部の入学試験委員会および設置準備委員会の所掌となるが、発達科学部側あるいは学科間での事前の調整・確認は本委員会にて行った。

今年度の審議概要（日程と議題）は以下のとおり。

- ・ 第1回（4月14日）
 - 1.平成29年度大学院学生募集要項について
 - 2.平成29年度入学者に係る入試日程について
- ・ 第2回（5月13日）
 - 1.平成29年度神戸大学入学者選抜要項について
 - 2.平成29年度国費外国人留学生（外国政府派遣留学生を含む）及び私費外国人留学生学部入学者の選考方法等について
 - 3.平成29年度神戸大学高大接続研究入試学生募集要項について
- ・ 第3回（6月13日）

平成29年度国際人間科学部推薦入試 アドミッション・オフィス入試学生募集要項について
- ・ 第4回（7月7日）

平成29年度国際人間科学部社会人特別入試〔第1年次入学〕学生募集要項について
- ・ 持ち回り（7月12日）

平成29年度博士課程前期課程入学試験に係る個別の入学資格（出願資格事前）審査について
- ・ 第5回（9月7日）
 - 1.平成29年度博士課程後期課程人間環境学専攻（第I期）入学試験・進学者選考試験合格者の判定について
 - 2.博士課程前期課程入学試験における英語の点数の算出方法等について
 - 3.平成29年度第3年次編入学試験受験特別措置について
 - 4.平成29年度神戸大学学生募集要項について
 - 5.平成29年度入試における合格判定に係る取扱いについて

- ・ 第 6 回 (9 月 29 日)
平成 29 年度博士課程前期課程入学試験合格者の判定について
- ・ 持ち回り (11 月 15 日)
平成 29 年度博士課程前期課程 1 年履修コース入学試験に係る個別入学資格 (出願資格事前) 審査について
- ・ 第 7 回 (1 月 18 日)
 1. 平成 29 年度博士課程前期課程人間発達専攻 1 年履修コース入学試験合格者の判定について
 2. 平成 29 年度入学試験に係る入学試験日程について
 3. 平成 29 年度学部 (第 3 年次編入学試験) の入試情報開示基準について
 4. 平成 29 年度大学院入試の入試情報の開示方針について
 5. 平成 29 年度国際人間科学部入学者選抜に係る原則について
- ・ 第 8 回 (3 月 6 日)
平成 29 年度博士課程後期課程入学試験・進学者選考試験合格者の判定について

3. 1. 2. 一般選抜入試に係る総括と課題

今年度の発達科学部にて実施された大学入試センター試験, 3 年次編入学試験及び人間発達環境学研究科の一般選抜入試に関する業務は, 学生委員会をはじめ関係各位の尽力により大過なく遂行された。

平成 28 年度入学者から博士課程前期課程の入試において, 英語試験の外部試験を導入した試験を開始した。また機能強化改革に伴い, 人間発達環境学研究科博士課程前期課程の学生定員に関しては, 平成 28 年度より人間発達専攻は 52 名から 51 名に人間環境学専攻は 40 名から 36 名に削減され, 研究科全体としては 92 名から 5 名減の 87 名という定員となっている。

入学試験結果は, 人間発達専攻で, 入学定員 51 名に対し, 志願者数 86 名 (志願倍率 1.69 倍), 受験者数 81 名, 合格者数 51 名, 入学者数 44 名であり, 定員充足率は 0.86 倍となった。また, 人間環境学専攻で, 入学定員 36 名に対し, 志願者数 41 名 (志願倍率 1.14 倍), 受験者数 39 名, 合格者数 37 名, 入学者数 34 名で, 定員充足率は 0.94 倍であった。外数 (定員 4 名) としている人間発達専攻 (一年履修コース) の入学者数 5 名を加え, 研究科全体として捉えれば, 定員 91 名に対し入学者数 83 名, 定員充足率は 0.91 倍となった。合格後の入学辞退者が人間発達専攻で 7 名, 人間環境学専攻で 3 名発生したために定員充足率が 1.00 を下回る事態となったが, 研究科全体としての入学状況は適性範囲の下限となっている。

また、博士課程後期課程については、人間発達専攻が、入学定員 11 名に対し、志願者数 17 名（志願倍率 1.54 倍）、受験者数 16 名、合格者数 12 名、入学者数 12 名であり、定員充足率は 1.09 倍となった。また人間環境学専攻では、定員 6 名に対し、志願者数 9 名（志願倍率 1.50 倍）、受験者数 9 名、合格者数 8 名、入学者数 6 名であり、定員充足率は 1.00 倍となった（第Ⅰ期と第Ⅱ期の合計）。研究科全体としては、定員 17 名に対し入学者数 18 名、定員充足率 1.06 倍となっている。

学部の 3 年次編入学試験も含めて、いずれについても詳細な数字は『資料編』に掲載する。

（入学試験委員会委員長 青木茂樹）

3.2. 特色ある入試

3.2.1. 3 年次編入学試験

平成 29 年度 3 年次編入学試験は、4 学科 9 コースと発達支援論コースを加えた 10 コースで実施した。募集人員は 10 名で、選抜方法はこれまでと変更なく、いずれのコースも、英語、専門科目、口頭試問であった。出願期間は平成 28 年 8 月 19 日から 8 月 25 日、試験実施は 10 月 1 日、合格発表は 10 月 25 日であった。

結果は、志願者数 55 名（志願倍率 5.5 倍）、受験者数 48 名、合格者数 11 名、入学者 9 名（人間形成学科 2 名、人間行動学科 0 名、人間表現学科 2 名、人間環境学科 4 名、発達支援論コース 1 名）であった。

（編入学試験専門委員会委員長 高見和至）

3.2.2. 社会人特別入試

国際人間科学部の入試として、発達コミュニティ学科、環境共生学科、子ども教育学科で実施した社会人特別入試は、英語と面接（口頭試問）による選抜を行った。各学科若干名の募集に対して、志願者数 11 名（発達コミュニティ学科 8 名、環境共生学科 2 名、子ども教育学科 1 名）、受験者数 11 名（発達コミュニティ学科 8 名、環境共生学科 2 名、子ども教育学科 1 名）、合格者数 4 名（発達コミュニティ学科 3 名、環境共生学科 1 名、子ども教育学科 0 名）の結果となり、この 4 名全員が入学した。

3.2.3. アドミッション・オフィス入学試験

国際人間科学部の入試として、発達コミュニティ学科と環境共生学科でアドミッション・オフィス入試（以下 AO 入試）を実施した。

発達コミュニティ学科では、これまで発達科学部人間行動学科の AO 入試として実施してきた入試を引き継いで『身体運動受験』として募集人員 12 名で実施するとともに、これ

まで発達科学部人間表現学科の一般入試前期日程で実施してきた実技検査を課す部分を引継ぐ形でAO入試『表現活動受験』として合計24名の募集人員（音楽受験12名、美術受験8名、身体表現受験4名）で実施した。身体運動受験で51名、表現活動受験で62名（音楽受験32名、美術受験15名、身体表現受験15名）の志願者があり、最終合格者は募集人員の通りの結果となり、その全員が入学した。

環境共生学科では、これまで発達科学部人間環境学科で実施してきたAO入試を引き継いで募集人員5名で実施した。13名の志願者があり、最終合格者は5名となり、その全員が入学した。

(入学試験委員会委員長，社会人入試専門委員会委員長，AO入試実施委員委員長 青木茂樹)

4. 国際交流活動

4.1. 学術交流協定

今年度は締結可能な大学やプログラムについて検討を進め、カナダ・ブロック大学の語学研修プログラムに係る覚書（2016. 11）を締結した。また、これまで締結している大学との協定の更新を実施した（ヴィリニユスゲディミナス工科大学の学生交流実施細則：主管部局工学研究科，2016. 12；モンゴル国立大学の学生交流実施細則：主管部局国際文化学研究科，2017. 3）。さらに、国際人間科学部の関連で、GSP オフィスにより中国の北京師範大学・華東師範大学、韓国のナザレ大学・公州教育大学との協定更新も進められている。

（国際交流委員会委員長 近藤徳彦）

4.2. 留学生

本年度、本研究科で学んだ留学生は74名、概要（性別・国籍別・学年別・専攻・学科別・国費/私費別）は別表の通りである。

(1) 交流協定校との留学生の交換

受入：オーフス大学1名、北京師範大学1名、華東師範大学1名、西オーストリア大学1名、ヴェネツィア大学1名

派遣：サンベダ大学1名、ハンブルク大学2名、モスクワ教育大学1名、ドレスデン工科大学2名（Erasmus+）、ヴェネツィア大学1名、トリーア大学1名

(2) 派遣留学生募集・決定について

留学説明会

7月19日（火）と11月9日（水）の昼休みに留学説明会を開催した。交換留学生制度を有する大学の紹介、留学先での勉学や生活、応募手続きなどについて説明を行った。また、留学経験者から留学に関するプレゼンテーションの発表や質疑応答への対応をしてもらった。

派遣留学生選考

2月16日（木）、国際交流委員会ワーキンググループ委員による部局間協定校への派遣交換学生の選考が行われた。応募者は1名であり、北京師範大学への派遣が決定した。

来年度の受入・派遣学生

部局間協定：ドレスデン工科大学2名（Erasmus+）

全学協定：キール大学1名、ポローニャ大学1名、北京師範大学1名

(3) 留学生懇親会

6月24日（金）、C棟講義室にて、本学部・研究科の留学生を対象とした懇親会を開催し

た。43名（留学生26名、チューター1名、事務職員7名、留学生担当専門教育教員1名、指導教員5名、研究科長1名、副研究科長1名、国際交流委員長1名）の参加を得て、親睦を深めた。教員による音楽演奏や、留学生による歌や踊りなど、さまざまなパフォーマンスに盛り上がり、交流を深めた。

(4) 留学生見学旅行

11月12日(土)、大塚国際美術館見学、藍染め体験を含む見学旅行を実施した。34名（留学生31名、引率教職員3名）の参加があり、日本の名勝見学、日本の文化の体験を通して日本理解を深めた。

(5) 留学生説明会及びチューター説明会

4月と10月に留学生説明会を行い、基本的なこと及び諸注意を与えた。3月と9月の2回行い、チューターに仕事の説明と諸注意を与えた。特に仕事内容について情報を共有し周知徹底できた。

(6) 派遣留学生報告書の閲覧及び留学報告会の開催

教務学生係において、過去の交換留学生の報告書をファイルにまとめ学生を対象に閲覧を継続している。留学生帰国報告会を8月1日(火)に行った。報告者はモスクワ教育大学への派遣学生1名、ソフィア大学への派遣学生1名であり、留学生活について説明してもらった。また、離日挨拶会を2月7日(火)に行った。報告者は北京師範大学からの留学生1名、パナマからの教員研修留学生である。日本での留学体験を語ってもらった。

(7) 留学生向け就活ガイダンス

10月、1年間の就職活動を経て、企業から内定を得た留学生を招待し、就職活動体験談を披露してもらった。実際の具体的な就職活動体験は、非常に有益であった。

(8) 留学生茶話会

第4週の月曜日17時～18時半に月1回で行っている。参加者は10名前後である。研究室の行事に自分だけ声がかからずさみしいなど、留学生からの生の声を聞き取る場になっている。解決が必要ならチューターと連絡を取るなどしているが、留学生相互のアドバイスで解決することも多く、ピアカウンセリングが有効な場であることがわかった。

(9) メーリングリストの利用

留学生のメーリングリストを作成し、就活セミナーや旅行やイベントなどについて一斉メールで案内を送付した。

(10) 来年度に向けて

Erasmus+に参加できるのは、非常に有益なことであるので引き続き押し進めたい。しかし、同時に、専門能力や意欲などを慎重に吟味の上学生を派遣する必要性もある。

別表 留学生在籍状況

		前期	後期	計
性別	女性	34	44	48
	男性	22	22	23
	計	54	66	71

		前期	後期	計
国籍	中国	46	57	61
	韓国	4	4	4
	パナマ	1	1	1
	キリバス	1	1	1
	オーストラリア	0	1	1
	イタリア	0	1	1
	デンマーク	1	0	1
	バングラディッシュ	1	1	1
計	54	66	71	

		前期	後期	計
学年	D3	6	5	6
	D2	1	1	1
	D1	2	2	2
	M2	16	15	16
	M1	8	8	8
	学部生2回生	1	1	1
	研究科研究生	10	18	18
	学部研究生	6	11	11
	学部特別聴講生	1	2	3
	大学院特別聴講生・特別研究生	2	2	4
	教育研修生	1	1	1
計	54	66	71	

		前期	後期	計
専攻・学科	人間発達	23	28	30
	人間環境学	23	23	26
	人間形成	0	3	3
	人間行動	1	2	3
	人間表現	5	6	4
	人間環境	2	4	8
	計	54	66	71

		前期	後期	計
国費/私費	国費	5	5	5
	私費	49	61	66
	計	54	66	71

(国際交流委員会委員長 近藤徳彦)

4.3 「英語による授業の実践—ESD 研究」

大学のグローバル化に対応して、今後、英語で行われる授業を増やしていくことが期待されている。実態としては、必ずしも英語の授業に対するニーズが顕在化していないものの、ESD（持続可能な開発のための教育）が地球規模での実践的な学際的交流を求めるものであることから、まず、大学院に開設された ESD サブコースの授業科目のうち、ESD 研究（ESD study）を、すべて英語で行うこととした。

教員 7 名が各専門に応じて英語でレクチャーを行い、一切日本語を使わないことがルールとされた。参加院生（9 名）は、英語で質問するだけでなく、授業後のコメントも英語で記入し、最終レポートも英語で行う、というフル英語の授業を実施した。教員・院生共に試行錯誤の繰り返しであるが、参加院生からは、「英語でのコミュニケーションの面白さを体感できた」「国際舞台での発表を意識することができた」との感想を得た。

夜間ということもあり、履修院生数は少なかったが、次年度は、本学カリキュラムに実装するために、全学的に本授業の存在をアピールし、履修院生の拡大とともに、英語による授業の効果・意義を広めていく予定である。

(人間発達専攻 松岡広路)

4.4. 学生・教員・職員の海外派遣

(1) 神戸大学基金

2016/7/16～2016/7/25：人間環境学専攻学生 1 名，ポルトガル・アゾレス諸島，Island Biology 2016

2016/5/11～2016/5/15：人間発達専攻 2 名，中国・マカオ，The 14th ASFAA Congress Macao 2016

(2) 国際交流運営資金

学生の国際学会発表への援助事業助成

2016 年 11 月：人間発達専攻 1 名，ニュージーランド・オークランド，SMAANZ 2016 Conference

2016 年 9 月：人間環境学専攻 3 名，ドイツ・ドレスデン，20th European Symposium on Polymer Spectroscopy ES0PS20

国際交流運営資金で学会発表の助成以外のもの

外国の大学との学生交流事業

2016年12月8日：北野幸子，オーストラリアと日本の乳幼児教育相互学習・交流，開催
(学術 WEEKS から予算あり)

外国の大学との研究者交流事業

2016年6月～7月：近藤徳彦，ヒトの自律性体温調節と行動性体温調節，Nicola Gerrett
(University of Worcester, UK)

(3) 教員・職員派遣 (研究科等の経費)

1) 教員の派遣

期日	氏名	国	訪問先	内容
2016年5月	加藤佳子	ハンガリー	エトヴェシュ・ローラ ンド大学, ドイツ ド レスデン工科大学, オ ーストリア グラー ーツ大学	協定交渉, スタディツアー 打合せ, Erasmus+への参 加, 学生派遣交渉
	近江戸伸子	ドイツ	ドレスデン工科大学, オーストリア グラ ーツ大学	Erasmus+への参加, 学生派 遣交渉, 協定交渉
2016年7月 ～8月	坂東肇	チェコ	Music School of Jan Hanus, Jaroslav Jezek Conservatory	国際人間科学部における海 外研修受入先調査
2016年8月	佐藤真行	カンボジア	World bank, university of Phnom Penh	国際共同研究打合せ
	奥山和子	タイ マレーシア	ボン・ラチャタニ大 学, スルタン・イドリ ス教育大学	国際人間科学部における GSP 開発のための視察及び 打合せ
2016年8月 ～9月	源 利文	インドネシア ベルギー	ダブリン・シティ大 学, ヘント大学	神戸グローバルチャレンジ プログラム打合せ
	北野幸子	アイルランド ベルギー	ダブリン・シティ大 学, ヘント大学	国際人間科学部における交 流校開拓
2016年9月	佐藤真行	シンガポール	南洋理工大学	国際共同研究打合せ
2016年9月 ～10月	古川文美子	インドネシア	リアウ学	海外研修引率
	清野未恵子	インドネシア	リアウ学	海外研修引率
	川地亜弥子	スウェーデン 英国	Fredrik 高校, ストッ クホルム市立図書館, ケンブリッジ大学	教育機関の見学調査, Dewey Comference2016 参加, 研究 調査
2016年12月	加藤佳子	ハンガリー ドイツ	エトヴェシュ・ローラ ンド大学, ドレスデン 工科大学	共同研究打合せ, Erasmus+ への参加
	源 利文	中国	上海交通大学	神戸グローバルチャレンジ プログラム打合せ
2017年2月	奥山和子	韓国	済州大学	協定交渉, 打合せ

	鳥居深雪	英国	Institute of cognitive Neuroscience 他	合同研究会・Training for Professionals 受講
2017年3月	蛭名邦禎	アメリカ合衆国	オレゴン大学, ワシントン大学, Minerva school	新学部におけるグローバルスタディプログラム受入開拓
	佐藤春実	アメリカ合衆国	オレゴン大学, ワシントン大学, Minerva school	新学部におけるグローバルスタディプログラム受入開拓
	川地 亜弥子	英国	ケンブリッジ大学附属小学校・同教育学部・ホーマートン大学・同図書館・ボウスクール	新学部におけるグローバルスタディプログラム受入開拓
	片桐 恵子	アイルランド	ダブリン・シティ大学	新学部海外・国内研修先開拓

2) 職員の派遣

なし

(4) 紫陽会グローバル人材育成資金

期日	氏名	授業科目等	渡航先・学生等
2016年8月3日～16日	太田和宏	サンベータ大学「経済発展をめざす社会起業」SEEDプログラム	フィリピン・マニラ・バギオ 学生1名
2016年8月29日～9月8日	伊藤真之	アジア・フィールドワークコース(神戸グローバルチャレンジプログラム)	インドネシア 学生1名
2017年2月13日～15日	片桐恵子	エイジング論演習2	韓国・ソウル 学生3名
2017年3月5日～11日	鳥居深雪	卒業研究, 特別研究I	ロンドン 学生6名

(国際交流委員会委員長 近藤徳彦)

4.5. 海外研究者等の招聘・訪問

期日	氏名	国名	所属・職名	受入者
2016年				
5/13	Michel Vandebroek	ベルギー	Ghent University・Professor	北野 幸子
8/20～24	宋 善英	韓国	韓国大学教育協議会	渡部 昭男
11/12	高 鏞	韓国	韓国国立済州大学校・教授	渡部 昭男
11/12	河 奉韻	韓国	韓国京畿大学校・教授	渡部 昭男

11/21～ 11/23	Daryna Dechyeva	ドイツ	Technische Universitaet Dresden・研究員	近江戸 伸子
12/4～10	Youngho Chang	シンガポ ール	Nanyang Technological Univeristy・Assistant Professor	佐藤 真行
12/15	Shharon Dotger	アメリカ	Syracuse University・ Associate Professor	赤木 和重
2017 年				
2/11	鄭 炳浩	韓国	ソウル市立大学教授/ ロースクール研究科長	渡部 昭男
2/11	朴 巨用	韓国	祥明大学校教授/ 韓国大学教育研究所理事長	渡部 昭男
3/12～16	Daniel Gagnon	カナダ	Faculty of Medicine, University of Montreal, Assistant Professor	近藤 徳彦

*学術 WEEKS での招聘についてはその項を参照。

(国際交流委員会委員長 近藤徳彦)

4.6. スタディツアー

(1) Well-being スタディツアー

オーストリアおよびハンガリーで Well-being スタディツアーを実施した。9月17日から9月23日は、オーストリアのザルツブルクとグラーツに滞在し、現地の日本人やグラーツ大学の学生との交流を行った。9月23日から10月5日は、ハンガリーのブタペストに滞在した。そして本年度、全学協定が締結されたエトヴェシュ・ローランド大学(ELTE)の学生と交流を行った。交流プログラムでは、相互の研究発表、討論、フィールド観察を行った。また、ELTE の協力を得て、Well-being に関する国際比較調査も行い、最終日にその調査結果を発表した。昨年度オーストリアで同様に行なった Well-being 文化比較研究の結果も併せて報告した。なお、オーストリアと日本の Well-being 文化比較調査の結果については、7月25日に International Council of Psychologists, Inc.が開催した国際学会で発表し Dayan-O'Rark Paster Awards を受賞した。

本プログラムに参加した学生は、博士課程前期の学生2名、学部生3名の5名であった。そして参加した学生のうち2名は、日本学生支援機構 JASSO の支援を受けた。

(人間発達専攻 加藤佳子)

(2) フィリピン・サンバーダ大学との交流及び台風ヨランダ後の地域復興に関する現地調査

2016年12月11日から21日にかけての11日間フィリピンにおいて学生交流及び研究に関する現地調査を行った。学部生11名、修士院生1名、教員1名及び既にサンバーダ大学に交換留学生として派遣されている学部生1名を加え全員で15名が参加をした。サンバーダ大学では社会実態の違いや価値観の相違をお互いに認識することを狙いとして「貧困問題比較」「恋愛とお金」という論題を立てて議論を行った。サンバーダ大学は教養学部経済

学科、経営学科学部生が参加した。経済学科長 June Viray 教授らの協力を得て行われたのち、レイテ島に渡り 2013 年強力台風ヨランダによって被災したコミュニティがその後どのように復興に取り組んできたのかについての実態調査を行った。調査は、サンペーダ大学講師 Allan Cledera 氏と現地教会系 NGO, CARITAS Palo の協力を得て行われた。

本プログラムは出発前に数か月を準備に費やし、さらに帰国後は調査内容を学術論文としてまとめる作業を約半年間行う。各学生に異文化交流体験、課題発見能力、外国語によるコミュニケーション能力などグローバル人材に求められる要素を涵養するという点において大きな貢献をしたと思われる。

なお、本プログラムは神戸大学基金の助成を得て行われた。

(人間環境学専攻 太田和宏)

(3) オーストラリアと日本の乳幼児教育総合学習・交流

12 月 8 日にオーストラリアのニューイングランド大学の乳幼児教育学を専攻する教員・大学院生と、本学の子ども発達論コース及び本学大学院学び系 (B) の教員・大学院生・学生とが、スタディツアーを実施した。参加者は、オーストラリアからは、ニューイングランド大学の教員 2 名 (Dr. Margaret Brooks, Dr. Yukiyo Nishida) と大学院生 12 名が参加した。本学からは、子ども発達論コースの教員 2 名と子ども発達論を専攻し、特に乳幼児教育学に関心のある学部生及び院生の合計 10 名である。

同日朝から姫路市内の保育施設を訪問し、施設を見学した。また、園児との交流を行った。オーストラリアの院生のパフォーマンスなどもなされた。また寺院を訪問しティーセレモニーを経験した。さらには姫路城にも訪問した。同日夕方からは、本学にて北野が英語による日本の保育についてのミニ・レクチャーを行った。聴講後、学生間によるディスカッションにより総合的に学んだ。保育実践の両国の特徴や、外遊び等保育環境の課題、宗教観、保育制度の課題などについての議論が積極的になされた。

なお、本スタディツアーの実施にあたっては、本学の国際交流運営資金及び学術 WEEKS の一貫としての支援を受けた。

(人間発達専攻 北野幸子)

(4) ロンドンの小学校・特別支援学校視察及びロンドン大学学生との研究交流

自閉スペクトラム症 (ASD) に関する専門性を高めることを目的に、2017年3月5～11日、ロンドンへのスタディツアーを実施した。参加者は、教員 1 名、大学院生 4 名、学部生 2 名、委託研究生 1 名であった。まず、ロンドン大学 Social Neuroscience Institute of Cognitive Neuroscience の Dr. Hamilton 研究室との合同研究会を行った。本学からは、2 名が研究について発表し協議を行った。その後、Dr. Hamilton とポストクの古見氏から、VR を用いた

心理学実験についてレクチャーを受けた。学生は、研究方法について視野を広げる機会となった。翌日は、応用行動分析に基づいたASDの教育を行っている独立運営の特別支援学校TreeHouse Schoolにおいて、指導法のトレーニングを受けた後、学校視察を行った。エビデンスに基づいて、従来のABAを臨床的に発展させ、モチベーションを重視している点が新たな学びであった。さらに、ロンドン市内の優れた教育実践を行っている私立のSybil Elgar School、公立のSouthmead Primary Schoolを訪問した。個を認める英国の教育の中で、ASDの子どもたちが穏やかに友好的に成長している姿に実際に触れ、あらためて特別支援教育のあり方について考え、自身の研究について視野を広げる機会となった。

本プログラムは、同窓会紫陽会グローバル人材育成基金による助成金を得て行われた。

(人間発達専攻 鳥居深雪)

(5)大韓民国ソウル市でのフィールドワーク及びソウル大学の研究者や学生との研究交流

2015年度に引き続き、2016年度もソウル国立大学との国際共同研究及び国際交流を実施した。本学の学部生3名(行動発達論コース)、博士前期課程の学生2名(からだ系)が参加した。日程は2017年2月13日から15日の3日間であった。13日はソウル市の街中にて、高齢者がどのくらい歩いているか、歩行環境は高齢者にやさしいかどうかなどのフィールドワークを行った。14日は3rd SNU International Gerontology Conference 2017: Aging in Asiaに参加した。博士前期課程3名は研究発表を行った。その後ソウル国立大学Han教授と実施している共同研究の研究会に参加、ソウル国立大学の研究者及び学生と交流を行った。学生は韓国と高齢者の状況を比較する視点を得、日本が高齢先進国であることを理解し、高齢化にかかわる様々な問題の一端を理解したと思われる。本プログラムは同窓会紫陽会グローバル人材育成基金の助成金、日本学術振興会の平成27年度二国交流事業共同研究助成金、新学部海外研修の引率費の助成金により実施された。

(人間発達専攻 片桐恵子)

5. 教育

5.1 教育課程

5.1.1 今年度の特長

平成 28 年度に新たに開始した取り組みや、本年度特記すべき事項などは以下のとおりである。

(1) 2 学期クォーター制の実施

平成 28 年度より、大学院においては 2 学期クォーター制の実施を開始した。学部においては、全学共通授業科目および専門科目における学部共通科目（「初年次セミナー」及び「発達科学への招待」）において 2 学期クォーター制の実施を開始した。

(2) 「高度教養科目」に関する規定制定

当該科目は平成 28 年度学部入学者より開設され 4 単位の必修が義務付けられた。平成 29 年度より 2 年次での履修が開始されることから、当該科目履修に関する内規を制定した。

(3) 「発達科学部及び人間発達環境学研究科の試験等における不正行為等に関する取扱い」の制定

平成 29 年度より、試験におけるカンニング等に加え、レポート等に関しても、丸写しなどの不正を罰することとなり、学部・研究科としての処罰規定の制定を行った。

(4) 「学部規則第 7 条ただし書きに関する申合せへの追記

履修単位上限に関する規定に関して、夏季及び冬季休業中の集中講義科目につき、1 年間に 4 単位を超えない範囲で上限を超えた登録を認めるものとした。

(5) 学生の海外活動に関する授業科目の単位認定

① 学部における「海外実習 A」「海外実習 B」「外国語実習」「海外インターンシップ実習」の単位認定の実施

平成 28 年度における単位認定の実績は以下の通り。「海外実習 A」0 名、「海外実習 B」10 名、「外国語実習」4 名、「海外インターンシップ実習」0 名。

② 大学院における「海外実習 A」（1 単位）、「海外実習 B」（2 単位）、「外国語実習」（1 単位）の科目設置

平成 29 年度から大学院においても表記科目を開設し単位認定を行うこととし、このための内規を制定した。

③ 学部及び大学院における海外の大学又は短期大学において履修した授業科目の単位認定について

平成 28 年度、標記の単位認定を行った該当者数は、学部 3 名、前期課程 1 名、後期課程 0 名であった。

(6) 英語外部試験 (TOEIC-IP) 受験者数

標記の受験者数は、1年生 236名、3年生 59名であった。

(7) 外国語による授業の充実及びキャリア授業の充実に向けた取り組み

① 外国語による授業の充実に向けた取り組み

外国語による授業の充実に向けた基礎データを収集するため、本年度に実施された学部・研究科における英語使用授業または受講者に英語コミュニケーションを経験させた授業の実施状況を調査し、当該担当教員に教育効果と課題に関するアンケート調査を実施した。調査結果につき、質問項目と主要な回答を以下に示す。

《質問項目》

- I 英語を使用して、どのような内容・方法の授業を実施したか。
- II 英語を使用したことによる教育効果としては、どのようなものがあったか。
- III 英語を使用したことによる問題・課題点としては、どのようなものがあったか。
- IV 今後、英語実施の授業を展開していく上での留意点などについての提案。

以下、質問項目ごとに回答教員をA～Dと記号化して回答を示す。

I	A：演習において時事問題の議論を毎週した。 B：英語の論文の構成、読み方について説明、実際に英語での発表。 C：ネイティブ、セミ・ネイティブの留学生を2、3人ゲストとして招き、(国籍はほとんど毎回違います)、グループに入ってもらい、英語でのアイスブレイキング。→日本人学生による英語でのゲスト国に関するプレゼン(10分程度)。 D：音楽作品分析研究(大学院)。特定の作家の作品について、その成立根拠や細部構造を分析すると共に、複数作品に共通する基本構造について講義した。
II	A：発音、文法の欠陥を気にすることなく英語で話す姿勢が身についた。中には留学経験することなく自分の考えを流暢に英語で表現できるようになった学生もいる(10名に1名くらい)。 B：学生の英語の読みが早くなった。 C：学生への授業振り返りアンケートによりますと、やはり「英語使用にやや馴れた」という意見が大半でした。残念ながら、英語力向上には直結しなかったようですが。 D：履修したのが留学生(母国語は英語ではないが)のみであったため、日本語で授業を行った場合よりも、授業内容をより理解していたと思われる。
III	A：内容に深く立ち入った議論に限界があった B：外国人がいる場合、日本人が英語の授業についていけるか。アンケート結果からあまり英語の授業を望んでないような感じがする。 C：私の授業は、「英語の授業」ではないため英語力そのものを成績評価にしないと初めに明言します。皆、まじめに英語でのプレゼン準備をするため、成績評価がとても難しい。合否だけの判定にしたかったです。 D：英語があまり得意でない日本の学生がいた場合、両言語による説明を加えなければならず、授業の深度が遅くなってしまう恐れがある。

IV	<p>A : 実際にオーラルな英語の力を付けた学生は、講義や演習など限られた時間の中で英語を使うだけではなく、むしろそれ以上に自分で努力をしていることが多い。独学としての英語の練習法を学生に教える機会があるといいと思います。</p> <p>B : 特定科目は、演習などは英語でするなど決めてしまっても良いかも。英語でのセミナーを必修にするなど。神戸大学生は優秀なのでやればできるのだが、必修としないとなかなかやらないかも。</p> <p>C : 私は初回ガイダンスの時に授業で使う（だろう）英会話文を練習します。つまり、定型文をしっかり導入して、よく使う文例を覚えさせておかないと、こうした授業では何も話せないまま終わってしまう。常に「質問できる」ようさせておくこと。「話したもん勝ち」みたいな雰囲気にしたかったの。留学生からの答えはほとんど理解できていませんが、それでもまず OK。</p> <p>D : 英語授業の担当者には、手当などのインセンティブを与える、など。</p>
----	---

②後期課程における英語実施授業開設に向けた検討

国際交流委員会と協力し、近い将来における、大学院後期課程でのダブルディグリープログラム実施の見通しを踏まえ、後期課程における英語実施授業の開設を検討した。海外の提携校からの受講希望があった後期課程授業を英語とするか、ないしは英語実施授業を新規開設する可能性につき検討を行った。

③キャリア授業の充実に向けた取り組み

キャリアサポートセンターと連携し、今年度後期、学部授業内においてキャリア・セミナー型授業を実施し、受講者・実施者双方によって示された学習成果及び課題を整理した。これにより、次年度新学部において実施される授業「協働型リーダーシップ論」をはじめとしたキャリア支援型授業の充実を図る基礎データを得た。以下、概要を示す。

授業名：「社会環境概論」

実施日時：2017年1月5日3時限

場所：D-room

受講者数：40名

授業内容：主に1年生を対象とした授業であった。授業の前半ではキャリアの捉え方、社会人基礎力、企業と学生の意識のギャップ、大学生活で身につけること、Planned Happenstance Theory 等、キャリアについての基本的な事項が説明された。それらを踏まえ授業の後半では、各受講生の自己理解を深めるため「自己理解ワーク」をグループワークも含めて行った。授業の最後には、まとめとしてOB・OGの体験談の紹介がされた。

受講生の様子：受講生は主に1年生であったが、授業の進行とともに真剣に話を聞く姿勢が見られた。グループワークでは各自の「好きリスト」を起点として、受講生間で積極

的にコミュニケーションを取る姿勢が見られたことから、非常に効果的な取り組みであった。D-roomでの授業の実施は、グループワークを行いやすい椅子・机の配置であり、受講生間も普段とは異なったアットホームな雰囲気の中で授業に積極的に取り組む様子が感じられた。コミュニケーションシートには、「キャリアの話聞いて良かった」、「予想以上に自分のことを知らないことを痛感した」、「実感を持って聞いた」、「真剣にキャリアについて考える時間だった」、「企業側と学生側の意識の違いにはすごく驚いた」、「OB・OGからの話が印象に残った」などの好意的な意見が多数あり、キャリアへの意識づけとして、高い成果が得られたと判断される。

実施者へのインタビュー内容：このような授業をきっかけにキャリアサポートセンターに相談に来ることができた学生も多く、また過去の授業のコミュニケーションシートでも良いフィードバックが得られていることから、さらに多くの学科・コースでのキャリア・セミナー型授業の実施が望ましい。私学でのキャリア型授業に比べて圧倒的に数が少ないことから、さらなる授業の充実と学部全体での取り組みが望まれる。

(教務委員会委員長 吉永潤)

5.1.2 学部、研究科共通科目

(1)初年次セミナー

本授業は、高校と大学の転換教育および大学の学修への導入教育を行う科目として、平成28年度から全学的に1年次第1クォーターに設置され、授業実施は各学部が担当した。全学共通テキストが作成され、授業支援WebシステムBEEFを通じて配布され、活用方法は各学部委ねられた。評価は合否で行われた。

発達科学部においては、試行的に、授業前半部(1~4回目)を教務委員会と学生委員会が共同で担当した。当該授業部分の授業目標としては次の3点が考えられた。①高校までの学習と大学での学修の相違を意識させ、主体的な学修姿勢の確立を支援する、②大学での自立的な生活スタイルにつき理解させる、③大学での学修・生活に求められるモラル、責任につき理解させる。この目標に即し、授業内容は、従来、教務委員会・学生委員会の新入生ガイダンスとして実施してきた内容をもとに、学生の興味関心をより引出す仕方で展開するものとした。具体的には、全学共通テキストを使用しつつ、学部上級生をゲストスピーカーとして活用し学修・生活経験を語らせるとともに、国際交流サポートルーム、キャリアサポートセンター、人間科学系図書館にそれぞれ講師担当を依頼し、学部内の学修・生活支援機能を多面的に紹介するものとした。以下に、授業第1~4回の内容を示す。

回数, 日程, 教室	内容	担当
第1回目 4月8日 B202	ガイダンス	教務委員会委員長 学生委員会委員長
第2回目 4月15日 B202	履修について, 留学について (全学共通テキストを使用) <ul style="list-style-type: none"> ・大学の学修の特色と発達科学部ならではの学び ・神戸グローバルチャレンジプログラムについて ・留学サポート機能の紹介 ・図書館活用法 ・履修経験・留学経験につき各学生ゲストスピーカー1名 ・授業振り返り小レポート 	教務委員会 国際交流サポートルーム 人間科学系図書館 神戸グローバルチャレンジプログラム委員会
第3回目 4月22日 B202	学生生活をデザインする (全学共通テキストを使用) <ul style="list-style-type: none"> ・学生委員会教員による海外大学での生活紹介 ・学生生活経験につき学生ゲストスピーカー1名 ・質疑応答 ・授業振り返り小レポート (課題: これからの大学生活に向けての心境を漢字一文字で説明しなさい。) 	学生委員会
第4回目 5月6日 B202	大学生のキャリア形成と留学のすすめ <ul style="list-style-type: none"> ・留学を通じてどんな学びをしたいか(アンケート実施) ・キャリアワークショップ ・授業振り返り小レポート 	キャリアサポートセンター 国際交流サポートルーム

回数, 日程, 教室	内容	担当
第5回目 5月13日 B202	発達科学部で学ぶとは? — 繋がる力・繋げる力—	澤宗則 (社会環境論コース)
第6回目 5月20日 F256 (奇数クラス)・F264 (偶 数クラス)	発達科学研究の実践性1 奇数クラス「ESDの課題と展 望」 偶数クラス「スクールカウ ンセリングの理論と実際」	奇数クラス: 松岡広路 (発達 支援論コース) 偶数クラス: 吉田圭吾 (心理 発達論コース)
第7回目 5月27日 F256・F264	発達科学研究の実践性2 奇数クラス「スクールカウ ンセリングの理論と実際」 偶数クラス「民族音楽学にお けるフィールドワーク」	奇数クラス: 吉田圭吾 偶数クラス: 谷正人 (表現文 化論コース, 人間表現論コー ス)
第8回目 6月3日 F256・F264	発達科学研究の実践性3 奇数クラス「ライフステージ に応じた身体づくり」 偶数クラス「ESDの課題と展 望」	奇数クラス: 高田義弘 (身体 行動論コース) 偶数クラス: 松岡広路

授業後半(5～8回目)においては、従来、新入生の導入科目として本学部が独自に開講してきた学部共通必修科目「発達科学への招待」の冒頭4回分の講義を行った。具体的には、「モジュールA 発達科学研究の実践性」に該当する、フィールドワークを手法とした異なる研究分野の4名の教員の研究紹介を中心にオムニバス形式で行った。本テーマを通して、フィールド研究の実際や意義を考えることを目的とした。6回目以降は、履修生を学生番号の末尾が奇数の組と偶数の組の2クラスに分けて行った。教科書「発達科学への招待 講義ノート」/ 神戸大学発達科学部「発達科学への招待」運営委員会編(かもがわ出版, 2013)と配付資料を用いた。関連科目として挙げた2Q「発達科学への招待」(8回)とあわせて履修することを求め、講義内容を繋げた。以下に、授業第5～8回の内容を示す。

(教務委員会委員長 吉永潤, 学生委員会委員長 高見和至, 「発達科学への招待」運営委員会委員長 白杉直子)

(2)発達科学への招待

12年間開講してきた新入生対象の学部共通必修科目「発達科学への招待」は、(1)で報告した「初年次セミナー」(1年次1Q)の後半に4回分を組み込み、引き続き、2Qに開講する本講義へと授業内容を繋げた。下表に本講義8回の授業を示す。第1～2回目は「モジュールA 発達科学研究の実践性」の続きであり、異なる専門分野の4名の教員が授業を振り返り、「フィールドワーク」を手法とした「実践的研究」の考え方や実際について、シンポジウム形式で討論会を行った。「フィールドワーク」から得られるデータの特性や、データを得るうえで配慮すべき点や研究者側の悩み・問題点などを学生らも学ぶ機会となった。第3回目の「モジュールB 発達科学研究の手法」では、統計学と、数値を必要としない質的研究という対極的な研究手法について入門的な講義を行った。「モジュールC 発達科学研究の学際性」では、メディア論、バイオテクノロジー、人間発達環境学を専門とする各教員が学際研究のあり方をそれぞれ講義した。

回数, 日程, 教室	内容	担当
第1回目 6月10日 F256 (奇数クラス)・F264 (偶数 クラス)	発達科学研究の実践性4 奇数クラス「民族音楽学に おけるフィールドワーク」 偶数クラス「ライフステー ジに応じた身体づくり」	奇数クラス: 谷正人 偶数クラス: 高田義弘
第2回目 6月17日 B202	発達科学研究の実践性5 モジュールAのまとめ シンポジウム	松岡広路, 吉田圭吾 高田義弘, 谷正人
第3回目 6月24日 F256・F264	発達科学研究の手法 希望者クラス「ナラティ ブ・アプローチ」 希望者クラス「実験・調査 結果に客観性を」	希望者クラス: 目黒 強(人 間形成学科 子ども発達論 コース・学校教育論コース) 希望者クラス: 阪本雄二(人 間環境学科 数理情報環境 論コース)
第4回目 7月1日 F256・F264	発達科学研究の学際性1 奇数クラス「学際性とメデ ィア論 環境問題を素材に	奇数クラス: 田畑暁生(人 間表現学科 表現文化論コ

	して」 偶数クラス「科学技術の進歩をどう考えるか 植物科学を題材にして」	ース) 偶数クラス：蘆田弘樹（人間環境学科 自然環境論コース）
第5回目 7月8日 F256・F264	発達科学研究の学際性2 奇数クラス「科学技術の進歩をどう考えるか 植物科学を題材にして」 偶数クラス「人間発達環境学への志向」	奇数クラス：蘆田弘樹 偶数クラス：渡部昭男（人間形成学科 教育科学論コース・学校教育論コース）
第6回目 7月15日 F256・F264	発達科学研究の学際性3 奇数クラス「人間発達環境学への志向」 偶数クラス「学際性とメディア論 環境問題を素材にして」	奇数クラス：渡部昭男 偶数クラス：田畑暁生
第7回目 7月22日 F256・F264	学生による「総合討論」準備のための討論会 (奇数・偶数クラスにて)	白杉直子
第8回目 8月5日 B202	学生による総合討論 テーマ「学部統合から見えてくる発達科学の将来性」	白杉直子

第7, 8回目は、恒例の学生主体のシンポジウムとその準備であった。学生たちが取り上げたテーマは「学部統合から見えてくる発達科学の将来性」であった。発達科学部と国際文化学部の統合により新学部が発足する前年度に本学部に入學した最後の発達科学部生として、発達科学を討論することを目的とした。司会者や板書係、マイク係らの協力により、大講義室で、総勢300余名の履修生が、新学部をよりよい学部とするために何が必要かについて学生の立場から活発に討論を行った。最後はレポート提出により各自が本講義での学びをそれぞれに総括した。

最終シンポジウムテーマ「学部統合から見えてくる発達科学の将来性」

8:50 開会宣言（司会者 2名）

8:55 シンポジストによる話題提供（1人 5-10分）

1. 「発達科学部の良い点・弱い点 ―先輩方への突撃インタビュー―」（表現学科 1年生）
2. 「国文生は学部統合をどう思っているのか ―意識調査から―」（環境学科 1年生）
3. 「発達科学部でつながる我々と学問 ―地域活動を例に―」（形成学科 1年生）
4. 「発達・国文の独自性と融合性」（環境学科 1年生）

9:35 シンポジストへの質疑応答（司会者 2名，書記数名，マイク係 4名）

9:45 全員による総合討論（同上）

10:15 閉会宣言（司会者 2名）

授業運営の工夫として、前年度同様、本学教務情報システム「うりぼーネットの掲示板」による授業に関する情報伝達（授業の案内，シンポジウム準備の連絡と呼びかけ，課題のレポート要件など）を徹底した。

平成 29 年度発足の国際人間科学部には、本講義の柱にもなってきた「フィールドワーク」と「学際性」がキーワードとして引き継がれる。また、アクティブ・ラーニングとしての学生主体の討論会のノウハウも蓄積してきた。新学部における教育体制づくりに、これらの成果を活かし、発展させていくことが今後の課題と考えられる。

（「発達科学への招待」運営委員会委員長 白杉直子）

(3) ヒューマン・コミュニティ創成研究

本年度は、「発達と環境の相互性」に焦点を当て、学生の主体的な学習及び多領域の学生間の意見交流に焦点を置いて取り組んだ。特に科学技術に焦点を当て、その発展が人間のウェルビーイングに貢献する条件について討議を行い、その討議を踏まえた学生主体の企画として、サイエンスカフェの実施（情報提供者：井上真理教授）、哲学カフェの試行（ファシリテーター：稲原美苗准教授）を行った。コーディネーターは伊藤真之教授、稲原美苗准教授、津田が務めた。

（ヒューマン・コミュニティ創成研究世話人 津田英二）

5.1.3 教職教育

(1) 教育実習

教育実習の履修者(単位認定者)数は、幼稚園 14(14)，小学校 25(25)，中学校 37(36)，高等学校 18(18)，中等教育学校 24(24)，特別支援学校 17(17)であった。中等実習履修者数を教科別にみると、国語 2，数学 13，英語 8，理科 21，社会 5，地理歴史 4，公民 1，保健体

育 9, 音楽 5, 美術 9, 家庭 2, であった。

平成 29 年 3 月 14 日に附属校園との実習反省会を行った。以下のような意見が出され、検討課題となった。

- 批評保育に本年度は学部教員の参加がなかった(幼稚園)。
- 新学部での教員養成について話し合う場を持つ必要がある(幼稚園)。
- 学生が児童に近すぎ、教師としてのメリハリを保てていないケースがあった(小学校)。一方、学生が生徒の間に入っていけないケースがあった(中等教育学校)。
- 個人情報の保護の観点と、学生への実習校からの連絡の必要との間で躊躇することがあった。大学として方針を立ててもらふ必要を感じた(中等教育学校)。
- メンタル面が原因で遅刻や休みが発生するケースがあった。このような学生につき、大学として事前に把握できたなら情報共有したい(特別支援学校)。

(2)教員免許取得状況

本年度の教員免許取得状況は以下のものであった。

①平成 28 年度卒業生の教員免許取状況(一種免許状)

区分	幼稚園	小学校	特別支援学校	中学校						
				理科	家庭	社会	数学	音楽	美術	保健体育
計	33	52	12	15	1	7	4	3	0	4
高等学校										
区分	理科	家庭	地理歴史	公民	数学	音楽	美術	保健体育		
計	22	1	9	7	8	3	0	7		

*実取得人数 109 名

②平成 28 年度大学院修了生の教員免許取状況(専修免許状)

区分	幼稚園	小学校	特別支援学校	中学校						
				理科	家庭	社会	数学	音楽	美術	保健体育
計	4	6	0	6	0	1	5	2	0	1
高等学校										
区分	理科	家庭	地理歴史	公民	数学	音楽	美術	保健体育		
計	8	0	0	1	5	2	0	1		

*実取得人数 23 名

(3)教職実践演習

本年度の幼小「教職実践演習」の授業スケジュールは以下のとおりであった。

回, セッション	日 程	テーマ	担当教員と人数	授業内容
1	10月7日 5限	オリエンテーションとグループ編成	学部教員	
2・3 I	10月14日 5・6限	教職の使命感や責任感, 教育的愛情等	附属小学校 1名	講話, グループディスカ ッション等 ※感想・レポート の提出
4・5 II	11月4日 5・6限	社会性や対人関係能力	附属小学校 1名	講話, グループデ ィスカッション等 ※感想・レポート の提出
6・7 III	11月18日 5・6限	特別支援教育について	附属特別支援 学校 2名	演習等 ※感想・レポート の提出
8・9 IV	11月25日 5・6限	幼児教育について, 幼児 理解に基づく教師のかか わり, 教師の使命感・責 任感・教育的愛情等	附属幼稚園 1名	講話, グループデ ィスカッション等 ※感想・レポート の提出
10・11 V	12月9日 5・6限	幼児教育について, 幼児 理解に基づく教師のかか わり, 教師の使命感・責 任感・教育的愛情等	附属幼稚園 1名	講話, グループデ ィスカッション等 ※感想・レポート の提出
12・13 VI	12月16日 5・6限	児童理解, 学級経営等 教科内容等の指導力 まとめ	附属小学校 1名	講話, グループディスカ ッション等 ※感想・レポート の提出

14	1月6日 5限	新任教員の果たす役割 ——卒業生講話	学部教員	講話, 質疑応答等
15	2月3日 5限	「まとめレポート」に基づく総括ディスカッション	学部教員	※感想・レポート等の集積による省察

○グループディスカッション, ロールプレイ, 模擬授業, 事例研究などを行う。

○10/14, 11/4, 11/18, 11/25, 12/9, 12/16は「5・6限の2コマ続き」で実施。

○10/21, 10/28, 11/11, 12/2, 1/13, 1/20は休講。

(教務委員会委員長 吉永潤)

5.1.4. 博物館学芸員資格

博物館学芸員資格委員会は、発達科学部の学芸員養成課程における博物館実習の運営を行っている。平成28年度の主な活動は4回の委員会、博物館実習の説明会・学内実習運営であった。

1) 平成28年度博物館実習説明会と各実習の実施

①全体事前指導(7月8日): 2,3年生を対象として、博物館実習全体のカリキュラムについての説明を行った。

②見学実習(夏期): 2,3年生を対象として、博物館・美術館・科学館等での見学実習を実施した。

③学内施設「あーち」における本実習

前期(9月27日～10月1日, 4日～6日): 学内施設「あーち」において、講師に脇谷紘先生(版画家・舞台美術家)をお招きし、社会福祉法人たんぽぽと連携して空間アート「遊ぼ!」を実施した。(履修者数10名)

後期(2月28日～3月4日, 7日～9日): 学内施設「あーち」において、平和展「歌いつがれてきた平和」を実施した。(履修者数4名)

④全体・館園事後指導並びに館園実習前事前指導(11月11日): 事後指導における実習生の体験談や問題意識を、これから実習に赴く下級生たちが共有する場として、今年度は4年生を対象とした全体・館園事後指導と、2,3年生を対象とした館園実習前事前指導を同時開催した。前者では博物館実習全体の総括を行った。後者では学外実習先の説明並びに館園実習に向けての諸注意を行った。

2) 平成26年度の博物館実習単位認定: 4年生12名に対して博物館実習の単位認定を行った。

3) 今後の課題

①国際文化学部との統合による新学部の設置に向けての、学芸員養成課程の統合・改変が課題である。12月9日には本委員会の高見泰興委員長と国際文化学部の吉田典子先生との間で実務者レベルでの情報交換が行われ、統合への作業段階の確認が行われた。また、平成17年度より開始した発達科学部附属施設「あーち」における学内実習は、当初より学内外の教員や講師の協力を得ることによって、自然科学系・芸術系・人文科学系の各分野にわたる多様な実習プログラムを展開しており、この実績を新学部設立においても活かし、より発展的な博物館実習プログラムにつなげる必要がある。

②昨年度より検討されていた、学芸員資格取得に関するカリキュラムを現状の3～4年生向けから、2～3年生向けに1年前倒しする案について、今年度より2～3年生でも履修できるようにして実現した。このしくみは、国際文化学部との統合において両学部のカリキュラムの親和性を高めることにもつながると期待される。

(博物館学芸員資格専門委員会委員長 高見泰興)

5.1.5. ESD サブコース

ESD (Education for Sustainable Development=持続可能な開発のための教育)をテーマとするこのコースは、学部を超えた領域横断型のコースとして、2008年度より開講されている。2015年度より授業運営を担うESD 教育部会(部会長:松岡広路)は、国際教養教育院に設置されたが、中核となっているのは、人間発達環境学研究科となっている。全学に配置されている同コース運営委員会の委員長は、伊藤真之(自然環境論)、副委員長は松岡広路(発達支援論)であり、総合コーディネーター(高尾千秋)や清野未恵子(発達支援論助教)を中心に、神戸大学の新しい教育モデルである「ESD コース」の運営に当たった。

今年度は、1学年のクォーター制に伴い、「ESD 基礎」「ESD 論」の基礎科目が、それぞれ「ESD 基礎 A・B」「ESD 論 A・B」に区分され、さらに学生のニーズにこたえて「ESD ボランティア論」を新設した。それらの基幹的プログラムは、本研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センターが実務を担当する「ESD スタディツアープログラム」である。阪神間の20以上のESD関係の団体に活動を提供してもらい、そこに学生が参加し気づきを持ち帰り、共有することで、ESDの世界の実像に触れることが意図されている。

ESD 基礎などの基礎科目と、各学部で開講されている関連科目を履修したのち、ESD 演習で、学びの総合化・交流を行う。ESD コースは、本研究科の発達支援論のカリキュラムをモデルとしているものということができる。次年度は、参加部局が増え、いよいよ全学部参加のコースとなる。本コースの運営の母体であるヒューマン・コミュニティ創成研究センターの役割は大きく、全学に存在感を示すことが求められる。

(ESD サブコース運営委員会委員 松岡広路)

5.1.6 ゲストスピーカー及びティーチングアシスタント

(1) ゲストスピーカー

授業科目の内容をより充実できるよう、担当教員の企画主体で1セメスター授業中に1回ないし2回、1クォーター授業中に1回の外部からのゲストスピーカーを登用している。平成28年度は、80万円（1件につき1万円）の予算配分のもとで、前期35件、後期41件の計76件が実施された。これに加え、本年度は、例年のない試みとして、「初年次セミナー」において学部3年次生3名の登用を行い（1件5千円）、1年次生を対象にスピーチを行わせるという試みを実施した。提出された実施報告書の点検を通じて、受講学生、招聘講師、担当教員のいずれからの良好な評価が得られており、高い教育効果を生んでいる。

平成29年度は計80件の登用を予算措置している。そのうち10件については、高度の学術的知見ないしは高度の職業経験を有する大学院博士課程後期課程学生の登用を想定したものとしており、博士課程後期課程学生のキャリアアップないし業績形成に資することを期している。

(2) ティーチングアシスタント

優秀な大学院学生及び学部学生に対し、教育的配慮のもとに教育補助業務を行わせ、学部教育におけるきめ細かい指導の実現や学生が将来教員・研究者等の職に就くためのトレーニングの機会を提供し、これに対する手当支給により、学生の処遇の改善の一助とするためにティーチングアシスタント制度を設けている。本年度からは、学部学生をスチューデントアシスタント(SA—時給900円)、大学院前期課程学生をティーチングアシスタント(TA—時給1200円)、後期課程学生をシニアティーチングアシスタント(STA—時給1500円)とし、従事可能な業務内容につき差別化を行った上で任用を行った。(後期課程学生をTAとして任用することも可能とした一時給1400円)。実施報告書(学生用・教員用)からは、担当教員・学生どちらからも高い評価を得ていることが確認できている。

平成28年度の予算配分額は約530万円(5,306,600円)で、登用学生数は以下の通りであった。

前期	SA	14名	TA	91名	STA	1名	計	106名
後期	SA	14名	TA	83名	STA	3名	計	100名

(教務委員会委員長 吉永潤)

5.1.7. グローバル人材育成推進事業

2012年度後半に採択されたグローバル人材育成推進事業は、その事業を通して国際社会の持続可能な発展を可能にする「問題発見型リーダーシップ」を発揮できるグローバル人

材の育成を目標としている。発達科学部では、国際的な視野で、開発・人権・貧困・平和・福祉・倫理・健康等に関わるグローバルな諸問題を発見したうえでグローバルな協力体制を先導する力量をもち、かつ日本社会に対するアイデンティティを有する人材、具体的には、グローバルな視点で課題をとらえ、種々の活動を介して協働的・主体的な学びを組織できる教育力を有し、異文化を尊重するマインドを持つ教育者・ファシリテーター等の育成をめざしている。

2016年度は事業の最終年度となり、加えて新学部の設置に伴い発達科学部としては最後の入学生を迎える学年となる。国際交流サポートルーム（COTIE:Communication Office toward International Exchange）では、英語力を含めた国際コミュニケーションのスキルアップ・留学への動機づけに取り組んできたが、新たに設置する国際人間科学部では、グローバルイシューに問題意識を持った海外研修とフィールドワーク学修を組み合わせたグローバル・スタディーズ・プログラム（GSP）を全学生に対して必修として課す。これを念頭に、2016年度の発達科学部の全新生入学生に対して1年間のうちに1度は国際交流サポートルームで実施するセミナーに参加するよう働きかけ、留学やコミュニケーションのスキルアップに対する意識調査を行った。その調査から得られた知見をはじめとして事業期間中に国際交流サポートルームで蓄積された経験知について、新学部でGSPのコーディネートを担当予定の教職員に紹介する機会を持った。

以下に2016年度の国際交流サポートルームの活動を列記する。

① 2016年4月より2017年3月末まで（通年の活動）

「オンラインディスカッションセミナー定期開催」毎週（前期は5～7月の木曜日、後期は11～3月の火曜日）1日2回（1回45分）のセッションを実施した。昼休み時間に、発達の学部生・院生を中心に科目履修生、教職員を交えて自由参加で開催。2016年度に実施したセミナーは約50回。参加学生数は毎回平均1～3名程度以上、推定延べ約100以上。後期は（Technology Entertainment Design）オンラインレッスンとして開催。

② 2016年4月より2017年3月末まで（通年の活動）

毎週金曜日（前期は5～7月、後期は10～12月）にTOEIC受験対策講座、留学カウンセリングおよび学習相談会を実施。2016年度の新入生には、1年のうちに1回は参加するように働きかけ、留学やコミュニケーションのスキルアップに対する意識調査も行った。

③ 2016年8月5日、1月24日

「英語スピーキング講座（6時間集中講座）」

アルク教育社のネイティブ講師による初級～中級レベルスピーキング実習

- ④ 2016年8月22、23日
留学セミナー，英語学習法セミナー，TOEICスコアアップセミナーを集中開催。
- ⑤ 2016年8月19日，9月2，16日
「英語プレゼンテーションコーチングセミナー（3回のセミナーと2回のオンラインレッスン）」
英語でのプレゼンテーションを行う計画のある学生を対象に，オンラインセミナー形式で実施。
- ⑥ 2016年11月12日
学術 Weeks 2016「韓国における給食事情&無償給食～比較教育・教育法の視点から～」に
韓国・国立済州大学校 Ko Jeon 教授と韓国・京畿大学校 Ha Bongwoon 教授を招聘。
（詳細は学術 Weeks 2016 の項に記載）
- ⑦ 2016年11月12日
学術 Weeks 2016「日本の授業を「再発見」する アメリカ研究者との対話を通して」に
米国シラキュース大学 Sharon Dotger 氏を招聘。（詳細は学術 Weeks 2016 の項に記載）

（神戸大学グローバル教育推進委員会委員 青木茂樹）

5.1.8. 神戸グローバルチャレンジプログラム

平成 27 年度に文部科学省「大学教育再生加速プログラム」として採択され，神戸大学全学で実施する「神戸グローバルチャレンジプログラム」の一環として，平成 28 年度より発達科学部が「アジア・フィールドワークコース」を開設，実施した。

「神戸グローバルチャレンジプログラム」は，学部の 1，2 年生を対象とする教育プログラムで，学生が国際的なフィールドで行う主体的な学修活動を通じて，「神戸スタンダード」の必要性を体感し，高学年次の学修に向けた学びの動機づけを得ることを目的としている。参加する各学部が提供する多様なコースの学修成果に対して，総合教養科目の「グローバルチャレンジ実習」として単位が認定される。

発達科学部の「アジア・フィールドワークコース」は，アジアでのフィールドワークを通して，異文化環境の下での自らの体験に基づいて，グローバル人材として必要な「課題発見・解決能力」の必要性に気づき，学びの動機づけを得ること，また，実践型グローバル人材として成長するための基盤となる 3 つの能力（「チームワーク力」「自己修正力」「課題挑戦力」）を修得することを目的とし，全学の学生に開かれたコースとして実施し

た。平成 28 年度は、神戸大学での事前学修を行った上で、学外学修として、8 月 29 日から 9 月 8 日にかけて、インドネシア・南スラウェシ州の農・漁村にてホームステイし、環境、教育、地域社会・経済、文化など、持続可能な開発にかかわる諸課題に関するフィールドワークを行った。その後、神戸大学において事後学修を行った。「グローバルチャレンジ実習」としては複数の学部から計 5 名の学生が参加したほか、3 年次以上の学生 3 名も参加し、教員 2 名が引率・同行した。インドネシアでの活動にあたっては、地域の人々の他、ハサヌディン大学の学生・教員、地方政府、地域の学校等の協力を受けた。

事後学修での振り返りや学生レポートから、参加学生について、イスラム文化などに対する理解を含む、グローバルな視野の広がりが見て取れた。また、課題発見能力の基礎修得のほか、国際コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力、そして実践型グローバル人材として成長するための基盤となる 3 つの能力「チームワーク力」「自己修正力」「課題挑戦力」についても伸長が見られたと評価された。

(人間環境学専攻 伊藤真之、古川文美子、源 利文)

5.2. 各学科等の教育

5.2.1. 人間形成学科

①運営

人間形成学科は、心理発達論コース、子ども発達論コース、教育科学論コース、学校教育論コースにより構成されている。日常的な運営は、主にコース単位で実施しているコース会議、ないしはコース運営会議で行っている。学科全体の予算、教育、入試等の議案やコース間の役割分担等については、学科長とコース主任による学科運営会議において適宜連絡・協議し、調整を図りながら運営されてきた。

②予算

予算は大学院の各専攻・系講座に配分されている。よって、学部独自の予算はない。大学院と学部のコースが対応しているところでは、一括して予算執行されている。ただし、大学院との対応がないコース、例えば、学校教育論コースについては、子ども発達論コースと教育科学論コースを構成する教員組織への予算配分から共通経費を捻出し、共同の運営とした。その他、実験・実習経費を得ている。なお、例年、学科共通経費は計上していない。

③入試

今年度では、一般入試、社会人入試が新学部新学科対応の入試であったため、発達科学

部として行ったのは、第3年次編入学試験だけであった。なお、社会人入試、第3年次編入学入試については、兼ねてより、その継続に関する諸課題が議論されていたが、新学部設置のために、発達科学部としての議論は終了したといえる。

④教育

年度当初に新生ガイダンスを実施した。2年次におけるコース振り分けは、2017年2月14日に実施され、全員の所属が確定した。例年、希望コースの偏在が顕著であるために、入学直後から、必要な情報を適宜アナウンスすると同時に、その時点でのコース希望調査を実施し（2回）、結果を公表することで、周知と準備を徹底したこともあり、今年も昨年に引き続き1つのコースに集中するような状況は改善された。また、3年次のゼミ分けでは、ゼミへの所属決定過程において、教員・ゼミ紹介パンフレットの作成、各指導教員との面談、先輩ゼミ生との面談機会などを設定し、個人の研究志向と所属ゼミとの最適化を図るように努力した。結果としてゼミ分けは支障なく遂行することができた。

教員の授業改善の試みとしては、「子ども発達論」「初等社会科教育論」など2科目においてピアレビューを実施した。また、「心理検査法」「教育相談」「心理学入門」「子ども教育論」「幼児教育内容論」「教育学概論」「教職論」「教育政策」「自然教育論」「理科教育方法論」「学習指導論」など多数の講義にTAを配置して授業の充実を図った。さらに、「教育政策」「教育行政学」「自然教育論」「教育方法学」「理科教育方法論」等の授業にゲストスピーカーを招き、講義内容を深化させた。

卒業研究については、コース単位で構想発表会ないしは中間発表会、最終試験としての最終発表会が実施された。それぞれの発表会等については、関連領域からの院生の参加もあり、質の高い議論が行われた。教育科学論コースでは、例年通り、卒業研究において副査制度を導入し、卒業研究の質の保証に取り組んでいる。

その他、合宿研修は、学校教育論コースが例年通り9月に西はりま天文台で実施している（参加者32名）。また、各ゼミあるいはゼミ合同単位でも8月ないし3月に多数の合宿研修（淡路、香住、篠山等）がなされており、教育研究の推進と教員・学生の交流に成果が上がっている。

⑤広報

オープンキャンパスにおいて、学科及び各コースの紹介に努めた。4つのコースはそれぞれに工夫を凝らして、在学生による説明・進学相談など多彩な取り組みを実施した。

高大連携関連では、主に心理発達論コースが星陵高等学校、尼崎高等学校、大手前高等学校への講師派遣等を行っている。

（人間形成学科長 稲垣成哲）

5.2.2. 人間行動学科

(1) 運営及び入試

平成 28 年度人間行動学科入学者数は、一般入試（前期日程）39 名，AO 入試（身体運動受験）12 名，計 51 名であった。人間行動学科の教員は 18 名（教授 10 名，准教授 8 名）である。1 年次の学生に対しては，学科長及び各コース主任が管理・運営にあたった。

2 年次以上の学生に対しては，健康発達論コース（教員 5 名），行動発達論コース（教員 5 名），身体行動論コース（教員 8 名）によって，それぞれのコースの運営にあたった。日常的な運営は基本的にコース単位で行い，コース間の役割分担等については，学科長とコース主任によって適宜連絡・協議し，学科全体に関わる教務・学生，入試等に関わる重要議案については，学科会議において審議・決定した。

平成 29 年度一般選抜入試（前期日程及び後期日程），社会人特別選抜入試及び AO 入試については，新たに本年 4 月に設立される国際人間科学部として入試を行ったので，ここでは省略する。

人間行動学科として 3 年次編入学入試（学部として若干名の募集）を例年通り実施した。応募者数は行動発達論コース 2 名（受験者 1 名），身体行動論コース 6 名（受験者 5 名）であったが，合格者は残念ながら 0 名であった。

(2) 教育

各学年における学生指導は，1 年次生は学科長，2 年次生はコース主任，3・4 年次生はゼミ教員が中心となって指導にあたっている。学生の教育研究活動が円滑かつ効果的に進むよう，学科として下記の行事を実施した。

4 月 4 日	新 2 年生ガイダンス及びコース別ガイダンス
4 月 5 日	新 1 年生ガイダンス
9 月 29 日	卒業研究中間発表会（2～4 年生の参加，コース別）
10 月 12 日	1 年生コース分け説明会
12 月 19 日	1 年生コース分けガイダンス及び第 1 回希望調査
1 月 23 日	1 年生コース分け第 2 回希望調査
2 月 1 日	1 年生コース分け決定・発表
2 月 6 日	卒業研究発表会（行動発達論コース）
2 月 10 日	卒業研究発表会（健康発達論コース及び身体行動論コース）

1) 履修コース分け

各コースの最大受け入れ人数は，教員数を考慮して健康発達論コース及び行動発達論

コースは 15 名、身体行動論コースは 27 名としている。振り分け方法は、学生の希望を優先とし、1 年次後期に 3 回の希望調査を実施する予定であった。しかし、本年度については、2 回目の希望調査でコースを決定することができたので、コース希望調査は、第 1 回目 12 月 19 日、第 2 回目 1 月 23 日で終了した。なお、希望調査当日の欠席者についてはメール等で連絡し、全員の希望コースを把握した。

本年度は第 2 回目に実施した最終の希望調査結果において、健康発達論コースは上限内、行動発達論コースは上限ちょうど、身体行動論コースを第一希望とする学生が上限人数を 1 名上回る 28 名であった。学科で協議の上、1 名だけ上限人数を上回っているが、学生の今後の学修意欲を削ぐことのないよう、学生の希望を第一に考え、健康発達論コース及び行動発達論コースの了承を得たうえで、本年度は 51 名全員、第一希望コースに入るという結論に達した。従って、本年度の最終的な履修コース分け結果は、健康発達論コース 8 名、行動発達論コース 15 名、身体行動論コース 28 名となった。

2) 研究室配属

3 年次の各研究室への配属の方法は、履修コースによって若干異なる。健康発達論コースは学生の希望が最優先で決定された。行動発達論及び身体行動論コースでは、基本的には各研究室の配属学生数の上限を 4 名程度とし、学生の希望を優先しつつ、希望に偏りが生じる場合には、教員の指定する授業科目の成績により振り分けた。

3) 卒業研究指導

履修コースにより卒業研究指導のスケジュールが若干異なるが、最も多数の学生がいる身体行動論コースでは、5 月に卒業研究届を提出したのち、9 月 29 日に中間発表会を開催し、口頭発表を行った。12 月 22 日に卒業論文をコース内提出した。コースでは各卒論の主査（指導教員）と副査を決め、翌年 1 月中に主査・副査のもと、口頭試問を実施し審査を行った。口頭試問等で指摘された箇所を加筆・修正した後、1 月 31 日に教務学生係へ提出した。その後、2 月 10 日開催の卒業研究発表会で口頭発表し、教員が最終合否判定を行った。他の 2 コースでも、同様な手順での卒業研究指導が行われた。

(3) 学生の受賞

○「インターカレッジコンペティション 2016」（関西広域連合、スポーツコミッション関西主催、グランキューブ大阪にて開催）において、長ヶ原誠教授の研究室メンバーによる「学生ルポライターチームの新設」が最優秀賞を受賞した（2017 年 1 月 27 日）。今回のインターカレッジコンペティションでは、「ワールドマスターズゲームズ 2021 関西で

現在から未来に向けて何が出来るか」をテーマとしたプレゼンテーションに 22 チームが参加し、最優秀賞を受賞した。

○人間行動学科では、体育・スポーツ科学が教育・研究の大きな分野であるため、スポーツ活動において優秀な成績を残す学生も多い。本年度は本学科の下記 4 名が平成 28 年度の学生表彰を受け、3 月 16 日に表彰式が行われた。

多田羅 光樹（カヌー部） 発達科学部 3 年

ドイツで開催された 2016 カヌーマラソン世界選手権大会男子 U23 日本代表として出場した。

山本 真穂（女子タッチフットボール部） 発達科学部 3 年

第 22 回全日本王座決定戦「さくらボウル」で 3 年連続日本一に貢献し、最優秀選手に選出された。

熊澤 陽香（女子タッチフットボール部） 発達科学部 3 年

第 25 回東西大学王座決定戦「プリンセスボウル」で 3 年連続大学日本一に貢献し、最優秀選手に選出された。

井ノ本 宙（水泳部） 発達科学部 4 年

第 63 回全国国公立大学選手権水泳競技会で、200m 平泳ぎの種目で 3 位の成績を修めた。

（人間行動学科長 河辺章子）

5.2.3. 人間表現学科

(1) 運営

人間表現学科は 1 学科 1 コース(人間表現論コース)が 3 年次生となって、ゼミ配属や研究指導の実質上の運営が動き出したところである。なお、4 年次以上の学生に対しては、従来通りの教員体制で各コースの運営にあたった。平成 28 年度は 1 コース制への完全な移行を重点課題に掲げて、学科・コース運営を行った。平成 28 年度の課題は、(a) 学部人間表現学科 1 コース制の円滑運営、(b) 人間発達専攻人間表現系における修士課程指導体制の整備 の 2 つである。

学科全体に関わる予算・人事・総務・教務・学生・入試等の議案、また学部全体に関わる議案については、原則月 1 回の定例学科会議もしくは必要に応じて適宜開かれる臨時学科会議において報告、あるいは審議・決定した。平成 28 年度は、定例学科会議は 8 回であったが、学部統合関連の重要議題が多数発生したため、それに伴う臨時学科会議を 6 回開催した。

(2) 予算

予算は大学院人間発達専攻表現系講座に配分されたので、学科としての配分はない。大学院表現系講座に共通経費として配分された教育経費を大学院表現系講座及び学部人間表現学科の共通経費とし、大学院と学科を一体的に運用した。なお、学生当経費の扱いに関しては、博士前後期課程学生については指導学生数に応じて配分、学部学生については均等割で配分した。

(3) 入試

平成 29 年度人間表現学科の入学試験には大きな変化があった。新学部における入試方法(形式と内容)を現行の入試体制(前期日程の 4 受験区分、後期日程の学部共通小論文)を変更し、前期日程の 4 受験区分の内、実技系 3 受験(音楽、美術、身体表現)を AO 入試とすることとなった。入試変更に伴う受験者減少や公報不足が懸念されたが、各受験区分(音楽、美術、身体表現)すべて受験者、合格者、入学者を充足した。また、平成 29 年度人間表現学科編入学試験は 2 名の合格者を得た。

(4) 教育

教務・学生関連諸事項に関しては、従来コースごとに管理もしくは検討されていた案件に関して、問題や情報を学科全体で共有し、コース間で整合性を図るなど円滑に 1 コース制運営できるよう全教員が意思統一を図れるようにしている。

・各種ガイダンスの実施

入学時ガイダンスをはじめとして、2 学年の年初ガイダンス、履修コースガイダンス、ゼミ分けガイダンス等、年次進行の節目において各種ガイダンスを実施している。本年度、1 コース制で 2 回目のゼミ配属が行われた。希望調査の結果は分野と研究内容の希望の偏りが顕在化し、希望者が多いゼミは 6 名、逆に少ないゼミは 1 名であった。この問題に対して、教育・指導の在り方について連日議論した結果、今年度も学生の希望を尊重する方向で配属することとした。課題としては、卒業研究に向けてのガイダンスを早い段階から徹底する予定である。

・学科教育理念の実質化に向けて

表現学科における教育理念は、音楽や美術・デザイン、身体表現といった実践表現領域と文化、感性、表現関連史などの学問理論領域を横断するような視点を養うことを通じて、領域に捉われない新たな表現学を担う人材の育成を目指すものである。この目標の実現に向けて、展開する授業科目の位置づけを明確にし、学生が個別の分野・領域に極端に偏らないよう指導している。

・在籍学生の状況

在籍学生の動向(休学、履修状況、単位修得状況等)について、年度初めと年度末に学科構成員全員で情報を共有し、問題が予想される場合は、早期対応への心がけをおこなっている。

【教育上の取組み】

- 神戸市地域文化活性化事業 3～15 歳の子どもたちを対象とするダンス・ワークショップ公演「どうぶつになって、おどろう！ サン＝サーンス作曲『動物の謝肉祭』～」東灘区民センター小ホール
- 3～15 歳の子どもたちを対象とするダンス・ワークショップ公演「どうぶつたちのおんがくかいⅢ～聴いて！ 踊って！ ザ・カーニバル・オブ・アニマルズ！～」兵庫県立芸術文化センター
- 神戸市内の公立小学校(山の手小学校・中央区)の学事「芸術鑑賞会」と連携し、絵画ゼミの12名の学生(学部・大学院)が「黒板アート」を実践し、子供達や教員の好評を得た。その模様は神戸新聞(7月26日)にも大きく採り上げられた。
- 舞台芸術論 ゲスト: 福井渚 (劇団四季事業部: Westside Story 5月31日) ゲスト石原燃 (劇作家, 6月14日 舞台芸術論「夢をみる」と「はっさく」を読む)
- オジャ教授のゼミ(特別授業)では、「elevator pitch」として簡潔に自分の研究内容を英語で表現し、アドバイスを頂くという貴重な機会をもち、学生にとっても教員にとっても学术交流として成果をあげることができた。
- 「アジアを「打つ」～ワークショップと講演・試演会～」において、学部生たちによるイベント企画・運営・出演をとおした学びの実践研究を行った。
- ゼミ活動の一環として、学部生・院生合同で神戸市内の高齢者施設を訪問し「音楽療法活動」を行った。
- 久保惣 Ei ホール ミュージアムコンサート 音楽への旅Ⅲ ピアノ演奏・室内楽研究室 坂東ゼミによる～ (2017.3.4)
- 地域連携アートプロジェクト タイムスリップコンサート (学術 weeks2016 2017.3.18)

【学会発表】

- 赤木満里奈・野中哲士. (2016). 振付創作プロセスにおけるコンテンポラリーダンス作品の変容—環境との関係に着目して—. 日本認知科学会第33回大会発表論文集, 893-896. (ポスター発表)
- 山本真秀・野中哲士 (2016). 声楽における技の伝達と習得. 日本認知科学会第33回大会発表論文集, 897-902. (ポスター発表)

(5) 研究

研究活動に関しては、人間表現専攻の研究に関する項を参照されたい。

(6) 広報

表現学科は平成 29 年度から新学部においてアートプログラム, ミュージックプログラムとして教

育研究をスタートさせる。その概要をオープンキャンパスや公式ウェブサイトを通じて対外的に情報発信するとともに、特に AO 入試情報の公報活動が課題である。

(7) 受賞

■少人数のための創作ダンスコンクール「アーティスティック・ムーヴメント・イン・トヤマ 2016」特別賞

(人間表現学科長 塚脇 淳)

5.2.4. 人間環境学科

(1)運営

学科に関する意思決定は、例年どおり、人間環境学科・専攻運営会議において行った。本運営会議は、学科長と各コースの主任の計5名から構成される。今年度は、定例会議を13回開催し、予算配分、人事、入試、教務等に関わる重要案件を審議・決定した。

(2)予算

学科共通経費として1万円を用意しておいたが、未使用であった。

(3)入試

特記事項なし。

(4)教育

4月5日、104名の新1年生を迎え、ガイダンスを行った。例年と同じ内容で、学科やコースの特色、カリキュラム、1年後のコース配属の基準等を説明した。学籍番号により学生を4グループに分け、各コースから選出された担当教員4名により履修相談やコース進路相談等を行う指導体制をとった。

また4月4日、新2年生に向けてコース配属のためのガイダンスを行った。今年度のコース別配属人数は、以下のとおり。自然環境論コース：35名、数理情報環境論コース：14名、生活環境論コース：25名、社会環境論コース：28名。

なお、教育の成果として、以下2件の学生の受賞があった。

受賞者：小田 実紀（発達科学部学生）

賞の名称：環境科学会 2016 年会、学部生・高専生・高校生等の部、優秀発表賞（富士電機賞）

受賞対象：災害廃棄物の広域処理に対する住民の選好評価とその要因分析

受賞年月：2016年9月

共同受賞者：宮本一毅（発達科学部卒業生），田畑智博（人間環境学専攻），蔡 佩宜（人間環境学専攻）

受賞者：松本明佳（発達科学部学生）

賞の名称：第24回衛星設計コンテスト 電子情報通信学会賞

第24回衛星設計コンテスト 審査委員長特別賞

受賞対象：宇宙線雲観測衛星

受賞年月：平成28年11月

(5) 広報

高校生に対する大学説明会（オープンキャンパス）が8月11日及び12日に実施された。各コースの院生・学生がこれまでの学生生活や留学に関する経験を述べる、という新しい企画が実施された。

（人間環境学科長 平山洋介）

5.2.5. 発達支援論コース

ヒューマン・コミュニティ創成研究センターの「プロジェクトと連動したコース」

本コースは、人間発達環境学研究科及び発達科学部の実践性を特徴とするヒューマン・コミュニティ創成研究センター（以下、「HCセンター」と略）の研究プロジェクトと連動して運営されている。学生は、「子ども・家庭支援部門」「障害共生支援部門」「ボランティア社会・学習支援部門」の3部門の実践的研究に携わりながら、地域・行政・企業・NPOとの協働的研究の実際を学び、現代的研究の原理と方法を修得することとなる。

センターのサテライト施設である「のびやかスペースあーち」で地域社会と関わりながら実践的な専門性を高めた学生、岩手県大船渡市の震災復興支援プロジェクトに参加することで問題解決能力を高めた学生などがいた。また、センターを事務局として進めているESDの事業に関わることでグローバルな課題への多角的な観点やそれへの対応のあり方を学んだ学生もいた。

多様な専門性をもった学習共同体

3年次に学部のあるゆるコースから進学可能な本コースは、学生集団自体が多様性・異質性を特徴とする。2016年度の進学者は16人で、2年次の所属は、子ども発達論6名、教育

科学論 2 名，学校教育論 1 名，人間表現論 1 名，自然環境論 4 名，生活環境論 1 名，社会環境論 1 名であった。4 年生と合わせると，学部生は 38 名（旧所属コースは 10 を数える）になる。本コースは，基本的に学部生の大学院進学あるいは大学院生と共に学ぶスタイルを推奨しており，大学院在籍者を含めると 57 名の，実に「多様な専門性をもった学習共同体」である。

ちなみに，発達支援論コースと直接つながっている大学院（人間発達専攻学び系 C）在籍者は，博士課程前期課程 7 名（M1：4 名，M2：3 名），同課程 1 年制履修コース 6 名，博士課程後期課程 5 名である。

「教師と生徒の共同作業」としての学習プログラムづくり

本コースは，旧所属のカリキュラムに束縛されることなく，研究テーマに応じて自由に学習プログラムを作り上げることができるという特徴もある。学生の問題意識・関心と最新の学問的 이슈が交差しえるように，教員と学生が共同して学習プログラムを作成する。教員と学生の関係性をいかに対話的に再構築するかという課題が残るが，学生にとっては「自らの学習過程を自ら創造する」という体験を通して，学習支援の本質を理解することとなる。卒業論文・修士論文・博士論文は，そのような学習と研究の集約である。

多様な社会領域での「ヒューマンキャピタル・ソーシャルキャピタル創成者」

2016 年度学部卒業生（4 年生）の進路は，大学院進学，地方公務員，社会福祉施設，製造業勤務，学校教員などで，博士課程（前期）修了者は，博士後期課程進学，学校教員，ソーシャルワーカーなどとなっている。

発達科学部・人間発達環境学研究科の全体的な傾向同様，本コースの卒業生・修了生も，多様な社会領域に進出しているといえる。しかし，とりわけ，学部・領域横断的かつ実践主義的な本コースで学んだ彼らには，現実社会の輻輳した問題を解決に導くヒューマンキャピタル（人的資本）・ソーシャルキャピタル（社会関係資本）を，より豊かにしていく実践者として，各領域において活躍してもらうことを期待するものである。

（発達支援論コース主任：津田英二）

5.3. 各専攻講座の教育

5.3.1. 人間発達専攻

(1) 運営

各教員は，4 つの系講座（こころ系，からだ系，表現系，学び系）に所属している。専攻の運営は，基本的に，この各系講座を中心に行われている。運営にあたっては，専攻長

と各系講座の主任より構成された人間発達専攻運営会議を組織し、月1回の定例会議のほか、適宜臨時の会議を開いて、専攻に関わる重要案件（人事、予算、入試、共通科目運営、共通備品運用等）に関わる審議等を行った。専攻内の人事については、各系講座で人事の方針を検討し、原案を作成した。

(2) 予算

予算は、専攻に配分されたものを各系講座に振り分けた。共通経費は設定していないが、大型プリンタ運用経費については、各系講座より予算の一部を共通経費として拠出している。また、この大型プリンタの経費については、その用途が共通必修科目におけるポスター発表に集中しているため、専攻長が実験・実習等に要する経費を申請して、対応している。なお、本大型プリンタの運用では、2016年度はからだ系講座が担当であり、原則的に、利用者には無料で使用させたが、予算的には過不足はなかった。今後、大型プリンタの設置場所が確定したので、毎年の移設設置の手間が大幅に削減される予定である。

(3) 入試

前期課程入試については、2次募集にはならなかったが、学び系の一部の受験区分において、応募者が少なく、また、合格辞退者も頻出して、結果的に定員の90%を下まわったことが大きな課題である。合格辞退の理由は、他大学院への合格、就職などである。来年度以降の前期課程入試について、広報活動等の強化が喫緊の課題となってきている。それと同時に、人間発達専攻の定員管理に関わって今後専攻全体で検討する必要があるかもしれない。一方、後期課程については、問題なく定員を充足することができた。

(4) 教育

共通必修科目として、人間発達総合研究I/II及び人間発達相関研究が設定されている。人間発達総合研究Iは、専攻内における多様な研究関心とテーマの広がり共有できる内容である。一方、修士論文の構想発表の場である人間発達相関研究では、例年通り、ポスター発表がなされ、活発な議論が行われた。この科目については、受講生からの評価が良好である。さらに、博士論文の構想発表会を兼ねる人間発達総合研究IIでは、2日間にわたり口頭発表によって、それぞれの博士論文構想並びに進捗状況が発表されている。この講義についても、院生からの評価は極めて高い。

大学院生への教育は修士論文・博士論文の作成を大きな目標として学び、研究を進めていくことが中心であり、指導はそれぞれの主指導教員や副指導教員がその役割を担っている。前期課程から学会発表（後期課程では国際学会での発表を奨励）や研究論文の学術誌

への投稿を勧めている。

なお、以下では各系の教育における特徴的な事項を挙げている。

こころ系：博士課程前期課程科目である「人間発達研究（こころ系）」では、学会発表を行うことを念頭に、自らの研究内容を大型ポスターを用いて発表させた。これにより、プレゼンテーション能力の向上に加え、院生の研究水準の向上にも貢献した。今年さらには発表者同士が十分にディスカッション出来るような工夫をした。また、幅広い見識を得るために、適宜ゲストスピーカーを招聘している（発達障害臨床学特論演習2016年11月12日（木）18:00-20:00 奥村智人氏（大阪医大LDセンター）「発達障害の子どもの臨床と視機能」）。また、院生向けの学術講演2件を開催した。

・2016年6月27日（月）吉田寿夫氏（関西学院大学）「心理学研究法について思うこと、あれこれ」

・2017年2月24日（金）西田裕紀子氏（国立研究開発法人国立長寿医療研究センター，老年学・社会科学研究センター，NILS-LSA活用室）「知能のエイジング：15年間の学際的縦断研究から」

教育の成果として、院生の受賞があった。well-being スタディツアーで行った研究成果を参加学生と連名で発表したものが評価され、1位と2位の二つの賞を獲得した。

Moe Nakamura, Eri Yoshida, Daisuke Yamanoi, Yukie Furuya, Chihiro Ishikura, Yu Yakita, Naoya Shigeta, Ami Kojima, Yoshiko Kato INTERNATIONAL COUNCIL OF PSYCHOLOGISTS, INC.

Dayan-0' Roark Poster Awards First Award The relationship between subjective well-being, and relationship with family and living environment in Austria and Japan.

Eri Yoshida, Moe Nakamura, Daisuke Yamanoi, Yukie Furuya, Chihiro Ishikura, Yu Takita, Naoya Shigeta, Ami Kojima, Yoshiko Kato INTERNATIONAL COUNCIL OF PSYCHOLOGISTS, INC.

Dayan-0' Roark Poster Awards Second Award Austrian and Japanese student' well-being and related factors.

からだ系：本年度より「人間発達研究（からだ系）」の開講期を後期に変更し、自然科学から人文・社会科学分野までの多岐にわたる学問分野をもとにした学際的観点から解析する方法や枠組みを習得し、課題解決のための柔軟な思考能力や洞察力を涵養することを目的に、それぞれの分野の学会やセミナーでの発表、学内での各種発表会・研究会などの実質的な運営と積極的参加を行うこととした。多数の大学院生が、国内外の学会や研究会

等で発表を行い、さらに系講座の教員が携わっている「アクティブ・エイジング・プロジェクト」、「鶴甲いきいきまちづくりプロジェクト」や「マスターズ甲子園」などの活動に積極的にかかわり、プロジェクト運営を補助する役割を十分に担っている。これらの積極的な活動を通して、多くの教員や他大学の研究者や院生とのディスカッションができ、多様な学びを深めていくことができたという院生からの感想を得た。

表現系：特徴的な活動は次の2点であった。【韓国からのキャンパスツアー受け入れ及び国際交流研究】2017年2月2日、3日の2日間、韓国・全州大学カルチャーコンヴァージェンス学部クリエイティブアーツサイコセラピー学科 (Department of Creative Arts Psychotherapy, College of Culture Convergence, Jeonju University, Korea) の学部生10名と大学院生6名が神戸大学を訪問した。テーマは「音楽療法におけるピアノ即興の臨床技法を学ぶ」で、音楽療法士を目指している学生達を対象に、岡崎香奈准教授がピアノによる即興技法を紹介。また、本学大学院の沼田里衣研究員による「コミュニティ音楽療法における即興音楽」と題した研究発表およびワークショップも行われ、学部生や院生も参加し、音楽による国際交流を行った。さらに、引率教員の Dong Min Kim 博士、Hyejin So 博士や学生らと共に、神戸大学における最新の音楽療法研究について議論を交わした。

【音楽文化史特論】ゲスト Giorgio Biancorosso (香港大学音楽学准教授 12月「イタリアオペラと映画のパフォーマンス」)、ゼミのゲスト Carol Oja (ハーヴァード大学音楽学教授 1月「elevator pitch の簡潔さで自分の研究を解説する」) 学術 WEEKS (学部大学院合同)：宮本直美(立命館大学教授、11月「歌と文化的記憶」のシンポジウム講演「共に歌うことの社会学」)、寺島夕紗子(洗足音楽大学 講師 2月「さとうきび畑こんさあと 50年目の記憶」) 今回は、2月2日のコンサートに先駆けて、学部、院のゼミ有志10人がシンポジウムで発表するという試みを行った。大変活発な議論が交わされ、学生たちにも教員にも貴重な学びとなった。

学び系：学び系としては、特筆すべき教育研究活動としては、教育基礎研究道場を挙げることができる。この道場では、多様なテーマに関する18件の特別講義が企画、実施され、院生の研究能力の向上に役立っている。また、高度教員養成プログラムも実施されている(詳細は、別に掲載)。さらに、講義内容の充実のために、ゲストスピーカー制度を活用し、受講生が幅広い専門家からの知見を得ることができるようにしている。

(人間発達専攻長 稲垣成哲)

5.3.2. 人間環境学専攻

(1) 運営

専攻に関する意思決定は、例年どおり、人間環境学科・専攻運営会議において行った。本運営会議は、学科長と各コースの主任の計5名から構成される。今年度は、定例会議を

13 回開催し、予算配分、人事、入試、教務等に関わる重要案件を審議・決定した。

今年度の人事として、准教授昇任 1 件に関する人事を進め、人事委員会での審議を経て、教授会において審議・承認された。

(2) 予算

特命助教人件費専攻負担分を考慮して予算を配分した。

(3) 入試

博士課程後期課程入試に関し、「受験生のプレゼンテーションに対し、主論文等審査委員と論文等審査委員が所見を述べ、各コースから 1 名ずつの口述試験委員が採点する」という方式を引き続き採用し、定着させた。

(4) 教育

院生は修士論文・博士論文の作成を中心目標として勉学・研究を進めることから、彼らに対する指導はそれぞれの指導教員に負うところが大きい。一方、とくに博士前期課程に関して、専攻共通教育のあり方をどのように考えるべきかが検討課題となっている。この点について、昨年度に開始した専攻共通科目「人間環境学相関研究」のあり方を見直し、新しい内容として再スタートさせた。その成果・要改善点などについて検証する必要がある。

なお、教育の成果として、以下 5 件の院生・学術研究員の受賞があった。

受賞者：青島一平（前期博士課程）

賞の名称：環境科学会，最優秀ポスター賞

受賞対象：満足度指標を用いた都市緑地の貨幣価値評価

受賞年月：2016 年 9 月

共同受賞者：内田圭，丑丸敦史，佐藤真行

受賞者：青島一平（前期博士課程）

賞の名称：日本生態学会，ポスター賞

受賞対象：自然環境と満足度～都市の生活と生態系サービス～

受賞年月：2017 年 3 月

共同受賞者：内田圭，丑丸敦史，佐藤真行

受賞者：舟木 千尋（博士前期課程）

賞の名称：シンポジウム「テラヘルツ科学の最先端Ⅲ」, 「最優秀学生ポスター賞」

受賞対象：テラヘルツ分光法によるポリカプロラクトンの紫外線劣化評価

受賞年月：2016年11月

共同受賞者：豊内 拓哉, 保科 宏道, 尾崎 幸洋, 山本 茂樹, 佐藤 春実

受賞者：蔡 佩宜（本専攻学術研究員）

賞の名称：第44回環境システム委員会研究論文発表会, 優秀ポスター発表賞

受賞対象：災害廃棄物の広域処理に対する住民の選好評価とその要因分析

受賞年月：2016年10月

共同受賞者：田畑智博（本専攻）, 白川博章（名古屋大学）

受賞者：高橋 覚（本専攻学術研究員）

賞の名称：日本写真学会 小島裕研究奨励金 受賞

受賞対象：原子核乾板ガンマ線望遠鏡による高解像度撮像・偏光計測のための技術開発

受賞年月：平成28年6月

(5) 広報

修士課程受験検討者に対し、7月にオープンラボの期間が設けられ、5名が来校し、そのうち3名が受験した。

（人間環境学専攻長 平山洋介）

6. 進路

6.1. キャリア形成支援

6.1.1. キャリアサポートセンター

キャリアサポートセンターは、学部の1年生から大学院生にいたるすべての学生を対象として、学生のキャリア形成を実践的にサポートすることを目的としている。狭義の就職活動の支援はもとより、生涯にわたるキャリア形成を視野に入れた支援活動を提供している。

就職活動中の学生を対象にしてはセミナー・説明会・ワークショップ等の集団的イベント及び個別的なカウンセリングを行い、より広範囲の学生を対象にしては、大学で学ぶことや働くことの意義を自分で考え、自分の人生をどう生きるかという課題と早い段階から真剣に向き合うように働きかけている。

どのような仕事に就くかを決め、自分の希望する職をどのようにして得るのかを考えることは学生にとって大きな転機である。この課題に向き合うとき、当面の目標を越えて、個人が生涯にわたって仕事や社会とどのように関わりつながって生きていくかという長期的な視点に立つように訴えている。

当センターが企画・実施するイベントの多くは人間発達環境学研究科及び発達科学部の学生のみならず神戸大学のすべての学生に対して開放されている。

現在当センターは、包括的なキャリア形成支援、就職活動支援全般の充実、大学院生へのキャリア支援の充実、留学生へのキャリア支援の充実、に重点的に取り組んでいる。以下に、これらの面における今年度の活動を報告する。また最後に、今年度実施した就職対策セミナーの一覧を載せる。

(1)包括的なキャリア形成支援

当センターは、希望する職に就くために必要な知識と技能を伝達することを越えて、包括的に長期的な視野から各自の将来の設計に取り組んでもらうべく働きかけている。各自のキャリア設計における包括的・長期的視野の重要性は、全学生・全教職員が共有すべきことであると考えている。

具体的な活動としては、主に授業内でのキャリアガイダンスを当センターのキャリアディベロップメントアドバイザーが担当した。授業の一環としてのキャリアガイダンスは、ここ数年継続して実施している。キャリア形成における長期的な視野の重要性をなるだけ多くの学生になるだけ早い段階に認識してもらうことをめざし、広範囲の1年次生を対象とする概論的授業科目において行っている。

企業が学生に求める資質に関する企業と学生の意識のギャップ、経済産業省が提唱している「社会人基礎力」等、本格的な就職活動を開始する以前に心得ておくべきことを解説

し、長期的な視野の涵養につながるように、いくつかのよく知られたキャリア理論（「転機の乗り越え」を軸とするナンシー・K・シュロスバーグの理論、人の一生を「役割の組合せ」という観点から理解しようとするドナルド・E・スーパーの理論及びジョン・D・克蘭ボルツの「計画された偶発性」理論）を紹介した。講師が一方向的に話をするのではなく、自己分析を試みる、他学生と意見を交換する等の活動を出席学生に促すことにより、学生が能動的に参加できるよう配慮した。

(2) 就職活動支援全般の充実

民間企業就職希望者、公務員志望者及び教職志望者に分けて、既に定着しているタイプの実践的な支援活動を精力的に実施した。

民間企業就職希望者に対しては、企業の動向に関するセミナー、エントリーシート対策講座、グループディスカッションワークショップ、インターンシップセミナー、卒業生・修了生との座談会、マナー講座を実施した。今年度は、新たに学生がより受講しやすい昼休み時間を利用し受講できる「ランチタイムセミナー」（ハラスメントについて、OGによるJICAについて、OBをゲストスピーカーとして招いた大学職員、公務員、教員の仕事理解など計5回延べ36名参加）も開催した。公務員志望者に対しては、職種・試験制度等に関する全般的なガイダンス及び採用試験対策セミナーを開き、教職志望者に対しては、各地の教育委員会による説明会、個別の高等学校による説明会、私学教員についてのセミナー、採用試験対策セミナー、採用試験合格者との座談会等を企画した。また、それぞれの進路ごとに、就職活動を終えた学生と、これからスタートする学生との座談会を進路別に開催した。後輩へ自身の就職活動の経験を伝えると共に、就職活動を振り返り、再評価することで今後のキャリア形成へ繋げることを目的としている。また、今年度から就職活動時期の変更に応じて、内定獲得に苦勞する学生に対して、個別相談会を計5回開催した。個別面談のため参加人数は56名であり、学生にとってレスキュー的な相談会となり、次年度も継続開催していく。また、2013年にスタートした業界研究セミナーも年々参加企業数が増え、今年度は15社の参加を得て開催とした。参加者数も年々増加し、112名の参加があった。就職活動時期が流動的な近年、学生に益するセミナーとして定着している。これらに加えて、キャリア形成全般あるいは現在直面している具体的な就職活動について学生が抱える多様なニーズに応えるべく、キャリアカウンセラーによる個別のカウンセリングを恒常的に実施した。いくつかの件についてさらに詳しく報告する。

① 全般的な内容のガイダンス

間もなく本格的な就職活動を開始する3年次生を対象とする全般的な内容のガイダンスを多数開催した。就職活動のスケジュール、インターンシップ、企業の探し方等この段階のすべての学生にぜひ心得ておいて欲しい基礎知識を伝達することを意図した。当センター

のキャリアディベロップメントアドバイザーあるいは外部からの講師が担当した。外部講師によるセミナーでは、就職戦線の動向、仕事研究の仕方等の面で貴重な内容が扱われた。

②グループディスカッション研修

多くの企業が採用活動の一環として実施するグループディスカッションでは、複数の参加者が与えられたテーマについて自由に討議することが求められる。大学・学部・専攻も違えば考え方・性格なども異なる様々なバックグラウンドを持つ学生と初めて会って一緒に討議するのであるから、戸惑うのが普通である。前もって模擬体験をしておくことが望ましい。

当センターによるグループディスカッション研修は2011年度に大阪府立大学との合同開催実施をスタートとして、毎年実施している。今年度は当センター独自の研修及び3年目となる京都大学との合同研修、昨年度から私立大学である甲南大学との合同研修も継続し、新たに兵庫県立大学との合同研修を合わせて8セッションを実施し、延べ261名の参加者を集めた。また、昨年度に引き続き大手金融業の人事部長である神戸大学OBから、直接に学生へのアドバイスを得る機会を設け、卒業生と在学生在を繋ぐキャリア支援とした。就職活動にすぐに役立つ実践的な内容であり、参加者には非常に好評であった。参加者のコメントの内容から判断して、この研修の様に実践的な研修の需要が高いことがわかる。今後も力を入れ発展させていきたい。

② 企業による採用選考活動時期への対応

上の(1)において言及した経緯により2016年3月卒業・修了予定者より、多くの企業による採用選考活動の時期が大幅に後倒しされ、学生の意識も積極的であったが、2017年3月卒業者については採用時期の変更がなく、積極的に活動する学生と楽観的な学生との二極化が傾向としてみられた。楽観的な学生へ活動を促すこと、またスタートが遅れた学生への支援が今年度の大きな課題のひとつであった。①で報告した全般的な内容のガイダンスにおいてこの件を繰り返し取り上げ、学生への周知を図った。また、すでに就職活動を終えた学生との座談会的セミナーの開催時期の調整や、企業目線で社会人として求められるキャリア成熟を促すような内容を講座見直しのなかで実施した。

(3) 大学院生へのキャリア支援の充実

①大学院生による就職座談会

主として修了までまだ時間のある大学院生及び大学院進学を考えている学部学生を対象として、既に就職先から内定を確保した当研究科の大学院生との座談会を開いた。院生としての学術活動と就職活動をどう折り合いをつけるのか、就職活動において大学院生としての強みをどう伝えるのか、といったことをめぐって、既に体験した学生とこれから体験しようとする学生の間に対話の機会を提供した。学生の状況についての情報を集め、参加

者の生の声によるきめの細かい質疑応答を可能にする座談会形式は、当センターが好んで採用するセミナーフォーマットである。

②理系教員選考会への協力

日本物理学会キャリア支援センター及び神戸大学キャリアセンターの主催による「私立中高 理系教員選考会」が、2017年1月22日神戸大学において開催された。理科・数学・情報の教員免許取得者・取得見込者を対象とする私立中高の採用面接会を軸とするイベントであった。当センターも実務面で協力した。

(4) 留学生へのキャリア支援の充実

留学生のための就活支援として留学生を対象とする全学レベルのガイダンスグローバルジョブセミナーにブース参加し留学生の採用に特に意欲的な企業の選び方、自己PRの考え方など具体的な支援を行った。恒常的に実施している個別のカウンセリングにおいても留学生を理解し、よりきめの細かいキャリアサポートを提供することを目指している。

(5) 就職対策セミナー

上に報告したイベント以外にも、就職活動を支援するためのセミナーを数多く企画し実施した。今年度実施したイベントの一覧を記す。

① 開催セミナー一覧

平成28年度 教員採用対策セミナー

第1回目	4月14日(木) 13:30~14:30 B103教室	大阪府教員採用選考試験説明会 【講師】大阪府教育委員会 参加者 15名
第2回目	4月14日(木) 15:10~16:40 B103教室	神戸市教員採用説明会 【講師】神戸市教育委員会 参加者 16名
第3回目	4月15日(金) 12:30~13:20 B104教室	豊能地区教員採用選考試験説明会 【講師】豊能地区教職員人事協議会 参加者 2名
第4回目	4月15日(金) 13:30~14:30 B104教室	大阪市教員採用選考試験説明会 【講師】大阪市教育委員会 参加者 1名
第5回目	4月15日(金) 15:10~17:50 F256教室	面接試験対策セミナー 【講師】東京アカデミー講師 参加者 34名

第6回目	4月18日(月) 12:30~13:30 B101教室	堺市教員採用選考試験説明会 【講師】堺市教育委員会 参加者 0名
第7回目	4月22日(金) 15:10~17:50 B104教室	論作文試験対策セミナー 【講師】東京アカデミー講師 参加者 25名
第8回目	4月26日(火) 10:30~11:30 B101教室	和歌山県教員採用選考試験説明会 【講師】和歌山県教育委員会 参加者 3名
第9回目	4月28日(木) 15:10~16:40 B104教室	京都府教員採用選考試験説明会 【講師】京都府教育委員会 参加者 2名
第10回目	5月6日(金) 13:20~14:50 B104教室	兵庫県公立学校教員採用候補者選考試験説明会 【講師】兵庫県教育委員会 参加者 30名
第11回目	5月12日(木) 12:30~13:30 B101教室	石川県公立学校教員採用候補者選考試験説明会 【講師】石川県教育委員会 参加者 1名
第12回目	5月13日(金) 15:10~17:50 B104教室	滋賀県公立学校教員採用候補者選考試験説明会 【講師】滋賀県教育委員会 参加者 5名
第13回目	5月17日(火) 10:40~12:10 B101教室	教育時事対策 【講師】東京アカデミー 参加者 27名
第14回目	5月20日(金) 13:00~17:30 B104教室	教員採用試験対策先輩からうかがう面接試験ポイント 【講師】佐谷 章子先生(紫陽会副会長) 参加者 17名
第15回目	5月27日(金) 13:00~15:00 B103教室	教員採用試験対策先輩からうかがう面接試験ポイント 【講師】佐谷 章子先生(紫陽会副会長) 参加者 13名
第16回目	5月27日(金) 15:00~17:30 B103教室	教員採用試験対策先輩からうかがう面接試験ポイント 【講師】佐谷 章子先生(紫陽会副会長) 参加者 13名

第 17 回目	6 月 10 日 (金) 13:20~14:50 B104 教室	教員志望者セミナー 【講師】中井博之氏 (学校法人共栄学園理事長) 参加者 10 名
第 18 回目	6 月 20 日 (月) 13:00~17:00 中会議室 A	教員採用試験対策先輩からうかがう面接試験ポイント 【講師】佐谷 章子先生 (紫陽会副会長) 参加者 15 名
第 19 回目	7 月 15 日 (金) 13:00~17:00 B104 教室	教員採用試験対策先輩からうかがう面接試験ポイント(集団) 【講師】佐谷 章子先生 (紫陽会副会長) 参加者 7 名
第 20 回目	7 月 15 日 (金) 13:00~17:00 B105 教室	教員採用試験対策先輩からうかがう面接試験ポイント (個人) 【講師】佐谷 章子先生 (紫陽会副会長) 参加者 7 名
第 21 回目	8 月 18 日 (木) 9:00~17:00 B104 教室	教員採用試験面接練習会 【講師】佐谷 章子先生 (紫陽会副会長) 参加者 9 名
第 22 回目	8 月 19 日 (金) 9:00~17:00 B104 教室	教員採用試験面接練習会 【講師】佐谷 章子先生 (紫陽会副会長) 参加者 6 名
第 23 回目	11 月 10 日 (木) 12:30~13:10 B105 教室	ランチセミナー第 5 回 教員志望向け 【講師】東京アカデミー講師 参加者 12 名
第 24 回目	11 月 17 日 (木) 10:40~12:10 B201 教室	横浜市教育委員会からの説明会 【講師】横浜市教育委員会 参加者 6 名
第 25 回目	11 月 25 日 (金) 12:30~15:30 D-room	教員採用試験合格者との座談会 【講師】教員採用試験合格者 参加者 32 名
第 26 回目	12 月 1 日 (木) 12:30~13:30 D-room	教育委員会からの説明会 【講師】豊能地区教職員人事協議会 参加者 4 名
第 27 回目	12 月 2 日 (金) 12:30~13:30 D-room	教育委員会からの説明会 【講師】大阪市教育委員会 参加者 3 名

第 28 回目	12 月 16 日 (金) 13:20~14:50 D-room	教員採用試験の傾向と対策 【講師】伊藤 憲司氏 (東京アカデミー) 参加者 30 名
第 29 回目	2 月 10 日 (金) 13:20~14:50 D-room	面接対策ガイダンス 【講師】伊藤 憲司氏 (東京アカデミー) 参加者 33 名
第 30 回目	3 月 24 日 (金) 13:00~15:40 B104 教室	集団討論練習会 【講師】大槻まゆみ氏 (東京アカデミー) 参加者 20 名

平成 28 年度 就職活動支援セミナー

第 1 回目	4 月 19 日 (火) 12:30~13:10 F256 教室	就活活動スタートガイダンス 第 1 部 【講師】林田雄太氏 (株式会社リクルートキャリア) 参加者 18 名
第 2 回目	4 月 19 日 (火) 13:20~14:50 F256 教室	就活活動スタートガイダンス 第 2 部 【講師】林田雄太氏 (株式会社リクルートキャリア) 参加者 9 名
第 3 回目	4 月 22 日 (金) 12:30~13:10 B104 教室	2018 年卒就職活動スタートアップセミナー 第 1 部 【講師】香田祐介氏 (株式会社マイナビ) 参加者 27 名
第 4 回目	4 月 22 日 (金) 13:20~14:50 B104 教室	2018 年卒就職活動スタートアップセミナー 第 2 部 【講師】香田祐介氏 (株式会社マイナビ) 参加者 20 名
第 5 回目	4 月 26 日 (火) 12:30~13:10 B104 教室	ランチセミナー (教員になるには?今から何をすれば良い?) 【講師】東京アカデミー 参加者 15 名
第 6 回目	5 月 10 日 (火) 12:30~13:10 B104 教室	インターンシップ選考対策 【講師】香田祐介氏 (株式会社マイナビ) 参加者 36 名
第 7 回目	5 月 10 日 (火) 13:20~14:50 B104 教室	インターンシップ選考対策 【講師】香田祐介氏 (株式会社マイナビ) 参加者 19 名

第 8 回目	5 月 19 日 (木) 12:30~13:10 D-Room	ランチセミナー (公務員の仕事を知ろう！) 【講師】東京アカデミー 参加者 5 名
第 9 回目	5 月 23 日 (月) 11:00~16:30 大会議室	就活応援！あなたの為の個別相談会 【講師】(株)ダイヤモンド・ヒューマンリソース大阪支社 参加者 16 名
第 10 回目	5 月 26 日 (木) 12:30~13:10 D-Room	ランチタイムセミナー (青年海外協力隊体験会&説明会) 【講師】JICA関西国際センター 中村彩乃氏 参加者 7 名
第 11 回目	5 月 27 日 (金) 12:30~13:10 D-Room	広告業界 企業説明会 【講師】MC & P マッチングデザインセンター 参加者 19 名
第 12 回目	6 月 2 日 (木) 12:30~13:10 D-Room	インターンシップマナーガイダンス 【講師】丹下 晴恵 (株式会社マイナビ) 参加者 13 名
第 13 回目	6 月 2 日 (木) 13:20~14:50 D-Room	インターンシップマナーガイダンス 【講師】丹下 晴恵 (株式会社マイナビ) 参加者 9 名
第 14 回目	6 月 17 日 (金) 12:30~13:10 D-Room	身近なハラスメントを知ろう！ 【講師】三木啓子氏 (アトリエエム株式会社) 参加者 5 名
第 15 回目	6 月 22 日 (水) 11:00~16:30 大会議室	就活応援！あなたの為の個別相談会 【講師】(株)ダイヤモンド・ヒューマンリソース 大阪支社 参加者 15 名
第 16 回目	6 月 24 日 (金) 12:30~13:10 B104 教室	これから就活準備を始める人へ 自己分析&自己PR講座 【講師】林田雄太氏 (株式会社リクルートキャリア) 参加者 19 名
第 17 回目	6 月 24 日 (金) 13:20~14:50 B104 教室	これから就活準備を始める人へ 自己分析&自己PR講座 【講師】林田雄太氏 (株式会社リクルートキャリア) 参加者 24 名
第 18 回目	7 月 8 日 (金) 13:20~14:50 大会議室	今年の就活から知る最新データによる今行うべき就活対策講座 【講師】降矢一朋氏 (株)ダイヤモンド・ヒューマンリソース 大阪支社 参加者 9 名

第 19 回目	7 月 11 日 (月) 11:00~16:30 中会議室 C	就活応援！あなたの為の個別相談会 【講師】 (株) ダイヤモンド・ヒューマンリソース 大阪支社 参加者 13 名
第 20 回目	7 月 13 日 (水) 11:00~16:30 大会議室	就活応援！あなたの為の個別相談会 【講師】 (株) ダイヤモンド・ヒューマンリソース 大阪支社 参加者 12 名
第 21 回目	8 月 9 日 (火) 12:50~13:20 中会議室 B	グループディスカッション実践セミナー 【講師】 田中美恵 (発達科学部キャリアサポートセンター) 参加者 7 名
第 22 回目	8 月 9 日 (火) 13:30~14:50 中会議室 B	グループディスカッション実践セミナー 【講師】 田中美恵 (発達科学部キャリアサポートセンター) 参加者 7 名
第 23 回目	8 月 26 日 (金) 13:00~15:00 B104 教室	インターンシップマナー実践講座 【講師】 田中美恵 (発達科学部キャリアサポートセンター) 参加者 6 名
第 24 回目	9 月 12 日 (月) 11:00~16:30 大会議室	就活応援！あなたの為の個別相談会 【講師】 (株) ダイヤモンド・ヒューマンリソース 大阪支社 参加者 4 名
第 25 回目	10 月 7 日 (金) 12:30~13:10 B210 教室	業界・企業研究講座 (業界・企業研究の進め方) 【講師】 芳山 美礼氏 (株式会社リクルートキャリア) 参加者 17 名
第 26 回目	10 月 8 日 (金) 13:20~14:50 B210 教室	業界・企業研究講座 (志望動機を強くする！企業研究のすすめ) 【講師】 芳山 美礼氏 (株式会社リクルートキャリア) 参加者 13 名
第 27 回目	10 月 13 日 (木) 12:30~13:10 大会議室	書ける！選考を突破する！エントリーシート対策 【講師】 香田 祐介氏 (株式会社マイナビ) 参加者 21 名
第 28 回目	10 月 13 日 (木) 13:20~14:50 大会議室	書ける！選考を突破する！エントリーシート対策 【講師】 香田 祐介氏 (株式会社マイナビ) 参加者 18 名
第 29 回目	10 月 18 日 (火) 12:30~13:10 D-room	OB・現役社員が語る新聞社の仕事の魅力 【講師】 田口 慎太郎氏 (株式会社朝日新聞社 販売局流通部) 参加者 2 名

第30回目	10月18日(火) 13:20~14:50 D-room	OB・現役社員が語る新聞社の仕事の魅力 【講師】田口 慎太郎氏(株式会社朝日新聞社 販売局流通部) 参加者 3名
第31回目	10月20日(木) 12:30~13:10 大会議室	逆引き就活論 2018就活ロードマップ編 【講師】福重 敦士氏(株)ダイヤモンド・ヒューマンリソース 大阪支社 参加者 12名
第32回目	10月20日(木) 13:20~14:50 大会議室	逆引き就活論 2019就活ロードマップ編 【講師】福重 敦士氏(株)ダイヤモンド・ヒューマンリソース 大阪支社 参加者 10名
第33回目	11月7日(月) 15:00~16:00 大会議室	実践型仕事研究講座「仕事研究方法を学ぶ」 【講師】間宮 清吾(株式会社マイナビ) 参加者 18名
第34回目	11月7日(月) 16:00~17:00 大会議室	実践型仕事研究講座「銀行業界徹底研究」 【講師】株式会社三菱東京UFJ銀行 参加者 18名
第35回目	11月8日(月) 13:20~14:50 D-room	現役OB社員が話す不動産業界の話 【講師】住友不動産株式会社 現役OB社員 参加者 5名
第36回目	11月17日(木) 13:20~14:50 B104教室	プレゼンテーション講座 【講師】林田 雄太氏(株式会社リクルートキャリア) 参加者 7名
第37回目	11月18日(金) 13:20~14:50 B104教室	国立大学職員として働く!! 【講師】辻 誠氏(神戸大学 企画部企画課企画法規グループ) 参加者 7名
第38回目	12月6日(火) 12:50~14:50 B210教室	グループディスカッション実践セミナー 【講師】田中美恵 参加者 6名
第39回目	12月12日(月) 12:30~13:10 F264教室	エントリーシート作成対策講座(短縮編) 【講師】降矢 一朋氏(株)ダイヤモンド・ヒューマンリソース 大阪支社 参加者 11名
第40回目	12月13日(月) 13:20~14:50 F264教室	エントリーシート作成対策講座(実践編) 【講師】降矢 一朋氏(株)ダイヤモンド・ヒューマンリソース 大阪支社 参加者 8名

第 41 回目	12 月 15 日 (木) 12:30～13:10 B210 教室	逆引き就活論 ～自己PR・志望動機の虚実編～ 【講師】福重 敦士氏 (株) ダイヤモンド・ヒューマンリソース 大阪支社 参加者 12 名
第 42 回目	12 月 15 日 (木) 12:30～13:10 B210 教室	逆引き就活論 ～自己PR・志望動機の虚実編～ 【講師】福重 敦士氏 (株) ダイヤモンド・ヒューマンリソース 大阪支社 参加者 10 名
第 43 回目	12 月 20 日 (火) 12:30～13:30 D-room	業界研究会 (食品編) ～スジャータめいらく株式会社～ 【講師】スジャータめいらく株式会社 参加者 7 名
第 44 回目	12 月 21 日 (水) 15:30～17:30 D-room	就職活動体験談 民間企業編 【講師】OB (五藤雅貴氏・福井清太郎氏) 参加者 11 名
第 45 回目	12 月 21 日 (水) 18:00～19:30 D-room	就職活動体験談 理系大学院生編 【講師】OB 参加者 6 名
第 46 回目	1 月 13 日 (金) 12:30～13:10 D-room	“選考突破” の為の就活総まとめ講座 【講師】林田雄太氏 (株式会社リクルートキャリア) 参加者 17 名
第 47 回目	1 月 13 日 (金) 13:20～14:50 D-room	“選考突破” の為の就活総まとめ講座 【講師】林田雄太氏 (株式会社リクルートキャリア) 参加者 16 名
第 48 回目	1 月 13 日 (金) 15:10～16:40 D-room	“選考突破” の為の就活総まとめ講座 【講師】林田雄太氏 (株式会社リクルートキャリア) 参加者 7 名
第 49 回目	1 月 15 日 (日) 13:30～15:30 インテリジェントラボラトリ	神戸大学, 兵庫県立大学合同グループディスカッション講座 【講師】田中美恵 (発達科学部キャリアサポートセンター) 参加者 14 名
第 50 回目	1 月 15 日 (日) 16:00～18:00 インテリジェントラボラトリ	神戸大学, 兵庫県立大学合同グループディスカッション講座 【講師】田中美恵 (発達科学部キャリアサポートセンター) 参加者 10 名
第 51 回目	1 月 17 日 (火) 12:30～13:10 B210 教室	面接対策講座～面接突破の極意～ 【講師】香田祐介 氏 (株式会社マイナビ) 参加者 16 名

第 52 回目	1 月 17 日 (火) 13:20~14:50 B210 教室	面接対策講座～面接突破の極意～ 【講師】香田祐介 氏(株式会社マイナビ) 参加者 28 名
第 53 回目	1 月 20 日 (金) 13:20~15:00 D-room	業界研究会 (電子部品メーカー) ～株式会社 村田製作所～ 【講師】葉山 浩樹氏 (人間発達環境学研究科 福田ゼミ 2016 年卒) 参加者 4 名
第 54 回目	1 月 23 日 (月) 14:00~15:30 D-room	OB 訪問会-未来を拓くプロ集団シンクタンクの研究者という仕事- 【講師】中尾健良氏・秋元康男氏 (三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング(株)) 参加者 3 名
第 55 回目	1 月 29 日 (日) 13:30~15:30 インテリジェントラボラトリ	京大・阪大・神大 合同グループディスカッション 【講師】田中 美恵 (発達科学部 CSC) 【協力】マイナビ 参加者 15 名
第 56 回目	1 月 29 日 (日) 16:00~18:00 インテリジェントラボラトリ	京大・阪大・神大 合同グループディスカッション 【講師】田中 美恵 (発達科学部 CSC) 【協力】マイナビ 参加者 15 名
第 57 回目	2 月 10 日 (金) 13:20~14:50 D-room	面接対策ガイダンス 【講師】伊藤 憲司氏 (東京アカデミー) 参加者 33 名
第 58 回目	2 月 13 日 (月) 12:30~13:10 B104 教室	3 月 1 日エントリー直前 就活総まとめガイダンス 【講師】香田 祐介氏 (株式会社マイナビ) 参加者 23 名
第 59 回目	2 月 13 日 (月) 13:20~14:50 B104 教室	3 月 1 日エントリー直前 就活総まとめガイダンス 【講師】香田 祐介氏 (株式会社マイナビ) 参加者 26 名
第 60 回目	2 月 17 日 (金) 12:30~17:20 発達科 B 棟	神戸大学業界研究セミナー ～業界研究ハ上ヲ目指セ～ 【協力】(株)ダイヤモンド・ヒューマンリソース 参加者 121 名
第 61 回目	2 月 20 日 (月) 13:30~15:00 D-room	神戸大学 OB 訪問会 ～富士通株式会社～ 【OB】谷川能章氏, 嶋田凌氏 参加者 4 名
第 62 回目	2 月 23 日 (木) 13:30~15:30 インテリジェントラボラトリ	神戸大学・甲南大学合同グループディスカッション講座 【講師】田中美恵 (発達科学部 CSC), 甲南大学キャリアセンター 参加者 18 名 (甲南大学 23 名)

第 63 回目	2 月 23 日 (木) 16:00～18:00 インテリジェントラボラトリ	神戸大学・甲南大学合同グループディスカッション講座 【講師】 田中美恵 (発達科学部 CSC), 甲南大学キャリアセンター 参加者 12 名 (甲南大学 20 名)
第 64 回目	3 月 7 日 (火) 13:00～14:30 D-room	株式会社リコー ～技術系 OB/OG 説明会～ 【講師】 村田 和希 (人間環境科生活環境論コース卒) 参加者 6 名
第 65 回目	3 月 9 日 (木) 13:00～14:30 D-room	デザインを仕事にする企業説明会 【講師】 MC&P マッチングデザインセンター 参加者 4 名
第 66 回目	3 月 10 日 (金) 13:30～15:00 D-room	株式会社 LIXIL ～技術系 OB/OG 説明会～ 【講師】 MC&P マッチングデザインセンター 参加者 3 名
第 67 回目	3 月 17 日 (金) 11:00～17:00 D-room, CS	ES 相談会 【講師】 降矢一朋氏 ((株) ダイヤモンド・ヒューマンリソース), 田中美恵 参加者 5 名
第 68 回目	3 月 17 日 (金) 17:00～18:30 D-room	新日鉄住金ソリューションズ株式会社 ～社員訪問～ 【講師】 神戸大学 OB・OG (平田大将氏, 他 4 名) 参加者 16 名
第 69 回目	3 月 21 日 (火) 9:30～11:00 D-room	株式会社村田製作所 ～OB/OG 説明会～ 【講師】 葉山 浩樹氏 (人間発達環境学研究科 福田ゼミ 2016 年卒) 参加者 15 名

平成 28 年度 公務員対策セミナー

第 1 回目	6 月 16 日 (木) 13:20～14:50 B201 教室	心理・福祉系公務員, 家庭調査官を目指そう! 【講師】 忠峯 輝政氏 (LEC 専任講師) 参加者 3 名
第 2 回目	6 月 21 日 (火) 13:20～14:50 B104 教室	これから始める面接対策 【講師】 坪倉 直人氏 (LEC 専任講師) 参加者 34 名
第 3 回目	7 月 13 日 (水) 13:20～14:50 D-room	公務員試験対策スタートセミナー 【講師】 東京アカデミー 参加者 16 名

第4回目	10月17日(月) 12:30～13:10 D-room	ランチセミナー第4回 公務員志望向け 【講師】東京アカデミー 参加者 4名
第5回目	11月25日(金) 13:20～14:50 大会議室	公務員試験対策ガイダンス 【講師】東京アカデミー 参加者 12名
第6回目	12月7日(水) 15:10～16:40 B106 教室	心理・福祉系公務員, 家庭調査官を目指そう! 【講師】忠峯 輝政氏 (LEC専任講師) 参加者 13名
第7回目	12月9日(金) 12:30～13:30 D-room	家庭裁判所調査官の仕事を知る 【講師】発達科学部OG (平成14年卒) 参加者 4名
第8回目	12月15日(木) 16:00～17:30 D-room	就職活動体験談 ～国家・地方公務員編～ 【講師】OB 参加者 11名
第9回目	12月19日(月) 15:10～16:40 B104 教室	公務員試験のすべて! 【講師】坪倉 直人氏 (LEC専任講師) 参加者 4名

(キャリアサポートセンター運営委員会委員長 澤 宗則)

6.1.2. 学振特別研究員申請支援

学生委員会の主催により、「学振特別研究員への応募のススメ」と題したセミナーを平成28年4月6日(水)に開催した。

まずは、副研究科長・青木茂樹教授より特別研究員制度の概要についての説明、ついで鳥居深雪教授から審査委員経験を踏まえた申請書作成やヒアリングなどに関するアドバイスがなされた。その後、人間発達環境学研究科で採用されている特別研究員2名(DC2)による採用に至る経験談やヒアリング時の留意点などの紹介がなされた。説明会には27名(博士課程院生19名, 前期課程院生6名, 学部生2名)の学生が参加した。参加者のモチベーションは非常に高く、特に申請書の書き方やヒアリング時の自己PRの方法に関して活発な質疑応答が行われ、予定時刻を20分超過した。なお、平成28年度特別研究員採用者は、新規で2名(DC2)であった。

○「学振特別研究員への応募のススメ」

・日時：4月6日（水）14時30分～ 16 時20分

・場所：発達科学部 大会議室

14：00 － 14：05 開会の辞（学生委員長 高見和至 教授）

プログラムの説明と講師紹介（学生委員長 高見和至 教授）

14：05 － 14：30 特別研究員制度の概要と本研究科の現状

（副研究科長 青木茂樹 教授）

14：30 － 14：55 審査・選考の実際－審査経験者の立場から（鳥居深雪 教授）

14：55 － 15：05 質疑応答

15：05 － 15：30 申請の実際 －応募者の立場から（1）（人間発達専攻学び系講座）

15：30 － 15：55 ヒアリングの実際－応募者の立場から（2）（人間環境学専攻自然環境
コース）

15：55 － 16：20 質疑応答

16：20 閉会の辞

（学生委員会委員長 高見和至）

6.2. 卒業・修了後の進路

平成28年度の発達科学部及び大学院人間発達環境学研究科修了生の進路は以下の通りである。なお、産業別就職者数、大学院進学者数などの詳細は『資料編』に記載した。

平成28年度 発達科学部生

（単位：人・％）

区 分	a 進学者	a/g 割合	就職者						f その他	f/g 割合	a+f g計
			b 企業	c 公務員	d 教員	e その他	b+c+d +e計	e/g 割合			
人間形成学科	15	15.15	32	15	18	2	67	67.68	17	17.17	99
人間行動学科	8	14.29	41	2	2	0	45	80.36	3	5.36	56
人間表現学科	6	15.79	22	2	1	0	25	65.79	7	18.42	38
人間環境学科	24	23.30	48	12	4	0	64	62.14	15	14.56	103
計	53	17.91	143	31	25	3	202	68.24	41	13.85	296

*その他の内訳 一時的な仕事に就いた者13（うち講師等9）就職活動継続7 公務員受験2
教員採用受験2 進学希望6 渡米1 海外青年協力隊1 芸能活動2
主婦1 未定6 不明1

平成 28 年度人間発達環境学研究科博士課程後期課程

(単位：人・%)

区 分	a 進学者	a/g 割合	就職者						h その他	f/g 割合	a+f+h g 計
			b 企業	c 公務員	d 教員	e その他	b+c+d+e f 計	f/g 割合			
人間発達専攻		0.00			1		1	16.67	5	83.33	6
心身発達専攻		0.00						0.00	1	100.00	1
教育・学習専攻		0.00					0	0.00	1	100.00	1
人間行動専攻		0.00			1		1	100.00		0.00	1
人間表現専攻		0.00					0	0.00		0.00	0
人間環境学専攻		0.00			1		1	25.00	3	75.00	4
計	0	0.00	0	0	3	0	3	23.08	10	76.92	13

*その他の内訳 一時的な仕事に就いた者 2(うち講師 2) 就職活動継続 1 研究員 1 不明 6

平成 28 年度人間発達環境学研究科博士課程後期課程

(単位：人・%)

区 分	a 進学者	a/g 割合	就職者						h その他	f/g 割合	a+f+h g 計
			b 企業	c 公務員	d 教員	e その他	b+c+d+e f 計	f/g 割合			
人間発達専攻	2	3.57	9	7	9	5	30	53.57	24	42.86	56
人間環境学専攻	3	9.09	21		5		26	78.79	4	12.12	33
人間表現専攻		0.00					0	0.00		0.00	0
計	5	5.62	30	7	14	5	56	62.92	28	31.46	89

*その他の内訳 就職活動継続 9 一時的な仕事に就いたもの 4(うち講師等 4) 教員採用試験
 受験 2 進学準備 2 資格試験受験 1 研究生 1 未定 2 帰国 1 不明 6
 (学生委員会委員長 高見和至)

7. 研究

7.1. 今年度の特長

7.1.1. 研究動向

(1) 本研究科教員の研究活動

本研究科における過去 5 年間の研究活動の実績は、下表のとおり、概ね順調に推移してきている。平成 28 年度の活動（KUID をもとに調査）は、「論文」371、「著書等」73、「研究発表等」547 となっており、昨年度から増加しており、確実に本研究科の研究活動は活性化しているといえる。

	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	平均
論文	206	218	328	311	371	286.3
著書数	38	73	83	75	73	68.4
研究発表等	287	311	488	419	547	410.4

(2) 本研究科の共同研究

こうした個々の研究活動とは別に、研究科として推進する組織的共同研究もまた、これまで以上に活発な活動を展開している。詳細は後述にゆだねるが、ここでは大まかな動きのみ紹介しておく。

1. プロジェクト研究

科学研究費補助金（A）（平成 24 年度～26 年度）「多世代共生型コミュニティの創成に資するアクティブ・エイジング支援プログラムの開発」を受けて進められた「多世代共生型コミュニティの創成研究」は、基盤研究（B）「都市部高齢化地域における住民ネットワーク形成過程の実験的検討」（平成 27 年度～平成 29 年度、研究代表者：増本康平准教授）に引き継がれ、現在システム情報学研究科との共同の学際研究として進行中である。

（独）新エネルギー・産業技術総合開発機構の戦略的次世代バイオマスエネルギー利用技術開発事業として採択された「藻類バイオ燃料事業に関する共同開発」は、高速増殖型ボトリオコッカス藻「榎本藻」からのオイル生産の実用化をとおしてバイオマスエネルギー利用技術にかかるベンチャー創成型産学共同プログラムを開発するものであるが、航空機向けバイオ燃料の量産に向けた社会的期待がますます高まっている。

高度教員養成プロジェクトは、知識基盤社会をリードする高度な能力を備えた教員の養成という現代的課題の解決に資するため、附属校園を活用したアクションリサーチ等実証的研究をとおして修士レベルでの高度教員養成プログラムを開発するもので、今年度も、優れた研究者を招聘したセミナーを多数開催し研究内容を深化させると同時に、国内外の

諸学会での報告を積極的に行いその成果の発信を行った。

2. 共同研究シーズの支援

本研究科では、研究科理念の実現と目標の達成に向け複数の教員が共同で実施する分野横断型学際研究を支援するため、これまでの「プロジェクト研究支援経費」「若手研究推進支援経費」「シンポジウム支援経費」に、今年度から新たに設けた「国際共同研究支援経費」を加えた4つの支援経費を用意し、共同研究シーズの創出を促進している。本年度も、下記のとおり選定し、それぞれの共同研究の実施を支援した。

なお、今年度の申請経費においては「若手研究推進支援経費」及び「シンポジウム支援経費」への応募はみられなかった。

○「プロジェクト研究支援経費」

- ① 研究課題：発達支援と心理臨床の有機的連環－発達支援インスティテュートにおける心理教育相談室の社会貢献の評価と展望

研究代表者：相澤 直樹

共同研究者：吉田 圭吾，河崎 佳子，伊藤 俊樹，伊藤 篤，津田 英二，澤 宗則

決 定 額：500 千円

- ② 研究課題：大学における『アート・リソース』の活用に関する実践的研究

研究代表者：塚脇 淳

共同研究者：岸本 吉弘，關 典子，田村 文生，大田 美佐子，谷 正人，岡崎 香奈

決 定 額：500 千円

- ③ 研究課題：ディープ・アクティブ・ラーニングの内容・方法・評価－「深い学び」を実現する教員養成・研修の開発

研究代表者：川地 亜弥子

共同研究者：赤木 和重，勅使河原 君江

決 定 額：700 千円

- ④ 研究課題：保幼小連携教育のための高度教員養成・次世代型教員研修の一体的モデル開発に関する研究

研究代表者：岡部 恭幸

共同研究者：国土 将平，渡邊 隆信，北野 幸子

決 定 額：800 千円

○「国際共同研究支援経費」

① 研究課題：科学教育のラーニング・プログレッションズに関する国際比較研究：アメリカ・レバノン・日本の小学生における生態系システムの知識の発達に焦点を当てて

研究代表者：山口 悦司

共同研究者：Hayat Hokayem (Texas Christian Univ., U.S.A.), Hui Jin (Educational Testing Service, U.S.A.)

決 定 額：650 千円

② 研究課題：Human and Natural Capital for Sustainable Development in Asia: Issues, Priorities and Solutions

研究代表者：佐藤 真行

共同研究者：Youngho Chang (Nanyang Technological Univ., Singapore), Runsinarith Phim (United Nations Development Program), Worawet Swanrada (Chulalongkorn Univ., Thailand)

決 定 額：1,000 千円

③研究課題：健康生成機序の解明と心理臨床教育への応用に関する国際共同研究

研究代表者：加藤 佳子

共同研究者：Rigó Adrien (Eötvös Loránd Tudományegyetem, Hungary), Urbán Róbert (Eötvös Loránd Tudományegyetem, Hungary), Ágoston Schmelowszky (Eötvös Loránd Tudományegyetem, Hungary), 斎藤 誠一, 吉田 圭吾, Elfried Greimel (Medizinische Universität Graz, Austria), Roswith Roth (Karl-Franzens-Universität Graz, Austria)

決 定 額：800 千円

(人間発達環境学研究科長・発達科学部長 岡田修一)

7.1.2. 学生の受賞

平成28 年度における学部生の受賞は以下の通りである。

1) 受賞名：「宇宙線雲観測衛星」(設計の部)

電子情報通信学会賞, 審査委員長特別賞, 第 24 回衛星設計コンテスト

受賞年月日：2016 年11 月 12日

受賞理由：設計の部への「宇宙線雲観測衛星」の提案およびプレゼンテーションが特に優秀と認められた。

2) 受賞名：優秀発表賞 (富士電機賞), 環境科学会 2016 年会 (学部生・高専生・高校生等

の部)

受賞発表題目：高齢者の生活様式と容器包装プラスチックごみの分別との関係性に関する考察

受賞年月日：2016年9月8日

受賞理由：当学会大会におけるポスター発表が優秀であると評価された。

平成28年度における大学院生の受賞は以下の通りである。

1) 受賞名：日本教育行政学会研究奨励賞

受賞論文：米国における学校再編への都市再開発政策の影響と課題 —シカゴを事例とした教育政策の空間的分析の試み—、『日本教育行政学会年報』第41号，pp. 109-125.

受賞年月日：2016年10月9日

受賞理由：教育を含む領域横断的な都市経営力学と、生活空間の変容による子どもの発達への影響を解明した研究報告が「特にすぐれた教育行政研究」と認められた。

2) 受賞名：最優秀発表賞，環境科学会2016年会

受賞発表題目：生活満足度を用いた都市緑地の経済評

受賞年月日：2016年9月8日

受賞理由：当学会大会におけるポスター発表が優秀であると評価を受けた。

3) 受賞名：日本科学教育学会論文賞

受賞論文：教員志望の大学生を対象としたアーギュメント・スキル教育プログラムのデザイン研究，『科学教育研究』第37巻，第2号，pp.149-157.

受賞年月日：2016年8月20日

受賞理由：科学教育に関する優れた研究を行い，その成果を『科学教育研究』に論文として発表したことが高く評価された。

(学生委員会委員長 高見和至)

7.2. 学術 WEEKS

学術 WEEKS は，2008年より大学院 GP（正課外活動の充実による大学院教育の実質化）を契機とし，本研究科の国際交流推進の一環として実施されている。学術 WEEKS 2016 にあつ

でも、これまでの基本方針を継承し、国内外の学術交流活動を通して、大学院生・学部学生の視野を広げ、研究会の企画・運営・発表などの技能習得に資することを目的とした。また、多様な研究領域を擁する本研究科の特色を生かし、教員・大学院生・学部学生をまじえた領域横断的な学術交流の場を提供するものである。本年度は昨年度よりも5企画多い15企画について実施された。来年度に予定されている学部改組に関わりグローバルな視点での企画も実施された。各企画では教員、院生及び学部生が立案、準備、運営を自主的に行い、外部の専門家を交えて専門性を深化させる一方で、よりグローバルな視点で物事を考えることができる良い機会となった。なお、11月11日にレセプションを行い、それぞれの企画について、企画者などから説明を頂いた。日ごろは専門分野に特化して研究を行う研究者や院生が異なる視点に立つ研究に接しすることで、自らの研究活動を相対化し、さらに異分野との協同や融合の可能性に対する気づきを持つ機会となったと評価できる。個別の企画内容に関しては以下を参照していただきたい。

(学術 WEEKS2016 ワーキンググループ主査 國土将平)

7.2.1 学術 WEEKS の各事業・セミナー

(1) 企画名：英語で論文を書く!!4W アプローチによるアカデミック・ライティングのためのワークショップ

日時：8月4, 5日

参加者：教員および学生40名

企画者：王一然, 大田美佐子, 橋本直人, 加藤佳子

概要:ドイツ, コブレンツ大学の Diana Boer, GESIS-ライプニッツ社会科学研究所の Katja Hanke を招聘し、英語で論文を執筆することに関するセミナーを開催した。英語で論文を執筆することは、経験豊富な研究者にとっても簡単なことではない。本事業では、4W メソッドを用いてアカデミック・ライティングの要点が構造的に説明され、論文がより多くの読者にアピールできるようにそのコツがわかりやすく説明された。さらに、参加者は自分の論文を使用した演習を受けることもでき、極めて実用的な取り組みを行うことができた。

(人間発達専攻 加藤佳子)

(2) ユーモア的即興から生まれる表現の創発:発達障害・新喜劇・ノリツッコミ

日時：11月5日(土)

場所：神戸大学発達科学部 B202 教室

企画者：越後絵里香(人間発達専攻), 赤木和重(教員)

講演者：砂川一茂氏(放送作家), 村上公也氏(元・小学校特別支援学級), 茂呂雄二氏(筑波

大学)

参加者：約 110 名 (学内外の研究者，大学院生，学生)

概要：11 月 5 日 (土)，神戸大学発達科学部 B202 において，砂川一茂氏 (放送作家)，村上公也氏 (元・小学校特別支援学級)，茂呂雄二氏 (筑波大学) を招いて，表記の企画を実施した。また，砂川氏・村上氏の実践では，障害のある子どもや青年も参加し，パフォーマンスを行った。小学校や特別支援学校の教員，大学関係者，学生ら約 110 名が参加した。砂川氏には，障害のある青年を対象に，「体験新喜劇」について実演を交えて講演していただいた。村上氏には，障害のある子どもたちとともに即興的な模擬授業を行っていただいた。茂呂氏には，お二人の話を踏まえて，ユーモアのある即興的活動が，子どもの創造的な発達を導くことの意味について論じていただいた。

(人間発達専攻 赤木和重)

(3) 韓国における給食事情&無償給食：比較教育・教育法の視点から

「子どもの貧困」と関わって，子どもへの食文化・食生活の保障が今注目されている。隣国の韓国では，食文化を伝え安心安全な食事を提供する立場から，学校給食が重視されている。また，小中学校の学校給食は無償化されており，高校でも無償給食を実施するところがある。一方，日本では義務教育段階であっても学校給食は有償であり (一部の自治体は無償化)，中学校などで給食自体を実施していないところもある。韓国における学校給食について，比較教育の視点から給食事情を，教育法の視点から無償化を，ゲスト 3 名を招いて探った。

日時：2016 年 11 月 12 日 (土曜日) 13:00~16:30

場所：神戸大学発達科学部 A 棟 2 階「大会議室」

演題等：高 鏞 氏 Ko Jeon (韓国・国立済州大学校教授)

韓国における子どもの権利保障と無償教育

河 奉韻氏 Ha Bongwoon (韓国・京畿大学校教授)

韓国における学校給食費支援制度の現況と課題

出羽孝行氏 (龍谷大学准教授)

韓国における学校給食事情——比較教育の視点から

参加者数：約 20 名 (参加者の年代は 20~60 歳代，職種は研究者，教職員，福祉職員，学生・院生など)

(人間発達専攻 渡部昭男)

(4) アジア諸国における子どもの健康問題と学校生活

日時：2016 年 11 月 12 日 (土)

場 所：神戸大学発達科学部 A 棟 1 階 ラーニングcommons

企 画 者：近藤亮介（人間発達環境学研究科博士後期課程）・国土将平（人間発達専攻）

講 演 者：佐川哲也（金沢大学人間社会研究域人間科学系・教授），中野貴博（名古屋学院大学スポーツ健康学部・准教授）

参 加 者：23 名（学内外の研究者，大学院生，学生）

概 要：本企画は，開発途上国であるネパール，タイ，ミャンマー等における子どもの健康問題と学校生活の実態を多角的に捉え，子どもの健全な発育や健康のために必要な教育についての示唆を得ることを目的とした。2名の外部講師を招き，中野貴博氏からは「アジアの子どもの生活習慣と健康との相互作用」，佐川哲也氏からは「学校生活からみた子どもの遊び・スポーツ」について講演いただいた。両氏の講演は長年の海外のフィールドワークの経験を通して，実際に感じられたこと，さらに，それらの経験に基づく詳細な調査結果が示された。その後の質疑応答では，開発途上国の子どもが抱える健康問題の実態について，環境要因との相互作用を含めた観点から捉え，健康的な生活習慣についての複眼的な思考より，子ども達に起こっている様々な問題点とその解決方法について，議論が展開された。また，遊びやスポーツ，健康問題の観点から子どもの学校生活を考えることで，文化や学校教育が子どもの健康や発育にどのように関わっているのかを考える機会となった。

（人間発達環境学研究科博士後期課程・近藤亮介，人間発達専攻・国土将平）

(5) アジアを「打つ」～ワークショップと講演・試演会～

日 時：平成 28 年 11 月 13 日

場 所：神戸大学発達科学部 C 棟 101 号室

企 画 者：横石 雄紀，関本彩子，柏木ドリス優真（人間表現学科）谷正人（人間発達専攻 表現系講座）

招 聘 者：李輔淳（社団法人テハンサラム研究員歳），朴京守（全日本アマチュアサムルノリ連合 サムルノリ講師），清水ジョセフ怜雄（演奏家名：蔡怜雄，フリー打楽器奏者）

参 加 者：19 名（学内外の研究者，大学院生及び学生）

概 要：音楽を演奏するための身体技法には，文化圏によって様々な違いがある。本イベントにおいては，李輔淳氏，朴京守氏，清水ジョセフ怜雄氏（演奏家名：蔡怜雄）の 3 名をゲストとして招き，アジアの音楽（特に朝鮮とイラン）を対象として，身体運動としての「打つ」という行為が，どのような意味合いでもって行われているのかについてワークショップ・講義・参加型演奏会という 3 つのプロセスを通して理解を深めた。イランの打楽器トンバクと朝鮮半島の打楽器チャンゴは各部屋に分かれてワークショップを行い，

またそれぞれ講演を行った。ワークショップおよび講演会には合計 19 人が参加した。参加者は本学学生、近隣住民などで、音楽演奏で使われる「打つ」「はじく」「吹く」などの言葉がどのような文化背景によって決定されていくのかについて、一般参加者に考察する機会を提供することができた。また終了後には他楽器の講師陣と参加学生たちとのレセプションに参加し交流を深めた。このような学部生発案による本イベント企画・運営活動を通して、大学院生・学部学生の視野を広げ、イベント企画・運営・発表などの技能習得にも十分資する機会となった。

(人間発達専攻 谷正人)

(6) 食と農の融合による新たな健康の創造 ～EU と日本の比較～

日程:A: 2016 年 11 月 15 日(火) 10:40-12:10 学術交流セミナー

B: 11 月 21-23 日 沖縄学術調査

企画者:近江戸伸子(人間環境科学・生活環境論・教授)

加藤佳子(人間発達専攻 こころ系講座・教授)

大学院生: 2 名(人間発達専攻 こころ系講座)

概要:A: 11 月 15 日に、協定校のドレスデン工科大学との上記企画の学術交流セミナーを行った。講演者と内容は以下の通りである。

Daryna Dechyeva (所属:Technische Universitaet Dresden) ”Innovative health management by introduction of new plant foods”

近江戸伸子 “植と食の融合による QOL の向上”

グローバル化とローカリゼーション、標準化とユニーク化、インテグレーションとエクスクルーション、環境と経済、安価と安全性の観点から、現代の食の様式を分析した。例として、ドイツで販売されている味噌汁パウダーを取り上げ、グローバル化に至る過程での新規と喪失を議論した。近江戸は、実習観察園の高齢者による作物栽培の実践例を紹介した。

加藤佳子 総括“食と植の融合による新たな健康の創造”

Well being と生活習慣病の改善について。自律的に健康な食生活を送るのが重要と考えるか否かがメタボリックシンドロームになりにくさを決める。生活習慣の改善は行動、態度に働きかける必要があること、Well being が充実していると自律的動機付けができることの研究事例を紹介した。

受講した学生からは、「論理的に自分の生活、健康、幸福を構成する要素を説明してもらえて、それぞれの関係性について多くの気づきがあった。新しい分野の広がりを感じた。」という意見があった。

B: 11 月 21-23 日の学術調査として、那覇市の沖縄県農業研究センター、沖縄科学技術大学院大学を訪問した。前者では、伊禮信研究員と砂糖生産に関する植物ゲノム研究について、セミナーで議論した。また後者では、ハリー・ウィルソン博士と学生の交流について議論し、国際的な環

境下で研究を進めていくことについて意見交換し、大変有意義であった。

(人間環境学専攻 近江戸伸子)

(7) 音楽教育シンポジウム 教育の場における音楽の喜びがうまれるとき

1. 企画概要

内容：音楽教育シンポジウム 教育の場における音楽の喜びがうまれるとき

あなたは人生の中で、どのように音楽の喜びを享受していますか？

音楽とのかかわりが、もし人生を大きく左右するとしたら……

本シンポジウムでは、世界を舞台に、声楽家・指揮者・教育者として活躍されている益子務氏に基調講演をお願いしました。氏は、京大院生時代に、来日中のロジェ・ワグナー合唱団にスカウトされて以来、世界の歌劇場はじめ音楽院や音楽祭でご活躍。さらに、音楽療法分野でも、医学部の研究者との実証的な共同研究で成果を上げておられます。また、今回のパネリストには、現場で奮闘する学校教諭のみならず、様々なジャンルの人と協演経験をお持ちの即興演奏家やホスピス等で音楽ボランティアをされている方もお迎えし、音楽と人間の根源的なかかわりについて、皆さんと一緒に考えていきたいと思えます。

本シンポジウムでは、教育現場において科学的に検証された音楽の効用を踏まえ、現場での実践経験豊かな教員や音楽家と共に、音楽の根源的な魅力について再考する。

成果：世界的な声楽家・指揮者・教育者として活躍する基調講演者の講演内容を踏まえ、小、中、高校の現職教員や音楽ボランティア、即興演奏家が、音楽の喜びがどのように生まれるのか討議。シンポジウム参加者全員が世代や各分野の立場を超えて本音で語り合える場を設けることが出来た。

参加者数：約 40 人

(後掲附録 1)

(人間発達専攻 坂東 肇)

(8) シンポジウム「歌と文化的記憶 - 表現と社会」

日 時： 2016 年 11 月 19 日

場 所： 神戸大学発達科学部 C101 教室

企 画 者： 大田美佐子 (人間発達専攻)

講 演 者： 宮本直美 (立命館大学大学院教授・基調講演)、大田美佐子(神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授・基調講演)、橋本直人(神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授、コメンテーター)、谷正人(神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授、コメンテーター)、シンポジウム発表者(大学院生 3 名、研究生 1 名、学部生 6 名)

参 加 者： 35 名 (学内外の研究者 10 名、大学院生 10 名、学生 15 名)

概要：

音楽(歌)を「文化的記憶」(アスマン)のひとつと捉えることによって、音楽と社会の関係を考察することを目的としたシンポジウム。基調講演の「共に歌うことの社会学」(宮本)では、集団での演奏というファクターが歌の機能と記憶を変容させる重要な視点が指摘され、「ソング研究から見えてきたもの・キャバレー・ソング、プレヒト・ソングから反戦歌へ」(大田)では音楽と言葉に仕掛けられた関係性が作用し、受容と記憶に働きかけるという歌特有の記憶のあり方が論じられた。また、基調講演に続き行われたコメンテーターとの議論においても、社会学的視点(橋本)からは歌との出会いについて、文化人類学的視点(谷)からも演奏スタイルに関する有意義な論点が提供された。二部の学生を中心とした発表では、音楽がどのように受け継がれ文化的記憶として機能してきたのかについて、「りんごの唄」「戦中の宝塚歌劇」「反戦歌のカバーについて」「戦時中の学生歌」など、様々な具体的事例をもとに論じられた。学外(大阪音楽大学、関西学院大学、立命館大学)からの聴講者も多く、またアートマネジメントの専門家も参加され、感想など手応えのある反響も得られた。今後も、授業、ゼミと連動させ、このような実りある学術交流を継続していきたい。

(人間発達専攻 大田美佐子)

(9) タイムスリップコンサート～英雄とはいかなる存在か～

1.企画概要

内容：タイムスリップコンサート～英雄とはいかなる存在か～

多くの人が、何の疑問も抱かずインターネットで手軽に音楽を視聴するだけでわかった気になり、音楽を真に理解する意味を見失っている現代。

19世紀ヨーロッパにおいては演奏録音など存在せず、心身の能力を総動員して自らの手で音楽を創造せざるを得なかった。しかしそうであるからこそ、その時代は現代には見られない、豊饒な生命力あふれる表現が、音楽のあらゆる分野で繰り広げられていた。このような時代の、音楽に向き合う姿勢を現代によみがえらせ、もう一度原点に帰って見つめ直すというのが、このコンサートの趣旨。

演奏する楽曲の背景と音楽について英雄の存在と生と死を絡めて話し、神戸大学教育学部卒業生との演奏や神戸大学発達科学部4年及び大学院生1,2年ゼミ生の演奏を通して、音楽本来の楽しみや音楽が示唆する真の幸福を地域や家庭で共有する、新たな希望の源を探索する。

成果：終演後に回収出来たアンケート用紙は30枚。来場者の多くが次回開催を希望していた。

アンケートの自由記述欄には、「大変幸せな時間を過ごせた」「生で初めて音楽を聴かせてもらい大変豊かな素晴らしい体験だった。」「先生の解説がわかりやすく、大変良かった美しい音色のピアノで楽しいひとときを過ごすことが出来た。」「曲の解説を聞いて良く理解でき、今まで聞き流してきた曲が一層深く感じられた。」「おいしいお酒と料理を腹いっぱい食べた気分」「神様の真なる愛を感じ、万物を大切に頂きたく存じました。」「うち足りて帰ります！」等の感想が寄せられ、来場者に音楽の喜びを伝えることが出来たと同時に、今後への期待の大きさも実感できた。

参加者数：約 40 人

(後掲附録 2)

(人間発達専攻 坂東 肇)

(10) オーストラリアと日本の保育施設見学フィールドワークと意見交流会

本企画は、本学大学院生が中心となって実施し、将来、保育者養成校教員や、保育学研究者、教育現場で実践研究のリーダー的な役割を果たすことが期待されている院生や学生に、研究交流能力や国際交流能力を育成することを意図として実施された。

交流会の目的は、(1)オーストラリアの幼児教育についての知識を深めるとともに、自国の幼児教育の実態を再認識すること、(2)将来幼児教育研究に関わる学生・院生の興味・関心の拡大と意識向上をはかること、(3)英語を使ったコミュニケーション力の向上である。

オーストラリアからは、ニューイングランド大学の教員 2 名 (Dr. Margaret Brooks, Dr. Yukiyo Nishida) と大学院生 12 名が参加し、本学からは、子ども発達論コースの教員 2 名と子ども発達論を専攻し、特に乳幼児教育学に関心のある学部生及び院生の合計 10 名が参加した。姫路市内の保育施設等を見学し、園児との交流等を行った。本学にて北野が英語による日本の保育についてのミニ・レクチャーを行った。聴講後、学生間によるディスカッション、さらには交流会を実施した。オーストラリアと日本の乳幼児教育制度について相違を確認しながら学んだ。結果、他国の幼児教育の実態に触れ、自国の保育についての理解や考えを深める機会となった。保育実践の両国の特徴や、外遊び等保育環境の課題、宗教観、保育制度の課題などについての議論が積極的になされた。

なお、本スタディツアーの実施にあたっては、本学の学術 WEEKS の一貫としての支援および国際交流運営資金の支援を受けた。

(人間発達専攻 北野幸子)

(11) 「日本の授業を『再発見』する：アメリカ研究者との対話を通して」

日時：2016 年 12 月 15 日 (木) 9:30～16:40

場所：12 月 15 日 午前 (第 1 部)：渦が森小学校 (神戸市東灘区)

午後（第2部、第3部）：神戸大学発達科学部 大会議室

企画者：赤木 和重（発達心理学）・川地 亜弥子（教育方法学）

講演者：Sharon Dotger 先生，（アメリカ，ニューヨーク州，シラキユース大学）

参加者：第1部：21名，第2部：35名，第3部：約90名

概要：第1部として，12月15日の午前中，神戸市東灘区渦が森小学校を訪問し，ニューヨーク州，シラキユース大学の Sharon 先生を含め，21名で授業見学を行った。

その後，第2部として，神戸大学発達科学部大会議室において，小学校の授業の様子について議論した。特に，Sharon 先生の視座より日本の授業について，感想・疑問をいただき，議論を行った。

第3部として，Sharon 先生より現在のアメリカの公教育の動向についてご講演いただき，その後，ディスカッションを行った。

普段は近すぎて見えない日本の授業を，アメリカの研究者の視点を借りながら，再発見する契機になった。

（人間発達専攻 赤木和重）

(12) 「こころの構造」からみる臨床上の諸問題

日 時：2017年2月21日（火）

場 所：神戸大学発達科学部 A303

企画者：吉田圭吾・山根隆宏（人間発達専攻）

講演者：広沢正孝（順天堂大学），須崎暁世（人間発達環境学研究科博士後期課程）

参加者：約40名（学内外の研究者，臨床心理士，大学院生，学生）

概要：本企画は，青年期をめぐる臨床上の問題について，人間本来の「こころ」に立ち戻り，こころの動き，こころの構造，自己などをテーマに，現代の社会との関係も視野に入れながら，その捉え直しを試みることを目的とした。広沢正孝氏を外部講師に招き，『こころの構造』からみる自閉スペクトラム症と統合失調症」と題した講演をおこなっていただいた。広沢氏の講演からは，自閉スペクトラム症と統合失調症のこころの構造の違いや臨床・援助における方針の異同について，また現代青年の心の構造の変化と現代社会との関係について理解を深めることができた。また須崎氏より，「青年期の親子関係—現代における特徴と課題—」と題した話題提供があり，現代社会の変化に伴う青年期の親子関係の変化とそれによってもたらされた親子関係の再構築の困難さについて理解を深めることができた。後半の質疑応答ではフロアを交えた活発な質疑や議論が展開され，また多くの参加者から次回の企画を期待するとの意見があり，本企画のテーマに対する関心の高さが伺えた。

（人間発達専攻 吉田圭吾・山根隆宏）

(13)シンポジウム「民主主義は人文的精神を必要としている—グローバル社会における教育の将来展望哲学を模索する」

日 時：2016年12月19日（月）

場 所：神戸大学発達科学部大会議室

企 画 者：鈴木幹雄，渡邊隆信，国土将平，坂東肇（人間発達専攻）

講 演 者：鈴木幹雄（神戸大学），林藤成美（神戸大学学部生）

参 加 者：約76名（学内外の研究者8名，大学院生12名，学部生52名，報告者・司会：4名）

概 要：【1.シンポの起点認識】 グローバル社会を志向する現代社会の歩みの下，教育の世界には人文主義的教育の後退という現実が作られてきた。しかし現代民主主義社会には，子ども達の多様で多元的な内面世界と人間性が欠かせない。

かつてヌスバウム教授は，その主著において，＜民主主義は人文的精神を必要としている＞ことを，民主主義社会の人材育成と将来展望の視点から明らかにした。

他方，韓国聖潔大学のホン教授は，ヌスバウムのこの教育原論的視点を強調し，2012年，韓国教育学コンフェレンスで，「教養教育を再考する：知識社会において人間性を育むことの意味（2012）」と題した基調講演を行った。

【2.本シンポの研究視角】 本シンポでは，表題テーマの下，現代アメリカ最先端教育学研究がいかなる方向に向かっているのかを学び，同時に①「知識社会において人間性を育む」，②「人間の「構想力」を活用して教育的「将来展望」を切り開く」の交差点に学術研究の焦点をあてようと試みた。

【3.シンポ内容紹介】 当初予定していたホン教授の招聘は同氏職務の関係で果たせなかったが，自力で取り組み，内容的に「実のある」シンポを開催できた。参加者数，多層の参加者層からして，本シンポは本学教職志望学生，人間形成研究に取り組もうとしている大学院生達に対してそれなりの研究意欲をかき立て，今日の困難な社会状況・教育状況の下，新鮮な現代的課題意識を学び取る刺激となったように思われる。

【4.シンポの主要内容】 シンポの主要内容は次の2点であった。

1. 韓国人教育学者ウンソク・ホン氏にみる教育の将来構想哲学研究紹介
2. グローバリゼーション下現代アメリカにみる将来構想哲学—シカゴ大学教授 M・ヌスバウム氏の研究視点到学ぶ

（人間発達専攻 鈴木幹雄）

(14) さとうきび畑こんさあと in 神大—50年目の記憶

日 時：2017年2月4日 15時から17時

場 所：神戸大学発達科学部 C111 教室

企 画 者：大田美佐子（人間発達専攻）

講 演 者：寺島夕紗子（洗足学園音楽大学講師），服部真由子（洗足学園音楽大学講師）

参 加 者：55 名（学内外の研究者 20 名，大学院生 15 名，20 名）

概 要：

寺島尚彦作曲の「さとうきび畑」は 1967 年に発表されて以来、みんなの歌やドラマの主題歌にもなり、愛唱されてきた。本企画はコンサートとアフタートークの二部構成である。一部では、寺島尚彦氏の次女でソプラノ歌手の寺島夕紗子氏に、様々な土地で記憶を紡いできた歌とともに「さとうきび畑」オリジナル版を演奏して頂いた（ピアノは服部真由子氏）。二部では、シンポジウム「歌と文化的記憶」と関連して、さとうきび畑がどのような文化的記憶として歌い継がれてきたのか、その作曲の背景や、歌とともに築いてきた沖縄との関係、特に草の根運動で読谷村に建てられた歌碑のことについて、語って頂いた。50 名を超える多くの方々に参加して頂き、また演奏家としてこの歌に向かい合う時の苦労や喜びなども直接伺う事ができ、シンポジウムのテーマ「歌と文化的記憶」との相互作用で、音楽と社会との関係性をより深く学ぶ機会になったと自負している。

（人間発達専攻 大田美佐子）

(15) 生誕百年+α 「糸賀一雄」再考(3)：「教育愛」をめぐって

学術 Weeks においては、「生誕百年 (+α) 『糸賀一雄』再考」を 2014 年度から連続して開催している。今回の学術 Weeks2016 では、糸賀一雄が教育思想において大きな影響を受けた木村素衛の「教育愛」に焦点をあてた。ゲスト 2 名を招いて、さらにじっくりと、糸賀一雄の思想と実践を深めた。

日 時：2017年3月19日（日曜日）13:00～17:00

場 所：神戸大学発達科学部A棟4階「427部屋」

演 題 等：大西正倫氏（佛教大学教授）

木村素衛の教育思想——「教育愛」と「表現愛」をめぐって

蜂谷俊隆氏（美作大学准教授）

糸賀一雄の福祉思想——「教育愛」と「共感の世界」をめぐって

参加者数：約20名（参加者の年代は20～60歳代。職種は研究者、教職員、福祉職員、学生・院生など）

（人間発達専攻 渡部昭男）

7.3. 研究科支援プロジェクト研究

7.3.1. 学際研究

(1) 発達支援と心理臨床の有機的連環－発達支援インスティテュートにおける心理教育相談室の社会貢献の評価と展望

概要

心理教育相談室は、地域住民に対する心理療法的支援と専門家養成をおもな使命としており、社会貢献に際してもそのような室の独自性を生かした活動が求められる。それらの社会貢献を今後ますます発展させるためには、現代地域社会における心理支援に関するニーズを適切に抽出するとともに、相談室で実習を終えた実習生が現場において直面する課題やニーズを的確にとらえ、それらを臨床心理士養成課程並びに地域住民に対する心理療法や講演活動に生かしていくシステムを確立する必要がある。また、それだけではなく、発達支援と心理臨床活動の有機的連環として、インスティテュート全体の活動の中に位置付けていく可能性についても積極的に検討されるべきである。本研究プロジェクトでは、現代地域住民や実習修了生の心理教育相談室へのニーズ調査を行い、それらの成果に発達支援並びに地域支援に関わる専門家の知見を融合させることを通じて、今後の心理教育相談室の社会貢献に関する発展的展望を模索することを目的とする。

方法

本研究プロジェクトでは、以下のような調査を通じて心理教育相談室の社会貢献について検討する。①心理教育相談室の修了生に対するアンケート調査：臨床心理士の養成における相談室実習の意義を検討するために、本学研究科臨床心理学コースの修了生を対象に実習の効果と意義に関する質問紙調査を実施した。郵送並びにメールを用いて調査質問紙の配布と回収を実施した。②心理教育相談室子育て支援セミナー参加者に対するアンケート調査：地域住民の相談室に対する認知度、ニーズ、心理職専門家への期待等を調査するために、本年度11月に開催された心理教育相談室主催の子育て支援セミナーに参加した子育て中の保護者に対し、相談室主催セミナーと相談室に関するアンケート調査を実施した。③九州大学大学院人間環境学府総合臨床心理センターへの訪問調査：臨床心理士養成の実践的取り組みを知るために、同分野において先駆的な取り組みを行っている九州大学大学院人間環境学府総合臨床心理センターへの訪問調査を実施した。

成果の公表

①については、次年度の第36回心理臨床学会秋季大会において発表するとともに今後学術専門誌、ないしは大学紀要において論文投稿を行う予定である。②については、すでに神戸大学大学院心理教育相談室紀要第7号における報告論文として公表した。③については、次年度の相談室紀要等で訪問記録を公表する予定である。 (研究代表 相澤直樹)

(2)大学における『アート・リソース』の活用に関する実践的研究

◆日程

【開催】2016年12月24日(土)～25日(日)

【仕込日程】2016年12月21日(水)～26日(月)

【研究会, KIITOの可能性を考える】1月7日(土)

◆出品者・シンポジスト

舞台美術 塚脇淳(彫刻家・神戸大学教授)

監修・演出・出演 工藤聡(振付家・舞踊家・在スウェーデン)

出演 関典子(舞踊家・神戸大学准教授)

鑑賞者(神戸大学教員・学生, KIITO・神戸市関係者, 芸術関係者 他)

◆シンポジウム・研究会

- ① テーマ「振動」, 芸術作品(彫刻・ダンス)によるKIITO空間活用実践。
- ② ディスカッション。映像編集・分析。波及効果および研究資料について。
- ③ (研究会報告書) KIITOは世界的なアート発信拠点に成りえる

空間は閉じてはならない。空間には風が吹いていなければならない。KIITOにはその空間が真にある。そのような「場」の特性に深く関与する表現とはどのようなものなのだろうか。私たちはこの問いに対して、第1弾の試みとして「波動」をテーマに、KIITOを実験場として、空間と彫刻とコンテンポラリーダンスの共振の可能性を探ります。(案内状より)

KIITOを初めて訪れたのは、だいぶ前なのですが、この空間、場所の素晴らしさはイギリスのテート・モダンになり得ると直感で思いました。テート・モダンというのは旧発電所を美術館にし、世界的に発信しているところです。例えば神戸からも同様の発信ができるのではと考えた時に、この場所この空間を上手く発信すれば世界中からアーティストが集まるだろうし、ありとあらゆる分野の人が集まるし、ワークショップやディスカッションもできるレクチャールームと色んなものがここには備わっている。これをどう生かしていくか、なんとかしたいという思いを持ち続けていました。私は神戸大学発達科学部で美術を教えているのですが、教員は個人的な表現者としての活動は様々なところでやっているが、その発信の仕方がやはり学生の教育中心になって地域とうまく連動していない。一方、今大学は地域連携や繋がりを模索し始めている現状がある。加えて2年前に、神戸大学は神戸市と教育連携を結ぶ提携をしたのです。このような流れの中でKIITO構想を発信していくチャンスが来ていると考え、研究申請など様々な形で提案してきました。幸いにも神戸大学人間発達環境学研究科のプロジェクト支援経費を得て、全てをKIITOに投入することにしました。

先ず第一にKIITOの持つ豊かな空間を知ってもらいたい、伝えたいというのがありまし

た。私の作品はそれを知ってもらう為のシグナル・装置の働きをすればよい。しかしそれだけではこの空間を動かすことはできない。同僚でダンサーである関典子さんに協力を仰ぎ考えていく中で、工藤聡というダンサーを知りました。彼のパフォーマンス映像を見た瞬間、空間を揺れ動かすことができるのはこの人だと私は確信しました。そしてついにKITTOの可能性を拓く実験の第一弾「KIITOプロジェクト」は実現した。しかしもう一つ、KIITO運営委員会の協力、神戸市の共催を得たことも大きかった。

(研究代表 塚脇淳)

(3) ディープ・アクティブ・ラーニングの内容・方法・評価——「深い学び」を実現する 教員養成・研修の開発

アクティブ・ラーニング (AL) を乗り越える学習として、ディープ・アクティブ・ラーニング (DAL) に注目し、その内容・方法・評価について調査を行った。DALでは、学習の質や内容に焦点を当てるディープ・ラーニング (DL) の知見を踏まえ、学習者が他者と関わりながら、対象世界を深く学び、これまでの知識や経験に結びつけると同時にこれからの人生につながる学習に注目する。本研究では、学問・教科内容の深さに依存した深さだけでなく、学習困難な子ども・青年たちが個人的な関心や経験と結びつけ、深く思考し表現する取り組みなどにみられる深さも射程に入れ、学習者の自己省察と自由度の高い表現活動についての鑑賞・批評活動及びそこでのクライテリアの共有に注目した。

調査実施地域は以下の通りである。USA・ニューヨーク州・シラキユース (貧困地区の公立校, 異年齢教育を実施している私立新教育実施校), UK・ケンブリッジ (大学附属小学校・限界なき学びプロジェクトを実施), UK・ロンドン (公立小学校, 子どものための哲学を実施) 日本・阪神地区 (大学附属幼稚園・小学校, 美術教育, 美術・博物館), 京都 (特別支援教育, 公立小学校, 公立小学校複式学級), 名古屋 (大学附属中学校), 東京 (大学附属小学校)。

特筆すべき成果として、日本における「インクルーシヴ教育」, 「ユニバーサルデザイン」が、実際には同じ内容・方法を前提として設計され、多様な学習を排除する危険性を有していること、このため、子どもたちの深い学びを排除すると同時に教師の豊かな見取り、枠組みの再構築も制限している可能性が指摘できた。これらを乗り越えるためには、教師の側の自由な枠組みと長期展望を可能にする研修が重要であり、そこは目標と評価が直結していない場、やや踏み込んでいえば「学校的でない」場における、本物の創作・鑑賞活動の導入が重要であった。そこでは作品が創作されるだけでなく、ダイナミックな鑑賞・批評の中で参加者の鑑識眼が耕されることが看取された。こうした場の構築には、現代の実践研究だけではなく歴史研究も重要であり、本プロジェクトにおいても美術教育、作文

教育の先駆的な取り組みをふまえた研修開発を行った。

調査においては先駆的な取り組みとして高く評価される実践を多数発見したものの、一方で子どもの深い思考を促すことを目的とした授業において、問題提起を行った子どもの思考に立ち戻ることなく、思考の枠組みづくりばかりに議論が集中するものも見受けられた。これは学問的なディープさは追求しているものの、個人的な関心や深い思考を授業のきっかけに矮小化し、そのことによって問題提起をした子どもの深い思考を妨げ、意欲を減退させた危険性がある。

以上の研究成果を踏まえ、シンポジウムを3件（内2件は学術 Weeks であり、国内外の研究者や実践家を招聘）実施、スタディツアー1件（川地）を開発、研修3件（赤木、勅使河原、川地）を改善した。本学部における教員養成改善への知見を得ると同時に、現職教員研修プログラムについて実際に改善できた。この他、研究成果報告として、単著1編（赤木）、共著2編（川地）、論文3編（赤木、勅使河原）として発表した。

（研究代表者 川地亜弥子）

(4) 保幼小連携教育のための高度教員養成・次世代型教員研修の一体的モデル開発に関する研究

保幼小の接続の重要性が指摘されて久しい。幼小の学びの連携・接続については、学校段階ごとの特徴を踏まえつつ、前の学校段階での教育が次の段階で生かされるよう、学びの連続性が確保されることの重要性が指摘されている。しかし、教育の内容と方法に関する具体的な接続期教育の開発は、まだまだこれからの課題である。そこで、本プロジェクトでは、子どもの発達の視点から保幼小連携教育の在り方について、専門領域を超え自らの専門とする領域以外の知見を共有し、研究者や実践者が共同で研究を進めていくとともに、そのような実践的な研究の推進に不可欠である高度な教員養成・教員研修をすすめていくための公立校園や附属との連携に基づいた拠点形成をめざして検討・準備のための会議を行った。

また、保幼小連携研究に関わっているメンバーを主構成員として、幼児教育・保育、各教科教育を担当している研究者が共同し、子どもの発達や学びの連続性を踏まえた幼児や児童の実態調査を教育現場との連携のもと、公立の校園や附属校園の幼児・児童を対象に行った。さらに、高度教員養成プログラムと連携し、より幼小接続期の実践の基盤となる実践的な研究を院生、教員、研究者が協働して行った。研究で得られた成果を以下の通り、日本乳幼児教育学会、近畿数学教育学会などで発表を行ったりした。

岡部 恭幸・北野 幸子(2016)「遊びから教科の学びへ～数理認識に関わる保幼小接続期

教育～」日本乳幼児教育学会第26回大会

岡部 恭幸(2016)「算数教育への連続性を考慮した 幼児期の「遊び」の開発に関する予備的研究」近畿数学教育学会第60回例会

北野幸子・飯田美和(2016)「地域別：持続可能な園になるために(第2回)0-15歳の育ちをつなぐ舞鶴市の取り組み「幼児教育・保育の質向上推進事業」『保育ナビ』2016年5月号,フレーベル館,24-27.

北野幸子(2016)「地域一体型による保育の質向上研修の開発——舞鶴市の挑戦」『発達』146号,ミネルヴァ,8-13

渡邊満・押谷由夫・渡邊隆信・小川哲哉編(2016)『小学校における「特別の教科 道徳」の実践』北大路書房

また、研究で共有した知見をもとに以下の指定校研究にも協力した。

神戸大学附属幼稚園・小学校 文部科学省研究開発学校

テーマ:「幼小接続」から「幼小一体」へ ー9年間を一体としてとらえた「初等教育要領」の開発をめざしてー

さらに、今後の高度教員養成・次世代型教育研修の一体的モデルや拠点形成に関する検討につなげるため、拠点形成に関する検討と高度教員養成・次世代型教育研修の一体的モデル開発を検討するための検討会議を神戸市教育委員会指導部指導課の指導主事をまじえて実施した。その成果として、教員研修の高度化と養成・採用・研修の一体的改革の促進を目的とする独立行政法人教員研修センターの「平成29年度教員の資質向上のための研修プログラム開発事業(次世代型研修プログラムモデル開発事業)」に神戸市と連携して応募(代表:渡邊隆信)している。

また、これらの成果を踏まえて、現場の課題やそれぞれの専門的な知見を共有し検討することを目的に以下のシンポジウムを開催した。シンポジウムには約250名の保育士、幼稚園・小学校教諭、研究者、学生、大学院生などが参加し、これからの保幼小接続期の教育について、情報や意見交換を積極的に行なった。

シンポジウム「遊びから教科へー保幼小接続期の学びを探るー」

主催:神戸大学大学院人間環境学研究科

共催:神戸市教育委員会

実施日・時間:2017年3月11日土曜日 13-17時

開催場所:神戸大学先端融合研究環統合研究拠点コンベンションホール

参加対象： 保育士，幼稚園・小学校教諭，研究者，学生，大学院生など約 250 名

プログラム：

13:00-13:05：挨拶(岡田修一研究科長，戸田信示神戸市教育委員会首席指導主事)

13:05-14:05：基調講演

「これからの保幼小接続期教育（要領指針の改訂を踏まえて）」無藤隆先生(白梅学園大学)

14:05-14:25：ミニ・レクチャー 1

「健康な心と体」を中心に」國土将平（神戸大学）

14:25-14:45：ミニ・レクチャー 2

「数量・図形への関心と感覚」を中心に」岡部恭幸（神戸大学）

14:55-：シンポジウム「遊びから教科へ～保幼小接続期の学びを探る」

14:55-15:00：趣旨説明 北野幸子（神戸大学）

15:00-15:15：「小学校の立場から」槇田美菜子先生(神戸市立鈴蘭台小学校長)

15:15-15:30：「幼児教育の立場から」平井和恵先生(神戸市立御影幼稚園長)

15:30-15:45：シンポジスト間の意見交換等 北野幸子（神戸大学）

16:00-16:55：参会者によるグループワークと発表 渡邊隆信（神戸大学）

16:55-17:00：閉会の挨拶(渡邊隆信，神戸大学) (担当 岡部恭幸)

7.3.2. 国際共同研究

(1) 科学教育のラーニング・プログレッションズに関する国際比較研究：アメリカ・レバノン・日本の小学生における生態系システムの知識の発達に焦点を当てて

1. 研究の目的

ラーニング・プログレッションズは，科学教育研究の分野において世界的に注目されている研究領域である。この研究領域においては，物理・化学・生物・地学の各領域の主要概念・理論（例えば，原子，エネルギー，遺伝，物質循環，天体）について，最終的に理解してほしい状態に到達するためには，どのようなプロセスで知識を獲得すれば最適なのかを解明することが目指されている。従来の科学教育研究にない特徴は，「生産的な誤り」への注目である。生産的な誤りとは，一見すると単なる誤りであるが，子どもの知識が科学知識へと発達するために本質的な役割を果たす知識である。

しかしながら，これまでのラーニング・プログレッションズ研究は，アメリカやヨーロッパの子どもを対象にしか行われておらず，アジアを含めた世界の様々の地域の子どもの対象にした研究が行われていない。また，複数の国や地域を扱った国際比較研究も行われ

ていない。そこで、本研究では、国際共同研究体制のもとに、次の2点を実施した。

(1) 生態系システムの知識の発達に焦点を当てて、日本の小学生を対象とした調査を実施し、国際比較のためのデータ収集を行う。

(2) 日本のデータとアメリカ・レバノンのデータを統合し、3カ国の比較分析を行う。この比較分析を通して、生態系システムの知識の発達に関するラーニング・プログレッションズの一般化可能性や地域固有性の基礎的な検証を行う。

2. 研究実績の概要

(1) 本研究の準備 (4~5月)

4月にアメリカ・ボルティモアで開催された科学教育研究の国際会議NARST2016において、事前ミーティングを実施した。その他、電子メールやSkypeによる協議を実施した。

(2) 調査フレームワークの作成・調査項目の作成 (6~8月)

最新文献のレビューと電子メールやSkypeによる協議を行い、生態系システムの知識に関する調査フレームワークを策定した。このフレームワークにおいては、フレームワークシステム論的分析、システムの相互依存性、動的リサイクリング、環状連結性の4種類の知識領域を設定した。調査フレームワークに従って、3カ国共通で使用する調査項目を作成した。

(3) 調査の実施・データ収集 (9~10月)

日本の小学生50名を対象とした調査を実施した。低年齢の子どもに配慮し、半構造化個別面接法を中心とした調査を行った。子どもの音声データは、ビデオカメラおよびICレコーダ等によって記録した。

(4) データ分析 (11月~12月)

調査で得られた音声データの文字起こしを行い、トランスクリプトを作成した。研究代表者・分担者の間でのデータ共有のために、レバノンと日本のトランスクリプトを英訳するとともに、バックトランスレーションを行った。データ分析に関しては、各国ごとの個別的分析を行った後、3カ国のデータの比較分析を実施した。

(5) 学術論文の共同執筆 (1~3月)

データ分析の結果について研究代表者・分担者で議論し、学術論文を共同執筆した。2017年2月末の時点において第2段階の草稿が完成している。現在、草稿の修正・検討を進めている。次年度において、世界上位ランクの科学教育研究誌へ投稿する。

(6) 大型科研費の申請 (10月頃)

本研究の共同研究者2名に海外研究協力者として参画を依頼し、山口が研究代表者として、本研究課題に関する大型科研費(基盤研究(A)(一般))を申請した。

(担当 山口悦司)

(2) Human and Natural Capital for Sustainable Development in Asia: Issues, Priorities and Solutions

本研究の目的は、経済的成長の著しいアジア諸国において持続可能な発展を実現するための諸要因を分析し、開発政策を提案することである。本研究プロジェクトでは、自然資本（環境、資源、生態系）と人的資本（教育、健康、人間発達）に着目し、経済発展及び経済的資本の蓄積にともなって変化する自然資本と人的資本の動学的蓄積（あるいは減耗）と持続可能性について、経済発展段階の異なる複数の国を取り上げ、実証的な研究を行った。

研究事例として、ブノンペン、中国、シンガポール、日本を取り上げた。これらは本研究の目的に照らして、異なる経済発展段階に位置する都市であるのと同時に、都市生態系が強い変化圧力に置かれている事例である。本研究の実施にあたり、Nanyang Technological Universityで資源経済学を専門にしているYoungho Chang氏、Paññāsāstra University of Cambodia および UNDP などが開発問題を担当している Runsinarith Phim氏をはじめ、様々な国で都市生態系の保全と都市開発に携わっている研究者と研究打ち合わせをしつつプロジェクトを進めた。

入手可能なオープンデータの解析はもちろん、生態系評価や人的資本評価など新規の課題については独自に社会調査を実施した。こうしたデータは現時点でもシンガポールと日本についてのデータが収集でき、解析を行った。その成果は、学術書や学術論文として国内外に発信し、学会を中心に高い評価を得た。

近年では、国連などが主導する包括的と富指数（Inclusive Wealth Index）の開発など盛んに進められているこの研究領域において、独自の社会調査と統合したこのような包括的な資本評価は世界に先駆けるものである。今後はこうした成果を、世界規模で展開されている研究に発信する。

（担当 佐藤真行）

(3) 健康生成機序の解明と心理臨床教育への応用に関する国際共同研究

本研究の目的は、グローバルな視点から健康生成機序の解明を行い、健康領域における心理臨床教育への応用を提案することである。

そのために、ヘルスプロモーションの理論的枠組みとして解釈されている健康生成論（Eriksson & Lindstrom, 2008）の立場から食行動、生活リズム、ストレスなどの生活習慣に着目し、次の3点を特徴とする研究を行っている。第一に国際共同研究によりグローバルな視点から、well-being や HR-QOL(Health Related Quality of Life)に関連する要因を明らかにする。そして第二に健康心理学、発達心理学、臨床心理学といった心理学領域に

おける学際性を基盤とする。こうした学際性と国際性による複眼的追究を前提とし、第三に well-being を主眼とした健康な発達に有効な心理臨床的教育方法について検討し実践的に人間の発達を究明することである。

共同研究に参加した教員は次の 8 名であった。神戸大学から齋藤誠一、吉田圭吾、加藤佳子、エトヴェシュ・ローランド大学から Rigó Adrien, Urbán Róbert, Ágoston Schmelowszky, グラーツ大学から Roswith Roth と Ursula Athenstaedt, グラーツ医科大学から Elfried Greimel が参加した。5 月と 9 月にグラーツとブダペストで、12 月にブダペストで研究打合せを行った。現在、二つの調査が進行中であり、3 つの国際共著論文が投稿中である。

(人間発達専攻 加藤佳子)

7.3.3. 高度教員養成プログラム

教育連携推進室の新設により、その研究開発部門において、高度教員養成プログラムの企画運営を引き継ぎ、例年通り実施した。年間8回のセミナーと 3 回の連携特別セミナー計11回を企画・実施している。参加者は、研究科において専修免許取得を目指す9名の院生であり、附属学校と連携しながらアクションリサーチを主たる研究方法として採用するものである。参加院生には、不十分ながら国内学会等への参加発表支援を当該プログラム予算から行っている。参加院生の研究業績は、次の通りである(参加学生の業績 <https://www.h.kobe-u.ac.jp/ja/node/4323>)。今年度の課題としては、参加者は一定数維持できたものの、その中に国際的な研究活動が見受けられないことである。今後、この方面の指導・支援などの充実が求められるであろう。

なお、参加院生の研究テーマは、次の通りであった。

伊藤 奈月	幼児期の科学教育における評価について
佐伯 源太郎	「一次関数」理解の困難性とその克服
広瀬 優香子	サビタイジングの能力と数の合成・分解の能力との関連性及び支援方法
清山 莉奈	就園前の子どもをもつ保護者への支援
伊藤 大貴	中等教育における政治地理的事象の考察
下木 なつみ	青年期の『自分づくり』と若者支援
佐野 孝	跳び箱運動切り返し系の技の動作評価尺度
森 大地	文化活動団体のソーシャル・キャピタルの実態

(教育連携推進室長 稲垣成哲)

7.4. 研究推進

7.4.1. 研究推進委員会

本委員会は研究科長，副研究科長，専攻長，学科長の 7 名で構成され，研究科における共同研究の推進，研究シーズの発見と育成，外部資金の獲得に向けた組織的対応等について議論を行った。

本委員会の検討事項は以下のとおりである。

	検討事項
第 1 回（4 月 8 日）	<ol style="list-style-type: none">1. 「平成 28 年度プロジェクト研究支援経費」等について2. 「人間発達環境学研究科における研究データ等の保存期間等に関する内規」について3. 神戸大学機能強化構想実現のための部局等における指標の検討について4. 他研究科，海外を含む他大学・他研究科との連携5. 研究科の教育研究活動の見せる化
第 2 回（5 月 6 日）	<ol style="list-style-type: none">1. 「平成 27 年度プロジェクト研究支援経費」等報告について2. 「人間発達環境学研究科における研究データ等の保存期間等に関するガイドライン」について3. 平成 28 年度「プロジェクト研究支援経費」「若手研究推進支援経費」「国際共同研究支援経費」申請について
第 3 回（6 月 3 日）	<ol style="list-style-type: none">1. 「平成 26 年度プロジェクト研究支援経費」等成果報告について2. 平成 28 年度「プロジェクト研究支援経費」「若手研究推進支援経費」「国際共同研究支援経費」選定について3. 先端融合研究プロジェクトについて
第 4 回（9 月 2 日）	<ol style="list-style-type: none">1. 科研費対策の強化に向けた取組みについて2. 先端融合研究プロジェクトについて3. 研究科における研究のヤマについて
第 5 回（10 月 7 日）	<ol style="list-style-type: none">1. 科研申請について2. 研究科の教育研究活動の見せる化について
第 6 回（11 月 4 日）	<ol style="list-style-type: none">1. 研究科の教育研究活動の見せる化（見せる化）2. 発達支援インスティテュートの機能強化をめざした体制の再整備について
第 7 回（12 月 2 日）	<ol style="list-style-type: none">1. 平成 29 年度科学研究費応募状況について

	2. 次年度の科学研究費応募に向けた取り組みについて 3. 研究科の特色ある研究（「研究科パンフ 2017 年版」掲載）について
第 8 回（1 月 6 日）	1. 平成 29 年度先端研究融合環プロジェクトの募集について
第 9 回（3 月 10 日）	1. 次年度の研究推進支援経費について 2. 次年度以降の研究推進委員会の構成について 3. 今後の研究科の研究推進に向けて

（研究推進委員会委員長 岡田修一）

7.4.2. 研究倫理審査委員会

本年度は81 件の新規申請があり，63 件が承認，17 件が条件付き承認，1 件が取り下げであった。

一昨年までの新規申請が20 件台，昨年度の新規申請が48件であり，本年度の新規申請は昨年度の1.7倍となった。平成27年4月1日から「疫学研究に関する倫理指針」及び「臨床研究に関する倫理指針」に代わり，新たに「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」が施行された。本審査委員会の手続き及び審査については，昨年度に引き続き，新倫理指針を踏まえた対応を心がけた。

（研究倫理審査委員会委員長 井上真理）

7.4.3 紀要編集委員会

平成 28 年度紀要編集委員会は，8 回の会議を開催し，「神戸大学大学院人間発達環境学研究所紀要」第 10 巻第 1 号，第 2 号の編集・刊行を行った。2016 年 9 月 30 日付けで刊行した第 10 巻第 1 号は，研究論文 6 編（査読あり），研究報告 6 編（査読なし）を掲載した。2017 年 1 月 31 日付けで刊行予定の第 10 巻第 2 号は，新たに「特集」というカテゴリーを設け，特集「発達とは何か」に関する論文 4 編（査読なし），研究論文 8 編（査読あり），研究報告 10 編（査読なし）を掲載予定である。

（研究紀要編集委員会委員長 田畑暁生）

7.5. 各専攻の研究

7.5.1. 人間発達専攻

人間発達専攻の研究は，多分野多方面に及んでおり，それは本専攻の総合的・学際的な性格を示すものである。原則，各系の中で研究が遂行されているが，系を横断する研究も

試みられており、その方向性は今後も継続・拡大するものと考えられる。それらのほとんどは科学研究費補助金によるものである。またその中で、国際共同研究がまだ数は少ないが展開されている。今後、研究の国際的な展開が期待される。以下、各系の研究について、その代表的なものを列挙する。

●こころ系講座の研究（教員の主要研究の中から抜粋した）

本専攻研究者：齋藤誠一

研究課題：思春期行動の発現機序に関する生物学的要因を基盤とした解明の試み

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究（代表：齋藤誠一）

研究概要：思春期行動の発現機序について、衝動性統制、認知・情動調節、抑うつ徴候、実行機能と思春期行動との関連、虐待、いじめなど過去の逆境経験から形成される発達の脆弱性と病的思春期行動との関連から解明することを目的とする。

本専攻研究者：坂本美紀

共同研究者：稲垣成哲（本専攻）、山口悦司（本専攻）、西垣順子（大阪市立大学）、益川弘如（静岡大学）

研究課題：トランス・サイエンス問題の解決能力を育成する知識共創型アーギュメンテーション教育

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（B）（一般）（代表：坂本美紀）

研究概要：トランス・サイエンス（科学技術と社会的意思決定政策が交わる領域）で生じる問題について、リスクやベネフィットの科学的証拠を重み付けして意思決定を行わせる問題解決学習の中で、論証構造を意識したライティングとトーキングのアーギュメンテーションを指導する教育プログラムの開発を目指した。

本専攻研究者：坂本美紀

共同研究者：山口悦司（本専攻）、伊藤真之（人間環境学専攻）

研究課題：科学技術ガバナンスの主体となるための市民リテラシーに関する大学教育プログラム

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究（代表：坂本美紀）

研究概要：科学教育、学習科学、サイエンス・コミュニケーションの学際的共同研究として、科学技術ガバナンスの主体となるための市民リテラシーに関する大学教育プログラムを開発した。

本専攻研究者：相澤直樹

共同研究者：山根隆宏

研究課題：認知の偏りを総合的に測定する認知特性プロフィール尺度の開発

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（C）（代表：相澤直樹）

研究概要：認知の偏りを総合的に測定する認知特性プロフィール尺度の開発をおこなう。

本専攻研究者：林 創

研究課題：場に応じた柔軟な欺き行動と道徳判断による社会性の発達

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究(C)（代表：林 創）

研究概要：幼児期から児童期の子どもを対象に、うそと道徳性の発達の両面に実証的な視点から着目することで、これらが人間の社会性の発達に重要な意味をもつことを明らかにする。

本専攻研究者：山根隆宏

研究課題：発達障害児の親の援助要請促進に関する基礎研究

研究資金：科学研究費補助金・若手研究 B（代表：山根隆宏）

研究概要：発達障害児の親の援助要請を促進・抑制する要因について、援助要請困難感やオンライン行動の観点から明らかにすることを目的とした。

本専攻研究者：山根隆宏

共同研究者：松本有貴（徳島文理大学）、山根隆宏

研究課題：教員・指導員による発達障害児の不安への CBT を用いた支援

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（C）（代表：石本雄真）

研究概要：不安の問題を抱える発達障害児を対象に、かつ特別支援学級や放課後等児童デイサービス等で非心理学専門家が実施できる心理教育的プログラムを開発し、その効果を検証することを目的とした。

本専攻研究者：川畑徹朗

共同研究者：菱田一哉，春名潤一，山下雅道，工藤ひとし，牧野淡紅恵，堀徹，眞下真澄，関根幸枝

研究課題：レジリエンシーの形成を促すいじめ防止プログラムの開発

研究資金：日工組社会安全研究財団一般研究助成（代表：川畑徹朗）

研究概要：レジリエンシー（精神的回復力）の形成を基礎とする中学生用いじめ防止プログラムを開発し、準実験計画法に基づいてその有効性を検討した結果、本プログラムはいじめ被害経験を抑制するなどの効果が示された。

本専攻研究者：中村晴信

共同研究者：甲田勝康（近畿大学），藤田裕規（近畿大学），間瀬知紀（京都聖母女学院短期大学）

研究課題：成長期における脂質代謝が骨量獲得および骨代謝に及ぼす影響：小中学生の縦断調査から

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究(B)（代表：中村晴信）

研究概要：脂質代謝が骨量獲得や骨代謝に及ぼす影響について、小中学生を対象にした縦断調査によって解明する。

本専攻研究者：中村晴信

共同研究者：甲田勝康（近畿大学），伊木雅之（近畿大学），藤田裕規（近畿大学）

研究課題：体脂肪分布の多様性の形成と代謝循環機能：日本人小児一般集団の大規模追跡研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究(B)（代表：甲田勝康）

研究概要：体幹や四肢における体脂肪分布の多様性が形成される過程と代謝循環機能との関係について、日本人小児を対象に大規模追跡研究を行う。

本専攻研究者：中村晴信

共同研究者：間瀬知紀（京都女子大学）

研究課題：成長期における獲得筋量と骨量・脂肪量および生活習慣との関連性

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究(C)（代表：間瀬知紀）

研究概要：成長期において獲得する筋量・骨量・脂肪量と生活習慣との関連性について検討する。

本専攻研究者：中村晴信

共同研究者：藤田裕規（近畿大学），甲田勝康（近畿大学），伊木雅之（近畿大学）

研究課題：味覚の認知能力と体組成：地域小児集団の研究

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究（代表：藤田裕規）

研究概要：幼児を主とした地域小児集団を対象に、味覚の認知能力と体組成との関係について検討する。

本専攻研究者：中村晴信

共同研究者：江原靖人（神戸大学），加藤修雄（大阪大学）ほか

研究課題：あらゆるインフルエンザウイルスを捕捉・検出する糖鎖修飾三量体核酸の開発

研究資金：科学研究費補助金・基盤(C)（代表：江原靖人）

研究概要：あらゆるインフルエンザウイルスを捕捉・検出することを目的として糖鎖修飾三量体核酸を合成し、環境中のウイルスの除去・高感度検出を行なう。

本専攻研究者：古谷真樹

研究課題：小・中学生の睡眠・心身健康を確保するためのストレスコーピング有用性の実証的研究

研究資金：科学研究補助金・若手研究(B)（代表：古谷真樹）

研究概要：ストレスコーピングを応用し、小・中学生の規則的な生活リズムと良質な睡眠の確保、心身健康を維持・増進するための健康教育プログラムを考案し、その効果を実証する。

本専攻研究者：古谷真樹

共同研究者：岡靖哲（愛媛大学），林光緒（広島大学），田中秀樹（広島国際大学），笹澤吉明（琉球大学），堀内史枝（愛媛大学），山本隆一郎（江戸川大学）

研究課題：睡眠教育パッケージの開発と教育現場における改善効果の検証

研究資金：科学研究補助金・基盤研究(B)（代表：岡靖哲）

研究概要：幼児から大学生を対象として、各年齢層に特徴的な睡眠の問題点を把握し、継続的な睡眠の知識の普及と睡眠行動改善を図るための睡眠改善プログラムを開発し、その効果を検証する。

本専攻研究者：村山留美子

共同研究者：内山巖雄（（財）ルイ・パストゥール医学研究センター），藤長愛一郎（大阪産業大学），岸川洋紀（武庫川女子大学）

研究課題：原発事故後の市民の環境リスクへの対応行動と認知の構造，その変動に関する研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究(B)（代表：村山留美子）

研究概要：福島第一原子力発電所事故後の市民のリスク対応行動とそれに関わる各種認知の構造，またその変動について検討する。

本専攻研究者：加藤佳子

共同研究者：小島亜未（滋賀県立大学），永野和美（神戸大学附属中等教育学校），西敦子（山口大学），佐藤眞一（千葉衛生研究所・大阪府立大学）

研究課題：健康を創出する生きいき食教育プログラム評価指標の開発

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（C）（代表：加藤佳子）

研究概要：中学生以上を対象に健康生成モデルに基づき，健康な食行動を規定する要因について検討した。得られた結果に基づき，食教育プログラムおよびその評価指標を作成中である。

●こころ系講座の国際共同研究

本専攻研究者：加藤佳子

共同研究者：Katja Beesdo-Baum (Technical University of Dresden)

研究課題：生きがい (Well-being) の文化比較研究

研究資金：ERASUMS+

研究概要：健康科学領域で検討されている生きがい意識を日本発祥のWell-beingとして位置づけ，生きがい (Well-being) の文化比較研究を開始した。

●こころ系の院生の研究活動

Nishio, Y. & Torii, M. (2016). Support Needed for Japanese Adolescent Girls with ASD: The Gap between Girls with and without ASD, International Meeting for Autism Research, Baltimore, 2016. 5. 12.

Matsuki, T. (2016). Relationships between negative urgency and problem behaviors in early adolescence : The moderator effect of effortful control. Poster presented at the 24th Biennial Meeting of the International Society for the Study of Behavioural Development, Vilnius, Lithuania, 2016. 7. 11.

Unzai S. (2016). Influence of Sense of Coherence on Stress International council of psychologists, 74th Annual conference, in Yokohama Japan, 2016. 7. 23

Kanno Y. (2016). Personalities associated with romantic jealousy experience: Considering self-esteem and narcissism in Japanese samples. The 31st International Congress of Psychology, in Yokohama Japan, 2016.7.26

Matsuki, T. & Saito, S. (2016). The impact of family and peer involvement on effortful control and externalizing behaviors in early adolescents. The 31st International Congress of Psychology, in Yokohama Japan, 2016.7.26.

Nakazono, S. (2016). A suggestion of a model of a process of autobiographical reasoning cued picture books. The 31st International Congress of Psychology, in Yokohama Japan, 2016.7.26.

Tanaka M. & Saito S. (2016). The influence of the youngest child's age on attitudes towards life and death among Japanese adults. The 31st International Congress of Psychology, in Yokohama Japan, 2016.7.28

Kojima A., Hu C. Kato Y. : The relationship between the action transformation stage, IKIGAI and sense of coherence. International council of psychologists, 74th Annual conference, in Yokohama Japan 2016.7.23

神野 雄 (2016). 多次元恋愛関係嫉妬尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 パーソナリティ研究, 25, 86-88.

Momoi K, Ohara K, Okita Y, Mase T, Miyawaki C, Fujitani T, Nakamura H (2016) Relationship among eating behavior, effortful control, and working memory in female young adults. Health 8:1187-1194

Momoi K, Ohara K, Kouda K, Mase T, Miyawaki C, Fujitani T, Okita Y, Murayama R, Nakamura H (2016) Relationship among eating behavior, effortful control, and w personality traits in Japanese students: cross-sectional study. Br J Med Med Res 8(8):1-9, BJMMR. 29729

小島 亜未, 小川 靖子, 加藤 佳子 特定健康診査継続受診とメタボリックシンドローム
関連指標の関係 ～市町村国民健康保険被保険者における特定保健指導後の追跡調査か
ら～. 保健師ジャーナル 72 680-689 2016

桃井克将, 小原久未子, 甲田勝康, 間瀬知紀, 宮脇千恵美, 藤谷倫子, 沖田善光, 中村晴
信: 若年女性の食行動と認知機能の関連. 日本生理人類学会第74回大会 2016年10月22日
(石川県七尾市)

桃井克将, 小原久未子, 藤谷倫子, 甲田勝康, 間瀬知紀, 宮脇千恵美, 村山留美子, 中村
晴信: 大学生における食行動とエフォートフルコントロールの関連. 第75回日本公衆衛生
学会 2016年10月27日 (大阪府大阪市)

藤谷倫子, 小原久未子, 桃井克将, 甲田勝康, 間瀬知紀, 宮脇千恵美, 村山留美子, 中村
晴信: 女子大学生における感謝・SOC・well-beingの関係性. 第75回日本公衆衛生学会
2016年10月27日 (大阪府大阪市)

藤谷倫子, 小原久未子, 桃井克将, 甲田勝康, 間瀬知紀, 宮脇千恵美, 古谷真樹, 中村晴
信: 女子大学生における感謝・自己実現態度・Sense of Coherenceの関係性について. 一
般社団法人日本学校保健学会第63回学術大会 2016年11月19日 (茨城県つくば市)

桃井克将, 小原久未子, 藤谷倫子, 甲田勝康, 間瀬知紀, 宮脇千恵美, 古谷真樹, 中村晴
信: 食行動とパーソナリティ, 実行注意との関連—大学生における調査より—. 一般社団
法人日本学校保健学会第63回学術大会 2016年11月20日 (茨城県つくば市)

小島亜未, 加藤佳子, 佐藤眞一: 食習慣・運動習慣の行動変容ステージと動機づけおよび
ソーシャル・サポートとの関係. 第75回日本公衆衛生学会 2016年10月27日 (大阪府大阪
市)

●こころ系院生の海外活動

西尾祐美子2016年1月～9月 Department of Education College of Staten Island, City
University of New Yorkに留学

●表現系講座の研究（教員の主要研究の中から抜粋した）

本専攻研究者：平芳裕子

研究課題名：「見るもの」としてのファッションー表象装置としてのミュージアムとの関連から

研究資金：科学研究費補助金 科研基盤研究（C）（代表：平芳裕子）

研究概要：20世紀ファッションにミュージアムが与えた影響を明らかにし、「着るもの」から「見るもの」としてのファッションの成立について考察する。

本専攻研究者：関典子

共同研究者：兵頭修也（東灘区民センター小ホール・魚崎）

研究課題名：「どうぶつになって、おどろう！ Dance Performance Workshop
～サン・サーンス作曲『動物の謝肉祭』～」

研究資金：神戸市地域文化活性化事業（代表：関典子）

研究概要：ダンスを「踊る・創る・観る」ことをテーマに据えた3～15歳の子どもたち20名を対象とするワークショップ公演（2014年『Hocus Pocus』に続く2度目の実施）。研究代表者である関の演出・指導・出演のもと、舞踊ゼミ学生も指導・出演した。

本専攻研究者：岸本吉弘

共同研究者：石川裕敏，園城寺繁誉，河合美和，善住芳枝（親和学園教諭），中島一平，渡辺信明（京都市立芸術大学教授）コーディネーター：尾崎信一郎（鳥取県立博物館副館長）

研究課題：ペインタリネスな抽象絵画の有様について

研究資金：ギャラリー白（民間企業）（代表：岸本吉弘）

研究概要：関西近県の活動する抽象画家が集い、拠点であるギャラリー白（大阪・西天満）において大型作品の展示と同時に、トークイベントも併載し、抽象絵画における現状と

その可能性を探る試みを実施した。（2016年8月開催。リーフレットも作成し、テキスト「ペインタリネス、名状しがたきもの」を尾崎信一郎が執筆した。）

本専攻研究者：田村文生

共同研究者：黒田亜樹

研究課題：解剖de 名曲を聴く～ムソルグスキーの描いたもの

研究資金：神戸市（代表：田村文生）

研究概要：ムソルグスキーの『展覧会の絵』とロシア民謡との関連性，作品内部の旋律的関連性等の解説と，ピアニスト黒田亜樹の実演を交えたレクチャーコンサート。

本専攻研究者：田畑暁生

研究課題名：条件不利地域の地域情報化政策

研究資金：科学研究費補助金 基盤研究（C）（代表：田畑暁生）

研究概要：中山間地域を中心とする条件不利地域においてどのような地域情報化政策が行われどのような課題が残っているのか，現地調査によって明らかにするもの。

本専攻研究者：谷正人

研究課題名：イラン音楽における身体性の研究～各楽器固有の身体感覚・語法，その交差～

研究資金：科学研究費補助金 挑戦的萌芽研究（代表：谷正人）

研究概要：2016年度は楽器を演奏する身体の使い方を，メンタル面および解剖学的側面に理解するためアレクサンダーテクニークについての講習を継続的に受講した。

本専攻研究者：谷 正人

共同研究者：二宮 文子（青山学院大学）北田 信（大阪大学）

研究課題名：インド音楽とペルシア音楽の交流—ヒンドゥスターニー音楽の形成過程に関する研究

研究資金：科学研究費 基盤研究(C)（代表：田中多佳子）

研究概要：2016年度はイラン・インド両文化圏に存在するサントゥールという楽器を題材として，その類似性と差異性を調査するためにインドに滞在してフィールドワークを行った。

●表現系講座の国際共同研究

本専攻研究者：野中哲士

共同研究者：Eugene C. Goldfield

研究課題名：能動的センシングシステムとしての探索的身体運動の組織化過程の解明

研究資金：科学研究費補助金 国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）（代表：野中哲士）

研究概要：乳幼児の日常技能発達のまわりで養育者が行うさまざまな環境の調整について検討した。

本専攻研究者：大田美佐子

共同研究者：Carol Oja (Harvard University), 細川周平(国際日本文化研究センター), 柿沼敏江(京都市立芸術大学), 沼野雄司(桐朋音楽大学), 福中冬子(東京藝術大学), 高岡智子(静岡大学)

研究課題名：グローバルな視点における現代音楽、音楽劇、その社会的アイデンティティに関する研究

研究資金：JSPS 日本学術振興会 外国人招へい研究者(短期)

研究概要：アメリカの音楽文化史に蓄積されたミュージカル研究とその問題を基盤にして、ミュージカルの芸術としての革新性と社会性の狭間にある展開可能性を実証研究を通じて議論する。ミュージカルを社会の問題性を反映するメディアとして捉え直し、「社会派音楽劇」に「文化的記憶」(アライダ・アスマン)として刻印された国民的アイデンティティの問題を対話的越境的な視点で考察する。H28年度はOja教授を招聘し講演(日本音楽学会西日本支部, 東日本支部, 東京藝大, 神戸大学), 共同研究の機会を持った。

本専攻研究者：塚脇淳

共同研究者：戸田郁子(仁川官洞ギャラリー), 柳銀珪(写真家)

研究課題名：神戸仁川芸術交流プロジェクト

研究資金：日韓文化交流基金(代表：下田展久)

研究概要：神戸と仁川のアート交流を進める為、塚脇が渡韓し町工場において1か月間公開制作及び塚脇淳展(韓国仁川官洞ギャラリー)を行った。また、アート交流シンポジウム「開港場仁川と神戸をつなぐアートシンポジウム」を行った。

●表現系講座の国際・国内活動

・韓国からのキャンパスツアー受け入れおよび国際交流研究

2017年2月2日, 3日の2日間, 韓国・全州大学カルチャーコンヴァージェンス学部クリエイティブアーツサイコセラピー学科 (Department of Creative Arts

Psychotherapy, College of Culture Convergence, Jeonju University, Korea) の学部生10名と大学院生6名が神戸大学を訪問した。テーマは「音楽療法におけるピアノ即興の臨床技法を学ぶ」で、音楽療法士を目指している学生達を対象に、岡崎香奈准教授がピアノによる即興技法を紹介。また、本学大学院の沼田里衣研究員による「コミュニティ音楽療法における即興音楽」と題した研究発表およびワークショップも行われ、学部生や院生も参加し、音楽による国際交流を行った。さらに、引率教員のDong Min Kim博士, Hyejin So博士や学生らと共に、神戸大学における最新の音楽療法研究について議論を交わした。

・音楽文化史特論

ゲスト Giorgio Biancorosso (香港大学音楽学准教授 12月「イタリアオペラと映画のパフォーマンス」), ゼミのゲスト Carol Oja (ハーヴァード大学音楽学教授 1月「elevator pitchの簡潔さで自分の研究を解説する」) 学術 WEEKS (学部大学院合同) : 宮本直美(立命館大学教授, 11月「歌と文化的記憶」のシンポジウム講演「共に歌うことの社会学」), 寺島夕紗子(洗足音楽大学 講師 2月「さとうきび畑こんさあと 50年目の記憶」) 今回は, 2月2日のコンサートに先駆けて, 学部, 院のゼミ有志 10人がシンポジウムで発表するという試みを行った。大変活発な議論が交わされ, 学生たちにも教員にも貴重な学びとなった。

●表現系講座院生の研究活動

(博士課程)

肥山紗智子 日本音楽学会 第67回全国大会 中京大学 名古屋キャンパス 2016年11月12日(土) 題目「戦後日本のセミドキュメンタリー的映画の音楽—『裸の町』と『野良犬』における言説と「リアリティ」の演出を中心に—

山村磨喜子 日本イスパニヤ学会 第62回大会 神戸市外国語大学 2016年10月1日 題目『ギタリスト勝田保世研究;戦時下のフラメンコを取り巻く様相』

炭谷将史 (2017). 子どもの遊び環境を行為で記述する試み. 日本発達心理学会第28回大会. ラウンドテーブル『行為発達の環境のデザイン』. (口頭発表)

(前期課程)

Ohtagaki, A., & Nonaka, T. (2016). Regulation of gait in getting on an escalator. *International Journal of Psychology*, 51(S1), p.1158. (ポスター発表)

妹尾輝枝 (院 M2) : 日本音楽療法学会第16回大会研究発表 (口頭) 「認知症高齢者対象の即興音楽療法～和太鼓のリズムを活用した集団即興～」 (2016.9.17)

中村一輝 (修士課程1年) 《平均律クラヴィーア曲集第1巻》のレトリックとメタファー—ドイツ・バロック時代特有の音楽理論に基づく分析と解釈 : 日本音楽学会 第67回全国大会 : 中京大学名古屋キャンパス (名古屋市昭和区)

●表現系講座の院生の受賞

石原興子 (院 D1) 「日本音楽即興学会奨励賞」

受賞者 : 石原興子氏 授賞理由 : 日本音楽即興学会第8回 (2016年度) 大会における研究発表 『精神科即興音楽療法における打楽器の臨床的役割—文献研究からの一考察—』が, 本学会の音楽即興の発展に貢献することが顕著に期待されるため。(学会賞規定第9条の1, 4に該当する) 受賞日 : 2017年3月24日

●からだ系講座の研究

本専攻研究者：増本康平

共同研究者：塩崎麻里子（近畿大学），太子のぞみ（大阪大学）

研究課題：高齢期の意思決定バイアスの解明と自律に向けた生涯学習プログラムの開発

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（C）（代表：増本康平）

研究概要：高齢者の意思決定バイアスの特徴を明らかにし，高齢者に適した意思決定の支援方法を明確にする。

本専攻研究者：増本康平，岡田修一，近藤徳彦，長ヶ原誠，片桐恵子

共同研究者：大川剛直，太田能，貝原俊也，谷口隆晴（システム情報学研究科）

研究課題：住民ネットワーク形成の客観的検証方法の確立

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（B）（代表：増本康平）

研究概要：ウェアラブルセンサデバイスによって対面コミュニケーション行動データを自動収集し，ネットワーク解析を行うことで住民交流の現状や変化を把握する。

本専攻研究者：増本康平

共同研究者：原田悦子（筑波大学），和田有史（農業・食品産業技術総合研究機構），榊美知子（高知工科大学），須藤智（静岡大学）

研究課題：高齢者の学習：認知的制御，感情，動機づけを考慮した学習機制の解明と支援の検討

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（A）（代表：原田悦子）

研究概要：高齢者が日常的活動の中で求められる学習について，認知的機序を明らかにし，学習の支援を行う基礎知見を得る。

本専攻研究者：増本康平

共同研究者：岡田修一，近藤徳彦，長ヶ原 誠，片桐恵子，木村哲也，太田能（神戸大学，科学技術イノベーション研究科），貝原俊也（神戸大学，システム情報学研究科）など

研究課題：都市部高齢化地域における住民ネットワーク形成過程の実験的検討

研究資金：科学研究費補助金 基盤研究(B)（代表：増本康平）

研究概要：地域社会の活性化として地域住民の交流の増進を図る交流プログラムがしばしば実施されているが，実際にそのプログラムによって住民の交流が図られているかを科学的データによって占めることは容易ではない。本研究は住民ネットワークの発達を可視化してデータとして示す方策を検討する可視化することでその効果を明らかにする。

本専攻研究者：前田正登

研究課題：子どもの走運動の指導に資した足の着地に関する研究

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究（代表：前田正登）

研究概要：本研究は、ランニングにおける足の着地方法とパフォーマンスとの関係を明らかにし、初級者を対象に足の着地方法の改善による効果を検証しようとするものである。

本専攻研究者：佐藤幸治

研究課題：運動や食事による性ステロイドホルモンの増加が動脈効果改善効果に貢献する機序の解明

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究B（代表：目崎登）

研究概要：運動や食事（栄養成分）により増大した血中および組織中の性ステロイドホルモンが動脈効果を改善する機序を解明することを目的としている血管の組織中の解析およびヒトにおける動脈硬化リスクに関する実験が中心である。

本専攻研究者：佐藤幸治

研究課題：1型糖尿病における運動による遅発性低血糖発症のメカニズムの解明
-遺伝子およびタンパク質網羅解析による原因究明-

研究資金：公益財団法人日本糖尿病財団コストコ研究助成（代表：佐藤幸治）

研究概要：1型糖尿病モデルラットに一過性の運動を行わせ、経時的に骨格筋糖代謝調節経路の変動を検討し、運動による遅発性の低血糖が起こる原因を明らかにすることを目的としている。

本専攻研究者：佐藤幸治

研究課題：1型糖尿病における運動誘発性遅発低血糖の発生機序の解明～1型糖尿病患者の新規運動ガイドライン作成に向けて～

研究資金：公益財団法人石本記念デサントスポーツ科学振興財団（代表：佐藤幸治）

研究概要：1型糖尿病モデルラットに一過性の運動を行わせ、経時的に骨格筋糖代謝調節経路の変動を検討し、運動による遅発性の低血糖が起こる原因を遺伝子網羅解析（マイクロアレイ法）を用いて、明らかにする。

本専攻研究者：原田和弘

研究課題：客観的に測定された外出行動が高齢者の身体・心理・認知機能に及ぼす影響とその関連要因

共同研究者：李相倫，李成喆，裴成琉，原田健次

研究資金：明治安田厚生事業団若手研究者のための健康科学研究助成（代表：原田和弘）

研究概要：GPS を使って高齢者の外出行動を客観的に測定し，健康指標との関連性などを検証している。

本専攻研究者：原田和弘

研究課題：ワーク・エンゲイジメントが高齢夫婦の満足度・精神的健康に及ぼす影響

共同研究者：近藤徳彦，増本康平

研究資金：損保ジャパン日本興亜福祉財団ジェロントロジー研究助成（代表：原田和弘）

研究概要：ワーク・エンゲイジメント（前向きな姿勢で仕事に取り組むこと）は，高齢者本人や配偶者に恩恵をもたらしているかを検証している。

本専攻研究者：原田和弘

共同研究者：高田義弘，谷口真澄，戸田公久，パウロ・ドス・サントス

研究課題：健康体操の実施による人工都市居住 60 歳以上男女高齢者に対する健康増進効果

研究資金：花王健康科学研究会研究助成金（代表：原田和弘）

研究概要：3 か月間の健康体操の実施が，高齢者の体力・日常身体活動・活動範囲などに及ぼす影響を検証している。

本専攻研究者：木村哲也

研究課題：モノフィン装着時の筋活動に関する探索的研究（1st ステップ）

研究資金：奨学寄付金（代表：木村哲也）

研究概要：モノフィンを装着したエクササイズ時の筋活動動態について検証した。

本専攻研究者：近藤徳彦

研究課題：汗腺に関わる固有の遺伝子とヒトの発汗調節機能との関連

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究（代表：近藤徳彦）

研究概要：発汗調節機能と汗腺数に関わる遺伝子との関係を検討する。

本専攻研究者：近藤徳彦

共同研究者：Nicola Gerrett（JSPS 海外特別研究員），

研究課題：年齢や暑熱順化がイオン再吸収能力から評価した発汗機能に及ぼす影響

研究資金：研究奨励費（代表：近藤徳彦）

研究概要：汗のイオン再吸収能力を評価する方法を確立し、年齢や暑熱順化によってそれがどのように影響されているのか検討する。

本専攻研究者：近藤徳彦

研究課題：汗成分センサーに関する共同研究と身体調節機構に関する基礎的研究

研究資金：株式会社本田技術研究所との共同研究費（代表：近藤徳彦）

研究概要：汗の成分を定量的に分析するシステムを開発する。

本専攻研究者：近藤徳彦

研究課題：日常生活での汗分析-sweatshirt の応用

研究資金：ニベア花王からの寄付金（代表：近藤徳彦）

研究概要：日常生活での汗をニベア花王が開発した sweatshirt を用いて測定する。

本専攻研究者：片桐恵子

共同研究者：遠座俊明（大阪ガスエネルギー文化研究所）

研究課題：地域デビューを促す地域プログラムの検討

研究資金：大阪ガス高齢社会研究奨学金，大阪ガスアクティブエイジング研究奨学金（代表：片桐恵子）

研究概要：地方行政が実施する高齢者向けの講座は様々あるが，地域デビューに有効な講座内容をマルチメソッドを用いて検討する。

本専攻研究者：片桐恵子

共同研究者：三浦麻子・田渕恵（関西学院大学），福沢愛（神戸大学），水野いずみ（実践女子大学）

研究課題：空の巣期女性の自己と自立：仕事と家族のはざままで

研究資金：連携型共同研究（代表：片桐恵子）

研究概要：50-60 歳代の女性の就労・社会参加・家族関係について検討する。

本専攻研究者：片桐恵子

共同研究者：石崎達郎（東京都健康長寿医療センター），新井康通（慶應義塾大学），

池邊一典（大阪大学），片桐恵子（神戸大学），神出計（大阪大学）

研究課題：超高齢社会に向けたサクセスフルエイジングモデルの再構築

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（B）（代表：権藤恭之）

研究概要：本研究は、①後期高齢者に当てはまる新たなサクセスフルエイジングモデルの構築。②高齢者パネルに対する追加調査および追跡調査。③追跡調査の結果を用いたモデルの検証。を内容としている

本専攻研究者：片桐恵子

共同研究者：秋山弘子（東京大学）、権藤恭之（大阪大学）、増井幸恵（東京都健康長寿医療センター）

研究課題：世代間の認識ギャップからみたシニア就労の現状と課題：ダイバーシティ雇用環境の実現にむけて

研究資金：損保ジャパン日本興亜福祉財団委託研究（代表：片桐恵子）

研究概要：高年齢者雇用安定法は改正されたものの、いまだ60歳代のシニア就労者がどういふ働き方をすべきなのかはみえない。シニア就労者のイメージやその実態を明らかにし、彼らの有効な働き方を検討する。

本専攻研究者：佐藤真行

共同研究者：丑丸敦史（神戸大学、人間発達環境学研究科）片桐恵子（神戸大学、人間発達環境学研究科）

研究課題：生活の質を考慮した生態系サービスの評価方法に関する学際研究

研究資金：科学研究費補助金 挑戦的萌芽研究（代表：佐藤真行）

研究概要：本研究は、六甲山系の生態系を調査対象フィールドとし、(1)生態学的研究によって当該地域の生態系の実態調査、(2)経済学的枠組に基づく生態系サービス評価、そして(3)心理学的枠組にもとづく生態系サービス評価を通じて、生態学・経済学・心理学を統合するようなあらたな包括的な生態系サービス評価手法の開発をめざしている。

本専攻研究者：田畑智博

共同研究者：片桐 恵子

研究課題：超高齢化社会の進行とごみ分別行動の関係性評価/フォアキャスト的アプローチを用いた高齢者社会に相応しい将来のごみ処理サービスの提案に関する研究

研究資金：挑戦的萌芽研究、三井住友海上福祉財団 2015年度研究助成（代表：田畑智博）

研究概要：高齢化問題というと福祉や医療に関心が集中してきたが、高齢化に伴う問題はそれ以外にも様々なことに影響を及ぼす。本研究では高齢化率の上昇がゴミ分別にどのような影響を与えるかを検討する。

●からだ系講座の国際共同研究

本専攻研究者：近藤徳彦他

研究代表者：Kenny G (オタワ大学)

研究題目：発汗調節に関わる仕組み,

研究資金：各大学からの予算

研究概要：運動に関わる要因が発汗調節にどのように関わっているのか，オタワ大学と共同で解明する．論文としては，以下がある。

1) Amano T, Ichinose M, Inoue Y, Nishiyasu T, Koga S, Kenny GP, Kondo N. Influence of forearm muscle metaboreceptor activation on sweating and cutaneous vascular responses during dynamic exercise. *Am J Physiol Regul Integr Comp Physiol*. 2016 Jun 1;310(11):R1332-9.

2) Haqani B, Fujii N, Kondo N, Kenny GP. The mechanisms underlying the muscle metaboreflex modulation of sweating and cutaneous blood flow in passively heated humans. *Physiol Rep*. 2017 Feb;5(3). pii: e13123. doi: 10.14814/phy2.13123.

本専攻研究者：近藤徳彦

共同研究者：Havenith G (Loughbrough Univ), 井上芳光 (大阪国際大学), 天野達郎 (新潟大学), Nicola Gerrett (JSPS 海外特別研究員),

研究資金：上述の研究費の一部 (代表：近藤徳彦)

研究概要：汗腺でのイオン再吸収能力を評価する方法の確立し，運動，年齢，性差，運動トレーニングによりこの能力がどのように変化するのか検討する．論文としては，以下がある。

論文

1) Amano T, Gerrett N, Inoue Y, Nishiyasu T, Havenith G, Kondo N. Determination of the maximum rate of eccrine sweat glands' ion reabsorption using the galvanic skin conductance to local sweat rate relationship. *Eur J Appl Physiol*. 2016 Feb;116(2):281-90.

本専攻研究者：片桐恵子

共同研究者：久保田裕之 (日本大学), Trudy Corrigan (Dublin City University)

研究課題：高齢者の安心と若者の未来を支える異世代間交流プログラムの開発

研究資金：科学研究費補助金 挑戦的萌芽研究 (代表：片桐恵子)

研究概要：高齢者と若い世代の交流がそれぞれの世代にどのような影響をもたらすのか、異世代間交流を促すための方策としてホームシェアプログラムの着目し、日本での布教を図る際の問題点などを検討する。

本専攻研究者：片桐恵子

共同研究者：Han Gyounghae (Professor in Human Development and Family Studies, Director, Translational Gerontology and Retirement Research Center, Seoul National University), 原田和弘, 龍野洋慶(神戸大学大学院保健学研究科), 福沢愛, Heejin Choi (Graduate student of Seoul National University), 葺石育美, 吉野太基 (東京大学大学院人文社会系研究科)

研究課題：都市居住高齢者の日常活動と健康：日本と韓国の国際比較研究

研究資金：日本学術振興会 国際交流：韓国との共同研究 (代表：片桐恵子)

研究概要：健康寿命の増進にはどのような日常生活をおくっているか、というライフスタイルが重要である。本給では、後期高齢者の日常生活の実態をダイアリー調査と活動量計の装着により多面的に把握し、健康状態などとの関連を明らかにすることを目的としている。

本専攻研究者：片桐恵子

共同研究者：Winnie W. Y. LAM (The University of Hong Kong), Rathi MAHENDRAN (National University of Singapore)

研究課題：Promoting Active Transport for the Elderly: A Comparative Study of Three Asian Cities

研究資金：NUS Global Asia Institute (代表：Becky P.Y. LOO (The University of Hong Kong))

研究概要：誰もが取り組める歩行行動に着目し、高齢者の歩行行動を促進するような近隣の歩きやすさ、歩行行動のもたらす効果などを東京、香港、シンガポールというアジアの3つのメガシティで比較する。

本専攻研究者：片桐恵子

共同研究者：キム ジュヒョン (忠南大学), アン スンテ (梨花女子大学), ジャン チョルジュン (檀国大学), ジュ ギョンヒ (Hanshin University), ジュ ソヒョン (梨花女子大学), チェ ヘジ (ソウル女子大学), ホン ヨンラン (Korea Educational Development Institute), パク ナンスク (University of South Florida)

研究課題 : Age integration: Building a new social paradigm in aged society

研究資金 : National Research Foundation of Korea (代表 : ジョン スンドル)

研究概要 : 高齢者の社会的孤立を防ぎ, 社会的統合を図るための方策を検討する。

●からだ系講座院生の研究活動

Taki C, Shiozawa N, Kimura T. Application of Minute Electrical Noise to Muscle Proprioception Modulates Excitability of Alpha Motor Neuron Group. *Advanced Biomedical Engineering*, in press.

鷗木千加子, 「1893年から1934年におけるバドミントン協会の役割と組織の在り方の変容について」, 『スポーツ史研究』, 第30号, 2017年3月, 印刷中

鷗木千加子, 「甲南大学の体育実技における学修支援環境整備の取組み」『甲南大学スポーツ・健康科学教育研究センター論集』, 第22号, 2017年3月発行

小野太寛, 平川和文, 前田正登 3軸加速度分析からみたバスケットボールにおける連続サイドステップの特徴. *体育・スポーツ科学* 第25号 pp.11-19, 2016年

岡野達哉, 小野太寛, 片山侑治, 前田正登 ステップ数およびステップ長の違いがサイドステップ運動時の方向転換動作に及ぼす影響 *体育・スポーツ科学* 第25号 pp.31-39, 2016年

Yamamoto, K. & Masumoto, K. Memory of the self in adults with autism spectrum disorder. 31st International Conference of Psychology (ICP2016), Yokohama, Japan, 2016.7.29

Du, X. & Masumoto, K. Effect of aging on emotional process-related decision-making: Are the older adults less subject to the sunk-cost fallacy? 31st International Conference of Psychology (ICP2016), Yokohama, Japan, 2016.7.28

山本健太・増本康平 行為のエピソード記憶における自己関連づけ符号化の役割 -成人自閉症者を対象とした研究- 日本認知心理学会第14回大会, 広島大学, 2016.6.18

瀧千波, 木村哲也. バリスティック最大随意収縮の個人内変動に対する脊髄 α 運動ニューロン興奮性変動の影響. 兵庫体育・スポーツ科学学会第27回大会, 兵庫, 2016年5月21日

瀧千波, 木村哲也. 高齢者における水ライトタッチが静的立位バランス調節に与える効果.
日本体育学会第 67 回大会, 大阪, 2016 年 8 月 25 日

Taki C, Shiozawa N, Kimura T. Effects of minute electrical noise on input-output gain
of alpha motor neuron group. 生体医工学シンポジウム 2016, 北海道, 2016 年 9 月 17 日

鷗木千加子, 「第二次世界大戦下における 国際バドミントン連盟の活動」, スポーツ史学会
30 周年記念大会, 立命館大学, 2016 年 12 月

水野(島谷) いずみ・片桐 恵子「成人期母娘の就労状況と母から娘へのサポート提供の関
連—無職の母親は有職の母親に比べて娘へのサポート提供を行っているか—」日本社会心
理学会第 57 回大会 2016 年 9 月 17 日・18 日 関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス

●からだ系講座の受賞

高見和至：日本学校メンタルヘルス学会最優秀論文賞（理事長賞）（2016 年 12 月 10 日）

受賞対象論文は、次の通りであった。高見和至（2016）, 「中学生における“いじめ”に関
する行動の諸相—された・した・傍観・制止・サポートの行動頻度と関連—」日本学校メ
ンタルヘルス学会『学校メンタルヘルス』第 19 巻, 第 1 号, pp. 14-27

●学び系講座の研究

本専攻研究者：稲垣成哲, 山口悦司

共同研究者：舟生日出男（創価大学）他 6 名

研究課題：知識構築型アーギュメンテーションの指導と評価を可能にする教師教育プログ
ラムの開発

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（B）（一般）（代表：稲垣成哲）

研究概要：科学教育の研究者と教育工学・学習科学の研究者の学際的共同研究として、知
識構築型アーギュメンテーションの指導と評価を可能にする教師教育プログラムを開発し
た。

本専攻研究者：稲垣成哲

研究課題：アクティブシニアによる ICT を活用した社会貢献及び学習共同体の形成モデル

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究（代表：竹中真希子）

研究概要：シニア世代における ICT スキル学習を媒介としたコミュニティ形成の研究であ

る。

本専攻研究者：稲垣成哲

研究課題：モバイルARアニメーションに基づくストーリーテリングシステムとその実践的評価

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（B）（一般）（代表：杉本雅則）

研究概要：ARアニメーションによってストーリーテリングにおけるキャラクターの振る舞いを表現するシステム開発研究である。

本専攻研究者：稲垣成哲

共同研究者：楠房子（多摩美術大学）、溝口 博（東京理科大学）他1名

研究課題：聴覚障害者の鑑賞支援のためのセンシング技術を用いたモバイルシアターのデザイン

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（B）（一般）（代表：楠房子）

研究概要：聴覚障害者に人形劇の楽しく鑑賞体験を提供するシステム開発と評価の研究である。

本専攻研究者：稲垣成哲

共同研究者：楠房子（多摩美術大学）他2名

研究課題：人物計測技術により没入感演出と注意推定、評価定量化とを図る博物館学習支援システム

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（B）（一般）（代表：溝口博）

研究概要：センサを用いて人とシステムが自然に対話できるシステムを構築し、博物館学習の展示学習支援に応用する研究である。

本専攻研究者：稲垣成哲

共同研究者：生田目美紀（筑波技術大学）、楠房子（多摩美術大学）、小川義和（国立科学博物館）他6名

研究課題：科学系博物館の展示支援と学習プログラムにおける情報アクセシビリティの調査研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（B）（海外学術調査）（代表：生田目美紀）

研究概要：科学系博物館の情報アクセシビリティの現状について、海外の主要な科学系博物館を調査する研究である。

本専攻研究者：稲垣成哲，山口悦司，北野幸子，目黒強

共同研究者：小川義和（国立科学博物館）他 6 名

研究課題：科学的素養醸成のコミュニケーション・メディアとしての科学絵本教育モデルの開発

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（A）（一般）（代表：野上智行）

研究概要：科学教育の研究者と幼児教育，認知心理学，児童文学，デザイン学，科学コミュニケーションの研究者が学際的に共同し，科学的素養醸成のコミュニケーション・メディアとしての科学絵本教育モデルの開発をした。

本専攻研究者：稲垣成哲，山口悦司，北野幸子

共同研究者：楠房子（多摩美術大学）他 3 名

研究課題：保育士・幼稚園教諭の科学教育力強化を支援する科学絵本活用ハンドブックの開発と評価

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究（代表：野上智行）

研究概要：科学教育の研究者と幼児教育・デザイン学の研究者が学際的に共同し，保育士・幼稚園教諭の科学教育力強化を支援する科学絵本活用ハンドブックの開発と評価を行った。

本専攻研究者：稲垣成哲，北野幸子，山口悦司

共同研究者：小川義和（国立科学博物館）他 9 名

研究課題：幼年期における科学的素養醸成のための科学コミュニケーションに関する学際的研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（A）（一般）（代表：野上智行）

研究概要：多様な情報処理メディアが開発され，全世代がその新たな環境下で生きる現代の幼年期の科学教育モデルを脳科学，学習科学や科学教育などの研究者による学際的連携によって提案した。

本専攻研究者：稲垣成哲，山口悦司

共同研究者：杉本雅則（北海道大学）他 5 名

研究課題：里山植生遷移ゲームと野外体験を統合した環境学習プログラムの開発

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（B）（一般）（代表：武田義明）

研究概要：人間の経験範囲を越えた大きな時間的スケールの自然現象を実感できる学習教材としての学習ゲームを開発し，そのゲームと野外体験を統合した環境教育プログラムを作成した。

本専攻研究者：稲垣成哲，山口悦司

共同研究者：楠房子（多摩美術大学）

研究課題：科学系博物館における情報アクセシビリティ・ガイドラインと実践モデルの提案

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究（代表：稲垣成哲）

研究概要：科学系博物館における情報アクセシビリティ・ガイドラインの策定とその具体例としての実践モデルを提案した。

本専攻研究者：川地亜弥子・赤木和重

共同研究者：越野和之（奈良教育大学），山根俊樹（鳥取大学），寺川志奈子（鳥取大学），國本信吾（鳥取短期大学）

研究課題：自閉症児の授業づくりにおける教育目標・教育評価に関する研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（C）（代表：三木裕和）

研究概要：自閉症児の行動変容だけではなく表現・情意面の成長発達という点からの教育目標設定，並びに具体的な授業づくりと，その評価のための基礎理論研究と実践研究を行っている。

本専攻研究者：船寄俊雄

研究課題：「文検」修身科の研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（C）（代表：船寄俊雄）

研究概要：本研究の目的は，「文検」修身科の全体像を明らかにすることである。その目的を達成するために，(1)「文検」修身科の制度の解明，(2)試験問題の分析，(3)試験委員の分析，(4)受験者の分析，(5)「中等修身」の実態解明の五つの作業課題を設定している。

本専攻研究者：船寄俊雄

共同研究者：近藤健一郎（北海道大学），泉水英計（神奈川大学），他3名

研究課題：川平朝申のライフコースを基軸とした戦前から戦後沖縄の教育・文化実践史研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（B）（代表：齋木喜美子）

研究概要：本研究は，戦前に日本統治下の台湾に渡り，終戦まで台湾で沖縄学研究や文化・文学活動，芸術活動を展開していた川平朝申（1908-1998）に着目し，彼のライフコースを通して近現代沖縄の文化・教育史を読み解くことを研究目的としている。

本専攻研究者：船寄俊雄

共同研究者：後藤小百合（高崎商科大学）、釜田史（愛知教育大学）、山本朗登（山口芸術短期大学）、他 9 名

研究課題：近代日本準専門職形成史の研究：キャリアコース・試験情報・専門性向上言説を中心に

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（B）（代表：菅原亮芳）

研究概要：本研究は、近代日本において教育領域をはじめとする諸領域において「準専門職」と呼ばれる職がどのように成立してきたのか、キャリアコース・試験情報・専門性向上言説等を対象として歴史的に探究することを目的とするものである。

本専攻研究者：山口悦司、稲垣成哲、坂本美紀

共同研究者：大島純（静岡大学）他 10 名

研究課題：学習科学を応用したイノベーティブな教育の理論と方法に関する国際調査研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（B）（海外学術調査）（代表：山口悦司）

研究概要：教育工学や脳科学等と学習科学を専門とする研究者が共同し、7カ国計13の先端的な研究拠点を組織的・体系的に調査し、学習科学を応用した最新の教育の実情を解明した。

本専攻研究者：山口悦司、増本康平、坂本美紀

共同研究者：中原淳（東京大学）

研究課題：大量退職時代における熟練教師から初任者教師への理科授業実践知識・技能の伝承モデル

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究（代表：山口悦司）

研究概要：高齢者心理学、発達心理学、職場学習・企業人材育成と科学教育の研究者が学際的に共同し、教師の理科実践指導力の持続的発展に資するため、優れた理科授業を行うための実践知識・技能の伝承に関する理論・方法論を構築した。

本専攻研究者：山口悦司

共同研究者：田代直幸（常葉大学）他 4 名

研究課題：持続的な学びを支える学習科学ポータルサイトの開発と評価

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（A）（一般）（代表：白水始）

研究概要：科学教育の研究者と学習科学の研究者が共同し、持続的な学びを支える学習科学ポータルサイトの開発と評価を行った。

本専攻研究者：山口悦司

共同研究者：大島純（静岡大学）他 2 名

研究課題：21 世紀型スキルとしての認識論的コンピテンシを育む協調学習環境の研究開発

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究（代表：望月俊男）

研究概要：協調学習を通して、知識や知ることや学ぶことに関する認識論信念を変容し、知識創造実践を実現していく「認識論的コンピテンシ」を育むために、それを適切に発揮しながら学習することができる学習環境デザイン原則を確立した。

本専攻研究者：山下晃一

研究課題：現代アメリカ地方教育行政における「急進性」の生成基盤と作用に関する調査研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（C）（代表：山下晃一）

研究概要：本研究では、近年の米国の地方教育行政において、特に学力向上や教員処遇等をめぐって、関係者の反発や理論的根拠の弱さ等にもかかわらず、所期の目的貫徹のために関連諸施策が強力に展開される様子を「急進性」という概念によって把握し、その根拠、展開過程、教育活動への作用、米国教育行政学・教育政治学への今日的影響を解明する。

本専攻研究者：山下晃一

共同研究者：佐藤晴雄（日本大学）、小林正幸（東京学芸大学）、他 15 名

研究課題：対保護者トラブルの予防と解決のための研修プログラムの構築と効果に関する学際的研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（A）（代表：小野田正利）

研究概要：幼稚園・保育園から大学に至るまで、児童・生徒・学生の保護者・親権者からの要望・要求が急増し、時にその対応に苦慮することは日常茶飯事である。これらを広く「保護者対応問題」ととらえて、受け手の学校の教職員が対応能力や意識を高めていく研修プログラムの開発を目指すものである。

本専攻研究者：山下晃一

共同研究者：大野裕己（兵庫教育大学）、大谷基道（獨協大学）

研究課題：科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究（C）（代表：白石陽一）

研究資金：教育エコシステムによる教育制度再編と教育行政の役割変容に関する研究

研究概要：本研究は、米国の官民連携・民間委託の新しい潮流である「教育イノベーション・クラスター」を事例に、教育学的視点および政治学的・行政学的視点から、その理念

的基盤である「教育エコシステム」の構造と義務教育における意義を考察し、多様な主体がネットワークを相互作用しながら教育を創造する新しいあり方を探求する。

本専攻研究者：山下晃一

共同研究者：望月一枝（日本女子大学・研究員）、大津尚志（武庫川女子大学短期大学部）
研究課題：高校の教科外活動に着目したグローバルなアクティブ・シティズンシップ教育モデル開発

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（C）（代表：白石陽一）

研究概要：本研究の目的は、教科外活動を中心としたグローバルなアクティブ・シティズンシップ高校教育モデルの開発・評価である。EU生徒会連合やイギリス・アメリカのシティズンシップ研究の理論・実践をふまえ、日本の異なるタイプの教科外教育実践から、高校生のアクティブ・シティズンシップ育成をはかる教育モデルを析出する。

本専攻研究者：山下晃一

共同研究者：安藤知子（上越教育大学）、加藤崇英（茨城大学）、他

研究課題：新たな学校ガバナンスにおける「教育の専門性」の再定位

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究（代表：浜田博文）

研究概要：本研究は、近年の日本の教育改革論議と学校ガバナンス改革において「教育の専門性」が劣位に置かれていることの問題性に着目し、新たに構築されるべき学校ガバナンスにおけるその再定位のあり方を、日米比較の視点をもって理論的・実証的に追究することを目的とする。

本専攻研究者：山下晃一、渡部昭男

共同研究者：大桃敏行（東京大学）、他 11 名

研究課題：地方教育行政組織改革と「共同統治」に関する理論と実践の総合的研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（B）（代表：坪井由美）

研究概要：本研究では、世界の教育ガバナンス改革の実践に学び、地方教育行政組織と学校との学習的関係の構築により、両者をともに教育改革主体として位置づけ、学校地域における保護者・住民と教職員による共同統治の理論を深め新しい質の教育（福祉）指導行政を創出する理論と実践を総合的に探究する。

本専攻研究者：渡部昭男

研究課題：後期中等・高等教育における「無償教育の漸進的導入」の原理と具体策に係る

総合的研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（B）（一般）（代表：渡部昭男）

研究概要：日本政府が 2012 年 9 月に留保撤回し拘束されることとなった国際人権 A 規約第 13 条 2 (b)(c) に規定された「無償教育の漸進的導入」原理に着目し、後期中等・高等教育における「無償教育の漸進的導入」具体策を総合的研究に検討する。

本専攻研究者：渡邊隆信

共同研究者：宮本健市郎（関西学院大学），山本洋子（武庫川女子大学），山名淳（京都大学）

研究課題：新教育運動期における都市計画と学校の学び環境の公共性に関する比較社会史的研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（C）（代表：宮本健市郎）

研究概要：19 世紀末から 20 世紀前半の大都市およびその周辺で展開した学校改革（新教育運動）を取り上げ、大都市の学校がどのような形で子どもの遊びのための環境を用意しようとしたのかを解明する。

本専攻研究者：渡邊隆信

研究課題：教育行政専門職の養成，研修に関する比較研究-システムとカリキュラム・方法を中心に-

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（B）（海外学術調査）（代表：日渡円）

研究概要：教育行政専門職の養成，研修に関して，その制度的な枠組みと研修内容について，先進主要国を中心として渡航調査を含めた海外比較研究を行う。

本専攻研究者：渡邊隆信

研究課題：ドイツ自由学校共同体の研究-オーデンヴァルト校の日常生活史-

研究概要：2016 年度世界新教育学会総会において，著書『ドイツ自由学校共同体の研究-オーデンヴァルト校の日常生活史-』を初めとするドイツ新教育運動の研究に関する顕著な業績により，日本 W E F 小原賞を受賞した。

本専攻研究者・代表者：國土将平

研究課題：運動観察法による思春期不器用時に生じる走動作変容の解明

研究資金：科学研究費補助金 基盤研究（C）（代表・國土将平）

研究概要：発育急進期において，一時的に運動能力の低下する思春期不器用があることが知られているが，走動作においてその思春期不器用がどのように生じ，どのように消失してゆ

くかを明らかにする。

本専攻研究者：國土将平

共同研究者：大島秀武（流通科学大学, 人間社会学部, 教授,）引原有輝（千葉工業大学, 創造工学部, 准教授）, 長野真弓 福岡女子大学, 国際文理学部, 教授)

研究課題：全国大規模調査による思春期前期小児の身体活動とメンタルヘルスの検討

研究資金：科学研究費補助金 基盤研究 (B) (代表・石井好二郎)

研究概要：小学校 5 年生から中学生 12000 人を対象とし, 身体活動がメンタルヘルスに対して及ぼす影響について検証した。

本専攻研究者：北野幸子

共同研究者：三村真弓（広島大学, 教育学研究科, 教授）, 辻 弘美（大阪樟蔭女子大学, 学芸学部, 教授)

研究課題：幼保連携型認定こども園 2・3 歳児クラス接続期教育における保育者の専門性

研究資金：科学研究費補助金 挑戦的萌芽研究 (代表・北野幸子)

研究概要：幼保連携型認定こども園における 2・3 歳児クラス接続期教育における保育者の専門性について検証する。

本専攻研究者：北野幸子

共同研究者：吉富巧修（広島大学, 教育学研究科, 名誉教授）, 伊藤真（広島大学, 教育学研究科, 准教授）, 北野幸子, 山中文（高知大学, 教育研究部人文社会科学系教育学部門, 教授)

研究課題：教科の基盤となる資質能力を育成するための幼小接続期教育に関する研究

研究資金：科学研究費補助金 挑戦的萌芽研究代表者 (代表・三村 真弓)

研究概要：教科の基盤となる資質・能力とは何かを明らかにし, それらを幼小接続期教育において育成するためのカリキュラム及び指導法を構築する。

本専攻研究者：北野幸子

共同研究者：無藤隆（白梅学園大学, 公私立大学の部局等, 教授）, 大矢 大（京都女子大学, 公私立大学の部局等, 教授）水崎 誠（東京学芸大学, 教育学部, 准教授）, 北野 幸子

研究課題：幼児の音声情報解読とその表現の発達状況一人間関係構築との関連を視点とした国際比較

研究資金：科学研究費補助金 基盤研究(C) (代表・吉永早苗)

研究概要 幼児の音声情報解読とその表現の発達状況を調査し、それに影響を及ぼす環境要因を明らかにする。

本専攻研究者：木下孝司

研究課題：文化伝達からみた幼児の仲間集団の発達：実験的アプローチの試み

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究（代表・木下孝司）

研究概要：幼児間での文化伝達の過程を測定する実験的方法を開発して、幼児期における集団の発達を検討している。

本専攻研究者：松岡広路

共同研究者：井口克郎，岡田順子 ロニー・アレキサンダー 坂本千代

研究課題：ジェンダー・エスニシティ・多文化共生に着目した震災復興と減災方策に関する研究

研究資金：科学研究費補助金 基盤研究（C）（代表・朴木佳緒留）

研究概要：大船渡市を中心とする復興の地域推進母体におけるジェンダー・エスニシティ・民族に関連する問題を整理し、多文化共生社会下の復興支援の方策を探ろうとする研究である。

本専攻研究者：稲原美苗

共同研究者 津田英二，浜渦辰二（大阪大学大学院文学研究科教授），池田喬（明治大学文学部准教授），村上旬平（大阪大学歯学部附属病院講師）

研究課題：哲学的当事者研究の展開：重度・重複障害者と慢性疼痛患者のコミュニケーション再考（代表・稲原美苗）

研究資金：科学研究補助金 基盤研究（C）（代表・稲原美苗）

研究概要：哲学の知見を取り入れ、重度・重複障害児（者）や慢性疼痛患者の支援プログラムを構築することを目的とする研究。

本専攻研究者：稲原美苗

共同研究者：稲原美苗，池田喬（明治大学文学部准教授），石原孝二（東京大学大学院総合文化研究科准教授），小手川正二郎（國學院大學文学部助教），筒井晴香（東京大学大学院総合文化研究科特任研究員），中真生（神戸大学大学院人文学研究科准教授），中澤瞳（日本大学通信教育部助教）

研究課題：北欧現象学者との共同研究に基づく人間の傷つきやすさと有限性の現象学的研

究

研究資金：科学研究費補助金 基盤研究（B）（代表・浜渦辰二）

研究概要：誕生，老い，病，死，障がい，痛み，性といった問題の広がりを経験学的に考察する共同研究である。

本専攻研究者：稲原美苗

共同研究者：稲原美苗，竹中菜苗（大阪大学保健センター助教），新家一輝（大阪大学大学院医学系研究科保健学講師）

研究課題：歯科医療現場における障害のある子どもとその親への包括的支援プログラムの開発

研究資金：大阪大学未来知創造プログラム（代表・村上旬平）

研究概要：障害者歯科学・臨床哲学・臨床心理学という三領域からの学際的アプローチによって，障害のある子どもをもつ親の「生きづらさ」を改善するプログラムを開発する研究。

本専攻研究者：伊藤篤

共同研究者：伊藤篤・久木津文・南憲治

研究課題：今日の親の親性形成と親子関係の質の向上を促す支援プログラムの開発

研究資金：科学研究費補助金 基盤研究（C）（代表・寺見陽子）

研究概要：過去の親子間の相互作用と現代のそれとの比較を通して，親子関係の質の向上を促す学習プログラムを開発しようとする研究である。

本専攻研究者：津田英二

共同研究者：松岡広路，伊藤篤，稲原美苗，清野未恵子，赤木和重，太田和弘，田中真理（九州大学教授），横須賀俊司（県立広島大学准教授）

研究課題：社会関係資本とキーコンピーテンシーによる困難事例自己解決コミュニティ開発の方法

研究資金：科学研究費補助金 基盤研究（B）（代表・津田英二）

研究概要：国際関係，格差，差別，障害，ジェンダー等，多様な領域において発生する解決が困難な事例について，能力と関係の2つの観点から，コミュニティが自律的に解決に向かう支援の方法論を検討・模索する研究。

●学び系講座の国際共同研究

本専攻研究者：國土将平

共同研究者：佐川哲也（金沢大学人間科学系・教授），友川幸（信州大学,学術研究院教育学系・准教授）中野貴博（名古屋学院大学スポーツ健康学部・准教授）

研究課題：アジアの後発開発途上国における学校保健モデル事業のインパクト評価

研究資金：科学研究費補助金 基盤研究（B）（代表・國土将平）

研究概要 ネパールとラオスを対象に，小学校において学校保健のモデル事業を実施し，ソーシャルキャピタルを考慮しつつその効果について実証する。

本専攻研究者：國土将平

共同研究：Shohei Kokudo, Chamaiparn Santikarn(WHO Myanmar), U Aun Tun(MOHS, Myanmar), Kyawyin Sanda (MOHS, Myanmar)

研究課題：Comprehensive School Health Strategy in Myanmar

研究資金：WHO, SEARO Suvajee Good(WHO, SEARO)

研究概要：ミャンマーの子どもたちの学校保健や健康に関わる資料を参考に，ミャンマー連邦における包括的学校保健戦略を検討した。

本専攻研究者：國土将平

共同研究者：國土将平，中野貴博（名古屋学院大学スポーツ健康学部・准教授）

研究課題：激変するアジア地域の子どもの身体・文化・生活の相互変容に関する国際比較研究

研究資金：科学研究費補助金 基盤研究（B）（代表・佐川哲也）

研究概要 小学5年生ならびに中学2年生を対象に，ライフスタイルや健康状態，価値観について，日本，タイ，ネパール，ミャンマーの4カ国の比較研究を行った。

本専攻研究者：國土将平

共同研究者：朝倉隆司（東京学芸大学，教育学部，教授），島田英昭（信州大学，学術研究院教育学系，准教授），友川幸（信州大学，学術研究院教育学系，准教授）國土将平

研究課題：アジアの教員養成機関における実証的なエコヘルス教育研究と研究ネットワークの構築

研究資金：科学研究費補助金 基盤研究（B）（代表・渡辺 隆一）

研究概要：ラオスで開発したモデルカリキュラムと教材を活用し，教員養成校での実証研究を行い，その導入の可能性と課題を検討した。

本専攻研究者：國土将平

共同研究者：中野貴博（名古屋学院大学スポーツ健康学部・准教授）

研究課題：激変するアジア地域の子どもの身体・文化・生活の相互変容に関する国際比較研究

研究資金：科学研究費補助金 基盤研究（B）（代表・佐川哲也）

研究概要 小学5年生ならびに中学2年生を対象に、ライフスタイルや健康状態、価値観について、日本、タイ、ネパール、ミャンマーの4カ国の比較研究を行った。

本専攻研究者：山口悦司

共同研究者：Clark A. Chinn (Rutgers University, USA) , Randi Zimmerman (Rutgers University, USA) , 望月俊男（専修大学）, 大島純（静岡大学）

研究課題：21世紀型スキルとしての認識論的コンピテンシを育む協調学習環境の研究開発

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究（代表：望月俊男）

研究概要：協調学習を通して、知識や知ることや学ぶことに関する認識論信念を変容し、知識創造実践を実現していく「認識論的コンピテンシ」を育むために、それを適切に発揮しながら学習することができる学習環境デザイン原則を確立した。

●学び系講座院生による研究活動

本専攻研究者：檜下達也（博士後期課程・院生）

研究課題：器楽教育成立過程の研究：音楽教育研究団体の動向を中心に

研究資金：科学研究費補助金・特別研究員奨励費

研究概要：日本教育史において未開拓のテーマである器楽教育成立過程の解明に取り組んだ意欲的な研究である。

本専攻研究者：西野倫世（博士後期課程・院生）

研究課題：現代アメリカ学力政策にみる伸長度評価の可能性-「正義」と「排除」の相克から-

研究資金：科学研究費補助金・特別研究員奨励費

研究概要：本研究は現代教育に内在する「排除」の力学に着目しつつ、教育上の「正義」の実現に向けた萌芽的方策として、「伸長度評価」と呼ばれる米国の最新動向を位置づけた上で、その制度設計・運用の意義と課題について分析を行うものである。成果の一端は、『日本教育行政学会』に査読付論文として掲載に至っている。

本専攻研究者：榎景子（博士後期課程・院生）

研究課題：米国における学校再編への都市再開発政策の影響と課題 -シカゴを事例とした教育政策の空間的分析の試み-

研究資金：科学研究費補助金・特別研究員奨励費

研究概要：近年の米国では、グローバル経済下での競争力向上を目指す都市経営が、学力改善に向けた地域教育経営の努力に深刻な作用を及ぼしつつある。本研究は空間論的視座からこの動向を分析して、政策作用の連動構造と子どもの発達への影響を解明した。その成果である査読付論文に対して「日本教育行政学会研究奨励賞」が与えられた。

本専攻研究者：江草遼平（博士課程後期課程・院生）

研究課題：聴覚障害児と健常児が共に創り、鑑賞できる人形劇システムの開発と評価

研究資金：科学研究費補助金・特別研究員奨励費

研究概要：聴覚障害児と健常児がともに鑑賞できるような情報アクセシビリティの保障の技術的な解決策と提案し、その評価をしている。

本専攻研究者：大塚穂波（博士課程後期課程，日本学術振興会特別研究員 DC2）

研究課題：幼児期におけるふりの理解の発達的变化：人形—大人の関係性に着目して

研究資金：科学研究費補助金・特別研究員奨励費（代表・大塚穂波）

研究概要：ふり遊びに用いられる人形の影響を検討し、ふりの理解の発達的变化を実証する。

本専攻研究者：古見文一（日本学術振興会特別研究員 PD）

研究課題：幼児期の一般的他者と特殊的他者の心の理解—マインドリーディングの発達モデルの構築

研究資金：科学研究費補助金・特別研究員奨励費（代表・古見文一）

研究概要：幼児期における様々な背景の特殊的他者の心の理解について検討している。

本専攻研究者：古見文一

研究課題：他者の心の理解を支える認知基盤の個人差の検討 自閉症の日英比較研究の観点から

研究資金：松下幸之助記念財団研究助成

研究概要：自閉スペクトラム症の認知特性と文化による認知特性の違いの関連を検討した。

本専攻研究者：古見文一

研究課題：Understanding Mechanisms of Human Social Interaction using Interactive

Avatars

研究資金：JSPS-ERC Research Fellow ERC grant support（代表・Antonia Hamilton）

研究概要：成人期を対象にヴァーチャルリアリティ空間でのアバターとのインタラクションを用いてコミュニケーション能力の発達を検討している。

●学び系講座の表彰

渡邊隆信：「日本WEF小原賞」（2016年6月12日）

伊藤篤：「平成28年度兵庫県社会教育委員協議会表彰」（2016年7月13日）

（人間発達専攻長 稲垣成哲）

7.5.2. 人間環境学専攻

本専攻では、多分野の教員が自身のテーマを発展させ、多彩な研究プロジェクトに従事することで、人間環境学とその研究ネットワークの発展に貢献してきた。以下では、本専攻研究者が展開する共同研究の概要を示し、とくに国際的な活動と成果を紹介する。

まず、（1）本専攻研究者は、今年度時点で、計30件の共同研究（研究費総額100万円以上）の代表者として、人間環境学に関する多様なプロジェクトを走らせ、統括する役割をはたしている。その研究費総額（研究全期間）は、直接経費だけで3億3,507万円におよぶ。さらに、（2）本専攻研究者は、さまざまな共同研究プロジェクトに共同研究者として参加し、研究ネットワークの拡大と発展の一端を担っている。

次に、研究のグローバル化のなかで、国際的な研究ネットワークに参加し、そこでの活動をさらに拡大していくことが求められている。本専攻の研究者は、今年度、（3）24本の国際共著論文・書籍を執筆・発表し、さらに、（4）国際学会・国際会議・海外大学などで14本の基調講演・招待講演などを行った。

（1）本専攻研究者が代表をつとめる共同研究

研究代表者（本専攻教員）：青木茂樹

共同研究者：中野敏行（名古屋大学）、長縄直崇（名古屋大学）

研究課題：気球搭載型エマルシオンガンマ線望遠鏡による宇宙線加速天体の精密観測

研究資金：科学研究費補助金・基盤（A）、2014-2016年度、総額（直接経費）3,030万円（代表：青木茂樹）

研究概要：エマルシオンフィルムを積層した検出器を気球に搭載し、高度35kmの大気トップにおいて宇宙から飛来するガンマ線を観測する。

研究代表者（本専攻教員）：浅野慎一

共同研究者：全国夜間中学校研究会，江口怜（東北大学）ほか

研究課題：戦後日本の夜間中学とその生徒：ポスト・コロニアルの東アジア社会変動論の視座から

研究資金：科学研究費補助金・基盤（C），2013-2016年度，370万円（代表：浅野慎一）

研究概要：日本の夜間中学校に関する歴史的資料を集成し，国際的・歴史的視座から分析する。

研究代表者（本専攻教員）：蘆田弘樹

共同研究者：Sandhya Mehrotra（ビルラ理工大学）

研究課題：炭素固定酵素ルビスコの高機能化と活性化促進による光合成リミットブレイク

研究資金：科学研究費補助金・基盤（B），2014-2016年度，総額（直接経費）1,360万円（代表：蘆田弘樹）

研究概要：ルビスコの機能進化を解析し，その結果に基づいて高機能化と活性化促進を行い，光合成の機能改良を行う。

研究代表者（本専攻教員）：伊藤真之

共同研究者：加藤恒彦，福士比奈子（国立天文台），安田和宏，中垣篤志（神戸大学附属中等教育学校）ほか

研究課題：日本における展開に向けた宇宙教育の課題と国際動向の研究

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究，2015-2016年度，総額（直接経費）160万円（代表：伊藤真之）

研究概要：日本における宇宙教育の展開に資することを目的として，国内外の宇宙教育の動向・課題を調査し，それを踏まえた宇宙教育プログラムの開発を試みる。

研究代表者（本専攻教員）：井上真理

研究課題：緊急時の備蓄用衣類セット開発のための基礎的研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤（C），2013-2016年度，総額（直接経費）390万円（代表：井上真理）

研究概要：生活科学を，災害現場という非日常の場にも展開させることによって，寒さや暑さといった生理的・精神的ストレスを和らげるとともに，水不足などに対応して衛生上の問題を軽減できる備蓄用肌着の衣服設計を行う。

研究代表者（本専攻教員）：井上真理

共同研究者：縄間潤一（パナソニック株式会社，アプライアンス社）

研究課題：洗濯後おしゃれ着の風合い定量化等に関する研究

研究資金：産学連携等経費，2016年度，総額（直接経費）118万円（代表：井上真理）

研究概要：おしゃれ着（カシミアセーター）の洗濯耐久性能を主観評価と物理特性から捉え，風合いを定量化すると共に，異なる洗濯条件における洗濯耐久性を明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：井上真理

共同研究者：近藤隆博，實方正和，高山奈菜（三井化学株式会社）

研究課題：オレフィン系熱可塑性エラストマーを中心とした高分子材料の触感評価の体系化

研究資金：産学連携等経費および大阪市イノベーション創出支援補助金，2016年度，総額（直接経費）312万円（代表：井上真理）

研究概要：オレフィン系熱可塑性エラストマーの最終用途に応じた望ましい触感を生み出す材料特性の範囲を明らかにし，必要とされる触感の体系化・標準化を行い，材料設計に結びつける。

研究代表者（本専攻教員）：井上真理

共同研究者：寺岡章，高寺由和（帝人株式会社）

研究課題：最終消費者にとっての自動車内装材の魅力品質向上に関する研究

研究資金：産学連携等経費，2016年度，総額（直接経費）100万円（代表：井上真理）

研究概要：特に人の手に触れる機会が多いステアリングホイールを事例に上げ，表皮材である人工皮革の機能と最終消費者にとっての魅力品質の関係を定量化する。

研究代表者（本専攻教員）：岩佐卓也

研究課題：ドイツにおけるストライキの新動向

研究資金：科学研究費補助金・基盤（C），2014-2016年度，総額（直接経費）260万円（代表：岩佐卓也）

研究概要：近年のドイツにおける新動向について事例を調査し，背景を解明する。

研究代表者（本専攻教員）：榎本 平

共同研究者：株式会社 IHI，株式会社ちとせ研究所，神戸大学

研究課題：微細藻類の改良による高速培養と藻体濃縮の一体化方法の研究開発

研究資金：NEDO プロジェクト「バイオマスエネルギー技術研究開発戦略的次世代バイオマスエネルギー利用技術開発事業（次世代技術開発）」，2012-2016 年度，総額（直接経費）7,749 万円，（NEDO 委託事業）

研究概要：微細藻類の改良による高速培養と藻体濃縮の一体化方法の研究・開発を行う。

研究代表者（本専攻教員）：江原靖人

共同研究者：中村晴信（神戸大学），開発邦宏（大阪大学）

研究課題：あらゆるインフルエンザウイルスを捕捉・検出する糖鎖修飾三量体核酸の開発

研究資金：科学研究費補助金・基盤(C)，2014-2016 年度，総額（直接経費）380 万円（代表：江原靖人）

研究概要：あらゆるインフルエンザウイルスの捕捉を目的として糖鎖修飾三量体核酸を合成し，環境中のウイルスの除去を行なう。

研究代表者（本専攻教員）：太田和宏

共同研究者：Joel Ariate Jr. (University of the Philippines)

研究課題：トランスナショナルなアソシエーション活動の可能性ーフェアトレードによる構造変革

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究，2016-2017 年度，総額（直接経費）160 万円（代表：太田和宏）

研究概要：フェアトレードを通じた国境を越える共同活動の実態と社会制度変革への影響についての考察を行う。

研究代表者（本専攻教員）：大野朋子

共同研究者：大形徹（大阪府立大学），魯元学（中国科学院昆明植物園）

研究課題：東南アジアの少数民族における祭祀植物の利用と地域景観形成に関する研究

研究資金：科学研究費補助金・若手 (B)，2014-2016 年度，総額（直接経費）300 万円，（代表：大野朋子）

研究概要：中国，タイを中心とした東南アジアにおいて祭祀利用されている植物の栽培，維持管理が地域固有の景観形成に果たす役割を考察する。

研究代表者（本専攻教員）桑村雅隆

連携研究者：小川知之（明治大学），栄伸一郎（北海道大学）

研究課題：保存量をもつ反応拡散方程式とその摂動系ーシンプレクティック構造と生物学

への応用

研究資金：科学研究費補助金・基盤（C），2016-2021 年度 総額（直接経費）310 万円（代表：桑村雅隆）

研究概要：保存量をもつ反応拡散方程式におけるパターン形成機構を解析し，その応用として細胞極性が生じる要因を数学的に解明する。

研究代表者（本専攻教員）：佐藤春実

研究課題：折りたたみ構造を有しない低分子量ポリヒドロキシ酪酸による結晶構造と水素結合の研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤（C），2015-2017 年度，総額（直接経費）400 万円（代表：佐藤春実）

研究概要：分子間水素結合を有する生分解性高分子において，折りたたみ構造の有無による結晶構造形成機構の違いを明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：佐藤春実

研究課題：テラヘルツイメージング分光による高分子材料の劣化の可視化と深さの方向分析

研究資金：JST 産学共創基礎基盤研究プログラム 2014-2016 年度，総額（直接経費）4,028 万円，（代表：佐藤春実）

研究概要：テラヘルツイメージング分光を用いた高分子材料の紫外線劣化の可視化と，そのスペクトル解析による高次構造の解明。

研究代表者（本専攻教員）：佐藤真行

共同研究者：丑丸敦史（神戸大学），片桐恵子（神戸大学）

研究課題：生活の質を考慮した生態系サービスの評価手法に関する学際研究

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的萌芽，2015-2017 年度，総額（直接経費）290 万円（代表：佐藤真行）

研究概要：都市における生態系サービスについて，経済学・心理学・生態学分野を中心とした学際的な評価枠組みを構築し，実証研究を行う。

研究代表者（本専攻教員）：佐藤真行

共同研究者：栗山浩一（京都大学），馬奈木俊介（九州大学），藤井秀道（長崎大学），林岳（農林水産政策研究所）

研究課題：生態系サービスの定量的評価及び生態勘定フレームワーク構築に向けた研究

研究資金：環境経済の政策研究（環境省受託研究），2015-2017年度，2,925万円（代表：佐藤真行）

研究概要：愛知目標の達成に向け，我が国における生態勘定のフレームワークの開発および生態系価値の経済評価を行う。

研究代表者（本専攻教員）：澤宗則

共同研究者：南埜猛（兵庫教育大学）

研究課題：空間的実践とエスニシティからみた在日インド人と在日ネパール人—戦術から戦略へ

研究資金：科学研究費補助金・基盤（C），2016-2019年度，総額（直接経費）330万円（代表：澤宗則）

研究概要：インド系移民とネパール系移民の日本での定住過程を空間的実践と戦略の観点から比較考察する

研究代表者（本専攻教員）：高見泰興

共同研究者：曾田貞滋（京都大学）

研究課題：機械的生殖隔離による種分化：交尾器形態分化の要因と帰結

研究資金：科学研究費補助金・基盤（B），2016-2019年度，総額（直接経費）1,408万円（代表：高見泰興）

研究概要：形態分化が種分化に及ぼす影響を生態進化と形態発生の観点から解明する

研究代表者（本専攻教員）：田畑智博

共同研究者：佐藤真行（本専攻），大西暁生（東京都市大学），佐伯孝（富山県立大学），川本清美（北海道教育大学）

研究課題：震災に伴う人工資本・自然資本ストックの損失と対策の評価

研究資金：環境省・環境研究総合推進費補助金，2014-2016年度，総額（直接経費）5,530万円（代表：田畑智博）

研究概要：南海トラフ巨大地震によって失われる人工・自然資本ストックの量を明らかにするとともに，これに伴って発生する災害廃棄物の処理・リサイクル対策を提案する。

研究代表者（本専攻教員）：田畑智博

共同研究者：片桐恵子（本専攻）

研究課題：超高齢化社会の進行とごみ分別行動の関係性評価

研究資金：科研・挑戦的萌芽研究，2016-2018 年度，総額（直接経費）260 万円（代表：田畑智博）

研究概要：高齢者の増加がゴミ分別及び自治体のごみ処理に及ぼす環境的影響を明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：平山洋介

共同研究者：川田菜穂子（大分大学）

研究課題：超高齢社会における複数住宅所有の実態と役割

研究資金：科学研究費補助金・基盤（B），2016-2018 年度，総額（直接経費）380 万円（代表：平山洋介）

研究概要：複数住宅所有の実態を高齢者の経済セキュリティと住宅市場へのインパクトという観点から解明する。

研究代表者（本専攻教員）：平山洋介

共同研究者：Ray Forrest (City University of Hong Kong)

研究課題：ポストクライシスの住宅供給システムに関する国際比較分析

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的萌芽，2014-2016 年度，総額（直接経費）270 万円（代表：平山洋介）

研究概要：ポストリーマンショックの金融システムの不安定化に対し，住宅供給システムがどのように再編されるのかを，国際比較分析から解明する。

研究代表者（本専攻教員）：平山洋介

共同研究者：佐藤岩夫（東京大学），越山健治（関西大学）ほか

研究課題：東日本大震災からの住宅復興に関する被災者実態変化の追跡調査研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤（B），2013-2016 年度，総額（直接経費）1,060 万円（代表：平山洋介）

研究概要：被災者の住宅事情を繰り返し調査し，その変化を追跡することによって，住宅復興のための政策・制度を評価し，その改善に貢献しようとするものである。

研究代表者（本専攻教員）：古川文美子

共同研究者：鮫島弘光（地球環境戦略研究機関），増田和也（高知大学），甲山治（京都大学），岡本正明（京都大学），水野広祐（京都大学）他

研究課題：村落潜在性（PODES）と国勢調査データを活用したインドネシア村落の社会変容

に関する広域把握

研究資金：京都大学東南アジア研究所共同利用・共同研究拠点「東南アジア研究の国際共同研究拠点」2015-2016年度，総額（直接経費）105万円（代表：古川文美子）

研究概要：インドネシア国内全村落を対象にしたセンサスマイクロデータと現地調査によるデータを統合することで，マクロレベルの動向が村落社会にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：古川文美子

共同研究者：近江戸伸子（本専攻），大野朋子（本専攻），田畑智博（本専攻），平山洋介（本専攻），丑丸敦史（本専攻），武田義明（神戸大）

研究課題：六甲山地における防災林機能を高めるエリアマネジメント

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的萌芽，2016-2017年度，総額（直接経費）300万円（代表：古川文美子）

研究概要：環境保全と防災を融合したエリアマネジメントを学際的アプローチから構築することで六甲山地と地域社会の新たな共生の在り方を模索する。

研究代表者（本専攻教員）：古川文美子

共同研究者：Ir. Andi Amri（Hasanuddin University）

研究課題：マングローブ植林地におけるノコギリガザミを用いた生態系修復と資源回復の評価指標構築

研究資金：三井物産環境基金，2016-2018年度，総額（直接経費）472万円（代表：古川文美子）

研究概要：生態修復だけでなく，地域住民の生業を通じたマングローブ再生を評価できる指標として「ノコギリガザミ」に注目する。そして，地域社会の現状に合うかたちでの資源利用・管理を提案することで，地域社会とマングローブの共生を目指す。

研究代表者（本専攻教員）：源利文

共同研究者：丑丸敦史（神戸大学），神松幸宏（立命館大学）ほか

研究課題：環境DNA分析によるオオサンショウウオおよび小型サンショウウオ類の生息調査

研究資金：科学研究費補助金・基盤（C），2014-2016年度，総額（直接経費）390万円（代表：源利文）

研究概要：環境DNA分析を応用し，オオサンショウウオの全国分布を調査するとともに，

小型サンショウウオ類のマイクロハビタットを調査する

研究代表者（本専攻教員）：山崎健

共同研究者：岡田章宏（本専攻），浅野慎一（本専攻），澤宗則（本専攻），太田和宏（本専攻），橋本直人（本専攻），岩佐卓也（本専攻），井口克郎（本専攻）

研究課題：東アジアにおける越境的社会圏の展開と課題

研究資金：科学研究費補助金・基盤（C），2015-2017年度，総額（直接経費）360万円，（代表：山崎健）

研究概要：多様な制度，文化，背景を持つ東アジアが一つの越境的社会圏を構築する可能性と課題を学術的に検討する。

（2）本専攻研究者が共同研究者として参加している共同研究の例

研究代表者：中家 剛（京都大学）

共同研究者：青木茂樹（本専攻）ほか 多数

研究課題：Tokai-to-Kamioka (T2K) Long Baseline Neutrino Oscillation Experiment

研究資金：科研費・新学術（研究領域提案型），2013-2017年度（代表：中家 剛）や高エネルギー加速器研究機構などの経費による。

研究概要：茨城県東海村の J-PARC 加速器で生成する人口ニュートリノビームを 290km 離れた岐阜県スーパーカミオカンデ検出器で捉え，ニュートリノ振動等に関して研究する。（11ヶ国，63 研究機関からの約 500 名が参画する国際共同研究）

研究代表者：中村光廣（名古屋大学）

共同研究者：佐藤 修（名古屋大学），渋谷 寛（東邦大学），青木茂樹（本専攻）

研究課題：超高解像度ニュートリノ検出器の開発

研究資金：科研費・新学術（研究領域提案型），2013-2017年度（代表：中村光廣）

研究概要：乳剤製造からフィルム整形，放射線照射，現像，解析までの原子核乾板実験のすべての工程を高度化し，観測や実験に実戦投入しながら次世代のニュートリノ検出器を開発する。

研究代表者：鯨坂学（同志社大学）

共同研究者：浅野慎一（本専攻），西村雄郎（広島大学）など。

研究課題：「都心回帰」時代の大都市都心における地域コミュニティの限界化と再生に関する研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤(B)，2013-2015年度（代表：鯨坂学）

研究概要：大阪市を主な事例として、「都心回帰」現象の実態と課題を解明する。

研究代表者：高橋忠幸（宇宙航空研究開発機構）

共同研究者：大橋隆哉（首都大学東京），Richard Kelley(NASA/GSF)，伊藤真之（本専攻）

ほか多数

研究課題：国際 X 線天文衛星 ASTRO-H プロジェクト

研究資金：国立研究開発法人 宇宙航空研究開発機構

研究概要：硬 X 線望遠鏡，マイクロカロリメータなどを搭載した X 線観測衛星 ASTRO-H を開発し，宇宙の高エネルギー天体の観測・研究を行う。

研究代表者：谷口真人（総合地球環境学研究所）

共同研究者：ハイン・マレー，大西有子（総合地球環境学研究所），蛭名邦禎，伊藤真之（本専攻）ほか

研究課題：日本が取り組むべき国際的優先テーマの抽出及び研究開発のデザインに関する調査研究

研究資金：国立研究開発法人科学技術振興機構 社会技術研究開発センター「フューチャー・アース構想の推進事業」（総合地球環境学研究所への委託研究予算）

研究概要：グローバルな持続可能社会の構築を目指す国際的な地球環境研究プログラム「フューチャー・アース」において，自然科学，人文・社会科学の研究者に加え，社会各層のステークホルダーとの協働を通して，日本が取り組むべき国際的優先テーマの抽出を行う。

研究代表者：諸岡晴美（京都女子大学）

共同研究者：井上真理（本専攻）

研究課題：シニアの健康・快適な衣生活を支援するための被服衛生学的研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤(A)，2015-2017年度（代表：諸岡晴美）

研究概要：加齢による心身の変化が大きくなるシニア層を対象に，加齢による諸機能の低下を経時変化として定量的に捉え，健康で，しかもアクティブに生活するための衣生活支援の在り方を提案する。具体的には老いに対して積極的なコンセプトを持った繊維製品の開発とその設計指針の導出を行う。

研究代表者：朴木佳緒留

共同研究者：井口克郎（本専攻）

研究課題：ジェンダー・エスニシティ・多世代共生に着目した震災復興と減災方策に関する研究

研究資金：科学研究費・挑戦的萌芽研究，2014-2016年度（代表：朴木佳緒留）

研究概要：ジェンダー，エスニシティ，エイジズムなどの要因により地域の中で周辺化されている人々の生活状況を経年的に調査し，問題状況を明らかにする。

研究代表者：宮崎祐子（岡山大学）

共同研究者：丑丸敦史（本専攻）

研究課題：資源制限がもたらす植物の性表現決定機構の解明：科学研究費補助金・基盤(C)，2016-2018年度（代表：宮崎祐子）

研究概要：被子植物における資源に依存した可塑的な性表現決定のメカニズムをツユクサを用いて明らかにする。

研究代表者：小野寺康夫（北海道大学）

共同研究者：近江戸伸子（本専攻）

研究課題：ホウレンソウ性決定遺伝子座の構造決定および進化過程の解明

研究資金：科学研究費補助金・基盤(B)，2015-2017年度（代表：小野寺康夫）

研究概要：Spinacia 属の系統学的に異なる種から同型と異型の性染色体をそれぞれ同定し，性染色体の異型化に関わる進化機構について解明する。

研究代表者： Watcharaporn Thapana (Kasetsart University)

共同研究者：近江戸伸子（本専攻），Kornsorn Srikulnath (Kasetsart University)

研究課題： Chromosome structure and function research in reptile and plant

研究資金：Capacity Building of Kasetsart University on International program, 2017年度（代表：Watcharaporn Thapana）

研究概要：爬虫類ならびに植物の細胞において，三次元高感度イメージング法による核内タンパク質，DNAの高感度可視化法を確立し，生体分子物質の移行機構を解明する。

研究代表者：関恒樹（広島大学）

共同研究者：太田和宏（本専攻）

研究課題：社会的なものの再編とリスクの統治-フィリピンの脆弱性とレジリエンスの民族誌から

研究資金：科学研究費補助金・基盤 (B)海外学術調査, 2015-2018 年度 (代表：関恒樹)

研究概要：フィリピンにおける生活上のリスクへの対応を個人，社会，制度の各レベルから実証的に検討し，その社会的意味付けについて考察する。日本人研究者に加え，西オーストラリア大，ノースウエスタン大，シラキュース大学の研究者との共同研究。

研究代表者：大形徹 (大阪府立大学)

共同研究者：大野朋子 (本専攻)，山里純一 (琉球大学)，佐々木聡 (大阪府立大学)

研究課題：タマシイの観点からみた中国を中心とする東アジア辟邪文化の総合的研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤 (C)，2016-2018 年度 (代表：大形徹)

研究概要：中国を中心とする東アジアや東南アジアにおいて医学・本草関係の文献や考古学資料，絵画，色，形，音，におい，材質などの要素に留意し，聴き取りも含め「辟邪」の観念やその織りなす文化について考察する。

研究代表者：観音幸雄 (愛媛大学)

共同研究者：桑村雅隆 (本専攻)

研究課題：非線形な拡散効果を伴う 2 種競争系の大域的な解構造の研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤 (C)，2016-2020 年度 (代表：観音幸雄)

研究概要：非線形な拡散効果を伴う 2 種競争系の大域的な解構造を分岐理論と力学系理論および数値分岐解析法を用いて解明する。

研究代表者：尾崎幸洋 (関西学院大学)

研究分担者：佐藤春実 (本専攻)

研究課題：多角入射 ATR 紫外分光法によるグラフェン・ナノコンポジットの表面電子状態の研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤 (A)，2015-2017 年度 (代表：尾崎幸洋)

研究概要：多角入射 ATR 紫外線分光法を用いてポリマー/グラフェン・ナノコンポジットの極表面分析を行い，高分子の物性や反応性に関する情報を得る。

研究代表者：馬奈木俊介 (九州大学)

共同研究者：佐藤真行 (本専攻)

研究課題：人口減少社会における，経済への外的ショックを踏まえた持続的発展社会に関する分析

研究資金：科学研究費補助金・特別推進研究, 2014-2018 年度 (代表：馬奈木俊介)

研究概要：人口減少や震災・テロなどの外的ショックといった現代的文脈における持続可能な発展の理論研究およびデータベース作成，実証研究を行う。

研究代表者：友澤和夫（広島大学）

共同研究者：澤宗則（本専攻），岡橋秀典（広島大学），石上悦朗（福岡大学），森日出樹（松山東雲女子大学），後藤拓也（高知大学），南埜猛（兵庫教育大学），梅田克樹（千葉大学），日野正輝（中国学園大学），鋤塚賢太郎（龍谷大学），中條暁仁（静岡大学），由井義通（広島大学），荒木一視（山口大学），土屋純（宮城学院女子大学），佐藤裕哉（下関市立大学），宇根義己（金沢大学）

研究課題：現代インドの経済空間構造とその形成メカニズム

研究資金：科学研究費補助金・基盤（A），海外学術 2014-2017 年度（代表：友澤和夫）

研究概要：経済成長著しいインド経済の空間構造とその形成メカニズムについての実証研究。澤は大都市近郊農村の社会変化についての分析を行った。

研究代表者：曾田貞滋（京都大学）

共同研究者：高見泰興（本専攻），池田紘士（弘前大学）

研究課題：飛翔多型をもつ甲虫類の全球的分散と種多様化

研究資金：科学研究費補助金・基盤（A），2015-2019 年度（代表：曾田貞滋）

研究概要：系統ゲノミクス的手法により飛翔力を失った甲虫類の進化過程を全球レベルで解明する。

研究代表者：藤井 実（国立環境研究所）

共同研究者：田畑智博（本専攻），藤田壮（国立環境研究所），田崎智宏（国立環境研究所），稲葉陸太（国立環境研究所），後藤尚弘（豊橋技術科学大学），大西悟（東京理科大学）

研究課題：都市廃棄物からの最も費用対効果の高い資源・エネルギー回収に関する研究

研究資金：環境省・環境研究総合推進費補助金（代表：藤井 実）

研究概要：都市の人口やエネルギー需要の将来変化を考慮して，廃棄物のサーマルリサイクルを軸としたエネルギー供給システムの設計方法を提案する。

研究代表者：糟谷佐紀（神戸学院大学）

共同研究者：平山洋介（本専攻）

研究課題：障害者の独立世帯形成における住宅条件

研究資金：科学研究費補助金・基盤（C），2015-2017 年度（代表：糟谷佐紀）

研究概要：障害者が独立して生活を維持するための条件を住宅確保・安定の観点から解明する。

研究代表者：宮本和子（山梨大学）

共同研究者：源利文（本専攻）、カンボジア保健省ほか

研究課題：タイ肝吸虫症による住民の健康への影響調査：カンボジアとベトナムでの罹患実態調査と肝臓がんリスク調査

研究資金：医療分野国際科学技術共同研究開発推進事業（e-ASIA 共同研究プログラム）

研究概要：カンボジアとベトナムにおけるタイ肝吸虫症の住民への影響について、疫学的調査、環境 DNA 分析等を組み合わせて調査する。

研究代表者：近藤倫生（龍谷大学）

共同研究者：源利文（本専攻）ほか

研究課題：環境 DNA 分析に基づく魚類群集の定量モニタリングと生態系評価手法の開発

研究資金：戦略的創造研究推進事業（CREST プログラム）

研究概要：環境 DNA 分析によって、海域における魚類群集のモニタリングを行う手法を開発する。

(3) 国際共著論文・書籍

Abe, K. et al., including Aoki, S. (T2K collaboration) (2016) Measurement of the muon neutrino inclusive charged-current cross section in the energy range of 1–3 GeV with the T2K INGRID detector, *Phys. Rev. D* 93 (7), 072002, 1-23

Abe, K. et al., including Aoki, S. (T2K collaboration) (2016) Measurement of muon anti-neutrino oscillations with an accelerator-produced off-axis beam, *Phys. Rev. Lett.* 116 (18), 181801, 1-8

Abe, K. et al., including Aoki, S. (T2K collaboration) (2016) Measurement of double-differential muon neutrino charged-current interactions on C8H8 without pions in the final state using the T2K off-axis beam, *Phys. Rev. D* 93 (11), 112012, 1-25

Agafonova, N. et al., including Aoki, S. (OPERA collaboration) (2016) Determination of the muon charge sign with the dipolar spectrometers of the OPERA experiment, *JINST* 11 (07), P07022, 1-17

Abe, K. et al., including Aoki, S. (T2K collaboration) (2016) Measurement of Coherent π^+

Production in Low Energy Neutrino-Carbon Scattering, *Phys. Rev. Lett.* 117 (19), 192501, 1-7

Abe, K. et al., including Aoki, S. (T2K collaboration) (2017), First measurement of the muon neutrino charged current single pion production cross section on water with the T2K near detector, *Phys. Rev. D* 95 (1), 012010, 1-11

Kono, T. et al. including Ashida, H. (2017) A RuBisCO-mediated carbon metabolic pathway in methanogenic archaea, *Nature Communications*, 8, 14007, doi: 10.1038/ncomms 14007.

Hirayama, Y. (2017) Selling the Tokyo sky: Urban regeneration and luxury housing, in Forrest, R., Koh, S. Y. and Wissink, B. (eds.) *Cities and the Super-Rich: Real Estate, Elite Practices and Urban Political Economies*, Hampshire: Palgrave Macmillan.

ASTRO-H collaboration (F. Aharonan, et al., including M. Itoh) (2016) The quiescent intracluster medium in the core of the Perseus cluster, *Nature*, 535, 7610, 117-121

Aharonian, F. A. et al., including Itoh, M. (Hitomi collaboration) (2017) Hitomi Constraints on the 3.5 keV Line in the Perseus Galaxy Cluster, *Astrophysical Journal Letters*, 837, L15-24

Matsumoto, H. et al., including Itoh, M. (2016) Ray-tracing simulation and in-orbit performance of the ASTRO-H hard x-ray telescope (HXT), *Proceedings of the SPIE*, 9905, 990541-990546

Awaki, H. et al., including Itoh, M. (2016) Performance of ASTRO-H hard x-ray telescope (HXT), *Proceedings of the SPIE*, 9905, 990512-990519

Takahashi, T. et al., including Itoh, M. (2016) The ASTRO-H (Hitomi) x-ray astronomy satellite, *Proceedings of the SPIE*, 9905, 99050U-990517

Minamoto, T. (2017) Random Mutagenesis by Error-Prone Polymerase Chain Reaction Using a Heavy Water Solvent, in Reeves, A. (ed.) *Methods in Molecular Biology Volume 1498 In Vitro Mutagenesis*, Springer New York, 491-495.

Park, K., Ohkushi, K., Cho, H.G., and Khim, B-K. (2017) Lithostratigraphy and paleoceanography in the Chukchi Rise of the western Arctic Ocean since the last glacial period, *Polar Science*, vol. 11,

42-53.

大形徹・山里純一・大野朋子・佐々木聡・董涛・池内早紀子, 《千金翼方・禁經》与日本奈良市出土二條大路咒符木簡, 中国人民大学-美国羅格斯大学 首届国际道教文化前沿論壇 論文集, 中国・天岳幕阜山, pp.122-131, 2016

Wang, M., Khasanah, Sato, H., Takahashi, I., Zhang, J., and Ozaki, Y. (2016) Higher-Order Structure Formation of a Poly(3-hydroxybutyrate) Film during Solvent Evaporation, *RSC Adv.*, 6, 95021-95031

Khasanah, Reddy, K.R., Ogawa, S., Sato, H., Takahashi, I., and Ozaki, Y. (2016) Evolution of Intermediate and Highly Ordered Crystalline States under Spatial Confinement in Poly(3-hydroxybutyrate) Ultrathin Films, *Macromolecules*, 49, 4202-4210

Sato, H., Miyada, M., Yamamoto, S., Reddy, K.R., and Ozaki, Y. (2016) The C-H · · · O (Ether) Hydrogen Bonding along the (110) Direction in Polyglycolic Acid Studied by Infrared Spectroscopy, Wide-angle X-ray Diffraction, Quantum Chemical Calculations and Natural Bond Orbital Calculations, *RSC Adv.*, 6, 16817-16823

Yan, X., Sato, H. and Ozaki, Y. (2016) Raman and tip-enhanced Raman scattering spectroscopy studies of polymer nanocomposite: Spectroscopy of Polymer Nanocomposites (Chapter4), S. Thomas, D. Rouxel and D. Ponnammma (eds.), Elsevier, 88-111

Sato, M. Phim, M. and Managi, S. (2016), Valuing the shadow price of forest stock in a sustainability indicator, in Managi, S. (ed), *The Wealth of Nations and Regions*, London: Routledge, pp. 98-116.

Phim, R., Sato, M. and Managi, S. (2016), Valuing the shadow price of wetlands as a natural capital sustainability indicator and a case study from Japan”, in Managi, S. (ed), *The Wealth of Nations and Regions*, London: Routledge, pp. 117-131.

Sato, M., Samreth, S. and Sasaki, K. (2017) The Impact of Institutional Factors on the Performance of Genuine Savings, *International Journal of Sustainable Development & World Ecology* (refereed),

forthcoming. DOI: 10.1080/13504509.2017.1289990

Park, Y.H., Kim, J.K., Jang, T.M., Chae, H.M., and Takami, Y. (2016) Local climate mediates spatial and temporal variation in carabid beetle communities in three forests in Mount Odaesan, Korea, *Ecological Entomology*, online.

(4) 国際学会・会議等でのキーノートスピーチ, プレナリースピーチ等

Shigeki Aoki for GRAINE collaboration, Invited presentation, "GRAINE project: Cosmic Gamma-ray Observation by Balloon-Borne Telescope with Nuclear Emulsion", The 3rd International Symposium on "Quest for the Origin of Particles and the Universe" (KMI2017), (January, 2017; Nagoya Univ., Japan)

Yosuke Hirayama, Keynote speech, "Housing and Competition-oriented Urban Policy", Asia-Pacific Network for Housing Research Conference on Housing Issues in a New Epoch of Urbanization (18, December 2016; Sun Yat-sen University, Ghangzhou)

Yosuke Hirayama, Invited special lecture, "Housing and Social Change in Post-growth Japan" for International Housing Policies and Practices of the Masters of Housing Management, (20 February 2016; The University of Hong Kong, Hong Kong)

Masataka Kuwamura, Invited presentation, "Diffusion driven destabilization of a spatially homogeneous limit cycle in reaction-diffusion systems", The 2016 (26th) annual meeting of the Japanese Society for Mathematical Biology (8, September, 2016; Kyushu University, Fukuoka)

Toshifumi Minamoto, Invited presentation, "Application of environmental DNA analysis to ecological surveys", International Symposium of Probiotics Application on Aquaculture, (July, 2016; National Kao Hsiung Marine University, Kao-Hsiung, Taiwan)

Toshifumi Minamoto, invited lecture, "Environmental DNA analysis provides "snapshots" of species distribution", International symposium on alternative stable states: a unifying concept in global change ecology, (July, 2016; Kyoto University, Kyoto, Japan)

Toshifumi Minamoto, Invited presentation, "Environmental DNA analysis: introduction and some examples of target species detection", The 5th Japan-Taiwan Ecology Workshop, (November, 2016;

Ryukoku University, Kyoto, Japan)

Toshifumi Minamoto, Invited special lecture, “Environmental DNA analysis of macro-organisms and its application to ecological surveys”, (December, 2016; Zhejiang Ocean University, Zhoushan, China)

Nobuko Ohmido, Invited speaker, German-Japanese Symposium “Bridge Dresden-Japan“, ‘Perspective of effective plant usages for edible and energy plants’ (9 May 2016; Technische Universität Dresden, Dresden, Germany)

Nobuko Ohmido, Invited speaker, German-Japanese Symposium “Bridge Dresden-Japan“, ‘Chromatin modification and mobility in plant development’ (12 May 2016; The Leibniz Institute of Plant Genetics and Crop Plant Research, Gatersleben, Germany)

Harumi Sato, Invited presentation, “Higher-Order Structure of the Biodegradable Polymer Studied by Terahertz Spectroscopy”, (December, 2016; Japan-Taiwan Medical Spectroscopy International Symposium, Awaji Yumebutai International Conference Center, Japan)

Harumi Sato, Invited presentation, “THz and low-frequency Raman Spectroscopy of polymers”, 20th European Symposium on Polymer Spectroscopy (ESOPS20), (September, 2016; Dresden, Germany)

Masayuki Sato, Invited speech, “Valuing ecosystem services and natural capital from a sustainability perspective : Education implementation in Japan”, EfS in Asia 2016 Conference (22, April, 2016; Nanyang Technological University, Singapore)

Yasuoki Takami and Sogo Takahashi, Invited presentation, “Detecting divergent sexual selection operating upon divergent genital morphologies” In the Light of Morphometrics: Frontiers in Ecology and Evolution of Insect Morphology, 25th International Congress of Entomology (September, 2016; Orlando, Florida)

(人間環境学専攻長 平山洋介)

8. 産官学共同・地域連携による教育・研究活動

8.1. 産官学共同プロジェクト

(1)ベンチャー創成型産学共同研究プロジェクト

地球規模の温暖化阻止に向け世界的な取り組みの1つとして、国際民間航空機関 International Civil Aviation Organization(ICAO)は2013年の国際気候変動決議 A38-18により、2020年からカーボンニュートラルな成長に関する世界規模の努力目標(CNG2020)及び2050年までに2005年比50%削減が決議され、2016年にはCO₂削減の枠組みとして global market-based measure (GMBM) が合意された。国際線を運航する航空会社、またその関連企業から成る業界団体である国際航空運送協会 International Air Transport Association(IATA)も、航空機に関わるCO₂排出量を2050年までに50%削減(2005年比)することを掲げている。目標達成のためには、航空機の技術革新や運航方法の改善に加え、バイオジェット燃料の導入が不可欠であるとしており、2020年からのバイオ燃料の導入を目指している。

このような中、私達は新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)の支援を受け、2012年度より2016年度まで神戸大学発ベンチャー企業「ジーン・アンド・ジーンテクノロジー(G>)」株式会社により開発された高速増殖型オイル生産藻「ボトリオコッカス・ブラウニー(Hyper-Growth Botryococcus braunii, HGBb)」を使って、再生可能エネルギーの開発を行って来た。その結果、①2013年度には100m²完全野外培養に成功、②2015年度には1500m²完全野外培養試験に成功、③2016年度には東南アジアでの100m²の完全野外培養に成功、④2016年度にはさらにHGBb藻からのオイルの70%がバイオジェット燃料として利用可能であることを証明、⑤HGBb由来のオイルのジェット燃料としての国際認証テストを開始し、2019年度には文字通り航空機燃料として国際的に使用可能になる予定、⑥将来のオイル生産・増殖制御を目的に開発を続けてきたHGBb藻への遺伝子導入・組み換え体作製方法の開発でもボトリオコッカス藻への遺伝子導入法を開発した。

これらの成果を受けて、国産の「HGBb藻からのジェット燃料」生産の本格的事業化を視野に、2017年度からさらに4-5年間引き続きNEDOからの委託事業として研究開発を続けるべく、次年度から再スタートするNEDO委託事業：「バイオジェット燃料生産技術開発事業／一貫製造プロセスに関するパイロットスケール試験」において、研究開発テーマ：「高速増殖型ボトリオコッカスを使ったバイオジェット燃料生産一貫プロセスの開発」をスタートさせる予定である。

(人間環境学専攻 榎本 平)

8.2. 地域連携プロジェクト

(1) 「神戸マラソン 2016」

神戸マラソンの基本構想の審議をする「フルマラソン検討委員会」(2009)の委員長を務めてから、「第1回神戸マラソン 2011」から「第6回神戸マラソン 2016」と継続して、兵庫県と神戸市が主催する都市型市民マラソン大会のサポートをしてきた。今年度は、神戸マラソン 2016 実行委員会委員を務め、また大会参加者のイベント評価に関するランナー調査

およびボランティア調査のコーディネートを行った。

ランナー調査においては、発達科学部生涯スポーツゼミ生を中心に、1回生から4回生、院生及びOB・OGの合計15名が、フルマラソンのフィニッシュ地点において、ランナーに対する質問紙調査を実施した。回収した1,194票のデータ分析により、大会満足度や大会参加の決定要因、大会の魅力、大会参加支出などを調べ、性別、ランナータイプ別（スピードランナー、スロージョーカー）及び居住地別に比較した。

大会の満足度について、満足群の割合は「スタッフの対応」(98.1%)、「トイレ」(98.1%)、「大会全体の満足度」(97.7%)、「大会の運営全体」(97.4%)と高い満足度を示した。「大会の広報」、「大会の時期」、「沿道の応援」「参加賞」に関しても高い満足度が示された。ただ、前回の第5回大会よりも、若干、満足度が減少した。

大会参加に伴う観光行動は、約4分の1(25.5%)が、「観光した(予定)」と答えた。県内参加者に対して、県外参加者の観光行動は多く、約34%が観光し、観光先としては、1位「三宮センター街・旧居留地」、2位「南京町」、3位「ハーバーランド」の順で、三宮・元町周辺が中心であった。

また、兵庫県立大学地域経済指標研究会の一員として加わり、兵庫県立大学政策科学研究叢書LXXXIX『神戸マラソンの社会・経済的影響』と題する叢書の第2章「ランナーの動向と特徴」、第5章「今後の課題(神戸マラソンのあるべき姿)」を執筆し、株式会社ルネックより刊行された。

(人間発達専攻 山口泰雄)

(2) マスターズ甲子園プロジェクト

「マスターズ甲子園」は、全国の高校野球OB/OGが、性別、世代、甲子園出場・非出場、元プロ・アマチュア等のキャリアの壁を越えて出身校別に同窓会チームを結成し、全員共通の憧れであり野球の原点でもあった「甲子園球場」で白球を追いかける夢の舞台を目指そうとするものである。全国200万人と推計される元高校球児による各地域でのOB/OG野球クラブの活性化、生涯スポーツとしての野球文化の発展、熟年(マスターズ)世代と

共に高校球児を含めたユース世代にも応援メッセージを発信しながら、活力と夢に満ちた個人・地域・社会・未来への創造と発展に寄与していくことを開催目的とし、神戸大学発達科学部の教員、職員、学生が中心となって産官学民の連携体制により 2004 年から第 1 回大会を始動した。大会事務局と主催団体である全国高校野球 OB クラブ連合の事務局を神戸大学発達科学部内のスポーツプロモーション研究室に併設し、神戸大学による後援のもと、大学による社会貢献活動とアクションリサーチを展開すると共に、スポーツ振興や生涯教育、老年学等のテーマに興味を持つ大学生が、成人・中高年のスポーツ活動支援や生きがい創造支援への直接的関与を可能にしていくための、学内外における学習機会として機能していくことを目指している。今年度の事務局運営は、大会開催日（11 月 5 日・6 日）が正式決定する 3 月下旬から始動し、その後、平均して週 1 回の大会運営委員会を開催し、2 月から 9 月までの期間で開催された各都道府県における地方予選大会支援と並行しながら、甲子園本大会に向けてのプログラム立案、出場者受付、PR・広報事業、財源の確保、ボランティアマネジメント等の準備作業を進め、大会前日の総会運営、大会当日運営、大会終了後の事後処理を行った。マスターズ甲子園 2016（第 13 回大会）には、16 都府県の地方予選大会から代表 16 チーム（計 723 名）が出場し、また、甲子園キャッチボール（元高校野球関係者、親子、夫婦、過去のボランティア参加者によるペアによる自由参加プログラム）に 570 人が参加した。神戸大学学生・院生を中心とした全国の学生ボランティア、成人・中高年ボランティア、近畿圏の高校生を含めた計 780 名のボランティアがスポーツプロモーションの一環として大会運営を支え、本学部からは、教員 2 名、大学院生 4 名、学部生 43 名、本学部卒業生 39 名が参加した。現在、大会事務局が運営する全国高校野球 OB クラブ連合には 37 都道府県、約 2 万人が登録し、各地方組織と本大会を支える民間団体や行政組織との連携事業として本プロジェクトを進めていく。

（人間発達専攻 長ヶ原誠）

(3)兵庫県三木市との連携事業

兵庫県三木市と神戸大学とが協定を結んだ連携事業が進んでいる。その一環として、三木市の掲げる「次世代育成プロジェクト事業」には主に本研究科が参加して、2012 年度から「確かな学力向上プロジェクト」がスタートした。2016 年度は、「三木市学力向上推進委員会」の開催（2012 年度～、委員長：渡部／副委員長：山下）、神戸大学スタッフの研修講師派遣（2013 年度～）、などが行われた。8 中学校の校区を順次指定しての「三木市学力向上サポート事業」（2014 年度～）に関しては、2015-16 年度指定の星陽中学校&豊地小学校、口吉川小学校が研究発表会を開催した。星陽中・豊地小合同による研究発表会では、川地が「自分のことばで表現する子どもを育てる授業とは一深い学びとアクティブラ

ーニングー」と題した記念講演を行った。2017年度も引き続き、共同の取り組みが展開される予定である。
(人間発達専攻・学び系 渡部昭男・山下晃一・川地亜弥子)

(4) 「兵庫障害児放課後ネットワーク」

兵庫障害児放課後ネットワークは、10年前、先進的な取り組みを始めていた学童保育などの関係者とともに結成され、実践を進めるための情報交換などを行ってきた。ここ数年、放課後等デイサービスの事業所数は急増し、本ネットワークは情報交換や研修の発信役として期待が高まっている。今年度は、2016年4月17日に第11回総会（神戸市勤労会館）を開催し、70名の関係者が参加して、実践報告と講演会を行った。また、2016年11月16日には「放課後活動にかかわる人のための学習会」を開催し、講演会と実践交流会を行った。26事業所50名の関係者が参加して、障害のある子どもの放課後保障の取り組みについて、日々の実践に有益な意見交換ができた。今後も、発達研究の成果を地域での発達保障ネットワークづくりに生かしていきたい。

(人間発達専攻 木下孝司)

(5) 千種川流域の環境保全活動

神戸大学サイエンスショップは、平成25年度より兵庫県の千種川水系佐用川流域の市民グループ「佐用川のオオサンショウウオを守る会」の環境保全、啓発活動等への協力を行ってきた。平成27年度より、サイエンスショップがコーディネートを行い、千種川流域圏で活動するグループ「千種川圏域清流づくり委員会」による環境モニタリングの取組「千種川一斉水温調査」（8月）への総合地球環境学研究所及び神戸大学人間発達環境学研究科の研究者の参画・協力を開始し、平成28年度も実施した。この調査は、同委員会が15年間にわたり継続してきた河川において生物種の生息の重要な要件の一つとなる夏季の水温等の市民による多地点同時調査であるが、専門家との協働により、同位体分析等、より多くの項目の調査・分析を行う形に発展した。平成28年8月の調査には、発達科学部人間環境学科の学生6名と他大学の学生3名が参加し、採取試料の処理などを補助した。このうち発達科学部人間環境学科の学生が、試料の分析と結果のとりまとめにおいて大きな役割を果たし、総合地球環境学研究所において開催された第6回同位体環境学シンポジウム（平成28年12月）、および兵庫県立人と自然の博物館において開催された第12回共生のひろば（平成29年2月）において結果を報告した。今後、地域の人々にどのようにしてわかりやすい形で結果とその意味をフィードバックしていくかが重要な課題となる。なお、この取組は、神戸大学教育研究活性化支援経費の支援を受けた地域連携事業の一環として実施

されている。

(人間環境学専攻/サイエンスショップ 伊藤真之・大串健一)

8.3. 高大連携

教育連携推進室として、高大連携の取り組みを推進した。主に全学の高大連携推進事業に基づいて、兵庫下県下の指定校からの大学訪問、公開授業、出前授業などの要請に精力的に対応した。学部・研究科としての高大連携窓口が必ずしも明確ではなかった昨年までと異なり、今年度は教育連携推進室が当該事業を統括できたことで、学部・専攻での講師派遣の決定などが円滑に行われたといえる。また、神戸大学附属中等教育学校との高大継続研究にも

参加し、主に、高校生の課題研究に関する指導教員の配置などを行っている。

(教育連携推進室長 稲垣成哲)

平成 28 年度高大連携事業

高校名	実施年月日	対応教員名	事業内容	
			事業内容	詳細
兵庫県立篠山鳳鳴高等学校 校・兵庫県立篠山東雲高等学校	2016/5/21	清野未恵子		篠山市内の河川の希少種調査の指導
神戸市立六甲アイランド高等学校	2016年6月～ 2017年2月	津田 英二	その他	カフェ・アゴラにおいて実習
兵庫県立 明石北高等学校	2016/6/6	増本 康平	模擬授業	
神戸大学附属中等教育学校	2016/6/24	林 創	出前授業	個人研究にあたっての講義
兵庫県立 北摂三田高等学校	2016/7/7	岡田 章宏	出前授業	
兵庫県立 尼崎高等学校	2016/7/13	長坂 耕作	施設見学	研究室の見学・説明
神戸大学附属中等教育学校	2016/7/19	林 創	その他	平成28年度 Kobe プロジェクト卒業研究優秀者発表会 講評

兵庫県立篠山鳳鳴高等学校・兵庫県立篠山東雲高等学校	2016/7/24	清野未恵子		篠山市内の河川の希少種調査の指導と住民向け説明会の開催
武庫川女子大学附属中学校・高等学校	7/26～27	青木 茂樹 伊藤 真之 佐藤 春実 源 利文	その他	実験・実習
兵庫県立 龍野高等学校	2016/7/29	伊藤 真之 源 利文	模擬授業	
私立 金蘭千里高等学校	2016/8/3	源 利文	その他	実験・実習
兵庫県立篠山鳳鳴高等学校・兵庫県立篠山東雲高等学校	2016/8/6	清野未恵子		篠山市内の河川の希少種調査の指導
京都府立 園部高等学校	2016/8/22	赤木 和重	その他	研究内容について学ぶ
兵庫県立 豊岡高等学校	8/22～23	伊藤 真之	模擬授業	
西宮市立 西宮東高等学校	2016/8/24	源 利文	授業見学	講義・研究室施設 見学
兵庫県立 豊岡高等学校	8/26～27	源 利文	その他	実験・実習
兵庫県立 兵庫高等学校	2016/9/14	稲葉 太一	出前授業	講義と研究発表の 補助
徳島県立 脇町高等学校	2016/9/21	林 創	その他	指導助言
兵庫県立 明石北高等学校	2016/9/26	伊藤 真之	その他	指導助言
兵庫県立 兵庫高等学校	2016/9/28	稲葉 太一	出前授業	講義と研究発表の 補助
兵庫県立 御影高等学校	2016/10/4	太田 和宏	出前授業	講義とワークショップ
熊本県立 済々黌高等学校	2016/10/6	林 創	その他	SG職員研修講演 会

兵庫県立篠山鳳鳴高等学校・兵庫県立篠山東雲高等学校	2016/10/8	清野未恵子		篠山市内の河川の希少種調査の指導
兵庫県立 兵庫高等学校	2016/10/12	稲葉 太一	出前授業	講義と研究発表の補助
尼崎市立 尼崎高等学校	2016/10/13	林 創	出前授業	
女子中高生のための関西科学塾	2016/10/16	源 利文 近江戸 伸子	模擬授業	
沖縄県進学力グレードアップ推進事業	2016/10/20	江原 靖人	模擬授業	
兵庫県立 加古川東高等学校	2016/10/22	林 創	出前授業	
兵庫県立 星陵高等学校	2016/10/28	吉田 圭吾 伊藤 俊樹	模擬授業	
沖縄県進学力グレードアップ推進事業	2016/11/10	源 利文	模擬授業	
兵庫県立 兵庫高等学校	2016/11/14	渡邊 隆信 川地 亜弥子	模擬授業	講義・施設見学, 新学部子ども教育 学科紹介
兵庫県立 加古川西高等学校	2016/11/15	岡田 章宏 吉永 潤	模擬授業	学部・学科説明・ 施設見学
兵庫県立 兵庫高等学校	2016/11/16	稲葉 太一	出前授業	講義と研究発表の 補助
兵庫県立 兵庫高等学校	2016/11/22	稲葉 太一	出前授業	講義と研究発表の 補助
兵庫県立 尼崎稲園高等学校	2016/11/24	岡田 章宏	出前授業	
兵庫県立 星陵高等学校	2016/11/28	江原 靖人	出前授業	校内発表会と講義
広島県立 福山誠之館高等学校	2016/12/14	林 創	その他	探求的な学習につ いての講演
兵庫県立 兵庫高等学校	2016/12/16	橋本 直人	出前授業	

兵庫県立篠山鳳鳴高等学校・兵庫県立篠山東雲高等学校	2016/12/17	清野未恵子		篠山市内の河川の希少種調査の指導
兵庫県立 兵庫高等学校	2016/12/21	岡田 章宏	その他	講演
兵庫県立 星陵高等学校	2017/1/23	伊藤 真之	出前授業	校内発表会と講義
兵庫県立 兵庫高等学校	2017/1/25	稲葉 太一	出前授業	講義と研究発表の補助
神戸大学附属中等教育学校	2017/2/6	林 創	その他	指導助言
兵庫県立 兵庫高等学校	2017/2/8	稲葉 太一	出前授業	講義と研究発表の補助
兵庫県立篠山鳳鳴高等学校・兵庫県立篠山東雲高等学校	2017/2/12	清野未恵子		篠山市内の河川の希少種調査のデータ整理に関する指導助言
兵庫県立 星陵高等学校	2017/3/6	蛭名 邦禎	その他	指導助言
兵庫県立 三田祥雲館高等学校	2017/3/6	伊藤 真之	その他	校内発表会と講評
兵庫県立 西脇高等学校	2017/3/8	蛭名 邦禎	その他	課題研究の進め方等の指導
兵庫県立 西脇北高等学校	2017/3/13	源 利文 伊藤 真之	施設見学	研究室見学 課題研究への指導

○出前授業: 高校等へ本学教員を派遣し、授業を行うもの

○模擬授業: 「大学体験」として高校生への訪問を受け入れ、高校生向けの授業を行うもの

○施設見学: 研究室見学を含む

○その他: 上記以外のもの

9. 社会的活動・震災復興支援

9.1. メンタルケア関係

(1)心のケア事業

神戸大学平成 28 年度震災復興支援・災害科学研究推進活動サポート経費として採択された「東日本大震災の心理的影響と支援のあり方に関する継続的研究」を活用して、福島県中通り地区で以下の事業を行った。

1)教員等に対する研修事業

①福島県県北養護教諭部会の研修会（12 月 22 日）：被災経験をもつ教員や生徒の自己肯定感の現状と課題に関する共同研究について助言指導と、データの分析方法や解釈に関わる講義を行った。

②NPO 法人ビーンズふくしま心理臨床スタッフの研修会(8 月 22 日)：日本心理臨床学会第 34 会秋季大会で発表した「東日本大震災による仮設住宅居住親子への支援」を中心に、これまでの心理臨床実践の資料としての集約のあり方について検討を行った。

2)生徒に対する支援事業

①福島県立福島南高等学校保健講話（6 月 9 日）：1，2 年生に対して「自分の心を見つめて」をテーマに、YG 性格検査の結果をもとに自分の性格を把握し、アピールする点や変えたい点を認識しながら、震災後の福島でどのように生きていくかについて講義を行った。3 年生に対して「受験期のストレスマネジメント」をテーマに、被災地で暮らしていることによる震災ストレスと、大学受験，就職試験を控えた進路選択に関わるストレスの両者とどのように折り合いをつけ、対処していくかについて、講義を行った。

(2)心のケアに関わる学会での発信事業

これまでの事業や調査で得られた成果を国際学会で外国人研究者に発信した。

①ISSBD(国際行動発達学会)第 24 回大会(7 月 10-14 日/リトアニア・ビリニュス)

②ICP(国際心理学会議)2016(7 月 24 日-29 日/横浜)

東日本大震災における津波や原発事故がどのような心理的影響を与えるのか、またそうした災害体験がレジリエンス，PTG，生き方とどのように関わるのかについて発表を行い、情報発信をした。

(人間発達専攻 齊藤誠一)

9.2. 災害地への支援活動

東日本大震災復興支援 岩手県大船渡市赤崎町

平成 23 年 3 月 11 日に津波によって大きな被害を受けた大船渡市への復興支援は、今年度で 6 年になる。阪神淡路大震災後の復興のプロセスと比較するまでもなく、その復興の

速度は遅い。ようやく防災集団移転，災害公営住宅移転ができつつあるが，住環境や防潮堤建設に力点が置かれてきたため，第三次産業の復活は遅く，商店街不在，社会福祉・医療などの社会サービスの低下といった状況は，いまだ改善できていない。

とりわけ，中心街のほとんどを津波で失った同市赤崎町は，そのいずれにおいても，もともと大船渡で遅れている地域である。2016年度段階では，同地区にある三つの仮設住宅に入居している人はいまだ多い。

こうした八方塞がりにも思えるまちの現状を打破し，町民のまちづくりの意欲を喪失させないために，本学の支援で運営されている「赤崎復興隊」（中赤崎復興委員会・赤崎地区公民館主催事業）は，今年度も精力的に活動した。赤崎復興隊は，平成24年10月に赤崎町民の有志と，本学の学生・教職員によって構成される「まちづくり推進共同体」である。本学学生たちは，平成24年11月以後，月に一度，赤崎地区公民館（平成24年5月1日に，本研究科と連携協定と締結）で5人～20人が，現地に赴き，ボランティアとして活動してきた。

本年度も，跡地を活用した赤崎復興市の企画・運営，現地の中学生・高校生による「赤崎復興隊ユース」の活動支援を中心に，月に一度，現地の復興隊メンバーとともに活動した。それに加え，大船渡市の大祭（5月）にもボランティアとして参加し，開催のお手伝いをした。現地の人たちからは「おらがまちの若衆」と呼ばれ，ますますその信頼の度を増している。

また，学生たちは，ほぼ毎月，赤崎地区公民館（平成24年5月1日，本研究科とのあいだで連携協定締結）で開催される「復興隊のつどい」にメンバーとして参加し，復興に即した具体的な事業の立案に貢献している。

さらに，平成23年7月からほぼ5年間続いている「11えん募金」も，いまだ継続している。毎月，「11日」に，3・11と1・17のご縁を紡ぐことを目的に，六甲道駅前で朝・昼・夜の3回にわたり，募金活動をおこなっている。月によってばらつきがあるが，本学学生のみならず，神戸市民の参画を得ながら，10名内外の学生が，思いを込めて活動している。この活動は，多くの神戸市民から，直接励ましの声をいただくとともに，赤崎の人たちからも感謝の言葉をいただいている。今年度，大船渡市に10万円，中赤崎復興基金（被災住民の基金）に15万円を寄付した。

学生の活動同様，教職員の支援活動も活発である。ヒューマン・コミュニティ創成研究センターの松岡広路，朴木佳緒留，社会環境論コースの井口克郎准教授は，交互に月一度は現地を訪問し，「赤崎復興隊のつどい」のファシリテーターを務めている。また，大船渡市復興局との活動調整や，外部団体の活動を組み入れるコーディネーターとしての役割も果たしている。まちづくりと公民館活動の活性化を連動させる方策を提示してきた。また，

跡地の土地利用計画のための学習活動の組織化や、女性のエンパワメントの方策についても、アドバイザーとして提案している。

赤崎町のまちづくりが順調に進むには、まだまだ時間が必要である。そして、外部からの資本（人的・物的・アイデア・社会関係）なしには、その持続的な発展は、到底、考えられるものではない。如何に、被災地と外部地域の関係を切り結ぶのか、という新しい被災地支援の問いに答えることのできるアクションリサーチを、今後も続けている決意である。

（人間発達専攻 松岡広路）

10. 附属施設

10.1. 発達支援インスティテュート

10.1.1. 発達支援インスティテュート運営委員会

本委員会は岡田修一発達支援インスティテュート長（研究科長）、松岡広路ヒューマンコミュニティ創成研究センター長、相澤直樹心理教育相談室長、伊藤真之サイエンスショップ副室長、稲垣成哲教育連携推進室長、及び近藤徳彦アクティブ・エイジング研究センター長で構成される。

今年度も本委員会を毎月 1 回のペースで開催し、研究科としての研究基盤の強化を図ると同時に、毎回各室・センターの活動報告を定例化し相互の連携を強めた。特に、平成 28 年度研究科の中期計画に記述した発達支援インスティテュートの拡充・改組に係る検討を行った。

なお、本委員会の検討事項は以下のとおり。

	検討事項
第 1 回（4 月 13 日）	第 3 期中期目標期間前半の構想についてーアクション・リサーチ型共同研究プロジェクトについて検討ー 発達支援インスティテュート報告会について
第 2 回（5 月 25 日）	第 3 期中期目標期間前半の構想について 発達支援インスティテュートの報告会について ヒューマン・コミュニティ創成研究センター規程の一部改正について
第 3 回（6 月 29 日）	第 3 期中期目標期間前半の構想について 発達支援インスティテュートの見える化について
第 4 回（7 月 27 日）	第 3 期中期目標期間前半の構想について 発達支援インスティテュートの見える化について
第 5 回（9 月 13 日）	第 3 期中期目標期間前半の構想について 発達支援インスティテュートの見える化について
第 6 回（10 月 20 日）	発達支援インスティテュートに関する部局年次計画と平成 28 年度上半期の進捗状況について 人間の発達及びそれを支える環境に関わる実践型共同研究プロジェクト 発達支援インスティテュートの機能強化をめざした体制の再構築について

第7回（11月17日）	研究科における研究のヤマ→研究科の教育研究活動の見える化 発達支援インスティテュートの機能強化をめざした体制の再構築について
第8回（12月26日）	先端融合研究環プロジェクトにかかる報告について 平成30年度概算要求について
第9回（1月31日）	平成30年度概算要求について 発達支援インスティテュートの拡充・改組について
第10回（2月30日）	平成30年度概算要求について 発達支援インスティテュートの拡充・改組について
第11回（3月8日）	ヒューマン・コミュニティ創成研究センター規定の改正について 発達支援インスティテュートの拡充・改組について

（発達支援インスティテュート長 岡田修一）

10.1.2. 心理教育相談室

心理教育相談室は、市民を対象とし、地域に開かれた相談室である。臨床心理学や心理療法に関する知見を生かして、地域の人々の心の健康に貢献することを目的としている。同時に、当相談室は、本研究科人間発達専攻臨床心理学コースが臨床心理士養成第I種指定校としての認可を維持するために必要な実習機関であり、コース所属の学生たちの臨床訓練の場として機能する目的を有している。平成12年度に、総合人間科学研究科の附属施設として設立され、平成17年度からは同研究科附属発達支援インスティテュートの一部門に位置づけられた。心理教育上のさまざまな問題について、臨床心理学の立場から専門的な援助を提供する活動を行っている。年間を通じて開室し（年末年始、お盆の大学の一斉休業期間を除く）、カウンセリング、プレイ・セラピーなどの心理療法を中心に、必要に応じて心理テストを実施するなどの心理臨床実践を行っている。相談は有料である。相談内容は、幼児期・児童期に家庭や学校でみられる発達教育上の問題、青年期のアイデンティティ形成に絡む課題、成人期のメンタルヘルス、熟年期の家族関係や生き方に関することなど、多岐にわたっている。

相談室は、心理教育相談室運営委員会により管理運営される。委員会の構成員は、運営委員会委員長の研究科長をはじめ、相談室長、副相談室長、ほか2名の委員からなる。また、本年度の相談室スタッフは、教員5名（臨床心理学コース担当、臨床心理士）、博士後期課程心理発達論講座院生6名、前期課程臨床心理学コース院生24名（M1：12名、M2：12名）、事務補佐員1名である。なお、本相談室が臨床心理士養成第I種指定校に関わる実習機関であることは前述のとおりであるが、前年度臨床心理学コースを終了した9名の

研修生は全員本年度の臨床心理士試験に合格している。

新規の相談申込みは、基本的に電話受付によって行われている。この受付業務も、臨床心理学コースの授業「臨床心理基礎実習」の一環となっており、修士課程1年(M1)の学生たちが相談室スタッフの一員として交代で臨んでいる。受付時間は、月曜日の午後1時～2時45分、火曜日～金曜日の午後1時～6時(いずれも祝日は除く)である(年末年始の1週間、お盆前後の2週間ほどは閉室)。毎年30件弱の新規相談申込みがあり、受理面接、インテークカンファレンスを経て面接受理、担当者、継続面接の形式等が決定される。年間相談件数は、平成22年度以降おおむね1000件程度で推移しており、地域住民の心の健康に貢献する心理相談機関として並びに臨床心理士養成に関わる実習機関として適切な程度の活動実績を保持している。なお、詳細な面接受付件数、面接受理数、面接回数等は年次報告資料編に掲載するとおりである。

平成22年度より、『神戸大学大学院発達支援インスティテュート心理教育相談室紀要』が年1回創刊され、院生たちが心理臨床の実践研究をまとめる場となっている。今年度の第7号は、事例研究論文1篇、相談室主催子育て支援セミナーの報告論文1篇を含む。

また、今年度は、発達支援インスティテュートHCセンターサテライト施設「のびやかスペース・あーち」との共同で一般の子育て中の保護者を対象に「心理教育相談室子育て支援セミナー『親の悩みと子どもも気持ち』」を開催した。心理教育相談室の臨床相談員が講師となり、「こらぼ・あーち」にて11月中に4回開催され、延べ73名の参加があった。セミナーの担当講師、内容、日時は以下のとおりである。

心理教育相談室子育て支援セミナー「親の悩みと子どもの気持ち」

コース①[11月15日(火) 10:45～12:15]

『思春期の子どもの心理と親子関係～反抗と従順と衝動的な行為を巡って～』

吉田圭吾 神戸大学大学院人間発達環境学研究科 教授 臨床心理士

コース②[11月22日(火) 13:00～14:30]

『子どもの「こころ」とイメージ～イメージを通じて表現される「こころ」について～』

伊藤俊樹 神戸大学大学院人間発達環境学研究科 准教授 臨床心理士

コース③[11月25日(金) 10:45～12:15]

『乳幼児期の親子関係と心の絆 ～ベビーサインでコミュニケーション!～』

河崎佳子 神戸大学大学院人間発達環境学研究科 教授 臨床心理士

コース④11月30日(水) 10:45～12:15

『思春期の子どもの傷つきやすさにより添う～子どもの心の育ちの観点から～』

相澤直樹 神戸大学大学院人間発達環境学研究科 准教授 臨床心理士

(心理教育相談室長 相澤直樹)

10.1.3. ヒューマン・コミュニティ創成研究センター

(1) 子ども・家庭支援部門

2016年度は、以下の各事業を実施した。

◆ドロップイン事業「ふらっと」(2005年度より継続)

「あーち」の基盤サービスの一つである。子育てひろばの提供と利用者間の交流促進、相談援助、情報提供を実施している。親子の見守りや子育て相談にあたっては、灘区保健福祉部、灘区公立保育所、神戸市 地域子育て支援センター灘などの協力を得ている。

◆アウトリーチ事業「ペリネイタル・アウトリーチ・サービス」(2006年度より継続)

早期からの拠点(ひろば)利用を促す「あーち」のもう一つの基盤サービス。地域の産婦人科と連携し、その医師・助産師が「あーち」を紹介し、親子の利用を促す。

◆コネクション事業「ビギナーズ交流会」(2012年度より継続)

「あーち」の利用開始後間もない(主に月齢6か月未満児をもつ)親同士をつなぎ、その交流を促すコネクション・プログラムを実施。利用者が「孤立・依存」から脱し、自己をエンパワメントさせていく契機となる取組である。

◆ペアレンティング事業「0歳児のパパママセミナー」(2006年度より継続)

初めて赤ちゃんを育てる家庭への予防的な親教育および仲間づくりプログラム(5月～より12月・月1回第2土曜日・計7回)である。募集にあたって灘区保健福祉部の協力を得た。

◆ペアレンティング事業「パパと遊ぼう」(2015年度より継続)

土曜日の男性(父親)利用が増加したことを踏まえ、1歳前後の子どもを育てる家族(母や祖父母も参加可)を対象とした男性の育児参加を応援するプログラム。保育士が、家庭でも親子で楽しめる多様な遊びをファシリテートする。6月4日、2月4日に実施した。

◆次世代育成事業「中・高生の赤ちゃんふれあい体験学習」(2006年度より継続)

地域の中学生・高校生(西宮市の公立高校の生徒も含む)と、上記「0歳児のパパママセミナー」に参加する親と子(赤ちゃん)とのふれあい体験学習(5月～12月・月1回第2土曜日・計7回)を実施した。地域の中学生・高校生の参加については、灘区内のNPO法人S-spaceが運営するユースステーション灘の協力を得た。

◆専門職支援事業「保育士のためのステップアップ・セミナー」(2006年度より継続)

「あーち」と連携関係にある地域の保育士の資質向上を目的としたセミナー。11月9日・11月22日に実施した。「発達につまずきのある子どもや親への対応」および「事故や病気に備えた救急対応」に焦点をあてた2回シリーズのセミナー(会場は灘区役所)を提供した。神戸市灘区保健福祉部、神戸松蔭女子学院大学教員、本研究科博士課程院生の協力を得た。
(担当 伊藤篤)

(2) 障害共生支援部門

1. 旧灘区役所跡地で実施してきた「のびやかスペースあーち」の老朽化に伴う移転作業を行い、10月からは神戸市及び灘区連合婦人会との連携で、移転先での新しいプログラム「よる・あーち」の企画・運営を行った。「学習支援」「子ども食堂」「居場所づくり」を合わせたプログラムで、毎週金曜日の夕方から夜にかけて実施した。経済的貧困、障害、不登校などの脆弱性を伴うニーズのある子どもや家族を対象とした実践で、従来の「あーち」での実践の成果を引き継いで多様な利用者のインフォーマルな相互教育が進んだ。
2. 「のびやかスペースあーち」において、障がい児を中心とした居場所づくりプログラムを毎週継続実施した。属性や立場が異なる多様な人たちが相互に関心をもちコミュニケーションを活性化するために開いているプログラムである。プログラム内容は、地域住民や学生が、子どもたちとの親密な関わりに基づいて計画・実施する。普段は、音楽プログラムや造形プログラム、季節ごとのイベント、料理プログラムなど、多彩なプログラムを行う。10月からは上記「よる・あーち」の一部として、さらに地域への広がりのある実践に育ちつつある。
3. 「のびやかスペースあーち」において、利用者の多様性及び利用者間のコミュニケーションを活性化するため、「らくがきおばさんがやってくる」「アートセラピー」「あーち博物館」「音楽の広場」といった表現系プログラム支援を継続して行った。今年度は、博物館実習の枠組みによる教育活動ともリンクした「あーち博物館」として、社会福祉法人たんぽぽ、版画家脇谷紘氏との連携による企画展「遊ぼ」、大田美佐子ゼミ、NPO 法人神戸と子どもネットワークとの連携による平和展「歌いつがれてきた平和」を実施した。また、被災地（宮城県の人口流出地域）の障害者施設との交流を進め、障害者アートを介したまちづくり支援の可能性を探った。
4. カフェ「アゴラ」において障害者キャリア教育支援を継続実施した。雇用のチャンスに恵まれない知的障害者を実習生として募集し、カフェ「アゴラ」を中心に社会的活動を提供するプログラムであり、2名の実習生に対する支援を継続的に行った。障害者雇用の継続にも取り組み、学生が障がい者就労の場面を間近に関わることのできる状況を継続させた。今年度もNPO 法人コミュニティサポートセンター神戸との連携により、実習生1名を住吉駅駐輪場整備の仕事に従事させた。また、障害者雇用の拡大も進め、障害のある従業員が抱える課題の解決を模索した。
5. インクルーシブな地域社会創成をめざす学童保育つむぎ、社会福祉法人たんぽぽの運営協力・連携協力や助言などを行った。
6. 知的障害者が自律的に記事を書き編集する新聞づくり支援を通して、知的障害者のセルフアドボカシー支援を継続的に実施した。

7. 韓国ナザレ大学, ソウル市立知的障碍人福祉館との交流活動を進展させ, スタディツア一の企画運営について協議した。また, 日韓の大学院生を組織化し共同研究を遂行し, 共同執筆論文を編集・執筆した。加えて, 社団法人韓国社会福祉政策研究院研究員として委嘱を受け, 発達障害人材開発センター開所の協力を行った。

(担当 津田英二)

(3) ボランティア社会・学習支援部門

1. 「震災復興支援プロジェクト」の企画・実施支援

2011年3月11日に発災した北東日本大震災で大きな被害を受けた岩手県大船渡市赤崎町(死者47名, 被害家屋約900戸/全1429)の支援は6年目となった。災害公営住宅の建設, 高台移転が徐々に進み, いよいよ復活のまちおこしが期待されるようになってきた。緊急時支援・復旧支援から, 生活支援・まちづくり支援に活動の内容が移行するなかで, 遠方のボランティアの役割はなにか? 真の復興に行きつくために今できることは何か? これらを, 学生ボランティアとだけではなく, 被災住民と共に考え, 少しずつ企画や事業を実行してきた。

昨年同様, 神戸大学基金, 震災復興・防災科学推進室, 人間発達科学研究科, 都市安全研究センターの支援を受けながら, あるいは, 「11えん募金」を通しての神戸市民からの支援を受けて, ほぼ毎月, 全10回にわたり現地で活動した。2016年度参加学生ボランティア数はのべ約80名で, 本プロジェクトのメンバーとして被災地で活動した。中赤崎復興委員会の活動を実質化するために, 「赤崎復興隊のつどい」支援とソーシャルビジネスを通してまちの活性化を図る「赤崎復興市プロジェクト」の活動支援に全力を尽くした。復興の現実はいまだ厳しいが, まちの消滅を防ぐための方法を, 主にESD・社会教育の観点から探っている。

◇「赤崎復興市」の活動支援

年4回(6月, 7月, 9月, 11月), 津波の跡地を活用して開催された赤崎町の復興市の企画・運営を, 学生ボランティアの協力を得て支えてきた。このなかで, 学生企画「たこ焼きプロジェクト」を通して, 赤崎の中高生が復興活動に参加するきっかけを生むことができたり, 仮設住宅の人たちが物を作りうる喜びを感じたり, 町外に出てしまった元赤崎町民の人の再会の場をつくることができた。

◇「ユースリターンプロジェクト」の実施

東北在住で大船渡市赤崎出身の大学生・若者が, 上記の赤崎復興市を含むわれわれの活動に共に参加をしてくれる場合, 交通費を補助しようとするプロジェクトである。発災後6年も発つと, 当時中学生であった被災地の子供たちも大学生になる。岩手県一関

や仙台近郊の大学に在学している赤崎出身者こそが、これからのまちづくりの担い手になる。われわれや赤崎復興隊の活動への参加奨励を通して、「未来のまちづくりの主役」を育てることを目的とする。財源は、毎月11日に、JR六甲道で行っている「11えん募金」である。

以上のように、「災害復旧ボランティア」から「生活支援ボランティア」に、そして、「復興のまちづくり支援ボランティア」へと活動の質を変えるとともに、活動の普遍化を意図する研究活動も徐々に鮮明になってきた。

2. ESD ボランティア育成プログラム推進プロジェクトの実施

「ESD ボランティア育成プログラム推進ネット(ぼらばん)支援プロジェクト」も本年度で10年を経過した。

今年度も、2016年5月、6月、7月、8月、9月、10月、11月、1月、2月、3月の10回にわたり、岡山県の長島にある「国立ハンセン病療養所 邑久光明園」において「住民との交流」「将来計画関連事業」「集いの広場開墾事業」などを中身とする「ワークキャンプ」を実施した。神戸大学メンバーだけではなく、岡山県の中学生、高校生、大学生の参加も得て、各回の参加者はいずれも30名を超え、活動は定着している。また、昨年度同様、1月には、ESD サブコース「ESD 論」のオプション・フィールドワーク先として、学生たちを受け入れた。

さらに、すでに神戸大学大学院人間発達環境学研究科と邑久光明園・自治会との連携を拡張し、新学部(国際人間科学部)を含む「連携協定」を11月1日に締結した。これにより、2017年度からは、GSPの国内フィールドワーク先に認定されることになった。

3. ESD 推進関係の事業

◇ESD 推進ネットひょうご神戸(国連大学認証組織:RCE 兵庫神戸)の活性化支援

ESD 推進ネットひょうご神戸の再組織化・再活性化をめざした世話人準備会をほぼ毎月実施した。また、ネットワーク総会議(2016年9月)、運営委員会(2016年5月、9月、12月)の開催支援をし、新しいESDの形態を地域社会に構築する支援を行った。

具体的な事業としては、ESD グローカルスタディツアープログラムを、30を超える参加団体・参加者の協力を得て実施した。昨年度、ESD スタディツアープログラムの推進ツールとして、ITを活用した「ESD ツアーポータル作成サイト」を開発したが、これを本格的に実施する運びとなった。本学のESD 基礎・ESD ボランティア論のサービスマーケティングの媒体であるだけでなく、神戸学院大学、関西学院大学、兵庫大学などの学生がESDの世界に触れるシステムとして機能しつつある。

◇第1回 ESD 実践研究集会の開催

2016年9月24日(土)、本研究科において記念すべき「第1回 ESD 実践研究集会」を

開催した。ESD の現在・過去・未来を探求するシンポジウム、サステナビリティに関連する学内外の組織のポスター発表によって構成された研究会に、延べ 100 人を超える参加者が集まった。今後も、学会活動へと発展することを企図して継続していく予定である。

(担当 松岡広路)

(4)ジェンダー文化・学習支援部門

「ジェンダー」や「生きづらさ」について、一人一人が日々抱えているさまざまな問題を、ともに考える対話のコミュニティ（一般的に「哲学カフェ」と呼ばれている）を創成する試みをしてきた。それらの問題を「マジョリティ」の立場ではなく、むしろ「マイノリティ」の立場に立って考えていこうとする哲学的実践を行い、多様な側面から一人一人の「語り」の地平を拓き、全ての支援にかかわる営みには欠かせない「生きづらさ」の哲学を探究する。

社会のさまざまな場所で潜在的に問題となっていることを、社会の中で生きている人々との対話を通して掘り起こし、問いとして考察することに取り組んでいる。例えば、ジェンダーやセクシュアリティの問題をはじめ、医療、介護、福祉、ビジネス、教育、テクノロジー、環境などについて、それらの問題に常に関わっている人々との対話を行う中で「何が問題であるのか」を吟味することを重視する。

2016 年度中にジェンダー文化・学習支援部門が開催して 3 つの活動について報告する。

1. 障害のある子どもと共に生きている母親のための哲学対話プログラム

障害者歯科学・臨床哲学（ジェンダー学）・臨床心理学・小児看護学という 4 領域からの学際的アプローチによって、大阪大学歯学部附属病院障害者歯科治療部に通院している障害のあるお子さんとともに暮らしている保護者（主にお母さんたち）の「生きづらさ」を改善することを目的にしたプログラム。障害のあるお子さんへの歯科治療に並行して、その親たちと対話をするなかで、その経験や感情を詳細に記述していく臨床哲学的アプローチと、一対一の語りを通じて心の変容を促す心理療法的アプローチを行うことで、親たちの社会的・心理的な状態の理解と支援を促進させる。それは、親たちの愛情や支援なしには生きることの難しい障害のあるお子さんの心身の健康状態、QOL の向上にも寄与できると考えられる。集められた「哲学対話」の語りの質的分析から、障害のあるお子さんとその親への包括的支援の促進に役に立てたいと考えている。

大阪大学歯学部附属病院障害者歯科治療部の協力の下、障害のある子どもと共に生きている母親を対象にした哲学対話（哲学カフェ）を開催してきた。障害のある子どもと共に

生きている母親の「生きづらさ」やケアのジェンダーバイアス、家族支援のあり方について対話を重ね、自分たちの生活の現状や今後の生活などを立体的に考えるプログラム。(2015年1月より2016年9月にかけて、月1回・計18回)。

大阪大学の学内助成金「未来知創造プログラム(2014年度採択)」の一環として実施。神戸では、「のびやかスペースあーち」の居場所づくりプログラムの中で、2016年7・8月に2回開催した。

2. 「オリジナル・プレイ」プログラム

スウェーデン・ヨーテボリ市立カナベック聾・特別支援学校の身体表現講師をしているエマ・グラン(Emma Gran)さんをお招きし、「オリジナル・プレイ」のワークショップを「のびやかスペースあーち」で開催した。このワークショップは、コミュニケーションに悩みを抱える子どもが、身体的な調和、動き、触れ合いを使って、「遊び」を創造できるようにするプログラム。保護者や実践者との対話を交えながら、言語表現以外のコミュニケーションのあり方を再考した。募集にあたって大阪大学歯学部附属病院障害者歯科治療部の村上旬平先生、神戸大学大学院人間発達環境学研究科の伊藤篤先生、そして、発達支援教室「ほっと」の代表をしている山根弘子先生の協力を得た。科研費研究の一環として実施した。

3. 国際シンポジウム「身体表現の可能性を探る—障害児・者のコミュニケーション再考」

多様な角度からコミュニケーション面での「生きづらさ」を考察する中で、非言語的コミュニケーションの可能性について関心を持ち始めた研究者や実践者が集まり、研究を始めた。このシンポジウムは、合理性／非合理性の二項対立を中軸とする合理主義的な表現を、実はそれが男性／女性や健常者／障害者の二項対立を中軸とする男性・健常者中心主義から生成されたものとして批判し、人間のコミュニケーションを再考した。そして、新たな表現の可能性を探るきっかけになった。このシンポジウムでは、障害児・者とともに身体表現を創り上げてきた実務者・研究者4名(ヨーテボリ市立カナベック聾・特別支援学校身体表現講師のエマ・グラン(Emma Gran)氏、そして、大阪大学COデザインセンター准教授の本間直樹氏、舞踊家の佐久間新氏、立命館大学スポーツ健康科学部准教授の永浜明子氏)を迎えて、身体表現についての講演をしていただいた。

科研費研究の一環として実施した。

(担当 稲原美苗)

(5) 自然共生支援部門

自然とともにあり続けられる社会の実現のため、本部門では地域の当事者とともに課題解決に資する地域づくり活動をおこなっている。本年度は主に以下の3つの軸で研究および実践活動をおこなった。

1) 農村部における自然共生社会の探求

兵庫県篠山市で、野生動物との共生、生物多様性保全のため農業や農村景観づくりなどの課題に関するアクションリサーチを行った。野生動物との共生では、篠山市畑地区にて、早期柿収穫イベント「さる×はた合戦」の実施を支援し、都市農村交流を通じた獣害対策の可能性を検討した。次に、篠山市エコツーリズム推進協議会の一員としてエコツアーの企画実施に関わり、有害駆除されたシカやイノシシの篠山市内での流通促進を目的にフレンチレストランのジビエ料理を取り入れたエコツアーをモデル的に行った。生物多様性保全につながる農業推進では、篠山市矢代集落の農家と共同で、柿酢を用いて山の芋栽培の減農薬に取り組み、青カビを抑制することに成功した。柿酢は、先述した「さる×はた合戦」で収穫した柿を用いたものであり、獣害問題を地域振興につなげるモデルとして総合的に展開可能であると考えている。

2) 都市部の登山者と連携したイノシシモニタリング手法の開発

六甲山系の南側斜面は狩猟禁止区域であり、イノシシ目撃頻度が算出できず、個体数推定ができていない。よって、兵庫県森林動物研究センターと共同で六甲山のイノシシの個体数管理のための指標づくりをおこなった。今年度は、六甲山を中心に登山をする方々の協力を得て、イノシシの目撃情報提供を通じたイノシシ目撃頻度指標の開発について検討した。その結果、西宮明昭山の会と、兵庫山岳連盟の協力を得ることができ、写真撮影等によるイノシシ出没情報を40ポイント程度集めることができた。その結果、登山者のイノシシ目撃情報収集をシステム化することが可能であることが示された。来年度は、もっと多くの方にご協力いただいて指標としての可能性を検討する予定である。

3) 木育を通じた持続可能な社会づくりの可能性

木育は、木や森と私たちとの暮らしのつながりを考えられる豊かな心を育て、里山の利活用を促進する人材を育成する目的で、近年各地で取り組まれている。兵庫県篠山市では、木育の推進が「ふるさとの森づくり計画」で定められているが、展開プロセスについては明記されていなかった。そこで、小規模自治体の児童を対象としたインフォーマル教育としての木育を推進手法について検討した。具体的には、多紀小学校の低学年を対象に、木育プログラムとして、①木育キャラバンによる木のおもちゃ体験、②山探索、③秘密基地

づくりをおこなうことで、森や木と私たちの暮らしの理解が深まるかどうかを調査した。その結果、木育プログラムを通して、木の名前と香りを一致させて覚えることが可能になったり、家と森のなかの木とがつながっていることなどが認識された。今後も、複数小学校の実践を通じて普及可能性と効果について検証する予定である。

(担当 清野未恵子)

10.1.4. のびやかスペース あーち

「のびやかスペース あーち」全体の取組について

研究科サテライト施設「のびやかスペース あーち（以下、「あーち」とする）」は、2005（平成 17）年 9 月より神戸市と連携の下、灘区役所旧庁舎（現：灘消防署 2 階）において運営を開始した。以来、2016（平成 28）年度末現在で 11 年半が経過した。本施設は開設当初より「子育て支援を契機とした共生のまちづくり」の拠点となることを目指して、様々な取組（プログラム等の提供）と実践的研究を展開してきた。地域のプラットフォームとして、多様な人々や団体・組織などが「あーち」で出会うことにより、互いの立場や境遇の理解を深める場、互いに暮らしやすい地域をつくっていくために「あーち」ではどのような活動が展開しうるのかを考え・共有する場を提供してきた。また、地域ボランティアに支えられた多様なプログラムのほとんどが、開設当初から継続して提供されていることから、これまで、非常に多くの乳幼児・児童・青年そして大人が「あーち」の存在を必要としていたことが分かる。そして、このことは「あーち」が大学の役割のひとつ、社会貢献を着実に果たしていることの証左でもあろう。

本年度の大きな変化は、以下に述べる 2 点である。まずひとつ目は、運営場所の移転である。これまで「あーち」は、神戸市より無償で貸与されている灘区旧庁舎の 2 階で、地域貢献、教育、研究を展開してきた。しかし、旧庁舎の老朽化等の理由から、2018（平成 30）年度末を目途に建物の取り壊しが計画されており「あーち」の存続が危惧された。まもなく神戸市は 2017（平成 29）年度より新たな施設を利用することを提案、その場所は「あーち」から徒歩数分という好立地にある神戸市立灘区民ホール 3 階部分である。灘区民ホールは、「地域の文化・芸術発信拠点」として地域と文化・芸術の出会いの場をつくることを目的に 1993（平成 5）年 3 月に設立された。現在は文化ホールとしての機能だけではなく、兵庫県立聴覚障害者情報センターや神戸市医師会東部休日急病診療所が入っており、市民・県民の福祉や医療サービスとしての機能も合わせ持っている施設である。こうした公的なサービスが機能している施設に「あーち」が無償で入居できることは、神戸市からの「あーち」に対する評価が高く、今後の運営を期待されたことが窺い知れる。本年度後期から、当研究科からのバックアップを受け、移転先である施設内のリノベーションをは

じめ食堂の新設，移転に際する諸手続きを遂行した。移転に伴う業務のため，「あーち」は2017年3月12日より27日まで休館し，28日より区民ホール3階で運営を再開した。

ふたつ目は，同じく神戸市から「子どもの居場所づくり事業」への申請を打診されたことである。本事業の背景は，先進国のひとつである日本の「子どもの相対的貧困」が6人に1人という嘆かわしく・恥ずべき結果を受け，2013（平成25）年6月に「子どもの貧困対策の推進に関する法律」が成立したことにある。その貧困対策のひとつとして，国が地方自治体に予算を配分し，各地域の実情に応じた多様な取り組みを促すのがこの事業である。具体的には，「子ども食堂」や「学習支援」相当する。事業の対象者としては，例えば，ひとり親であったり経済的に困難であったりするため食事に何らかの支援が必要な子ども，学習面においては，学校の授業についていくことが困難であったり，学習の機会が乏しいといった子どもとその保護者らである。本事業の運営においては，高齢者給食に関する豊富な実績のある「灘区連合婦人会」との協働事業となった。10月の事業開始までに，灘区まちづくり課の支援を受け「新あーち準備会」を開催し，婦人会や灘区社会福祉協議会，灘区民ホールとも協議を重ねながら準備を整えた。さらに，事業開始後は，「新あーち会議」を設立し，事業運営上での情報交換や課題等の検討をおこなっている。次年度からは，従前からある「あーち連絡協議会」と統合し，地域連携のひとつとして各機関や団体との関係をさらに充実させていく予定である。

なお，本事業の実践については，障害支援共生部門で詳説するが，これまで部門がおこなってきた「居場所づくり」実践と神戸市の「子どもの居場所づくり事業」を統合させ，プログラム名を「よる・あーち」と命名し，移転先である灘区民ホール3階で，先行的に今年度の10月より，週1回（金曜日の午後5時～8時）開催した。毎回，多くの未就学児・小学生・高校生らと保護者，そして市民ボランティア，学生（他大学含む）・院生らが集まり，子どもたちは学習支援を受けたり，ボランティアや保護者と夕食を共にしたり，遊びのプログラムに参加したりしてそれぞれが自分のニーズに合わせて自由に過ごせた。市民ボランティアや学生らは，子どもの学習支援をおこなったり保護者と交流したりしながら互いに親睦を深めることができた。毎回のプログラム終了後には学生が主体となって，その日の振り返りをおこない，学生や市民ボランティア同士で意見交換をおこなった。

「あーち」の年間利用者数の月別は後述の表1で提示するが，28,019人（延べ）であった。例年に比して，冬季の利用者数が少なかった要因としては，本年度は12月に入り急激に気温が低くなり，体調を崩す親子が来館を控えたこと，またベビーマッサージの講師が出産のため，11月から1月の3か月間，プログラムを休止したことなどがあり，乳児と保護者の参加が減少したことなどが挙げられよう。年間の利用者数を開館日数の229日で割

ると一日平均、約 122 人が利用していることになる。一日の利用者数が平均して 100 名／日を超えるという実績は 2007 年度より 10 年間続いている。また、先行的に灘区民ホールで開始している「よる・あーち」の利用者（子どもと保護者）が半期で 502 人である（「よる・あーち」の利用者数・ボランティア・学生数の内訳は表 3 を参照）。

本年度のプログラム開催状況を集計（2 月末日現在）すると、教員・一般ボランティアが主催するプログラムの実施回数（延べ数）は 345 回、大学の正規教育プログラムの実施回数（延べ数）は 26 回である。例年どおり、資格関連科目である博物館実習も 2 回開催された。また、2008 年度より毎年継続して ESD サブコースの授業に協力し、学部生が実践活動をおこなう場を提供している。このように、本年度も、「あーち」は学生の教育・実践を支援する機能を果たした。また、学部生・院生が卒業研究・修士研究の場として「あーち」を活用することも多く、発達支援論コース在籍生に限っても、これまで、卒業論文 8 編・修士論文 12 編・博士論文 3 編が提出されている（2006～2016 年度）。

大学に設置されている「のびやかスペース あーち 運営委員会」とは別に、日常的に「あーち」のプログラム等にかかわっているメンバーが参加する「あーち 連絡協議会」が、例年どおり、5 月・7 月・9 月・11 月・1 月・3 月に開催された。この会では、「あーち」の利用者、プログラムリーダーとそのスタッフ、「ふらっと」相談員、一般のボランティア、学生、教職員が一同に会して、「あーち」の現状・プログラムの近況・新しいプログラム等に関する報告や検討がおこなわれている。また、学生などによる研究の場として「あーち」が活用されるので、この協議会は、学生からの研究依頼・計画を承認・検討する場にもなっている。

「よる・あーち」に関する会議としては、先述した通り、「新あーち準備会」を毎月 1 回開催、事業開始後は「新あーち会議」を毎月 1 回開催した。出席者は大学関係者（教職員・院生・学部生）の他に灘まちづくり課、灘区連合婦人会、灘区社会福祉協議会、市民ボランティアが参加している。

プログラム予定表、学生や利用者による絵本の紹介、利用者が担当する取材記事・コラム等を掲載する月刊広報誌を編集するために、毎月 1 回「あーち 通信編集会議」が開催されている。開設以来、「あーち 通信」は一度も発刊を欠いておらず、「あーち」のホームページ上で順次公開されている。「あーち 通信」は、これまで同様、利用者に配布されているだけでなく、灘区役所や灘社会福祉協議会および各児童館、さらに連携先の産婦人科クリニックにも配布・設置している。本年度末で「あーち 通信」は 138 号になった。

◎受賞歴

神戸市「市民福祉奨励賞（児童福祉）・平成 21 年度」

神戸大学「学長表彰・平成 22 年度」

兵庫県「平成 27 年度ひょうご子育て応援賞」

「あーち」運営の主たる部門の活動について

「あーち」の日常的な運営は、ヒューマン・コミュニティ創成研究センターの「子ども・家庭支援部門」と「障害共生支援部門」が担っている。2つの部門の実践内容を以下に整理する。

<子ども・家庭支援部門>

従来から実施してきた「ドロップイン・サービス（ふらっと）」「ペアレンティング・セミナー」「赤ちゃんふれあい体験学習」などを引き続き実施した。また、「赤ちゃんふれあい体験学習」に関しては、県内の高校生に加え、2012年度からは、六甲道児童館のユースステーションを通じて、灘区内の中学校・高等学校から有志の生徒を迎え、赤ちゃんやその保護者とふれあう機会を設けている。地域における連携活動として、以前から近隣の産婦人科クリニックでも「あーち」の広報をおこなっている。そのため、乳児期とその親による早期からの「あーち」利用は安定的に継続している。また、この産科施設に通院しているハイリスク家庭を「あーち」の相談員につなぐなどの協働関係も継続している。

2006年度より、地域子育て応援プラザ灘および灘区公立保育所とは、①保育士による「おひさまひろば あーち」での見守り・相談・親子遊び、②地域子育て応援プラザ灘の保育士による乳幼児健診時における「あーち」の広報、③当部門による灘区内の公立・私立保育所の保育士向けの子育て支援に関する研修会（2回シリーズ 2016年度は11月に実施）の提供、④当部門による地域子育て応援プラザ灘および公立・私立保育所の主催事業に関する広報、といった形で連携・協働体制を継続している。

「ふらっと」の相談体制については、これまで勤務してきた発達相談員の海外移住にともない、発達のアンバランス・遅れに関する多くの相談に関する対応が不十分になった点が、大きな課題である。また、今年度からは、新たに助産師・保育士の資格を持つ相談員を雇用した。この他に、従前からの保育士・助産師・NPOからのボランティアが、今年度も相談対応を担当している。2015年度から開始した灘区歯科医師会との連携相談事業（隔月1回の歯科医師による相談日）も順調に継続している。なお、2005年開設以来継続してきた相談対応（地域子育て支援拠点事業の4事業のひとつでもある）で扱われた相談内容は毎年、整理・分類され、神戸市にも報告されているが、主な相談内容は、子どもの発育・

発達（身体機能・行動・言葉・情緒・認知面等）、子どもの生活に関すること、離乳食・幼児食に関すること、親自身では育児不安、地域の子育て支援資源に関するものが多い。

2013 年度より開始した「ビギナーズ交流会」は、「あーち」を初めて利用する、もしくは利用して日が浅い母親を対象としたコネクション・プログラム（利用者どうしを結びつける機会の提供）であるが、これは、2010 年度に実施した「あーち」利用者対象の悉皆調査の分析結果を受けて構想・実施（月 1 回）している取組である。交流会の対象者は生後 6 か月未満の子を持つ母親であり、今年度も、毎回 8～12 組前後の親子が参加するプログラムとして根付いてきている。また、このプログラムは、「あーち」の教育研究補佐員（博士後期課程修了生）による実践研究の一環になっており、母親のエンパワメントがどのように導かれるかが、インタビュー調査や質問紙調査を通して探求されている。

「あーち」は、他大学からの見学や実習の場としての役割も果たしてきているが、正規カリキュラムとして協力してきているのは、園田学園女子大学の「地域育成連携実習」「経験値統合実習」であり、今年度で 3 年目を迎えた。

<障害共生支援部門>

障害共生支援部門では、「のびやかスペース あーち」が、利用者の多様性の確保と相互コミュニケーションを促進することを主旨とする試みを行っている。

基幹プログラムとして「あーち」設立初期から毎週金曜日に実施している「居場所づくり」プログラムを継続させた。さまざまな障害のある子どもを中心として、障害のある成人、その他の地域住民や学生が多面的な社会関係を形成することで、相互のエンパワメントをめざすプログラムである。

プログラム内容は、子どもとの関わりの中から地域住民や学生らが計画・実施する。通常は子どもの関心に沿った遊びを展開しているが、音楽プログラム、造形プログラム、料理プログラムなど、季節ごとのイベントも行った。また、「らくがきおばさんがやってくる」「アートセラピー」「めだか親子クラブ」などを「居場所づくり」以外のプログラムを同時開催し、多様な利用者との相互作用を活性化させた。その他にも、外部団体との相互連携も発展しており、今年度も恒例の実習農園での芋掘り、社会福祉法人かがやき神戸のクラウンパフォーマンス、市民団体がコーディネイト役で実施した子ども劇との相乗りなど、多彩にプログラム展開をした。

なお、このプログラムには、関西学院大学、海星女子学院大学、神戸大学「ボランティアと社会貢献」のフィールドワーク先として、多くの学生を受け入れている。

インフォーマルな関係の中から、社会的問題に主体的に関わっていく関係を形成することも隠れた目的としており、持ち込まれる諸問題（多くは障害に関する問題）をめぐる活

動も付随した。プログラムから派生した個別の問題に踏み込んで関わることも多くある。教育・研究・実践を三位一体としたインクルーシブな場づくりをめざす実践的研究のフィールドとなっており、試行錯誤が行われた。特に 10 月からは、「居場所づくり」に、新たに開始した「学習支援」「子ども食堂」を加えたシステムに一新し、これを「よる・あーち」と名付けて展開した。これは、年度初めから学生や教職員、行政や地域組織が協議を重ねて実現したものであり、生活上あるいは発達上の障壁に直面している子どもたちやその保護者を主な対象とし、遊ぶ・学ぶ・食べる・交流する要素とするプログラムである。

同時に、子どもの発達に不安をもつ親を対象とした「ドーナッツ」「ピーナッツ」、音楽を通して住民の社会関係を広げることを目的とした「音楽の広場」など、市民主体で実施するプログラムの支援を行った。また、本年度も博物館学芸員課程との連携で博物館展示（あーち博物館）を行った。2016 年 9 月 27 日～10 月 6 日「遊ぼう！」（社会福祉法人たんぼぼ、版画家脇谷紘氏との連携）、2017 年 2 月 28 日～3 月 9 日「歌いつがれてきた平和」（大田美佐子ゼミ、NPO 法人神戸子どもと教育ネットワークとの連携）であった。

プログラム概要・その他

以下に、①プログラム概要、②見学・視察数、③月別年間利用者数（表 1）、④プログラム数とそれに対応するボランティア数（表 2）、⑤連携・協力関係にある組織・団体（表 3）、を示す。

①プログラムの概要

子どもとその保護者を主な対象にしたプログラム

<★は本年度から開始したプログラム>

- ・ふらっと：地域子育て支援拠点事業（ドロップイン・サービス）として週 5 日開設
- ・おひさまひろば あーち：神戸市地域子育て支援センター灘の保育士・灘区公立保育所の保育士がドロップイン・サービスの利用者に対し、見守り・相談と親子遊び（ショートプログラム）を提供
- ・ベビーマッサージ：「あーち」利用者である母親がリーダーとなっておこなう交流プログラム
- ・あーち ビギナーズ交流会：「あーち」を初めて利用する、または利用して日が浅い母親対象の仲間づくりプログラム（子どもの月齢 6 か月未満対象）
- ・ほのぼの音ランド：音楽療法士によるリズム遊びプログラム
- ・おはなしの国：ボランティアによるストーリー・テリングと絵本の読みきかせ
- ★おはなしエプロン：ボランティアによる絵本の読み聞かせ
- ・めだか親子クラブ：退職教員が中心となった手作りおもちゃのプログラム

- ・らくがきおばさんがやってきた：地域の画家が展開する自由なアート空間
- ・アートセラピー：草木などの自然のものなどを用いてアートを展開するワークショップ
- ・人形劇：神戸・阪神間の人形劇グループや高校生による公演
- ・人形劇団 むー：「あーち」支援者や利用者が立ち上げた人形劇団
- ★おもちゃ病院：地域住民の有志によるグループが、壊れたおもちゃなどを修理してくれるプログラム

発達障害のある子どもとその親を対象にしたプログラム

- ・ドーナッツ：発達障害児をもつ親支援プログラム
- ・ピーナッツ：ドーナッツの発展編
- ・ぼっとらっく：発達障害児を持つ親の学習会と発達障害児の遊び場

おとなを主な対象としたプログラム

- ・筆をもとう：地域の書家による書の初歩を気軽に学ぶプログラム
- ・0歳児のパパママセミナー：子育て中の親を対象にした学習・交流プログラム
- ・中・高校生の赤ちゃんのふれあい体験学習：中・高校生が0歳児とその保護者が毎月1回交流する
- ・わくわくトーク：キャリアプログラム

○保育士のための子育て支援研修会（2回シリーズ）

その他

- ・居場所づくり：障害のある人たちを中心としたみんなが集うプログラム
- ・音楽の広場：本研究科の院生や教員・ボランティアが主催する、誰でも楽しめる自由な音楽プログラム
- ・みんなで歌おう！：地域の作業所スタッフや実習生によるゴスペル

博物館実習

○博物館実習：2016年9月27日～10月6日「遊ぼう！」（社会福祉法人たんぼぼ，版画家脇谷紘氏との連携）

2017年2月28日～3月9日「歌いつがれてきた平和」（大田美佐子ゼミ，NPO法人神戸子どもと教育ネットワークとの連携）

- ・あーち 通信編集会議：利用者や学生を交えて「あーち」通信をつくる場
- ・あーち 連絡協議会：プログラムリーダー，利用者，教職員等による「あーち」運営に関する会議

②「あーち」への見学・視察数

大学のサテライト施設として，社会的責任や地域貢献をはたし，アクションリサーチの成果を社会に対してモデル提示したり発信したりする手段として，見学者やメディア取材の受け入れをおこなっている。以下は，2016年4月以降，2017年3月末日までの「見学

者数」「視察者数」を機関・組織別に整理したものである。

◎「あーち」見学者など

<見学（総数 43 名）>

神戸市こども青少年課 3 名 灘区保健福祉部 2 名 灘区こども家庭支援課 7 名
灘区まちづくり課 2 名 灘区社会協議福祉会 4 名
長田区自立支援協議会 8 名 友生支援学校 2 名
尼崎市子育てひろば「えがお」1 名 ユーステーション灘ボランティア 1 名
神戸市看護大学 1 名 兵庫教育大学教員 2 名 兵庫教育大学院生 3 名 関西学院大
大学院生 1 名
鳴門教育大学大学院生 1 名 個人 3 名
神戸大学 GPS オフィス 1 名 神戸大学大学院人間発達環境学研究科教員 1 名

<視察・ヒアリング等（総数 49 名）>

香港教育局用事教育課日本交流団 40 名 神戸大学大学院人間発達環境学研究科院生 5
名
西宮市社会教育委員 2 名 西宮市教育委員会社会教育課 2 名

<取材・撮影>

神戸新聞 神戸市灘まちづくり課

◎「よる・あーち」見学者など

神戸市こども青少年課 3 名 灘区区長 1 名 灘区こども家庭支援課 3 名 灘区まち
づくり課 5 名 灘区社会協議福祉会 4 名 神戸市市会議員 5 名
西宮市社会教育委員 2 名 西宮市教育委員会社会教育課 1 名
ろっこう医療生協 2 名 ラフターヨガ 4 名
六甲学院教員 1 名 鳴門教育大学教員 1 名 鳴門教育大学大学院院生 1 名
関西学院大学教員 1 名 神戸女学院大学教員 1 名 神戸松蔭女子学院大学教員 1 名
神戸女子短期大学教員 1 名 神戸女子短期大学学生 3 名 明星大学教員 1 名
大阪大学歯学部教員 1 名 京都女子大学学生 1 名 神戸海星女子大学学生 1 名
神戸大学農学部教員 1 名 神戸大学農園 2 名 神戸大学 GPS オフィス 1 名
神戸大学大学院人間発達環境学研究科教員 3 名
ヨーテポリ市立カナベック聾・特別支援学校 身体表現講師 1 名 他個人 23 名
<取材・撮影> 神戸新聞 神戸市灘まちづくり課

③ 2016年度「あーち」利用者数とその内訳 但「よる・あーち」除く

「あーち」の年間利用者数は28,019人（延べ数）である。開館日数の229日で割ると、一日平均約122人が利用している

2016年度利用者数（2016年4月～2017年3月）

年間開館日数 229日

年間利用者数 子ども 13,811人 おとな 14,208人 合計 28,019人

表1 月別利用者数

2016年度		ふらっと		あーと		こらぼ		利用者数の合計		
月	開館日数	子ども	おとな	子ども	おとな	子ども	おとな	子ども	おとな	合計
4月	20	958	930	31	22	99	129	1088	1081	2169
5月	18	808	784	19	21	108	190	935	995	1930
6月	22	1257	1210	28	13	169	167	1454	1390	2844
7月	22	1394	1298	12	24	167	209	1573	1531	3104
8月	17	1150	1080	9	15	87	78	1240	1179	2419
9月	20	1180	1171	38	24	182	202	1400	1397	2797
10月	21	980	997	22	24	175	233	1177	1254	2431
11月	20	933	978	25	22	101	202	1059	1202	2261
12月	18	651	678	12	23	113	236	776	937	1713
1月	19	893	912	15	20	104	142	1012	1074	2086
2月	19	994	1036	25	32	105	143	1130	1165	2295
3月	13	848	830	13	25	106	108	967	963	1930
合計	229	12046	11904	249	265	1516	2039	13811	14208	28019

④2016年度「あーち」プログラム数およびボランティア数 但「よる・あーち」除く

表2は、2016年度に「あーち」で提供されたプログラム数およびそれにかかわったボランティア（リーダー、スタッフ、一般、学生・院生）の数である。

表2 プログラム数およびボランティア数（延べ数）

2016		プログラム数				ボランティア数			
月	開館日数	一般のプログラム	大学の授業&正規教育プログラム(実習)	プログラム総数	プログラム数-日平均	プログラムリーダー&スタッフ数	一般	学生院生	プログラム見学者
4	20	24	1	25	1.25	43	37	54	9
5	18	31	2	33	1.83	62	67	58	10
6	22	32	2	34	1.54	57	56	54	9
7	22	33	2	35	1.59	61	57	73	16
8	17	21	1	22	1.29	35	31	35	8
9	20	33	3	36	1.80	77	51	72	14
10	21	38	3	41	1.95	77	41	28	17
11	20	35	3	37	1.85	81	15	53	3
12	18	31	3	34	1.89	72	29	42	12
1	19	31	3	34	1.79	83	27	34	10
2	19	34	3	39	2.05	70	29	11	18
3	13	27	2	29	2.23	61	29	48	14
合計	229	372	28	399	1.74	782	469	568	140

*基盤プログラムである「ふらっと」は毎日開催しているが、プログラム数に入れていない

*「あーち」通信編集会議・連絡協議会・他の会議などは入れていない

*比較的ボランティア参加の多いプログラム（順不同）

：ぽっとらっく・居場所づくり・アートセラピー・らくがきおばさん・人形劇・パパママセミナー

⑤2016年度「よる・あーち」利用者数とその内訳

表3 「よる・あーち」利用数・ボランティア・学生数等 内訳（延べ数）

			10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
利用者	子ども(未就学)		22	12	9	13	12	11	79
	子ども(小学生)	1年	9	7	2	8	6	42	36
		2年	9	11	9	6	6	49	43
		3年	4	4	2	3	1	16	15
		4年	8	7	6	9	9	47	38
		5年	0	0	0	0	0	2	2
		6年	0	2	0	1	5	10	5
	小計		30	31	19	27	27	166	139
	中学生	1年	0	0	0	0	0	1	1
		2年	0	0	0	0	0	0	0
		3年	0	0	0	0	0	0	0
	小計		0	0	0	0	0	1	1
	高校生	1年	0	0	1	3	3	10	7
		2年	6	6	6	4	6	35	29
3年		8	13	12	14	11	75	64	
小計		14	19	19	21	20	120	100	
保護者		24	24	17	22	34	159	125	
おとな		18	11	6	9	16	85	69	
小計		42	35	23	31	50	244	194	
ボランティア	一般		26	17	7	21	24	110	86
	学部生		40	39	22	31	25	181	156
	院生		12	15	8	6	6	54	48
	小計		78	71	37	58	55	345	290
スタッフ	教職員		12	14	8	10	6	59	53
	灘区婦人会		30	33	20	22	17	148	131
	小計		78	47	28	32	23	243	220
	合計(人)		271	215	135	182	186	1193	1007

以下は参考

		10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
その他	見学者	22	16	22	3	11	7	81
	ヘルパー	12	13	10	4	15	10	64
合計(人)		34	29	32	7	26	17	145

子ども食堂	子ども	32	25	25	7	36	30	155
参加者	高校生・保護者大人	74	79	58	19	65	55	350
合計(人)		106	104	83	26	65	85	505

⑥2016年度 連携・協力関係にある団体など

以下の表3は、2016年度の運営にあたって連携・協力を得た組織や団体名を整理したものである。

表3 連携・協力関係にある組織・団体など

団体名	連携協力の内容
神戸市市民参画推進局	運営協力
神戸市灘区保健福祉部こども家庭支援課こども保健係	0歳児のパパママセミナー&中・高校生の赤ちゃんふれあい体験学習
神戸市灘区まちづくり推進部	なだ桜まつり/地域コーディネーター
灘警察署	安全のおはなし(10周年ウィーク)
灘消防署	消防訓練 小児救急のおはなし(10周年ウィーク)
神戸市地域子育て支援センター灘 (通称:子育て応援プラザ灘)	ふらっと相談員/おひさまひろば あーち
灘区民ホール	運営協力/情報交換
灘区公立保育所(7か所)	ふらっと相談員/おひさまひろば あーち
灘区地域コーディネーター(元幼稚園教諭)	ふらっと相談員
灘区社会福祉協議会	ボランティアコーディネート
灘区内児童館(10か所)	情報交換
六甲道児童館	情報交換
六甲道児童館ユースセンター	中学・高校生の赤ちゃんふれあい体験学習
灘区連合婦人会	よる・あーち(子ども食堂)
社会福祉法人たんぼぼ	博物館実習/みんなで歌おう!

学童保育つむぎ	居場所づくり
カフェ「アゴラ」	居場所づくり
社会福祉法人かがやき神戸	居場所づくり
神戸ユニバーサルツーリズムセンター	居場所づくり
NPO 法人神戸子どもと教育ネットワーク	めだか親子クラブ
チャレンジひがしなだ	筆をもとう
クエスト総合研究所	アートセラピー
NPO 法人マザーズサポーター協会	おしゃべりほっとタイム
亀田マタニティ・レディース・クリニック	アウトリーチ・サービス
灘区歯科医師会	ふらっと相談員／パパママセミナー
兵庫県歯科衛生士会 神戸東支部	おくちをあ〜ん
ママ・リッシュ トマト	0歳児のパパママセミナー
おもちゃ病院（地域の有志）	おもちゃ病院
兵庫県立西宮甲山高等学校	高校生の赤ちゃんふれあい体験学習／人形劇
神戸市看護大学（灘区保健福祉部から依頼）	地域母子保健実習の場として提供
園田学園女子大学	育成連携支援実習／経験値統合実習の場として提供
神戸海星女子学院大学	供
神戸大学医学部保健学科地域連携センター	ボランティア論（授業）の場として提供
	ぽっとらっく

他に個人による協力も多数あり

（のびやかスペース あーち運営委員長 赤木和重）

10.1.5. サイエンスショップ

1. 概要等

サイエンスショップは、(a) 地域社会における広義の科学教育を含む市民の科学に関わる諸活動への支援、および (b) 神戸大学学生の主体的研究活動等への支援を行うことを目的とする。上記 (a) については、科学者等の専門家と市民の対話と協働を通じて、環境問題など科学に関わる地域課題への市民の取組や、社会における科学技術の進展とそれに関する政策形成過程などへの市民の参画を促す仕組づくりと実践を目指しており、実践研究として行われている。

平成28年8月には、サイエンスショップに対して、その業績が科学教育の実践研究において特に顕著であると認められたとして、日本科学教育学会から科学教育実践賞が授与された。

平成 28 年度は、研究科専任教員（室長，副室長，及びその他の室員 5 名の計 7 名（特命助教 1 名を含む））と、教育研究補佐員／学術研究員 1 名（非常勤職員）^{（注 1）}，事務補佐員 1 名（非常勤職員），学外研究員 2 名の体制で運営された。

（注 1） 平成 28 年 9 月に教育研究補佐員から学術研究員に移行。

2. 平成 28 年度の主な取組

(1) Future Earth 研究課題の抽出に関する研究への参加・協力

総合地球環境学研究所 Future Earth 推進室との共同研究として、グローバルな持続可能社会の構築を目指す地球環境研究の国際プログラム Future Earth において、日本で優先的に取組むべき研究課題・テーマ群の抽出の手法開発と実施に参画した。このプロジェクトは、独立行政法人科学技術振興機構（JST）社会技術研究開発センター（RISTEX）の「フューチャー・アース構想の推進事業」の一環として実施される調査研究（課題名：「フューチャー・アース：日本が取り組むべき国際的優先テーマの抽出及び研究開発のデザインに関する調査研究」，研究代表者：谷口真人教授（総合地球環境学研究所），平成 26 年 9 月～平成 29 年 3 月）として進められた。Future Earth では、自然科学，人文学・社会科学等幅広い領域の研究者に加えて，社会各層のステーク・ホルダーとの協働に基づく，研究の co-design, co-production, co-delivery が重要な理念として掲げられており，サイエンスショップが蓄積してきた科学コミュニケーションなどの実践に基づく知見等を活かして，平成 27 年度までに，市民，行政等へのインタビューや，広範な専門家を集めたワークショップのグループディスカッション・ファシリテータとしての協力等を行ってきた。平成 28 年度は最終年度にあたり，取組の成果が「日本における戦略的研究アジェンダ」（Japan Strategic Research Agenda: JSRA）としてまとめられたが，サイエンスショップは，JSRA の優先順位付けワークショップ，広く社会への成果報告として開催されたシンポジウム「わたしたちがえがく地球の未来（フューチャー・アース）」（平成 29 年 2 月）等に協力した。

(2) 地域社会における市民の科学活動および科学コミュニケーション支援

サイエンスショップのこれまでの取組を通じて，伊丹市（「サイエンスカフェ伊丹」），姫路市を中心とした播磨地域（「サイエンスカフェはりま」），南あわじ市など兵庫県内の各地域で，サイエンスカフェをはじめとした科学に関わる活動を主体的に進める市民グループが立ち上がって着実な活動を展開し，サイエンスショップがこれを継続的に支援している。平成 28 年度神戸大学地域連携事業の一環（課題名：「人間の発達」の実現をめざす市民活動への支援事業」，事業主体：発達支援インスティテュート）として学内支援も受けて取組を進めた。

以下に本年度の主な取組等をまとめる。なお、サイエンスカフェの開催リストについては年次報告書資料編に掲載する。

(a) 千種川流域における環境モニタリング活動への協力・支援

千種川流域圏で活動するグループ「千種川圏域清流づくり委員会」による河川環境モニタリング「千種川一斉水温調査」への、総合地球環境学研究所および神戸大学人間発達環境学研究科の研究者および学生の参加・協力をコーディネートした。この調査は、同委員会が15年間にわたり継続してきた、河川において多様な生物種の重要な生息要件の一つとなる夏季水温等の市民による多地点同時調査であるが、専門家との新たな協働により、同位体分析等、より多くの項目の測定・分析を行う形に展開されている。(詳細は、「8.2. 地域連携プロジェクト、(5) 千種川流域の環境保全活動」の項に記した。)

(b) Hyogo Science E-cafe (英語によるサイエンスカフェ)

兵庫県において外国語指導助手(ALT)を務める人々を中心として発足した、科学教育と国際理解の推進を目的とするグループ Hyogo Science Coalition との共同で、英語によるサイエンスカフェの企画・開催を開始し、神戸市において6回を実施した。このうち、平成28年7月開催分については、新たな試みとして、複数の高校生グループが、自らの取組んだ科学研究について英語で紹介する企画を実施した。

(c) サイエンスカフェ伊丹

伊丹市を中心にサイエンスカフェの開催に取り組む市民グループ「サイエンスカフェ伊丹」によるサイエンスカフェ等の開催(14回)を支援した。

(d) サイエンスカフェはりま

姫路市を中心とした播磨地域において、サイエンスカフェ等を開催する市民グループ「サイエンスカフェはりま」によるサイエンスカフェ開催を支援した(1回)。

(e) サイエンスカフェ*SODA

淡路島でコミュニティ活動やその担い手の育成等に取り組む NPO法人 ソーシャルデザインセンター淡路(SODA)によるサイエンスカフェの企画・開催に協力した(1回)。

(f) サイエンスカフェにしのみや

西宮市の大型商業施設、阪急西宮ガーデンズ内に設置されたコミュニティ・スペース「スタジモにしのみや」で開催される「サイエンスカフェにしのみや」の開催に協力した(2回)。

この他、公益財団法人ひょうご科学技術協会及び大学コンソーシアムひょうご神戸が主催する「サイエンスカフェひょうご」の企画・運営を担い、姫路市、南あわじ市、伊丹市、

豊岡市で計4回を開催した。このうち南あわじ市では、人間発達環境学研究科の研究者をゲストとして、淡路島での調査・研究の成果に基づいて同地域での再生可能エネルギー利用等の課題をとりあげた。豊岡市でも、人間発達環境学研究科の研究者がゲストを務め、環境DNA技術と生物多様性について紹介し、地域の高校生が多数参加した。

また、平成28年11月には、日本農芸化学会からの要請を受けて、神戸市において黒大豆の健康への効果に関するサイエンスカフェの開催に協力した。

平成19年以降実施している、市民が科学者とともに IPCC (Intergovernmental Panel on Climate Change :気候変動に関する政府間パネル) の報告書を読み解く会「市民のための、IPCC レポートを根掘り葉掘り読む会」を17回開催した(第2期, 第32回から第48回)。

(3) 学部・大学院教育

大学院博士前期課程の授業科目「サイエンスコミュニケーション演習」においては、履修者である大学院生が演習の一環としてサイエンスカフェを企画・開催した(場所: 発達科学部 D-room, テーマ: 「バーチャルリアリティ(仮想現実)のいま」)。

また、学部授業科目「ESD論」のフィールドワークとして行われた、南あわじ市におけるため池の掻い掘りに協力した。

この他、学部学生を中心とした正課外の実践的取組として、地域の小学校等で天体観望会の開催に取組む「天文ボランティアグループ アストロノミア」も、学部、学科の壁を越えて学生が参加し、地域の児童と保護者などを対象として3回の観望会(場所: なぎさ小学校, および 神戸大学鶴甲第2キャンパス)を開催した。また、アストロノミアは鶴甲小学校の児童を対象とした「理科実験教室」(後述)での実験1テーマを企画・実施した。

このように、サイエンスショップは、大学・大学院におけるアクティブ・ラーニング/サービス・ラーニングの場やそれを促す仕組みとしても機能している。

また、平成27年度に神戸大学全学の取組として文部科学省「大学教育再生加速プログラム(AP)」に採択された「神戸グローバルチャレンジプログラム」について、サイエンスショップ関係教員がアジアの研究フィールドを活かす形で、発達科学部が提供する「アジア・フィールドワークコース」を実施した。平成28年度は、インドネシア・南スラウェシ州の農・漁村にてホームステイし、環境、教育、地域社会・経済、文化など、持続可能な開発にかかわる諸課題に関するフィールドワークを行った。(詳細は、「5.1.7. 神戸グローバルチャレンジプログラム」の項に記した。)

(4) 地域科学教育への支援と科学技術系人材育成の取組

平成28年11月には、兵庫県生物学会と共同で「高校生私の科学研究発表会2016」を開

催した。高校生 96 名，高校教員 19 名，大学関係者 18 名（うち学生 7 名）を含む 144 名の参加者があり，活発な発表，交流が行われた。優れた研究に対して，サイエンスショップより優秀賞を授与した。

平成 29 年 3 月には，「第 4 回 未来社会を担う人材育成のための多角連携フォーラム ～ Future Earth と教育～」を，発達科学部・人間発達環境学研究科とサイエンスショップの主催，総合地球環境学研究所の共催で実施した（神戸大学瀧川学術交流会館）。北海道教育大学名誉教授の氷見山幸夫氏，総合地球環境学研究所教授・副所長の谷口真人氏，兵庫県立人と自然の博物館主任研究員の三橋弘宗氏，加古川東高等学校教諭の志水正人氏他による講演が行われ，Future Earth と教育に関してこれまでの推移，いくつかの取組，実践などが紹介され，参加者による議論，交流が行われた。

平成 29 年 1 月には，スーパーサイエンスハイスクール（SSH）事業成果の地域への普及と兵庫県下の理数教育の発展を目的として活動する兵庫「咲いテク（Science & Technology）」事業推進委員会主催の「第 9 回 サイエンスフェア in 兵庫」の開催に協力するとともに，サイエンスショップ紹介のポスターを出展した。このイベントは，平成 27 年度までポートアイランドの神戸国際展示場を会場として開催されてきたが，平成 28 年度は，神戸大学，兵庫県立大学，甲南大学，理化学研究所計算科学研究機構が共催し，神戸大学統合研究拠点をはじめとしたこれらの大学・研究機関の施設を会場として実施された。また，同委員会による取組として平成 28 年 7 月神戸大学統合研究拠点において開催された，高校生による英語での課題研究発表会「第 2 回 Science Conference in Hyogo」を共催した。

兵庫県立兵庫高等学校の課題探求型授業への人間発達環境学研究所大学院生の協力（平成 28 年 9 月から平成 29 年 2 月）のコーディネートを行った。同高等学校からは，大学院生による高校生への指導の教育効果が高く評価されている。

鶴甲小学校 PTA の要請を受けて，平成 19 年度以降毎年開催している「理科実験教室」を平成 28 年 7 月に実施した。また，サイエンスショップ研究員の新井敏夫氏により，成人を対象とした「つるかぶと科学教室」（平成 29 年 2 月から 3 月，3 回）が企画・実施された。

この他，人間発達環境学研究科が「鶴甲いきいきまちづくりプロジェクト」の取組「アカデミックサロン」の一環として主催した月の観望・講演会「みんなで楽しもう！大学でひと味違うお月見会」（平成 28 年 10 月）に協力した。

3. 成果発表等 （サイエンスショップの活動に直接に関わるもののみを掲載する）

(1) 論文等

- ・ 蛭名邦禎，伊藤真之，梅村界渡，源利文，「市民による科学情報読み解きへの支援 -『IPCC

レポートを根掘り葉掘り読む会』-], 日本科学教育学会研究会研究報告, 第 30 卷, 第 7 号, 17-20 [査読なし]

- ・ 源利文, 伊藤真之, 蛭名邦禎, 「環境DNA分析手法による高校生研究活動への支援」, 日本科学教育学会研究会研究報告, 第 30 卷, 第 7 号, 21-24 [査読なし]

(2) 研究発表等

- ・ 谷口真人, マレー・ハイン, 大西有子, 西村武司, 蛭名邦禎, 伊藤真之, 鶴田宏樹, 近藤康久, 安成哲三, 「日本が取り組むべきフューチャー・アースの国際的優先研究テーマの抽出及び研究開発のデザインに関する研究」, 日本地球惑星科学連合 2016 年大会 (2016 年 5 月)
- ・ 大串健一, 中野孝教, 陀安一郎, 横山 正, 太田民久, 草野由貴子, 三橋弘宗, 伊藤真之, 蛭名邦禎, 「兵庫県千種川の水質と安定同位体の特徴」, 日本地球惑星科学連合 2016 年大会 (2016 年 5 月)
- ・ 山本雄大, 陀安一郎, 中野孝教, 横山 正, 申 基澈, 藪崎志穂, 太田民久, 三橋弘宗, 大串健一, 藤澤未雪, 伊藤真之, 蛭名邦禎, 「兵庫県千種川の水質に関する地球化学的研究」, 同位体環境学シンポジウム (2016 年 12 月)

表 神戸大学サイエンスショップ 平成 28 年度の主な取組

市民科学活動支援
<ul style="list-style-type: none"> ・ 千種川流域における環境モニタリング活動への協力・支援 ・ サイエンスカフェの開催・開催支援 (サイエンスカフェ神戸 (2 回) および Hyogo Science E-cafe (6 回) 開催, サイエンスカフェひょうご ほか 県下各地のサイエンスカフェ開催等支援 (総計 22 件)) ・ 市民と研究者が協力して気候変動に関する IPCC レポートを精読する会「市民のための, IPCC レポートを根掘り葉掘り読む会」の定期開催 (17 回) ・ つるかぶと科学教室開催 (3 回: 学外研究員による企画) 他
地域の科学教育支援
<ul style="list-style-type: none"> ・ 神戸市立鶴甲小学校 PTA からの依頼を受けた児童と保護者を対象とした理科実験教室の開催 ・ 兵庫県立兵庫高等学校における課題探求型授業「創造基礎」への協力 (大学院生による研究・実習等指導) ほか ・ 第 2 回 Science Conference in Hyogo 共催

大学教育・学生の活動
<ul style="list-style-type: none"> ・サイエンスコミュニケーション演習, ヒューマンコミュニティ創成研究(大学院)等の授業支援 ・天文ボランティアグループ「アストロノミア」による天体観望会の開催(神戸市立鶴甲小学校他) ・神戸グローバルチャレンジプログラム 発達科学部「アジア・フィールドワークコース」運営
研究会等の主催・共催
<ul style="list-style-type: none"> ・「高校生・私の科学研究発表会 2016/兵庫県生物学会 2016 研究発表会」開催(主催: 兵庫県生物学会, 神戸大学サイエンスショップ) ・第4回 未来社会を担う人材育成のための多角連携フォーラム ~Future Earth と教育~
イベント等開催協力
<ul style="list-style-type: none"> ・サイエンスカフェひょうご(主催: 大学コンソーシアムひょうご神戸社会連携委員会, (公財) ひょうご科学技術協会) 姫路市, 神戸市, 伊丹市, 豊岡市で開催・開催支援 ・サイエンスカフェはりま(主催: サイエンスカフェはりま) 姫路市他 ・サイエンスカフェ伊丹(主催: サイエンスカフェ伊丹) 伊丹市 ・サイエンスカフェ*SODA(主催: ソーシャルデザインセンター淡路) 南あわじ市
研究・開発等
<ul style="list-style-type: none"> ・Future Earth 研究課題の抽出に関する研究への参加・協力(総合地球環境学研究所との共同研究) 他

(サイエンスショップ室長 蛭名邦禎, 副室長 伊藤真之)

10.1.6. アクティブエイジング研究センター

1. 運営・活動体制

(1) 運営委員会の審議等内容

メール審議も含め、10回の運営委員会を開催し、予算執行、学内・学外研究員、プロジェクト支援、国際共同研究、報告会、セミナー等に関して、報告・審議を行った。

(2) 運営委員

運営委員の任期が2017年3月31日までであり、2015年度と同じ運営委員でセンター運営に関わる上述の審議を行った。なお、2017年度の運営委員は以下のメンバーから佐々木倫子委員に代わり、近江戸伸子委員を加えることとした。

近藤徳彦（センター長）、長ヶ原誠（副センター長）、片桐恵子（副センター長）、岡田修一、増本康平、佐々木倫子、平山洋介、井上真理、田畑智博、齊藤誠一、木村哲也、古谷真樹、岡崎香奈、原田和弘

(3) 専門教員

2016年3月よりセンターの運営・研究に携わる教員の協力を得た(原田和弘特命助教)。

(4) 学外研究員

以下に示すプロジェクト1)の学外研究員を2017年度から受け入れる。

Ms Watcharaporn Thapana (Faculty of Science, Kasetsart University, Thailand)

2. プロジェクトの推進

(1) プロジェクトメンバーと内容

本年度も昨年度と引き続き、11のプロジェクトを実施した。また、2017年度からは2つのプロジェクトを加え、13のプロジェクトを展開する(12、13は2017年度からのプロジェクト)。

1) 鶴甲いきいきまちづくり-アクティブエイジングを目指して

メンバー：岡田修一、近藤徳彦、長ヶ原誠、片桐恵子、増本康平、学外研究者

期間：2010年度～2020年度

内容：オールドニュータウンである鶴甲地区を対象に、多世代が心身ともに健やかで将来の希望に満ちた、安全に暮らせるまちづくりを支援するものである。アカデミック・サロン(大学内で行うイベント)を鶴甲地区の住民の学びと活動の場の基礎とし、大学をコミュニティの中心に位置付け、このサロンを通して、住民同士のネットワークを形成するとともに、サロンの継続に必要なファシリテーターを養成し、住民が企画・運営するコミュニティ活動を支援する。

2) 住民ネットワーク形成の客観的検証方法の確立

メンバー：増本康平、岡田修一、近藤徳彦、長ヶ原誠、片桐恵子、木村哲也、古谷真樹、

研究科共同研究者 4 名

期間：2015 年度～2017 年度

内容：ウェアラブルセンサデバイスによって対面コミュニケーション行動データを自動収集し、ネットワーク解析を行うことで住民交流の現状や変化、キーパーソンを把握し、支え合い・助け合いの基盤となる住民ネットワークの活性化につなげる。

3) 男女の違いや個人差を考慮した健康増進支援プロジェクト

メンバー：近藤徳彦，岡田修一，中村晴信，古谷真樹，井上真理，齊藤誠一，木村哲也，佐藤幸治

期間：2015 年度～2019 年度

内容：健康行動（食・睡眠・運動）を支援するため、これらに関係する環境を工夫することにより健康を支援する方法を提案する。その際、これまで十分な情報が得られていない男女の違いや個人差からアプローチする。

4) 高齢者の身体システム機能維持・向上への学際的プロジェクト

メンバー：木村哲也，佐藤幸治，学外研究者

期間：2015 年度～2017 年度

内容：高齢者の身体システム機能の維持・向上に対して、基礎研究及びその成果に基づいた社会実装を、応用生理学，運動生理・生化学，バイオメカニクス，生体工学の各観点を統合して学際的に実施する。現在取り組み中の具体的課題は、立位バランス神経制御則の解明や高齢者の筋機能の向上である。

5) 都市住居高齢者の日常活動の国際比較

メンバー：片桐恵子，原田和弘，福沢愛，学外研究者 1 名，海外研究者 2 名

期間：2015 年度～2017 年度

内容：都市に居住する高齢者がどのような日常活動を行っているのか，その活動量はどの程度か，活動がどのように気分や健康に関連しているか，などの実態の解明とそれらの関連を，日本（神戸）と韓国（ソウル）との国際比較から検討する。

6) 超高齢化社会を見据えた持続可能なごみ処理施策の提案

メンバー：田畑智博，片桐恵子

期間：2015 年度～2016 年度

内容：高齢者世帯の増加が将来の自治体のごみ処理施策に及ぼす環境的・経済的影響を，

シミュレーション分析により明らかにする。ごみ分別等の住民負担の限界と対策の検討を通じて、超高齢化社会に相応しい持続可能な自治体のごみ処理施策を提案する。

7) 関西ワールドマスタースゲームズ 2021 レガシー創造支援研究

メンバー：長ヶ原誠，岡田修一，近藤徳彦，片桐恵子，増本康平，学外研究者 3 名

期間：2015 年度～2022 年度

内容：2021 年に関西広域で開催が決定した生涯スポーツの国際大会がもたらすレガシー（遺産）創造に向けた振興事業アクションリサーチの展開と効果検証のモニタリング評価を実施し，成人・中高年者を対象とした参加型のスポーツメガイイベント開催が個人と地域の活性化に及ぼす影響過程を検証する。

8) 高齢期の意思決定バイアスの解明と自律に向けた生涯学習プログラムの開発

メンバー：増本康平，学外研究者 2 名

期間：2015 年度～2017 年度

内容：高齢者の意思決定バイアスの特徴を明らかにし，高齢者に適した意思決定の支援方法を明確にする。最終的には，高齢期の自律を目標とした「選び方を選ぶ」生涯学習プログラムを開発する。

9) マスタース甲子園によるアクティブエイジング活性化の検証

メンバー：長ヶ原誠，学外研究者 3 名

期間：2015 年度～2017 年度

内容：高校野球部 OB クラブの拡大を目指して始動したマスタース甲子園の各地方予選・全国大会の開催が及ぼすアクティブエイジングに関わる諸効果を検証し，スポーツ同窓会結成支援による活動的な加齢文化の推進に着目した生涯スポーツプロモーション事業の可能性と課題を提示する。

10) サードエイジ・プロジェクト

メンバー：片桐恵子，福沢愛，学外研究者 2

内容：これまでの高齢者とは異なる新しいシニア層である団塊世代以降の人のライフスタイルや志向を把握し，定年後の社会参加や就労について検討し，新たなシニアの社会的な役割を提案する。

11) 異世代間交流のプロジェクト

メンバー：片桐恵子，学外研究者 1，海外研究者 1 名

期間：2015 年度～2019 年度

内容：家族や地域の絆の減衰が指摘されている中で，異世代間交流の実態と課題を検討する。異世代間交流を活発化するような age friendly university のあり方について，アイルランドとの国際比較を実施しながら探索する。

12) 超高齢社会における複数住宅所有の実態と役割

メンバー：平山洋介，学外研究員 1 名

期間：2017 年度～2019 年度

内容：高齢化が進む社会のなかで，複数の住宅を所有する世帯が増えている。付加的な住宅はレントアウト収入をもたらし，高齢者の経済セキュリティを形成するケースがある。ここでは，高齢社会の安定の維持における複数住宅所有の可能性と限界を明らかにする。

13) 活動的な生活習慣と健康増進プロジェクト

メンバー：原田和弘，近藤徳彦，学内・学外研究員

期間：2017 年度～2020 年度

内容：高齢者において，活動的な生活習慣が形成・維持されるプロセスには，どのような要因が関わっているのかを学際的な観点から明らかにする。また，その知見に基づき，活動的な生活習慣の効果的な支援方法を開発する。

(2) プロジェクトに関わる外部資金

各プロジェクトはそれぞれ外部資金を獲得し，研究を推進している。また，学内予算によりプロジェクト推進支援を行ってきた。本センターとして，平成 28 年度健康寿命延伸産業創出推進事業（経済産業省）や，大学と連携したまちづくりチャレンジ事業助成（神戸市灘区）から支援を得た。

3. 2016 年度アクティブエイジング研究センター報告会（第 1 回 KAARb サロン）

以下の日程で 2016 年度の活動報告会を実施した。10 社以上の企業も含め，約 40 名の参加者を得て報告会を開催することできた。

日時：2017 年 3 月 17 日（金）

場所：神戸大学大学院人間発達環境学研究科・大会議室

内容：

15:00 センターの活動報告 近藤徳彦 (アクティブエイジング研究センター長)

15:10 プロジェクト研究報告 (各 15 分)

モデレーター 長ヶ原誠 (アクティブエイジング研究センター副センター長)

報告 1 : 「活動的な生活習慣と健康増進プロジェクト」

原田和弘 (神戸大学大学院人間発達環境学研究科 特命助教)

報告 2 : 「超高齢化社会を見据えた持続可能なごみ処理施策」

田畑智博 (神戸大学大学院人間発達環境学研究科 准教授)

報告 3 : 「高齢者の日常行動 in Asia」

片桐恵子 (神戸大学大学院人間発達環境学研究科 准教授・

アクティブエイジング研究センター副センター長)

16:00 「企業との連携と今後のセンターの方向性を探る」パネル・ディスカッション

モデレーター 近藤徳彦

「コープこうべの高齢者支援の取り組み」

圓井(まるい) 秀樹 氏 (生活協同組合コープこうべ 次代コープこうべづくり本部)

「年齢とともに弱ってくる下半身をサポートするトイレ」

町元孝二 氏 (アサヒ衛陶株式会社代表取締役社長)

栗木達雄 氏 (株式会社パルプラス)

17:30～交流会

4. セミナー

以下のセミナーをセンター主催・後援で実施した。

(1) 2016年8月24日 16:30～18:00 中会議室 B

講師: Dr. Michael Annear (Wicking Dementia Research and Education Centre, University of Tasmania, Australia)

Title: Evaluating dementia education needs and developing targeted and web-based interventions for elderly persons.

(2) 2016年10月14日 13:30～15:00 F256

講師: Dr. Trudy Corrigan (Dublin City University, Dublin Ireland)

Title: The Benefits of International Learning for Both Older and Younger People in Higher Education and in Society Today

(3) 2017年2月24日 15:00~17:00 A棟3階 心理発達論セミナー室 (A303)

講師：西田裕紀子氏 (国立研究開発法人国立長寿医療研究センター)

演題：知能のエイジング：15年間の学際的縦断研究から

5. 連携活動と本センターへの訪問

(1) 連携活動

以下の学内プロジェクトと連携活動を実施した。

- 1) スマートシティプロジェクト (神戸市・神戸大学)
- 2) アクティブエイジングをIT人工知能により支援強化するプロジェクト (科学技術イノベーション研究科)
- 3) 認知症予防プロジェクト (神戸大学)

(2) 訪問

以下の団体・研究者の訪問があり、本センターとの連携・共同研究の議論を行った。

1) 国内

株式会社第一興商, 有限会社ウインズ, 生活協同組合コープこうべ, Jtb Communication Design, 神戸市, 公益社団法人兵庫県柔道整復師会, NPO創生クオーレ, 神戸ユネスコ協会, 株式会社 Hugkm, その他

2) 国外

Institute for Population and Social Research, Mahidol University, Thailand

Dr. Rossarin Gray, Director

Ms. Kamolchanok Kamsuwan

Ms. Wannee Hutapat

Wicking Dementia Research and Education Centre, University of Tasmania, Australia

Dr Michael Annear

Dublin City University, Ireland

r. Trudy Corrigan

(アクティブエイジング研究センター長 近藤徳彦)

10.2. 実習観察園の運営利用状況

平成 28 年度の実習観察園の概要および活動内容は以下の通りである。11 月 11 日に大阪教育大学で第 50 回近畿教育系大学農場等協議会が開催され、実習観察園委員として近江戸伸子が参加した。他 5 大学の農場運営上の問題点、地域連携、環境保全等について話し合った。平成 28 年度の実習観察園の概要および活動内容は以下の通りである。

○実習観察園施設および概略図

実習観察園の概略は図 1 の通りで、前年と変わりはない。灰色で示した部分は、自然環境論コースの教員が研究のために設置したビニルハウスである。

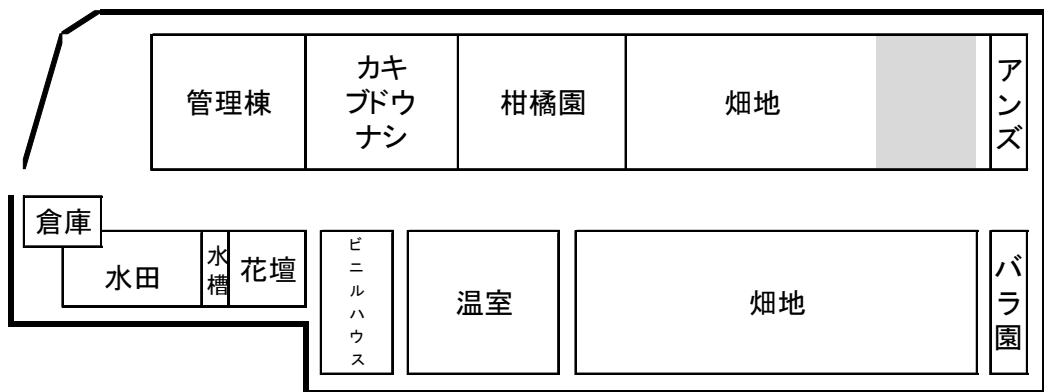


図 1 施設・作付概要

○作付面積および作付植物

作付面積および作付作物はそれぞれ表 1 および表 2 に示した通りである。

表 1 作付面積 (m²)

種別	面積	備考
畑地	352	教材・実習用
果樹園	255	教材・実習用
水田	70	実習・研究用
バラ園	35	園内美化・実習用
花壇	25	園内美化・実習用
計	735	

表 2 作付植物

種類	植物
野菜	コマツナ、ホウレンソウ、キャベツ、キュウリ
	カボチャ、スイカ、トマト、オクラ、ピーマン
	イチゴ、ナス、ダイコン、カブ、タマネギ、ニンジン
マメ・穀類	ダイズ、ラッカセイ、ソラマメ、インゲンマメ
	ジャガイモ、サツマイモ、トウモロコシ、イネ
果樹	なつみかん、ハッサク、温州みかん、スダチ
	ユズ、キンカン、カキ(富有、サエフジ)、ブドウ(ピオーネ、デラウエア)、スモモ
	ナシ(長十郎、菊水)、イチジク
花卉	ベゴニア、マリーゴールド、ペチュニア、サルビア
	キンセンカ、バーベナ、トレニア、デモルフォセカ
	マツバボタン、スベリヒユ、ヒマワリ、アサガオ
	ハボタン、チューリップ、ナデシコ、バラ

春夏期 北

ソバ	ナス	ピーマン・キュウリ	トマト	パプリカ					ヘチマ	ヘチマ	自然環境論コース 実験用ビニール

生活環境緑化特論演習	植物環境学実験実習	植物環境学実験実習	植物環境学実験実習	幼児環境指導法	幼児環境指導法	幼児環境指導法	幼児環境指導法	ピーマン・ナス	トマト・	ピーマン・キュウリ	トマト・キュウリ	パプリカ	サツマイモ	サツマイモ	サツマイモ	スイカ・カボチャ
------------	-----------	-----------	-----------	---------	---------	---------	---------	---------	------	-----------	----------	------	-------	-------	-------	----------

秋冬期 北

ソラマメ	タマネギ	ダイコン	ダイコン	イチゴ	イチゴ	イチゴ	イチゴ	イチゴ	自然環境論コース 実験用ビニール ハウス

ジャガイモ	園芸教室	園芸教室	園芸教室	ジャガイモ			園芸教室	園芸教室				サツマイモ	サツマイモ	サツマイモ
-------	------	------	------	-------	--	--	------	------	--	--	--	-------	-------	-------

図2 28年度畑地作付配置図

○教育（実習）活動

本年度も表3に示した授業で、学生・大学院生が活用している。

「植物環境学実験実習」での、利用の内容は、植物栽培に関すること、すなわち、畝立て、土作り、草花や野菜の種まき、育苗、鉢上げ、定植、誘引、かき、収穫、挿し芽繁殖、花壇・緑化設計と制作などである。これらの他に、プランターや鉢植え栽培による校内美化の指導も行っている。果樹類については、開花の観察、摘花、摘果、無核化处理などの説明に利用している。

「幼児環境指導法」において、履修者が実践的に“植物と子供の遊び”というテーマで、幼稚園児の指導をおこなうことを想定し、七夕飾り、ササのおもちゃ作成、草もちの作製をおこなった（図3）。タケ、ササの来歴、違い、利用法について、講義をおこなった。能動的に学修するアクティブ・ラーニングとして、五感を活用した実習をおこなった。

表3 授業としての学生利用数

授 業 名					
	2012	2013	2014	2015	2016
生活環境緑化論1	59	57	45	44	-
生活環境緑化論2	35	40	9	39	-
生活環境緑化論演習	5	11	8	11	-
幼児環境指導法	24	25	42	20	24
植物環境学実験実習	26	22	16	16	24
生活環境緑化特論演習	6	2	1	-	-
植物環境学特論I	2	21	12	2	-
計	157	178	133	132	48



図3 草遊び

○研究のための利用

人間発達環境学研究科および発達科学部の教員ならびに学生が研究と論文作成のため、本園を活用している。

1) アオキ *Aucuba japonica* の発芽実験

「観賞果実への鳥類等の干渉に関する研究」のために鳥類散布型植物であるアオキ *Aucuba japonica* を用いて発芽実験を行った。実習観察園の温室で園芸品種を含めたアオキの種子約4000粒を播種した。アオキは播種から発芽までに3か月以上必要で、発芽後の生育も極めて遅いため現在も生育観察中である。

利用者：大野朋子，学外共同研究者1名

2) マツの年輪計測

発達科学部4回生の卒業研究（担当教員；大野朋子）のため、実習観察園内で枯死した

マツの年輪計測を行った。計測した年輪は3サンプル（樹齢約80年，幹直径約1m）である。8月に園内において年輪表面の研磨を行いながら写真撮影および年輪幅等の計測を行った。

利用者：学生（4回生）1名

3) ツユクサ・ケツユクサの栽培実験

人間発達研究科 M2 の「修士論文研究」（担当教員：丑丸敦史）として，人間発達環境学研究科の施設である実習観察園に設置した温室内で栽培したツユクサ属2品種，ツユクサおよびケツユクサを対象に，「他品種の花粉受粉による結実率の低下」の研究を行い，実生の植え付け（4月下旬）から結実期（10月中旬）まで温室内での開花観察および受粉実験を行った。研究補助として，発達科学部生数名の協力があつた。

利用者：修士過程の研究を行った学生1名，協力研究員1名，協力学部学生約2名

○他機関の利用

1) 田植え体験・稲刈り体験

神戸市灘区の鶴甲幼稚園の園児約80名と教諭が，人間発達環境学研究科の施設である実習観察園で田植えを実践し，実際に体を動かして五感を活用した体験を行った。発達科学部の授業科目「幼児環境指導法」（担当教員：近江戸伸子教授，大野朋子准教授）において，履修者約25名が実践的に幼稚園児の指導を行った。

田植え：2016年5月24日

参加者：鶴甲幼稚園5歳児約80名，同園教諭等5名，発達科学部学生約25名

稲刈り：2016年10月18日

参加者：鶴甲幼稚園5歳児約80名，同園教諭等5名，発達科学部学生2名



図4 幼稚園児の稲刈り

2) 交流ルーム「カフェ・アゴラ」における知的障害のある実習生の実習活動への協力

交流ルーム「カフェ・アゴラ」では、知的障害のある青年・成人に対して多様な社会経験を提供する活動を行っているが、その実習活動の一環に 農園での作業を組み込んだ。今年度は1名の女性が、原則として毎週火・木に、花壇の除草、農具の洗浄等に取り組んだ。

3) 鶴甲いきいきまちづくりプロジェクト 園芸教室の開催

高齢化が進行している地域コミュニティにおいて、多世代が心身ともに健やかで希望に満ちた、安全な暮らしができるまちづくりは急務であり、住民が主体的に、多世代の交流を促進し、その中で課題を見つけ、学び、活動していく生涯学習の実践の場づくりが大事である。地域社会のこのような現状に対し、本研究科がもつ人的・物的・空間的リソースを活用して、どのような支援が可能か検討する、「鶴甲いきいきまちづくりプロジェクト」を立ち上げた。実習観察園を活用した園芸教室はその一環の活動である。

春、秋ともに10歳代から80歳代までの多世代が参加し、参加者(30, 29名)が3名のグループに分かれ、それぞれのグループ毎に野菜や花の栽培を楽しんだ(図5)。

春の園芸教室 5月28日(土)、6月18日(土)、7月9日(土)

秋の園芸教室 9月10日(土)、10月15日(土)、11月26日(土)、12月17日(土)



図5 「鶴甲いきいきまちづくりプロジェクト」園芸教室

4) 兵庫県立兵庫高校の授業“創造基礎”でのグループ別調べ学習

採餌装置を用いた野鳥の訪問観察をおこなった。高校生1名 2016年11月1-2日

5) アライグマによる生態系への被害検証に関する調査

アライグマによる都市部における被害の現状、及び生態系への影響を明らかにし、環境保全及び、市街地での捕獲効率向上を目的とした調査をおこなう。神戸市灘区の住宅街に

おけるアライグマの生息実態調査のための動画撮影と学術研究捕獲により検証を目的とする。兵庫県立大学大学院学生 1 名による調査である。実施時期は 2016 年 12 月 1 日～2018 年 3 月 31 日である。

今後も地域や学校等の要請等も積極的に受け入れ、授業ならびに研究で、利活用を図る予定である。

(実習観察園運営委員長 近江戸伸子)